鈍色の空を溶かして

丹羽遊星

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
鈍色の空を溶かして

【Ｎコード】
Ｎ０７９８Ｗ

【作者名】
丹羽遊星

【あらすじ】
父の跡を継いで司祭となったルキア。望まぬままに司祭の道を歩み始めて四年、穏やかでありながらも鬱々とした日々を送っていた。
一方、幼馴染のエリーヌは王太子付きの近衛士官となっていたが、変わりゆくルキアに苛立ちと諦めを抱いていた。
疎遠になっていた二人だったが、ある日エリーヌは王太子ミカヤの命令書を届けるためにルキアのもとを訪れる。その命令とは、近々開始される隣国との戦に、特殊な力を持つルドリア教会の司祭を徴兵するというものであった。

様々な思惑が交錯する中、強い葛藤を抱きながら前へと突き進んでいくルキアは、千年にわたり張りめぐされてきた憎悪の渦にじわじわと呑み込まれていく……。

登場人物（前書き）

第三章までに登場する人物の紹介です。
ネタバレはありませんので、確認用としてお読みください。
（年齢は、すべて物語開始時点のものです）

登場人物

【主人公】

◆ルキア・ドートリッシュ　（２１・♂）
［正式：セヴァンス侯爵ルキア＝ベルネス・ディラ・ドートリッシュ］
父クラウスの死後、十七歳でドートリッシュ家当主となった。
現在、ルドリア教会の高位司祭であり、四大司祭（炎）の地位を得ている。

◆エリーヌ・グレンヴィル　（１９・♀）
［正式：エリーヌ＝フィーア・ディラ・グレンヴィル］
アシュレイ・グレンヴィル伯爵の一人娘。推定相続人。
近衛隊に所属しており、階級は少尉。

【王家】

◆ミカヤ＝ヴィジェ　（２２・♂）
ゴースティン王国王太子。アルト・ヴィジェ王唯一の嫡嗣。
生母はアイリーン・オルストン。

◆キイル＝ヴィジェ　（４０・♂）
アルト・ヴィジェ王の異母弟。クラヴィーエ公。

十代のころより兄王の摂政として、また、ミカヤ誕生後は宰相として国政を担ってきた。
生母は先王の二度目の王妃（現王太后）キャサリーゼ・ハーシェリオン。

◆アルト＝ヴィジェ　（６３・♂）
ゴースティン王国オトゥール朝第十六代国王。
若くして王位に就いたが、政治は弟と閣僚らに任せ、隠遁生活に入った。
生母は先王の最初の王妃であるオヴェリア・ギルベイド。
亡き妃レイリアとの間には二人の王女がいる。

【ルドリア教会】

◆エーゼン・サルファ　（３０・♂）
［正式：コルベール侯爵エーゼン＝ドゥル・ディラ・サルファ］
サルファ家当主。
ルドリア教会の高位司祭で、総議長の地位を得ている。

◆ルノー・ドートリッシュ　（１９・♂）
［正式：デフトール伯爵ルノー＝アリオス・ディラ・ドートリッシュ］
ドートリッシュ家前当主クラウスの息子でルキアの弟。
ルドリア教会の下位司祭。

◆ローザン・ゲーブル　（３３・♂）
ルドリア教会の高位司祭で、四大司祭（地）の地位を得ている。
元魔道士。

◆クユラ・ウェーリック　（４１・♂）
ルドリア教会の高位司祭、四大司祭（水）の地位を得ている。
リーヴァ・エクランドとは友人である。

◆リーヴァ・エクランド　（４０・♀）
ルドリア教会の高位司祭であり、四大司祭（風）の地位を得ている。
ラウル・アシリングの従姉。

◆ラウル・アシリング　（２０・♂）
ルドリア教会の高位司祭。リーヴァ・エクランドの従弟。

◆クラウス・ドートリッシュ
［正式：セヴァンス侯爵クラウス＝リーゲン・ディラ・ドートリッシュ］
ドートリッシュ家前当主。ルキアとルノーの父。
ルドリア教会の高位司祭で、主教の地位に就いていたが、四年前に死亡。

【閣僚・軍人】

◆ジーク・ラッセル　（４４・♂）
［正式：ジーク＝レイ・ディラ・ラッセル伯爵］
陸軍大臣。
代々ハーシェリオン家に仕えてきたラッセル家の当主で、キイルの腹心。

◆ロベルト・ネイゲル　（４３・♂）
［正式：ロベルト＝ウォード・ディラ・ネイゲル男爵］
大蔵大臣。
キイルの元学友で、もっとも忠誠心の厚い人物とされる。

◆ミシェル・ハーシェリオン　（５３・♂）
［正式：デデュー公爵ミシェル＝ロイ・ディラ・ハーシェリオン］
外務大臣。
ハーシェリオン家当主で、キイルの叔父に当たる（王太后キャサリーゼの弟）。

◆アンジェ・ギルベイド　（６０・♂）
［正式：ダラス公爵アンジェ＝ヴォーヌス・ディラ・ギルベイド］
法務大臣。
ギルベイド家当主で、現国王の従弟（先王妃オヴェリアの甥）。

◆アシュレイ・グレンヴィル　（４０・♂）

［正式：アシュレイ＝オーヌ・ディラ・グレンヴィル伯爵］
グレンヴィル家当主でエリーヌの父。
北方軍司令官を長年務めており、階級は大将。

◆マーテル・バルフォア　（４９・♂）
［正式：マーテル＝フォー・ディラ・バルフォア伯爵］
元西方軍司令官で、階級は中将。
ジーク・ラッセルの部下。

◆ケールセン・グラッド　（４０・♂）
バルフォアの後任として西方軍司令官となった。階級は少将。
王太子派の軍人の中でもっとも強い力を有する。

【系図】

＞ｉ３２３２７―４０８３＜

世界観・地図（前書き）

確認用としてお読みください。

世界観・地図

【アレイシス大陸の主要国家について】

◆ゴースティン王国◆

アレイシス大陸南中部に位置する大国。
東と南は海、西はケーニヒス、ファジール、シベリーと面している。
現在、オトゥール朝第１６代国王アルト・ヴィジェによる治世のもと、十を超える属領を持つ。
王位継承は男系男子のみ。貴族や平民は女子相続が可能。
公用語はゴースティン語。

◆ケーニヒス王国◆

ゴースティンの西に位置する大国。
現在、セルバンテス王家による専制政治が敷かれている。
ファジールが独立したことにより本国の領土は三分の二まで縮減した。
ただし、シベリーやベイリーズ等の属領をいくつも有しているため、依然としてゴースティンと並ぶ国力を有する。
王位継承は男子のみ。ただし、女系王族にも継承権あり。
公用語はケーニヒス語。

◆ファジール大公国◆

ゴースティンの西、ケーニヒスの南に位置する国。
かつてはケーニヒス王国の一部であったが、二十年前にゴースティンの支援を得て独立。
独立当時はカール大公が治世を行っていたが、五年前に息子のジョアンが大公位を継いだ。
ファジールのザイード大公家はケーニヒス王家の傍系である。
公用語はケーニヒス語。

◆シベリー自治国◆

ゴースティンとケーニヒス、ファジールとの国境に帯状に広がる国家。
ゴースティンやケーニヒスを構成するガレ族とはまったく異なる容姿を持つ異民族で、宗教も異なる。
百年前より、ケーニヒス王国の属国となり、対ゴースティンの国境防衛の軍が組織されている。
八つの州（オーリア、カールトン、バードン、ミレニス、リブロ、アパス、ルドン、ジュダ）によって構成されている。
各州には州代表がおり、州代表らを束ねるシベリー総督が首都バードンにおいて統治を行っている。

◆地図◆

＞ｉ３６４３７―４０８３＜

【暦について】

１年を３６５日とするグレゴリオ暦を採用。

月名は黄道十二宮を参照。

磨羯宮（１月）、宝瓶宮（２月）、双魚宮（３月）、白羊宮（４月）、金牛宮（５月）、双児宮（６月）、巨蟹宮（７月）、獅子宮（８月）、処女宮（９月）、天秤宮（１０月）、天蝎宮（１１月）、人馬宮（１２月）

蠢動

薄暗い執務室の中、水晶の埋め込まれた聖杖が揺れる。そこから指し示される淡い青緑色の光が弾け、部屋中に拡散し、頭上から柔らかに降り注いでいく。

王太子ミカヤは煌めく光の粒を掴もうと手を伸ばしたが、それは小さな旋風となり、彼の赤い髪を緩く乱した。

「貴様はたしか、風を操るのだったな……」

呆けたように呟くと、黒衣の司祭はゆっくりと双眸を開き、燭台の灯りをその瞳の奥に宿す。

「これは高位司祭らが儀式で用いる魔道の力となりますが、戦闘で使用することになる力もまた、これと同じものにございます」

その返答は、ミカヤにとって少々不満なものであった。

王宮にいれば、毎日の公式礼拝の際に司祭の操る魔道の力を目にすることができる。司祭たちは神々しいばかりの眩い光を放ち、あたりを包む。その光は、神の祝福と信徒らの祈りをつなぐもので、決して何人をも傷つけるものではない。

そのような力が一個大隊や砲弾をはるかに凌ぐものになるのだと、この男――ルドリア教会の高位司祭であり、総議長の座にあるエーゼン・サルファは言う。

ミカヤは頬に当てた手を下ろし、重厚な樫の肘掛け椅子に両腕を

置いた。

「私は自軍の消耗を最小限に抑えるべく、魔道の力を利用したいのだ。貴様はそれが可能だと申したが、この程度のものを兵力にせよと？」

「すべては司祭の＞念（ゼンゼ）＜次第でございます。今お見せしました魔法は＞念＜をほとんど込めておらず、魔力を可視化したものに過ぎません。ですが、司祭が強い＞念＜を込めて放てば、魔力は狂気を孕み、敵へと向かうでしょう。無論、力を放った本人にもその力は及びますが……」

ミカヤが眉をひそめると同時に、エーゼンは先ほどと同じように聖杖を振った。

そこから放たれた光は、この薄暗い部屋においては視界を撹乱（かくらん）させるほどに強く、ミカヤは思わず目の前に手をかざした。

目が光に慣れるより先に、背を怖気が走り、冷や汗が流れる。ミカヤは目元を覆っていた手を引きはがし、鋭く細めた目をエーゼンに向けた。

「なにをした……？」

「先ほどよりも強い＞念＜を込めさせていただきました。殿下のお身体に影響を及ぼすようなことはありませんので、どうぞご安心を」

「そういう貴様はどうなのだ？　力は司祭にも及ぶのではなかったのか？」

ミカヤは尊大に振舞いながらも、いささかの恐怖を感じていた。

この部屋は強い魔力の波動に支配されており、肌を刺すような発気がまとわりついてくる。胸の奥底からありもしない焦燥を次々にかき立てられるようで不愉快でしかない。

そんなミカヤの様子を嘲笑うかのように、エーゼンは目を細める。

「すなわち、高度な魔法を操るためには、それと同程度の防護能力や制御能力が求められているのです。高位司祭の叙階を受けた者らは皆、その能力に長けた者たちであり、それゆえに高等儀式を執り行う資格を有しているということです」

たしかに、儀式の最中に司祭が力を暴発させるようではたまらない。

「それでは、＞神の力（レガロ）＜ならばどうなる？　はね返る力は、儀礼に用いる魔法のそれとはまるで比較にならんのか？」

「＞神の力＜とは教会内では禁忌魔法とも呼ばれております。通常の魔法が“精霊の力の一部を借りる”とするならば、禁忌魔法は“精霊の力をそのまま呼び出す”とでも申しましょうか。当然、求められる防護能力・制御能力の質は異なり、精霊の力を制御……いえ、支配する必要があるのです。支配する力を持たない者が＞神の力＜を手にすれば、ほんの一時その力を抑えることができたとしても――」

「身を滅ぼす、か……」

「はい。＞神の力＜はあまりに強大な力……。それゆえ、継承者たる器を持つ者が稀にしか現れません。しかし、現在の継承者は四名。これは、歴代で最高となります」

「初めて、そのすべてが同時に揃ったということだな」

ミカヤは満足げな声で応えながらも、その腹では苛立ちを抑えていた。よくもこれまでその存在を王家に秘匿していたものだと、苦々しく思う。

＞神の力＜と呼ばれる魔道の存在をミカヤは以前より知っていたが、それは教典に記されたお伽話としてであって、そのような力が

実在するなど考えてもいなかった。これはミカヤに限ったことではなく、盲信的なルドリア教徒でもない限り、信じている者などいない。

ゴースティン＝ルドリア教会が王権の支配下に置かれ、早、三百年という歳月が流れた。

しかし、その支配はあくまで形式的なものにすぎない。

教会には完全なる自治が認められているため、絶対的権力者たる国王であっても内部への不介入が余儀なくされてきた。教会の存在を忌々しく思う者は王族のみならず貴族の間にも一定数存在するが、不平を抱く傍らで、司祭らの有する権力の恩恵に与ろうとする腑抜けが大半である。

教会が王家の従属組織と化してからというもの、国内の聖職者を統率する高位司祭たちは、ゴースティン王と敵対してきたわけでも、その力を盾に王を意のままに操ってきたわけでもない。ただ、そこに在り続けてきただけだ。王権ですら手の出せない孤高の存在として……。

だからこそ癪に障るのだ、とミカヤは胸の内で毒づき、執務机に身を乗り出す。

「訊いておきたいことがある。貴様はこれまで散々あやつらに味方してきたはずだが、なにゆえ今になって私に手を貸そうとするのだ？」

「わたくしは、こういった話がございますとお教えしたまでのこと。失礼ながら、ミカヤ殿下に手をお貸ししようなどと考えているわけではございません」

エーゼンが伏せていた目をすっと開いたとき、蝋燭の火が小さく爆ぜた。

「加えて、王弟殿下並びにハーシェリオン家に対し忠義を尽くしてきたわけでも――」
「食えぬ男だな、貴様は」
ミカヤは侮蔑をこめて言い放ったが、エーゼンは意に介さぬというように微笑み、聖杖を軽く揺らす。それとともに、部屋中に撒き散らされていた＞念＜は、聖杖の水晶へと吸い込まれるように消えていき、ミカヤは圧迫感から解放された。
「エーゼン・サルファよ。司祭らの持つ力がどれほどのものか、閣僚らは知らぬはずだが、説き伏せることは可能か？」
「必要であれば、閣僚及び軍幹部らの前で高位司祭の力をお見せする機会を設けましょう。ただ、＞神の力＜についてはそれは叶いません。どれほどの規模を巻き込むことになるか、わたくしにも想像がつきかねますので」
「……それでかまわん。これであやつらのくだらん主張を黙らせる策が見つかったのだからな。その策を有意義に役立てるため、貴様にはいろいろと動いてもらう必要がある。私にこのような話を持ちかけた以上、当然そのつもりであろう？」
「はい。司祭らの説得は私にお任せを」
エーゼンは一礼ののち、身をひるがえし、王太子の執務室を後にしようとした。毅然としたその背に、ミカヤは挑むような視線と声をぶつける。
「それにしても、あれが対峙しているのが貴様のような輩だったとはな。ルドリア教会は、宮廷以上の悪の巣やもしれんな」

偽りの仮面　（1）

「それではエリーヌ様、しばらくこちらでお待ちくださいませ」

女中が下がるとともに、エリーヌは示された長椅子に腰を下ろした。

貴賓室の窓からは、生い茂る庭木の果てに、壮麗な聖堂をうかがい見ることができる。陽の落ち始める空と聖堂の納まった風景は、まるで一枚絵のような魅力があったが、エリーヌは外に目をやることはなく、じっと手の中の書状を見つめていた。

この書状は王太子ミカヤ＝ヴィジェからの命令書で、宮廷司祭ルキア＝ベルネス・ディラ・ドートリッシュに宛てられたものである。書状を届ける役目をミカヤより与えられたエリーヌは、今しがたルキアの屋敷に到着し、その登場を座して待っている。

かつて教皇宮とも呼ばれたドートリッシュ本邸は、ゴースティン王国首都エクシュール東部の一角に、王宮に匹敵するほど広大な敷地を有している。その中心にそびえ立つのが、天に伸びる何百本の小塔と何千体もの彫像で飾られた白亜の宮殿であった。

ドートリッシュは一千年を超える歴史を持ち、代々ルドリア教会の権力者を輩出してきた家系のため、貴賓室に置かれた調度品ひとつにしても、一族の歴史を感じさせるものが並んでいる。

エリーヌは幼いころからこの厳めしい屋敷を出入りしていたが、今日は久々に訪れたということもあり、どこか居心地が悪く、妙に

気分が浮ついていた。窓に映る自分の姿を見やり、少し乱れた前髪を指先で整えていると、黒檀の柱時計が五時を知らせる。その時計には、ドートリッシュ家の紋章である“薔薇をくわえた獅子”が透かし彫りされていた。

再び書状に視線を戻したエリーヌは、小さくため息を吐く。ミカヤがこの命令書を託した意図を、エリーヌははかりかねていた。

通常、このような役目が一介の将校に与えられることなどない。エリーヌとルキアは幼馴染みであるが、今では格別親しくしているわけでもない。

ルキアは四年前に父侯爵が急死したことにより、十七歳で領地・財産のほとんどを爵位とともに受け継ぎ、さらに高位司祭の叙階を受け、ルドリア教会の権力者の一人として名を連ねるようにもなった。エリーヌとルキアが疎遠になったのは、ちょうどそのころからである。

一向に掴めないミカヤの真意を探っているうちに、静かに貴賓室の扉が開かれ、ルキアが現れた。その斜め後ろに控えている壮年の男は、先代のころからドートリッシュに仕えている家令ベルチェ・モーガンである。

ルキアは数日前から風邪で寝込んでいたとのことで、部屋の中央へ進む彼の足取りは少しおぼつかないものだった。ベルチェは気遣わしげにルキアに手を差し出していたが、ルキアはそれを気丈に拒んでいた。

エリーヌは目線だけを動かし、いまだ言い慣れない称号で呼びかける。

「セヴァンス侯、ずいぶんと弱っておられるようですが？」

「いや、心配には及ばない」

ルキアはエリーヌの斜め横の肘掛け椅子に腰を下ろした。
久々に間近で見るルキアは、いかにも熱に浮かされた顔をしていた。
エリーヌが突然来訪したために急いで身なりを整えたのだろう。簡素な藍色のローブをまとい、長い赤髪を横でひとつに束ねた姿は、エクシェール宮殿の王室礼拝堂で目にする彼とは大きく異なっていた。

「グレンヴィル少尉、あなたがここに来られるのは珍しいことだ。今日は一体どうされたのだ?」

ルキアはやつれた顔に、穏やかな笑みを浮かべていたが、エリーヌが書状を机上に差し出した途端、瞬きとともに柳眉を寄せた。

「ミカヤ殿下からの命令書を貴公に持参しました」
「なぜ、少尉がこれを私に?」
「私から侯爵にお届けするようにとの殿下のご命令でしたので」

書状を手にしたルキアは、封蝋に押された王太子の紋章をしばし見つめていた。ベルチェがペーパーナイフを差し出すと、ルキアはそれを受け取ると同時に片手を上げる。退室を促されたベルチェは、主人に一礼をし、貴賓室を後にした。
ルキアは厳かな手つきで中を開き、書状の文字を追い始める。そんな彼の様子を、エリーヌは息をひそめてうかがっていた。

「……出撃命令?」

ルキアは書状から目を離し、困惑をにじませた翡翠色の瞳をエリーヌに向けた。その視線を、エリーヌはあえて冷やかに見返す。

「三日前の中央会議において、シベリー自治国に対し、国軍を差し向けることが決定しました。この戦は今年初頭の、シベリーによる西方軍奇襲への報復を目的としたものです」
「なぜ、いきなりそんなことに？　あの紛争の処理については、ケーニヒスを交えて交渉が行われていたのではなかったのか？」
「話し合いの場は設けられましたが、交渉は決裂しました。あれほど大規模の紛争であり、上級将校数人に死傷者まで出たのですから、シベリー側が大幅に譲歩しない限り交渉が進まないのは当然ではないかと」
「しかし、シベリーと戦など――」
「ずいぶんと呑気なことを。ルドリア教の司祭は、神に祈りを捧げてさえいれば平和がやってくるとでも考えておられるのですか？」

エリーヌが冷たく言い放つと、ルキアは紅潮した顔に緊張を走らせた。そんなルキアの顔を直視できず、エリーヌは目をそらし、椅子の背に深くもたれかかった。

ここ数十年のゴースティン王国の情勢は、他国に比して平和であると評してよい。

ゴースティンと肩を並べる隣国ケーニヒスとの戦争は八十年以上起こっておらず、国内においてもオトゥール王家が権勢を誇っているため、有力貴族による派閥争いはあるものの、権力奪取の兆候はない。財政も安定しており、ゴースティンの歴史始まって以来の太平の世と呼ばれるようになって久しい。

ただし、ケーニヒスとの国境に位置するシベリー自治国との武力衝突は珍しくなく、ニか月ほど前にも国軍の主力部隊が紛争鎮圧に向かう事態にまで発展した。シベリーは今から百年ほど前にケーニヒスの従属国とされ、シベリーの軍隊は、対ゴースティン国防軍と

しての機能を有するようになった。それ以来、シベリーはゴーステ
ィンにとって年々厄介な存在となっている。

「いずれにしても、いずれシベリーとの戦は避けられなかったでし
ょう。そこでミカヤ殿下が、国境近くのシベリー州軍を殲滅すべき
と中央会議において主張され、国王陛下はそれに勅許を与えられま
した。それにより、一か月半後にシベリー軍討伐が開始されること
となり、その主力部隊に強力な魔法を扱うとされる高位司祭を加え
ることが決定したのです。……今、貴公が手にしておられる書状は、
その決定を踏まえて出されたものです」

エリーヌが言い終えても、ルキアはしばらく口をつぐんだままで
いた。話を聞いていなかったのではないかと思えるほど、ルキアは
思案に耽っており、手の中の書状を見つめたまま瞬きさえしない。
沈黙は深まるばかりであった。気を揉んだエリーヌは、無意識の
うちに何度も両手の指を組み合わせていた。
やがてルキアは、困惑を潰していくかのように、ためらいがちに
口を開く。

「たしかに、これまでに魔道の力が軍事利用されたことはある。し
かし、それは衛生兵や工兵の一部としてであって、魔道の力それ自
体が兵力として戦闘に用いられたことはない。中央会議に参加され
ている上級将校らはそれをご存じのはずだ。それに、昨今は銃器の
開発も進み、大砲の機動性も増しているというのに、なぜ殿下は魔
道の力などを戦闘に用いようなどとお考えになったのだ？」
「貴公の言われるように、魔道を戦闘に用いるなど前例のないこと
ですが、ルドリア教会の高位司祭は戦闘に耐えうる強大な力を有し
ていると聞き及んでおります。それならば、その力を利用しない手
はないと思いますが？」
「殿下が、会議の場でそのように言われたのか？」

「ええ。特に＞四大司祭＜の用いる力は、想像を絶する威力であるという話でした。そして、シベリーのような異教の蛮族の駆逐は、本来ルドリア教会の役割でもあるのだともおっしゃっていました。上級将校らも、自軍の兵力の消耗を極力抑えるために、なおかつ圧倒的な兵力をもってシベリー軍を殲滅するためにも、司祭の徴兵に賛同する者が多数を占めていました。なにより、シベリーとの紛争に終止符を打つことは、我が国にとってどれほど有益なことかと――」

突如、エリーヌは熱気を感じ、言葉を止めた。

押し殺した怒りのように、瞬く間に炎が燃え上がり、ルキアの手の中の書状は灰へと化した。

「……ミカヤ殿下は、かのお伽話を信じていらっしゃるのだろうか？　あれほど神など信じぬと口にされていたというのに」

ルキアはため息まじりに呟き、手を軽く握った。ルキアの細長い指の隙間から、磨き上げられた床の上に灰がさらさらと落ちていく。

エリーヌはわずかに乱れた鼓動を抑え、ルキアを鋭く見やる。

「殿下の命に従わぬおつもりですか？」

「……いや、殿下のご命令なれば私に否やはない」

妙な含みを持たせた物言いだった。エリーヌがますます眉をひそめると、ルキアは殊更に微笑んで見せ、澱みなく言葉を紡ぐ。

「グレンヴィル少尉、あなたはこれからエクシュール宮殿に戻られるのだろう？　それならば、私が了承したという旨をミカヤ殿下にお伝えしてほしい。正式な返事は後で王宮にお届けすることになるだろう」

“了承”というルキアの言葉を聞いた瞬間、エリーヌの心臓は一際強く鼓動を打ち始めた。そして、心の中で何度も「なぜ」と繰り返した。

王太子付きの近衛士官であるエリーヌにとって、ミカヤに対する忠誠の言葉以外に受け入れられるものはない。彼の命令は絶対で、なにがあろうと従うべきものであると、これまでずっと胸に刻んできた。

しかし今だけは、ルキアのミカヤに対する忠義を受け入れることができなかった。

「命令であれば、なんにでも従うとでも？　それではまるで木偶（でく）のようですね」

エリーヌは思わずそう口走っていた。はっと顔を上げると、ルキアの呆れたような顔が目に入る。

その途端、かっと耳が赤くなり、エリーヌは乱れた口調で言い放つ。

「わかっているのですか？　あなたは戦場へ……それも前線に遣られるんですよ？」

「そういう命令だと、理解しているつもりだが？」

「わかっていてその態度なのですか？　ずいぶんと物わかりがいいのですね」

「先ほどあなたが言ったのではないか。シベリーとの紛争に終止符を打つことは、我が国のために有益なことなのだと。それが私に与えられた役目だというのなら、それを全うするまでのことだ」

「人殺しが司祭の本分だとでも？　あなたはどうかしているのではないのですか！」

エリーヌはとうとう声を荒げた。

ルキアに対し、どうしようもないほどの強い怒りを感じていた。そして、ルキアの前で冷静さを保てなかった自分自身に酷く失望していた。

ミカヤの命令は、神に仕える司祭を戦場に遣るというあまりに理不尽なものである。司祭たちは軍事訓練を受けておらず、下手をすれば生まれてから一度も剣を握ったこともないような人間ばかりである。いかに強力な魔法が扱えようとも、前線で戦わせるなど危険極まる。

この命令がどれほど不条理なのか、エリーヌはルキアに理解してほしかったのだ。そのために、あえて不遜な言葉を選んでルキアにぶつけていた。それにもかかわらず、ルキアはあっさりとミカヤの命令に従おうとしていた。

再び訪れた沈黙の中、エリーヌがじっと机上をにらみつけていると、いかにも辛そうに咳き込む音が聞こえ始めた。驚いたエリーヌが顔を上げると、胸のあたりを強く押さえているルキアの姿が視界に入った。

ルキアが風邪で寝込んでいるということを、エリーヌはドートリッシュ邸を訪ねる前から知っていた。それでもなお面会を望んだのは、ルキアが出撃命令に対しどんな反応をするのかを見届けたかったからである。書状は必ず本人に手渡すようにとミカヤから厳命されていると、ベルチェに嘘まで吐いた。だが、これほど酷い風邪をこじらせているのなら、書状をベルチェに託してすぐに立ち去るべきだっただろう。

痛々しい音が長く続いていくごとに、エリーヌはみじめさが募り、膝の上に置いた手を強く握り締めた。

「……エリーヌ」

どこか懐かしさを覚える声で名を呼ばれ、エリーヌは恐る恐る顔を上げる。

ルキアは左側の肘掛けに身体をもたれかからせ、目線だけをエリーヌへと向けた。先ほどよりも顔が赤く、瞳も潤んでいた。

エリーヌはルキアを気遣う言葉をかけようとしたが、それよりも先にルキアが口を開く。

「たしかに、私のような立場にある者が、戦に手を染めるなど許されざることだろう。だが、魔道の力を戦に用いることが国益に適うことならば、たとえ人殺しに加担することになったとしても、司祭の本分に違背するものではないと私は考えている」

ルキアは、なおも物わかりの良すぎることを口にした。そのために、エリーヌはルキアを労わる機会を完全に失ってしまった。

「そんなことをあなたは本気で思っているのですか？　昔、私が狩りに誘ったとき、あなたはなんと言われた？　動物も人間も同じ命を与えられているものだから戯れに撃つことなどできはしない、こう言ったのを忘れたのですか？　あなたがあのころと同じ考えのままならば、どうしてそんな簡単に戦への加担を受け入れることができるのです？」

エリーヌが感情のままに言葉を吐き出している途中、ルキアは眉ひとつ動かさずに目を伏せていた。そんなルキアの様子は呆れ返っているようにも見え、初めのうちこそ威勢の良かったエリーヌの声は、次第に悄然としたものになっていく。

「第一、あなたは司祭でしょう？　いかなる理由があろうと、戦に

賛同するような態度を取るべきではないはずです。いえ、あなたが司祭でなくても同じこと。兎や狐ですら撃つことですらためらう者が、人を殺めることなどできるはずがないではありませんか」

エリーヌが言葉を止めた途端、部屋の中はがらんとなった。柱時計の振り子の音がかすかに響いていたが、部屋の隅々にまで行き渡った寒々しい空気を助長させるばかりであった。

「……なんとか言ったらどうです？」

沈黙に耐えかねてエリーヌは呟いた。ルキアの返答を待つことは、痛みに耐えようとする感覚と大差なかった。

ルキアは一度だけ瞬きをし、緑眼をエリーヌに向けて開いた。その瞳は、冷たく澄み渡り、静謐をたたえていた。

「あなたは、なぜ私のもとに命令書を持ってきたのだ？」

先ほどと同じ問いだった。

一度目と違うのは、ルキアの声から困惑が完全に消え去っていることだった。

エリーヌはどう答えてよいかわからなくなり、何度も目をしばたたかせてルキアを見つめていた。

「軍人であるあなたが司祭の徴兵に賛同できないのは当然であるし、シベリーとの戦についてもなにかと不服に思うところはあるだろう。だが、いくら不満であろうとも命令である以上、あなたはそれに従わざるをえないはずで、私の場合もそれは同じなのだ。私一人が頑なに拒もうとも、それにより罰せられようとも、なにも変わりはしない。別の者がその代わりを務めることになるだけだ。……私が狩りに加わらずとも、誰かが兎を撃ち殺していたときと同じように」

ルキアはエリーヌをなだめるように言葉を重ねる。

「殿下のお考えは私などには推しはかりようもないが、あのような命令書が出されたということは、これはもはや変えられぬことなのだろう。あなたの気持ちはわからないではないが、この件について一司祭である私ができることはなにもない」

もうどうにもならないとでも言うように、ルキアは首を振る。そんな彼の姿を見ていられず、エリーヌは顔をそむけて立ち上がった。

「……長居をして申し訳ありません。もう私の用は済みましたので、これで失礼します」

去り際に、横目でルキアを見やり、声をかける。

「早く風邪など治されればどうです。高位司祭ともあろう方のお姿とは思えませんので」

「ああ、わかっている」

ルキアはエリーヌのほうを見ずにそっけなく答える。エリーヌは唇を噛みしめ、逃げるように貴賓室から出ていった。

もうずいぶんと前から、エリーヌはルキアから強い拒絶を感じている。

ルキアは聖職に就いてから、剣を聖杖に持ち替え、白い祭服に身を包んで祭壇に立ち、澄んだ声で教典を読み上げている。王宮の礼拝堂で目にするルキアは、神の御使いを思わせる穏やかな顔をしていたが、エリーヌの目には、すべてを捨て、なにもかもを諦めたような隠者の顔にしか見えなかった。穏やかに微笑んだ偽りの仮面を

被り、自らをひたすら虐げているかのようで、それを見ているのは辛かった。

その反面、ルキアの心が平穏であるならばそれでよいと思う気持ちもあった。彼を敬い慕う多くの者たちが望むままに、いつまでも聖者の仮面を被り続けてくれればいいのだと、これまで自分に言い聞かせていたのだ。

しかし、これから起ころうとしている戦は自衛の意味すら持たない、ただの殺戮でしかないものである。そんな戦いに、ルキアはなにを思って加担するというのだろうか。今までと同じように、自らを偽り、道なき道を独りで歩いていこうとするのだろうか。

廊下の窓から見える空は、薄い闇色に染まり始めていた。

エリーヌは立ち止まり、後ろを振り返る。まだルキアのいる部屋を名残惜しげに見つめてから、燭の灯る廊下を歩き始めた。

偽りの仮面　（2）

エリーヌが退室した直後、ルキアは大きく息を吐き、右手で顔を覆った。彼女によってかき乱された心は、なかなか本来の静けさを取り戻してはくれなかった。

もっと詰られることを覚悟していたのだ。エリーヌがなにも言えなくなるように、ルキアはあえて突き放すような言葉を選んだ。だから、彼女が怒るのも無理はないことだと思っていた。

エリーヌの突っかかるような言葉は、ルキアの身を案じているものでもあり、また、彼に対して理想を求め、期待をかけるものでもあった。それらを無碍にはねつけてしまっても、ルキアには後悔をすることもできず、ただ鬱積した想いを抱えることしかできなかった。

「……ルキア様」

視線を上げると、扉の前にベルチェの姿があった。

「お顔の色がお悪うございます。そろそろお休みになられたほうがよろしいかと……」

「いや、これから少し出かけたい。馬車の用意を」

そう告げた途端、ベルチェは顔を曇らせ、ルキアのほうへと静かに歩み寄る。

「エリーヌ様は一体なんの御用だったのです？　ミカヤ殿下からの命令書というのは？」

ルキアは事実のままに話そうとしたが、どこまでをベルチェに話してよいものかと言いあぐね、そのままうつむいた。

「シベリー軍の討伐でございますか？」

「どうして、それを？」

「昨日、本邸の聖堂を訪れた方から聞き及んだのです。シベリー軍の討伐部隊が近々編成されることになり、その部隊に司祭を組み入れるという話が中央会議で出されたと、その方はおっしゃっていました。しかもそれは後方支援部隊ではなく、戦力としてだと……。まさか、そのようなことがあるはずがないと思っておりましたが……」

「そのまさか、だ。司祭の徴兵についてはミカヤ殿下からのご命令であるが、既に国王陛下の勅許が得られているものらしい」

「しかし、国王陛下の勅許とはいえ、それにどれほどの力があるというのか……。失礼ながら、今の陛下は国政を動かす権限などお持ちではないのですから」

不敬な言葉であったが、それを不敬と感じる者も今では数少ないことだろう。

現ゴースティン王アルト＝ヴィジェは、歴代国王の中でも稀に見る穏健派の人物と評されている。彼の御世では一度も国内が戦禍に見舞われず、幸いにも酷い天災が起こることもなく、財政は非常に安定しており、民が重税に喘ぐこともなかった。

しかし、実際のところ王は政治・軍事にまったく関心がなく、彼がその半生をかけて精を出したのは色事のみであった。

そんな王に代わり、宰相として長年国政を取り仕切ってきたのが王弟――クラヴィーエ公キイルである。ここ数年に至っては、王は健康を理由に表舞台へ立つことが一切なくなったため、王太子であるミカヤが宰相のキイルとともに国政の中心にいる。

ただ、ミカヤとキイルはその気質・信条こそ似通っているものの、まるでそりが合わず、協調関係にはない。

キイルも以前よりシベリー軍の討伐について検討し、国境防衛のために西方軍の増強に力を注いでいた。また、二か月前の紛争は近年稀にみる大規模なものであったため、王弟派の閣僚たちの間でも報復のためにシベリーに軍を差し向けるべきとの意見が上がっていたという。

それにもかかわらず、ミカヤが同様の主張をし始めた途端に反対の意思を示し、王弟派の側近である陸軍大臣、大蔵大臣、外務大臣のほか、上級将校を扇動し、ミカヤを説き伏せていた。

……以上が、ルキアの把握していた数日前までの状況である。

それが今や、ミカヤは国王の許しを盾に、国軍の上級将校たちの賛同のもと、シベリー軍の討伐に踏み切ろうとしているのだ。それも、ルドリア教会の司祭を徴兵するという前代未聞の作戦とともに。

あれからたった数日の間に、一体なにがあったというのか。

ルキアは熱に浮かされた頭を抱え、いくつかの可能性を模索しようとしたが、政の一切について権限を有しないルキアの知れる事情は限られており、ミカヤの真意をはかるなど容易ではなかった。

ひとつ引っかかったのは、中央会議においてミカヤが発言していたとされる内容である。

魔道の力が戦力として用いられたことがないというのは、ゴースティンに限らず、この大陸全体における共通認識であるが、厳密に言えばそれは正しくない。

かつてゴースティン地方において大きな戦が起こった際、強大な魔法が戦闘に用いられることがある。その魔法を現在の兵力に換算するなら、砲弾など比較にならぬ威力であろう。

その戦はアルゼ教典において＞聖戦＜として語られているもので、幼い子供までもが知っているが、昨今では単なるお伽話にすぎないと考える者も少なくない。なによりミカヤは、迷信や不確かな伝承の類は一切信じぬ性格で、あまつさえ神の存在を否定する発言をこれまで幾度も繰り返してきた。

だからこそ、ミカヤの発言が不可解に感じられたのだ。

「ルキア様、ミカヤ殿下がこのような暴挙に出られたのは、王弟派の大臣らの振舞いに腹を据えかねてのことでしょう。ですが、国王陛下がこのような戦に許可を与えられるとは思いません。司祭の徴兵など、もってのほかでしょう。おそらく、殿下が王に無理やり――」

「滅多なことを言うものではない」

ルキアはベルチェをたしなめつつも、内心、それが正しいのだろうと思っていた。

王は先立っての紛争について報告を受けた際も、またいつものことだとろくに関心を示さなかった。あの状態では、殲滅作戦についても、ろくに話を聞かぬままミカヤに許しを与えたに違いない。司祭の徴兵に至っては、まったく関与していないのだろう。

ミカヤは王の無関心に付け込んでいるわけだが、それを表立って批判できるのがキイルだけだというのは皮肉なものである。周囲の者たちは、次期国王となるミカヤの挙動に対し、下手な口を挟むことを恐れている。キイルの動きを待ち、より自分にとって有利なほうへ流れるのが今の宮廷の在り様だった。

そして今は、ミカヤのほうに風が吹いている。

ルキアが細い息を吐きながら顔を上げると、ベルチェの沈痛な眼差しが突き刺さった。

「恐れながら、ルキア様が国王陛下にお願い申し上げてはいかがでしょうか？　司祭までも戦に出すとあれば、勅許の撤回もお考えになるかもしれません。陛下は信心深い方と聞き及んでおりますし、なにより戦など決して望んでおられないでしょうから……」

たしかに、この風向きを変えられる者がいるとすれば、国王をおいて他にない。

王は四十を過ぎたころから非常に信心深くなり、ルキアの父クラウスを傍に置いて重用していた。ベルチェの言うように、王が司祭の徴兵命令の存在を知れば、いかにミカヤからの嘆願といえども許しを取り下げようとするかもしれない。少なくとも、ルキアが戦場に出ることを王はそう簡単に許しはしないだろう。

しかし、いかに覆る見込みがあろうと、ルキアは自らの立場を利用するわけにはいかないと思っていた。それはいかなる時でも変わらぬ意思であったが、キイルとミカヤの間に争いが起こっている今ではなおのこと、ルキアの意思は頑なものになっていた。

「この話は後だ。とにかく、出かける用意を」

「……かしこまりました」

ベルチェが退室し、ルキアも服を着替えるために自室へ戻ろうとしたとき、強い風が窓を叩くような音がした。

ルキアは振り返り、テラスへと通じる大きな窓を眺める。そこには、ぼんやりとした人影が薄闇の中に映し出されていた。

ルキアは気だるげに歩を進め、窓の前に立った。外にいる人物を

硝子越しに確認すると、棒鍵を引き抜いて窓を開け放つ。冷気が室内に吹き込み、机上の灯りを吹き消した。

バルコニーの手すりに腰かけていたのは、銀髪に褐色の肌を持つ少年だった。少年は室内に入ると、黒い外套をひらひらさせながら、ルキアに笑いかける。彼の赤褐色の瞳は好奇心をのぞかせていた。

ルキアは燭台に手をかざし、蝋燭に火を灯しながら問う。

「リジー、いつからそこにいたんだ?」

「ちょうど、お前に客が来たときだったかな。なにやら深刻そうだったから、なかなか声かけづらくてさ」

投げかけられたリジーの視線をかわし、ルキアは椅子の肘掛けにもたれかかる。

「……少々、面倒なことになった」

「ああ、シベリーの討伐か?」

「さっきの話、聞いていたのか?」

「聞いてたんじゃなくて聞こえたんだよ。偶然だってば、わざとじゃない」

リジーは長椅子に腰を下ろし、呆れたような高い声を漏らす。

「それに、ここ数日えらく噂になってるんだけど、お前は知らなかったのか?」

「私は、噂などというものには耳を傾ける気はない」

「いや、ちょっとは耳澄ませとけよ。あんまり外のことに疎いのも問題あると思うぜ。お貴族様は外聞を気にする必要もあるだろ?」

「まさか、司祭の徴兵まで噂になっているのか?」

「司祭がどうしたって?」

「……ルドリア教会の高位司祭がシベリー軍の討伐部隊に組み込ま

れることになった」
「へえ、それはすごいな。この国では聖職者が軍人の真似事までするんだな」

ルキアは押し黙ったが、リジーは意気揚々として言葉を続ける。
「俗人以上に金欲と色欲に塗れた聖職者なんて別に珍しくないし、軍人以上に人殺しが趣味の聖職者がいてもおかしくないだろうけど、ちょっと問題ありすぎじゃないか？」

リジーの明るい声は、却ってルキアの心に暗い陰りを落とした。冷静になって考えてみるほどに、これはとんでもない事態なのだと思い知る。

「おそらく私はシベリー軍の討伐に参戦することになるだろう。こんなことになってしまって本当にすまないと思っている」

ルキアが悄然として告げると、リジーは肩をすくめた。

「そんなこと俺に謝られてもな……。まあ、お前は好きにやれよ。どうせ俺は見てるだけさ」
「好きに、か。それができれば苦労はしないさ」

わずかな沈黙ののち、リジーは短くため息を吐く。

「こんなことになるならさ、司祭なんかにならなきゃよかったのにな」
「どうして、今さらそんなこと……」
「お前は子供のころから毎日朝から晩まで勉強漬けだったじゃないか。他にも剣術やら馬術やらって、ろくに遊ぶ暇もなくてさ。それ

もこれも、将来、あの王太子様に仕えるためだったんだろう？」

ルキアの中からいくつもの記憶が断片的に浮かび上がり、しばらくの間、彼の思考は過去に止め置かれていた。それらの記憶は十数年も前のものから、ほんの数年前のものもあったが、そのすべてが遠い昔のことのようであった。

「……たしかに、そんなころもあったな。だが、今さらそんな話をしても仕方ないだろう？」

「仕方なくても文句の一つも言いたくなるさ。お前は昔から物わかりのいい振りばかりしてるじゃないか。当主の座なんか弟に押しつけちゃえばよかったんだよ。そのほうが、絶対お前のためだったと思うぜ」

「私がこの家を継いだのは国王陛下のご命令だったからだが、司祭となっても今まで学んできたことが無駄になるわけではない。後悔などしていない」

「お前が納得してるなら別にいいけどさ。……それよりお前、いきなり力を使うのはよせよ。見てて冷や冷やする」

ルキアが誰かにそのようなことを言われたのは久々のことだった。彼が不用意に力を使おうとも、それを咎める者はもういない。

幼いころ、ルキアは秘められた強い魔力を抑えることができず、度々、窓硝子や燭台を粉々に砕いてしまうこともあった。その程度ですんだときはまだ良くて、一度など、室内を炎で包んでしまい、あわや大惨事となりかけたことがあった。そのときのこと思い出し、ルキアを懐かしさと恥ずかしさが襲った。

「……今はもう、力を上手く制御できなかった子供のころとは違う。そんな心配はいらない」

「へえ、ずいぶんと偉そうな口を利くようになったもんだな。父親

の前じゃ絶対にそんなこと言えなかったくせに」
「すまない、これからは気をつけるよ」
ルキアはくすりと笑って、立ち上がり、そのまま部屋を出ていこうとした。
その背にリジーの声が投げかけられる。
「どうしたんだ？」
「今から出かけてくる。だからリジーはもう帰れ」
「病人が無理すんなよ。足元ふらついてるぞ？」
ルキアはかすれた声で相槌を打ち、そのまま貴賓室を後にした。

爛熟

アイオーン離宮の談話室にて、ミカヤは白い長椅子に腰かけて斜陽を眺めていた。その長椅子は、曲線を多用した意匠で、細かいところまで繊細なレリーフが施されており、くつろぐには少し不適に思える造りをしている。

アイオーン宮は別名“王太子離宮”とも呼ばれており、この宮殿の主はまぎれもなくミカヤである。それにもかかわらず、この部屋は主の意思にことごとく逆らうかのように、軽薄な華やかさばかりを漂わせており、ミカヤは忌々しさを覚えた。

熟れすぎた果実……。

父王の御世についてそう評したのは誰であっただろうか。人であれ、文化であれ、この国の至るところで、熟れて、腐り、地へと落下する果実の末路を思い起こすものを目にすることができる。

毒々しさを覚えるほどの甘ったるさとでも言えばよいのだろうか。華やかな飾りは成熟の表れというよりも虚飾でしかなく、その最たるものが国王であるというのは爛熟の証とも言えた。

「あと、ほんの少しの辛抱だ……」

ミカヤは口の中で呟きながら、地に叩きつけられ、血のような赤い汁をほとばしらせる果実を頭の中に思い浮かべた。

現王アルト＝ヴィジェがまだ王太子であったころ、彼はありあまる華やかな美貌とは不釣り合いなほど覇気のない性格をしており、

それに加えて政務よりも色事に情熱を傾ける有り様で、先王の気を揉ませていたという。

王の悪癖に拍車をかけたのは、初めの妃を成婚後たった四年で亡くしたことにあるとされるが、その数か月後に誕生した異母弟キイルの存在により、世継ぎを儲ける重責から解き放たれたことも大きいと言われている。

ほぼ時を同じくして、先王が流行り病にて崩御し、アルト＝ヴィジェが王位に就くに至ったが、それから四十年もの間、彼に王としての自覚が芽生えたことなど一瞬たりとてなかったのだろう。

宮廷においても国民の間においても、“お飾りの君主”と揶揄されるようになって久しく、老いによりかつての容色が失われた今となっては、もはや不要の装飾と化していた。二年前に王が大病を患い危篤に陥ったときも、王家に長く仕えてきた重臣たちでさえ、来たるべき時が来たという態度を取る始末であった。

そんな父王を、ミカヤはただ憐れに思う。

ミカヤは王に対し、最低限の敬意と人並みの嫌悪以外の感情を抱くことはなかったが、昨今ではその敬意も憐れさに浸食され、嫌悪感ですら無関心へと変わりつつあった。

扉の軋む音が耳へと届き、ミカヤはおもむろに目を開く。

空は既に陽が落ちかけ、薄く闇に包まれていたが、それほど時間が経過したわけではないようだった。入口のほうへと視線をやり、そこに立つ近衛士官の姿を目に留めると、ミカヤはふっと微笑する。

「ずいぶんと早かったな」

ミカヤは目を細め、エリーヌ＝フィーア・ディラ・グレンヴィル少尉に声を投げかけた。

エリーヌはミカヤの異母姉の姪に当たり、ミカヤからすれば妹同然の存在である。彼女は四年前、十五で士官学校へ入学し、卒業とも近衛に配属された。幼いころから乗馬や剣術に励んでいたとはいえ、エリーヌは雄々しさなど微塵もない可憐な令嬢であった。彼女の父であるグレンヴィル伯爵は、武官の道を志した愛娘に、今なお反対の意思を示しているという。

王太子の近衛は、軍人としての素養に加え、家柄や容姿、所作の美しさまでもが考慮されている。

そんな近衛士官であるエリーヌの姿は、この華美に過ぎる部屋の中でも浮くことはない。長い栗色の髪を束ねる赤のリボン。まだ幼さを残した顔立ちと華奢な体躯には不釣り合いな黒い軍服。ほとんど装飾と化した金色のサーベル。それらを身にまとう彼女の存在もまた、この国の象徴の一角であるのだろう。

ミカヤは不愉快なレリーフの施された肘掛けに身体を寄りかからせる。

エリーヌはミカヤの近くまで進み出て、その場で恭しく膝を折った。

「ただいま戻りました」

「エリーヌ、急ぎ戻る必要などなかったのだぞ。あれとまともに顔を合わせたのは久しぶりだったのだろう？　積もる話もあっただろうに」

「いえ、わたくしの務めはセヴァンス侯に殿下の命令書をお渡しすることでしたので」

「実直だな。やはり、友人同士というのは似るものなのか？」

返答に窮しているエリーヌを見やり、ミカヤは左の口角を上げる。

「お前の場合は、ただ意地を張っているだけだな」

「意地などではございません。侯爵は酷く風邪をこじらせている様子でしたので、長居はできぬと思った次第でございます」

「あれが病を得た理由を知っているか？」

ミカヤからの突然の問いに、エリーヌは大きな琥珀色の瞳を瞬かせる。

「近ごろ、王都では質の悪い風邪が流行っておると聞いています。彼の病はそのせいではないのですか？」

「そのような理由ならば、わざわざお前に問わぬ。アンジェより聞き及んだ話だが……数日前、宮殿に来ていたジークの末子が池の近くで遊んでいたらしい。それで足を滑らせて溺れているところをルキアが助けたのだそうだ。当の子供はかすり傷で済んだにもかかわらず、あいつは何日も高熱にうなされ、出仕もかなわぬというわけだ」

「そうですか、ジーク・ラッセル伯爵のご子息を……」

「いかにもあいつらしい理由だろう？」

ミカヤは嬉々として問いかけたが、それに反してエリーヌの顔は憂色に包まれていた。その反応に、本当にわかりやすいことだ、とミカヤは苦笑する。

ジーク＝レイ・ディラ・ラッセルは王弟キイルの腹心で、その外戚――ハーシェリオン家に長年仕えてきた伯爵家の当主である。ジークは十年近く前から陸軍大臣の地位にあるが、今回のシベリー軍の討伐に今もなお難色を示している。ジークはこれまでにもミカヤのやることなすことに難癖をつけてきた。そのため、ミカヤは王弟

派の人間とルキアが関わることを酷く嫌っており、そのことはエリーヌもよく知っている。

「それにしても……父上だけでなく、子供のお守りまでしているとはな。あいつは一体なんのために宮廷に上がったのだ？」

ミカヤは呆れと興を織り交ぜた声で呟いた。

縁故で取り立てられた文官・武官よりもはるかに役に立つ人材でありながら、宮廷におけるルキアの主な職責は、公式礼拝を取り仕切ることと王の私的顧問を務めることである。私的顧問といっても、王は政から遠ざかって久しく、王から持ちかけられる相談事など空疎な夢物語にすぎない。ルキアが無為に日々を過ごしていることをミカヤはかねてより遺憾に思っていたが、それはエリーヌも同様であった。

「出撃命令についてルキアはなんと言っていた？」

「殿下の命ならば否やはない、そう申しておりました」

「あいつらしい物言いだな」

「ただ、少々怒っているようにも見受けられましたが……」

「ほう？　ルキアが怒るなど珍しいことだ」

「それほど不満に思っているということではないのでしょうか？　わたくしの目の前で殿下からの書状を燃やしてしまいましたから」

それを聞いたミカヤは愉快げに笑う。

「それで、お前はルキアと喧嘩になったのか？」

ミカヤの問いかけに、エリーヌは驚きを露わにした。

「ルキアを戦場に遣ろうとしていること、お前が不服に思わぬわけ

はないからな」

心配なのだろう、とミカヤが微笑むと、エリーヌは慌てて端然とした顔を作る。

「恐れながら、わたくしは司祭を戦場に出すのは好ましくないと考えております。どれほど強い魔力を秘めていようとも、剣の使い方も忘れてしまったような者を戦場に出しても、足手まといになるだけではないのかと――」

ミカヤの低い笑声がエリーヌの声に被さる。これほど見え見えの嘘を吐くのなら、胸の内を明かしているのと大差なかった。

エリーヌほど愚直な人間はミカヤの周りにはいない。父王はさておき、皆、易々と心裡を隠し、心の中で唾を吐いている。その面の皮の厚さは、決して剥がすことのできない鉄仮面のごとくである。だからこそミカヤは、エリーヌを好ましく、貴重に思っていた。

「まったく、すげない素振りだな。昔はあれほど仲睦まじかったというのに……」

ミカヤの知る限り、ここ数年ルキアとエリーヌはろくに言葉を交わしていない。エリーヌが近衛に入隊してからは王宮で顔を合わせる機会が増えたにもかかわらず、挨拶をするどころか、目すら合わせようとしない。

ここまで徹底的に意地を張り通すのなら、二人が疎遠になっていくのも仕方ない。誰の目から見てもルキアとエリーヌは対照的な人間であるものの、こういうくだらないこだわりを持ち続けるところだけはそっくりだった。

「たしかに、クラウス殿が亡くなり、ドートリッシュを継いでから

というもの、あいつは変わった。お前の苛立ちはわからんでもないさ」

うろたえるエリーヌから視線をそらし、ミカヤはゆったりと背を長椅子にあずける。

「……久々に、会いに行ってみるのも悪くない」

悪の巣

夜の市街を二頭立て馬車が駆けていく。
ルキアは御者にとにかく急いでくれと告げていたが、病のルキアを気遣ってか、御者は比較的ゆったりと馬を走らせているようだった。それでも通常よりは速度を上げているため、滑らかに舗装された道とはいえ、不愉快な揺れが車両を通してルキアにも伝わった。
舗道には等間隔に街灯が設置されており、夜道でもある程度の明るさが保たれている。この街灯は、日暮れ近くになると点灯夫たちが市街中を回ってランプに点火し、なおかつ夜中灯りを絶やすことがないよう定期的に燃料を補給する必要がある。現在この大陸において、これほど街灯設備の整った都市はエクシュールのみであり、これはゴースティンのような大国の都だからこそ成せる技であった。

ルキアはずっと伏せていた目を開き、窓の外の風景を眺めた。
そこはドートリッシュ邸の南、馬車を十分ほど走らせた位置にあるフェルダ大聖堂の近くで、ここまで来れば目的地まであと少しの距離である。

今、ルキアが向かわんとしているのは、ルドリア教会の高位司祭エーゼン＝ドゥル・ディラ・サルファの邸宅である。
王都の中東部にあるサルファ邸は、濃い灰色の外壁を持つ珍しい建物で、王都に多数ある貴族の邸宅の中でも異彩を放っている。黒々とした外観は、昼間に見ると遠く離れた位置からでも威圧感を覚えるが、夜に見るとまた格別な凄味があった。

サルファ邸に到着したルキアは、当主エーゼンの私室に通された。

ルキアがサルファ邸を訪れることはこれまでに幾度かあったが、当主の私室に通されたのは今回が初めてのことだった。

数年前までエーゼンは宮廷司祭の地位にあった。その当時、ルキアはミカヤの学友としてアイオーン宮に居室が与えられていたため、二人が王宮で顔を合わせる機会は多かった。エーゼンが教会の総議長となり、ルキアが高位司祭となってからは、フェルダ大聖堂で開かれる定例会議や公式礼拝の場において同席するようになっている。

エーゼンの部屋に足を踏み入れたルキアは、広い室内を見渡しながら奥へと進んでいく。

部屋の右手には暖炉があり、赤々と焚かれた火が弾けていた。暖炉の上には、細かな美しい彫刻の施された小銃が置かれている。それは半世紀ほど前に主流だった様式の銃で、装飾目的であるに違いないが、上級聖職者の私室には明らかにそぐわないものである。

ルキアの目を一際引いたのは、暖炉の斜め右の壁に掛けられた巨大な絵画であった。

その絵はアルゼ教典の一節を描いたもので、ルドリア神の御使いにより力を授けられた聖イシスが、ヴァーロンの大軍勢と果敢に死闘を繰り広げている。

イシスの放つ＞神の力（レガロ）＜は、原始教典の中に登場する四聖獣の力を呼び出すものとされているが、絵画の中では聖獣の姿がそのままイシスの放った力として描かれていた。聖イシスはゴースティン地方に多い栗色の髪を持つ青年の姿をしており、現在のものとは形の異なる白い祭服をまとっている。

エクシュール宮殿とフェルダ大聖堂にも教典の一節を描いた宗教画が一枚ずつ置かれているが、おそらくこの絵も同じ画家の手によ

るものだろう。筆使いはさることながら、イシスの容貌がいずれも同じものであった。

（しかし、この絵はあまりにも……）

ルキアが眉をひそめたのと同時に、奥の間の扉がゆっくりと開かれた。ルキアは絵画から視線を外し、部屋の中央へと歩み寄る黒髪の男を見やった。

「その絵、お気に召しませんでしたか？」

「……なぜ、そう思われるのです？」

「あなたには珍しく、ずいぶんと険しい顔をしておいでですから」

エーゼンはルキアの横に並び、絵画を見上げる。

「この絵は、宗教画で知られる巨匠ノワイユの遺作です。彼はその生涯においてアルゼ教典の一節をもとに三枚の絵を遺しましたが、三部作の最後であるこの一枚だけがあまりに異端で、聖堂にも王宮にも飾られることがなく、私の祖父が買い取ったのですよ」

王宮と聖堂に飾られている宗教画は一対になっているのだとルキアは思っていた。ルキアに限らず他の多くの者も、サルファ邸にまだ別の一枚があることを知らないだろう。それも無理からぬことと思えるほど、三部作最後の一枚はエーゼンが異端と称するに相応しいものであった。

イシスの身体と白い衣は血に塗れ、足元には甲冑を身につけた戦士の遺骸が無数に転がっている。激しい戦闘の様子を表現するにしても、あまりに通俗的に過ぎ、神々しさよりも生々しさを強調している。

「私に絵を解する心はありませんが、これは少々悪趣味ではないかと」

「たしかに、この絵の中のイシスは聖者とは程遠い姿ですね。しかし私はアルゼ教典を深く解して描かれたものだと思っています。大量殺戮を行なった司祭としての側面もまた、聖イシスの真実なのですから」

「申し訳ありませんが、私はノワイユの絵をあなたと論じるために赴いたわけではありません」

ルキアが冷たく遮ると、エーゼンは、肩にかかるつややかな黒髪を揺らしながら身をひるがえす。

「どうぞ、お掛けになってください」

ルキアはエーゼンが指し示した黒檀の椅子に腰を下ろす。ややあって、エーゼンもルキアの前に対座した。

今、ルキアもエーゼンも祭服はまとっていない。ルキアは夜着から礼装に着替えたが、エーゼンは白いシャツの上に深苔色のローブを羽織っていた。

「ルキア様、今夜はどうされたのです？　伏せってらっしゃると伺っておりましたが」

「いきなり押しかけて申し訳ありません。……ですが、至急あなたにお話しせねばならぬことがございましたので」

高熱のために余裕を失くしたルキアは、前置きもそこそこに本題に入る。

「ミカヤ殿下からの命令書が届きました。一か月半後のシベリー軍の討伐に参戦せよとのことです。あなたも既に同様の書状を受け取

っていらっしゃるかと思いますが……」
「ええ、それがどうかしたのですか？」
わざとらしいほどに余裕然としているエーゼンに対し、ルキアはわずかに気色ばんだ。
「それについて説明していただきたい。これは一体、どういうことです？　なぜ、殿下があのような命令を……」
形式上、国王はゴースティン＝ルドリア教会の最高位にある＞主教＜よりもはるかに強い権力を有している。国王の力は教会へ及ばないわけではないが、教会はゴースティン王国よりも長い歴史を持つ組織であり、国王自身が神への畏敬から教会への干渉を行ってこなかった。
教会内の自治を司るのは約二十名の＞高位司祭＜であり、重要事項については彼らの合議によって決定がなされる。慣例上、その合議決定はゴースティンの国内法に優位し、国王であっても軽視することは許されないとされてきた。
「国王の勅許を得た王太子命令であろうと、教会の意思に反し、司祭を徴兵する権限などあろうはずがない……。ルキア様はそうおっしゃりたいのですね？」
「そうです。あのような命令書が出されたということは、ミカヤ殿下の命に従うという合議決定がなされたということでしょうか？」
エーゼンはルキアの怒りを受け流すかのように微笑んだ。その顔は、一見、柔和な印象を与えるものの、瞳の奥に忍ばせた鋭利が見え隠れしていた。
「いいえ、その件に関して合議は行われておりません。私が高位司

祭を代表して、徴兵命令への了承をミカヤ殿下にお伝えしただけです」
「いくら総議長とはいえ、あなたにそのような権限はないはずでは？」
「もちろん、マーシェル主教の同意を得た上でのことです」
「マーシェル様が同意なさったと？　私にはとても信じられませんが」

ルキアが険しい表情のまま問いを重ねると、エーゼンはすっと笑みを消し、滑らかな言葉を舌先にのせる。

「ミカヤ殿下のお言葉をそのままお伝えしましたところ、マーシェル主教は不承々々ながら同意されました」
「殿下のお言葉？」
「『所詮、慣例は慣例……。誰かが破れば意味などなさなくなる』とのことです。なんともあの方らしいお言葉だと思いませんか？」

ルキアは言いかけた言葉を飲み込み、別の問いを投げかける。

「それで、他の高位司祭らはなんと言っているのです？」
「一昨日、高位司祭をフェルダ大聖堂へ緊急に集め、事の経緯について私から詳細に説明をいたしました。なにぶん、司祭の徴兵など前代未聞のことですので、手放しで賛成する者などほとんどおりませんでしたが、最終的には納得していただけたようです。まあ、下位司祭からは批判が噴出するでしょうが、さしたる問題はないでしょう。彼らには関係のない話ですから」
「関係ないなどと、よくもそのような――。これは教会全体に関わることではありませんか！」
「あなたのお怒りはごもっともですが、もし仮にあなたが私と同じ立場ならば、どうされました？　王の寵臣というお立場をもって、

陛下にお願い申し上げましたか？　たしかに陛下はあなたのお願いならば、ミカヤ殿下の嘆願ですら反故になさるかもしれませんね。……残念ながら、私にはそのような手段を取ることはできかねますが」

エーゼンが当てこするように告げると、ルキアは机の下で膝に置いたこぶしを震わせた。やり場のない怒りのせいで、ますます熱が上がってきたように感じられた。

「コルベール侯爵、ですか……」

ふいにエーゼンの含み笑いが聞こえ、ルキアは視線を上げた。エーゼンは懐から取り出した書状を手に取り、薄く笑う。

「いくらそれが私に与えられた称号であっても、私のことをそう呼ぶ者はほとんどおりませんね。あなたの場合は宮廷を出入りされているので、称号で呼ばれることのほうが多いのでしょう。……セヴァンス侯？」

ルキアが言葉につまると、エーゼンは軽く椅子を引いて立ちあがった。

「称号など、なんら価値のないものです。私たちはかつての地位を失い、王権の支配下に置かれた。侯爵と呼ばれるたびに、そのことを認識させられるだけなのですから……」

エーゼンは未開封の書状を持ったまま暖炉の近くへ進むと、書状をためらうことなく燃え盛る炎の中にくべた。

かつてエクシュールの地はゴースティンの王都ではなく、ドート

リッシュ家が支配権を有する教皇国の一部であった。その当時、ドートリッシュの当主は教皇と呼ばれ、ゴースティンのみならず他国のルドリア教会にも多大な影響を及ぼしていた。一方サルファの当主は大司教という地位にあり、教皇の側近の中でもっとも権威ある地位を受け継いできた家柄だった。

それが今から三百年前、教皇エルジェ三世の時代に、エクシュールの支配権がゴースティン＝オトゥール王家に譲渡され、教皇軍の解散と引き換えに、ゴースティン国内のルドリア教会は王家による保護が約束された。それに伴い、ドートリッシュとサルファには侯爵位が与えられてゴースティン王国の一貴族となった。

ただし、この二つの侯爵家は、国内のルドリア教会においてかつてと同じような権力を保ち続けている。ドートリッシュの当主は主教に選ばれることが多く、先代のクラウスも主教の地位にあり、現在ルキアは主教に次ぐ四大司祭の位を得ている。サルファ家もまた同様の傾向があり、当主のエーゼンは合議を取り仕切る総議長の座に就いている。数百年を経た今もなお、教皇時代の権威に縋り、古い血脈に強いこだわりを持つがゆえに、ドートリッシュやサルファの一族の中には王家に対し反感を抱いている者が少なくない。

燃え上がる書状を見届けたエーゼンは、ルキアのほうに向き直る。

「私は教会が王権の支配下に置かれることを快く思っておりませんが、シベリーの討伐については教会が異を唱える必要はないと考えているのです。あの目障りな異教の蛮族の駆逐は、ゴースティン王国ではなく、我らルドリア教会の役割でもあります。それだけの力を私たちは神より与えられているのですから」

その一言で、ルキアはひとつの確信を得る。

「……ミカヤ殿下は高位司祭が強大な力を有していると中央会議で発言されていたそうなのですが、まさか、＞神の力＜の存在についてもご存じなのですか？」
「ええ、ご存じですよ」
「殿下にそれをお教えしたのは、あなたですね？」
「そうです。私がミカヤ殿下にお教えいたしました」

エーゼンは悪びれる様子もなく、あっさりと認めた。ルキアが唖然としていると、エーゼンはすらすらと語り始める。

「ラッセル伯爵がシベリー軍の討伐に難色を示されており、キイル殿下を始め、他の大臣方も王太子殿下には批判的なようです。殿下は大臣方を納得させるため、自軍の被害を最小限に抑え、なおかつ早期に戦を終結させる方法を模索しておられました。それで先日、魔道の力を軍事利用できないかと私にお訊きになられたので、高位司祭の力と四大司祭が操る禁忌魔法についてお話しした次第です」

＞神の力（レガロ）＜。

教会内では禁忌魔法とも呼ばれるが、それが実在することを知っているのは一部の者に限られ、ルキアですら四年前に高位司祭の叙階を受けるまでただの迷信だと思っていた。教会がその存在を秘匿してきた理由は定かではないが、あまりに強大な力ゆえに、時の権力者たちに悪用されることを避けようとしてのことだと解されている。

「サルファ殿。……シベリーがルドリア教会において不都合な存在であるとしても、司祭が人を殺めるということについて、あなたはどう考えておられるのです？　このようなことが許されるとでもいうのですか？」
「それは、シベリーがルドリア教会における“人”に当たればの話

では？」

平然と言ってのけるエーゼンに、ルキアはますます苛立ちを強めたが、このように思っているのはなにもエーゼンだけではない。

シベリーは、はるか昔よりアレイシス大陸に彼ら独自の文化を築き上げてきた民族と言われている。彼らは浅黒い肌に白銀色の髪をしていることに加え、発達した犬歯を持つ。そんな彼らの姿は異形の者とされ、その忌わしさから永く迫害を受けてきた。

その一方、ゴースティンやケーニヒスといった大陸南中部の諸国はガレ族と呼ばれる民族で構成されており、彼らの文化圏がルドリア教崇拝圏となる。ガレ族とはダグー族やフェルノ族といった大陸の多数派民族の総称であり、シベリーのような一貫した特徴を持たないが、それでもシベリー族が“異形”と呼ばれるのは、彼らがガレ族の容貌とは大きく乖離しているからに他ならない。

それゆえ、両族が互いの望む形での共生を目指すのは困難を極めていた。

シベリーはガレ族による迫害に遭いながらも、古くからの居住地を手放そうとせず、その結果、ゴースティンやケーニヒスといった大国が領土を拡張していくにつれ、両国の境へと追いやられていった。

現在、シベリーはケーニヒスに従属し、自治国としての地位が認められているが、シベリー自治国はゴースティンとケーニヒスの国境を帯状に分布しており、この奇妙で歪な形こそが、両族の盛衰の歴史をそのまま体現していた。

王都の貴族や裕福な平民たちは、シベリー族を直接目にする機会などなく、彼らは異形の悪魔であると子供のころより偏った考えを植えつけられ、多くはそのまま大人になっていくのだ。

ルキアは机上の一点をじっと見つめたまま、おもむろに口を開く。

「シベリーは長年迫害されてきましたが、この百年ほどはケーニヒスの保護下にあり、自治権や居住権を保証されています。ケーニヒスの意図は国境防衛ためにシベリーを軍組織化することであり、民族としての彼らを尊重しているわけではありませんが、依然として迫害に回るゴースティンにシベリーが反発するのは当然ではありませんか」

そう口にしながらも、ルキアはどこかで虚しさを感じていた。

ゴースティンの民――とりわけシベリーによる暴動や略奪行為の被害に遭ってきた国境周辺の民にとって、シベリーは軽蔑と憎悪の対象である。選民意識の強い貴族はシベリーの存在について歯牙にもかけない者が多かったが、ここ数十年、国境に駐留している西方軍の被害が拡大するようになってからは、討伐を主張する者が増えていった。今回はミカヤが強硬に進めようとしているが、討伐自体は遅かれ早かれ決行されたに違いない。

そんな心の迷いを嘲笑うかのように、エーゼンは冷笑的な視線をルキアに向ける。

「たしかに、シベリーはゴースティン・ケーニヒス両国の争いに巻き込まれてきた犠牲者ではあるでしょう。ですがルキア様、その件に関して責められるべきはゴースティンではありません。シベリーを国境防衛の捨て駒としているのはケーニヒスなのです。それにあなたもご存じでしょう？　ケーニヒスがシベリーの自治権を縮小し始め、それに不満を募らせたシベリーがケーニヒス相手にも暴動を起こしていることを……。そもそも、シベリーは国境を越えて略奪行為を起こすことが珍しくなく、彼らを一方的に弱者ととらえるの

は無理があるのでは？」

エーゼンの言葉には明確な誤りなどなかったが、まったく正しいとすることもできなかった。ただしそれは、普遍的な道徳によってでしか批判のできない、言わば感情論でしかない。なにより今のルキアにはエーゼンに食ってかかる気力などなかった。

なおもエーゼンの言葉は続く。

「それとも、ケーニヒスと直接開戦すべきだとでもおっしゃりたいのですか？　かつてキイル殿下がシベリー討伐を主張されていたのは、ケーニヒスとじかに戦を交えることなく、その軍事力を殺ぐためでした。今回のミカヤ殿下の提案はそれと同じものです」

ルキアはますます熱を持ち始めた額を押さえた。興奮を無理やり抑えていたために、余計に体力を使い果たしてしまったようだった。

これは今に限ったことではない。エーゼンと二人きりで話すとき、ルキアはいつも強い敗北感を噛みしめている。

「それにしても、＞神の力＜を軍事利用なさろうとするなど、あの方は本当に“神をも恐れぬ者”ですね。ミカヤ殿下については私よりもルキア様のほうがよくご存じでしょうが、そうは思われませんか？」

ルキアは額を押さえたまま小さく笑う。

「そうですね、あの方は昔から神など信じぬとよく言っておられました。そのことを思い起こせば、今回の徴兵命令もなんら不思議はないように思えます」

「一昔前ならばそのような方は本当に珍しかったのでしょうが、昨今ではさほどでもないのかもしれませんね。本当に、神への敬意を

払う者が少なくなってきているのは嘆かわしいことです。我らが受け継いできた力にしても、存在が秘匿されてきたがために徐々に権威が失われていき、挙げ句の果てには教典がお伽話のように扱われている始末ですから」

エーゼンの言葉には、その口調の柔らかさとは裏腹に鋭い棘を含んでいた。ルキアは幾ばくの不安に駆られながらも、こう問わずにはいられなかった。

「あなたは、昔のような権力を取り戻そうとでもいうのですか？力を誇示すべく、戦に協力しようとでも……？」

エーゼンは肯定するでも否定するでもなく、ただ目を細めただけだった。ルキアは熱い息を吐きながら、固く目を閉じる。

これから起こりうることを思うと、ルキアの胸は騒いだ。それは、ほんの弾みで傾斜を転がり始めた小石を見ているような感覚だった。辛うじて続いてきた平穏に密かに影が落とされていく……。まさにその瞬間を味わっているのだと思った。

雪にけぶる視界へと　（1）

ルキアは聖堂の西塔へと登り、その中ほどからエクシュールの街並みを眺めていた。ここからは、まっすぐに伸びた幅の広い通りと、その両脇に立ち並ぶ家々を臨むことができる。この一帯の建物の屋根は青銅色で統一されており、その風景は圧巻であるはずなのだが、ルキアの目の前に広がるものはどこか陰気で色を失くして見えた。

石灰のような空から雪が舞い降りてくる。くりぬき窓から手を差し出すと、小さな雪が手のひらに落ちたが、雪はその冷たさを感じさせる間もなく、すぐに熱で溶けた。

無数の雪がひらひらと地上へと沈んでいくのを、ルキアは瞬きもせずに眺める。

一週間以上も続いた熱は今朝ようやく引いたが、相変わらず身体中が痛く、脚も腕も重いままだった。そのせいか、気分も塞ぎがちになっていた。

突如強い風が吹き、黒い祭服のケープと銀飾りを煽る。

乱れた服を正しつつ、ふと通りに視線を向けたとき、ルキアの目は黒塗りの二頭立て馬車をとらえた。その馬車はドートリッシュ邸へと向かってきているようだった。

礼拝に訪れた貴族であろうか。

ルキアは壁に立てかけていた紫水晶の聖杖を手にし、長く続く螺旋階段を降り始めた。

西塔から出たルキアが聖堂の扉の前に立ったとき、先ほど塔の上から見た豪奢な馬車が裏門をくぐり、ゆったりと聖堂のほうへ近づいてきていた。御者の仕着せは藍地に銀の刺繍がされており、派手さはなくとも品を感じさせるものである。

ルキアは来訪者の様子をじっと眺めていたが、馬車の屋根にある王冠の装飾を目に留めたとき、まさかと思いながら、急いで石段を駆け下りた。

馬がいななき、車輪が止まる。

御者が恭しく車両の扉を開けると、黒衣をまとった赤い髪の青年が石畳の上に降り立った。青年が黒い毛皮の外套をひるがえしながら進んでくる。ルキアはその場に立ち尽くしたまま、乱れた息を押し殺すように唾を飲み込んだ。

「久しいな、ルキア」

「ミカヤ殿下、なぜ……」

ミカヤはルキアの前を通り過ぎ、肩にかかる波状毛を揺らしながら石段を上り、聖堂の中へと入っていった。

この聖堂はドートリッシュ本邸の敷地内にあり、一般に開放されているが、今は誰も訪れていない。ルキアはミカヤの姿が聖堂の中へ消えたのを見送った後、彼の後に続いた。

ルキアが聖堂内に足を踏み入れたとき、ミカヤは身廊の中ほどに立ち、物珍しげに天井を見上げていた。

この聖堂は壁画の施された王宮の礼拝堂とは異なり、精巧な彫刻が施された円柱群がそびえ立ち、その間からはステンドグラスの高窓が展開されている。

今日は空が薄曇りで窓から透過光がほとんど差し込まないが、そのことが却って高窓の装飾に荘重さを与え、ステンドグラスの細か

な模様が豪華さを増していた。

ルキアは聖堂の重い扉を閉じ、表情を硬くしたままミカヤに声をかける。

「まさか、殿下がこのようなところに来られるとは思いませんでした」

「なぜそう思うのだ？」

「昔から、神など信じぬと言っておられたではありませんか。王宮での公式礼拝にもほとんど出られませんし」

ルキアの返答に、ミカヤは愉快そうに笑いながら、椅子に腰を下ろした。

「このようなところに用はない。お前に用があって出向いたまでだ」

ミカヤの強い視線をさりげにかわしながら、ルキアは問う。

「命令書への返事ならば、昨日お届けしたはずですが」

「ああ、昨夜受け取った。お前の手蹟（しゅせき）はあいかわらず見事なものだな」

「では、わたくしへの御用とは？」

「久々に顔を合わせたというのにそっけないことだな。顔色が悪いようだが、まだ気分が優れないのか？　それとも怒っているのか？」

意外な問いかけに驚き、ルキアが瞳を瞬かせると、ミカヤは少し眉を下げる。

「エリーヌをお前のもとに遣ったこと、そんなに気に入らなかったのか？」

「いえ、そういうわけでは……。ただ、なぜ彼女に命令書を届けさせたのかと……」
「そう構えるな。別に深い意味はない。ただ、王宮で居合わせても目すら合わせないお前たちに話し合いの機会を持たせてやろうと思っただけだ」
「恐れながら、そのような気遣いは無用にございます」
「やはり怒っているのではないか。だから私からの命令書を灰にしたのか？」

ルキアがわずかに表情を乱すと、ミカヤはエリーヌに聞いたと言って目を細める。

「そのことを責めているのではない。あんな紙切れ一枚でお前が承服するなど、初めから思っておらぬ。あの命令書は、言わばパフォーマンスだ」

ミカヤは椅子の背に手を置いて身体をもたれかからせ、佇立しているルキアを冷やかに見やる。

「ドートリッシュやサルファの人間はなにか勘違いをしているのではないか？　これまでは合議決定とやらが国内法や王命以上に優先されてきたようだが、本来、ルドリア教会はゴースティン王家の従属組織だ。ゆえに、私が教会の合議決定を待つことも、それを考慮してやる必要もない。国王の温情により自治権が与えられてきたからといって、それに付け入り、好き勝手にやってもらっては困る。……あの命令書に意味があるとすれば、お前たちにその立場を改めて認識してもらうためのものだ」

ルキアの頭に、先日のエーゼンとの会話がよみがえる。ルキアはエーゼンに賛同する気も、彼を庇うつもりもなかったが、ミカヤの

言葉に対し少々反発を抱いた。

「そうそう、あの総議長が言っていた。たとえお前が司祭の徴兵に不服であろうとも、国王にすがることはないだろう、とな。実を言えば、私はお前が父上に勅許の撤回を求めるのはないかと思っていたのだ。さすがに今回ばかりはなりふり構ってはいられないはずだからな。しかし、それはいらぬ心配であったようだ」

ルキアは聖杖を握る指先に力を込め、ミカヤに決然と告げる。

「そのようなこと、考えもしませんでした。わたくしが陛下に勅許の撤回を求めるなど、あまりに僭越でございますし」

「いずれにしても、お前がおとなしくしていてくれて助かった。父上がどう申されようと押し切るつもりではいたが、お飾りとはいえ、国王であることに変わりはない。今、父上に余計な口を出されては面倒なことになったやもしれんからな。まったく、国の行く末をその目に映せぬのなら、不様に寝たままでいればよいものを」

「殿下、あまりにお言葉が過ぎます」

「案ずるな。お前以外、誰も聞いてはおらぬ」

ミカヤは不敵な微笑を浮かべてみせた。それは、昔からミカヤがよく見せる表情だった。

ルキアはミカヤの不遜な言葉を胸に沈め、端正な口調で問う。

「シベリー軍の討伐について、クラヴィーエ公らはなんと？」

「なんだ、お前がおとなしくしていたのは、私があの男に屈するのを待っていたからなのか？」

「そうではありません。シベリー軍の討伐は、他国の軍隊の一部を壊滅させようとするもの。これまでの紛争制圧とはわけが違いますし、ケーニヒスやファジールといった隣国の動きも気になります。

それゆえ、宰相閣下や大臣方のご意向はどうであるのかと気になったまでのことで……」

ミカヤはうんざりしたように高窓を見上げ、荒っぽく息を吐く。

「宰相は腹心の大臣らの意向を受けて、いまだ難色を示している。外務大臣はケーニヒス及びファジールとの関係悪化を、陸軍大臣はシベリー軍の討伐に伴う両国の動きを、大蔵大臣はケーニヒス本国が参戦した折の戦費拡大を懸念している、といったところだ。あやつらの弱腰が、これまでシベリーを増長させてきたのではないのか？」

ミカヤはそう論うものの、これまで彼らの外交姿勢が消極的であったとは言いがたい。

かつてケーニヒス王国と南部のファジール大公国との間には従属関係が形成されていたが、二十年ほど前、ケーニヒスのセルバンテス王家とその支流に当たるファジールのザイード大公家との間で王位の継承及びファジールの独立を目的として内乱が勃発した。その際、当時ゴースティンの国政を担っていた宰相クラヴィーエ公は、ザイード家に味方することを決め、ゴースティンの軍隊の一部をファジールに派遣した。

その結果、ファジールはケーニヒス本国より独立を果たし、百五十年以上続いた従属関係は解消されたが、長年対立してきたゴースティンとケーニヒスの関係は悪化し、シベリー自治国が両国の緩衝地帯となっていった。

ゴースティンは最大の貿易相手国であるケーニヒスとの関係改善のため、両王家の婚姻による同盟締結を画策しようとしたが、計画は七年前に破談となり、それにより両国の関係はますます冷え切っ

ていた。
　ファジールについても、五年前にカール大公が亡くなり、その嫡子ジョアンが継いでからは、あまり良い関係が築かれているとはいえず、このシベリー討伐がケーニヒス及びファジールを巻き込むことにならない保証はない。なにより、シベリーがケーニヒス軍に直属するようになってから、シベリー軍にはケーニヒスから高度な銃器が出回るようになり、その戦力は数十年前とは比べものにならない。
　シベリー討伐自体を回避したいという大臣らの考えはもっともなもので、むしろ、司祭を徴兵してまで開戦に踏み切ろうとするミカヤのほうが不可解である。

「それでは、大臣方は高位司祭の徴兵を条件に、シベリー軍討伐に賛同されたのですか？」
「あやつらの賛同など不要だ。この件に関しては全権が私にある。他の者には一切口を挟ませはせぬ。たとえ影の王と呼ばれてきた宰相であろうとな」

　ミカヤの声色が変わった。強気な言葉とは裏腹に、どこか焦燥が感じられ、先ほどまでの余裕を失っているようでもあった。
　それに気づいてもなお、ルキアはミカヤに一気に告げる。

「殿下、クラヴィーエ公と手を取り合うことはできぬのでしょうか？　あの方は決して殿下を蔑ろにされているわけでも、自らが王になろうとされているわけでもありません。むしろ、宰相として長年この国のために尽くされてきた方です。今のように宮廷が二つに分かたれていては、内政に混乱が生じかねません。これ以上廷臣らの派閥争いを助長するようなことはお止めください」

　ミカヤは眉を吊り上げる。

「お前は、私に譲歩せよと言うのか？　父上がもはや君主として体をなしていないのだから、王の代わりとなるべきは王太子である私のはずだ。だというのに、閣僚らはその正統性を認めんと言わんばかりに私を爪弾きにしており、キイルは宰相でありながら、その状況をいまだに放置しているのだ。それが蔑ろにしているわけではないのなら、一体なんだと？」

これは、今までに二人の間で何度も繰り返されてきたやりとりだった。そしていつもこれ以上話が進むことはない。ルキアはミカヤを諫めたいとは思うものの、彼にはそれ以上の言葉を持ち合わせてはいない。

時折窓に打ちつける風が、冷えた空気をさらに寒々しいものへと変えていく。

ルキアが黙り込んだままでいると、ミカヤは耐えかねたように立ち上がった。そのまま身動き一つとらないルキアに近づき、彼の手から水晶の埋め込まれた聖杖を奪う。

「なぜ、お前が司祭などになってしまったのだろうな？」

ぞっとするほど冷たい声だった。

ルキアは空（から）になった手を所在なげに下ろす。

「ああ、たしか父上のご命令だったな。元よりお前には司祭になどなる気はなく、クラウス殿もお前ではなく弟のほうを後継に指定していたというのに……。昔からドートリッシュの人間はあの方の我儘に振り回されてばかりで難儀なことだ」

ルキアが息を呑むと、ミカヤはわずかに表情を緩めた。

「お前は幼いころから高位司祭の叙階を受けるに相応しい力を有していたようだが、侯爵家の生まれで、学問にも武芸にも秀でているとくれば、司祭などになるよりもふさわしい地位があったはず。……ルキア、教会になどさっさと見切りをつけてしまえ。私がこれだけ期待をかけているというのに、なぜお前はいつまでも司祭の地位にこだわっているのだ？」

ミカヤはそう口にしながら内陣を進み、祭壇を一段一段上り始めた。ルキアはその後ろ姿に声をかける。

「こだわっているわけではありません。わたくしはドートリッシュの当主として、司祭となるのが当然の道であるだけのことです」

「ならば、当主の座を弟に譲ってしまえばすむ話だろう。父上がなんのためにお前をマーシェル主教の側近に据えて宮廷に上げたと思っている？　本来の目的さえ達成されれば、なにも司祭などにせずともよかったはずだ」

「おっしゃっている意味が……」

「父上はお前への負い目から、傍に置いて目をかけずにいられないのだ。はぐらかすのもいい加減にしろ！」

ミカヤは声を荒げて振り返り、祭壇の上からルキアを鋭く見下ろした。ミカヤの目からは、ルキアの反応に対する怒りがほとばしっていた。

「司祭となったのは国王陛下のご命令であると同時に、わたくし自らが選んだ道です。ですから、わたくしはもう、他の何者にもなるつもりはございません」

ルキアには、ミカヤの言葉と視線を真正面から受け止めることが

できない。だからいつもこうして甲斐のない言葉だけを繰り返し、ミカヤの怒りだけを受け止めるようになっていた。

ミカヤは辟易したようにルキアをにらみつける。

「お前のくだらぬ感傷に付き合うつもりはない。予定通り、シベリー軍の討伐は断行する。よって、司祭の軍事投入も変えるつもりはない。私はこの戦にすべてを賭けているのだ。私に従うと決めたなら邪魔はするな！」

その力強い声は、聖堂内に響き渡った。ルキアはうつむき、祭壇を降りるミカヤの靴音を聞いていた。

徐々に近づいてきていた音が途絶える。

ルキアが顔を上げると、そこにはミカヤの冷たい笑みがあった。

「ルキア、いっそあの蛮族を根絶やしにしてこい。そして、必ず生きて戻ってこい。数え切れぬ者を手にかけ、それでもなお聖職に留まろうというのなら、いずれお前に主教の地位を約束しよう。そして血濡れの手に主教の聖杖を握るがいい」

ミカヤはルキアの腕を掴み、奪った聖杖を手の中に戻す。

持ち慣れたはずの杖が、重くルキアの手に圧しかかった。

「お前が私の戴冠を行うというのも一興だろう？」

ミカヤが身をひるがえすと、黒い外套と赤い髪がルキアの腕をかすめていった。その名残を追いかけるように、ルキアは扉への通路を進んでいくミカヤをじっと見つめる。

再び重い扉が開かれたとき、厚い雲の切れ間から降り注ぐ陽の光がミカヤを照らした。

（次期国王はこの方をおいて他にない……）

いかに不遜に振舞われようとも、ルキアがそう思わずにはいられないほどに、ミカヤは王者たる風格をその背に漂わせていた。

雪にけぶる視界へと　（2）

聖堂から出たルキアは、空を見上げた。陽光がうっすらと照っているにもかかわらず、雪の勢いは強く、春先だというのに積もりそうな降りようだった。

風にまかれる長い髪を手で押さえながら、石段を降りている途中、「ルキア様」と澄んだ声に呼びかけに引かれ、ルキアは西塔のほうへと視線を向ける。

そこには青色のドレスに身を包み、毛皮のケープを肩に掛けた少女が立っていた。彼女は、ドートリッシュ本邸近くに住む貴族の娘、ベアトリス・レイヴァンだった。

「来ていたのか、ビビ」

「ええ。先ほど、ミカヤ殿下がいらっしゃっていたのですか？」

「殿下にお会いしたのか？」

「いいえ。ただ、王家の馬車が止まっているのが見えましたので」

ビビは栗色の巻き毛に手をやりながら、物言いたげにルキアを見上げる。いつもは明るい光を宿している金茶色の瞳は、不安をにじませていた。

「ビビ、どうした？」

「あの、ルキア様は戦争に行かれるのですか？　学校で噂になっているのです。高位魔法を扱う司祭までもが徴兵されることに決まったと。それは、ルキア様も行かれるということですよね？」

シベリー軍の討伐だけでなく司祭の徴兵までもが噂として広まっているようだった。既に予測されていたことだったが、それが決定事項として広まっていることにルキアは少し驚いた。

ビビの学校には高位司祭の身内の者がいるのだろうか。

ルキアはビビの正面に向き直る。

「ああ、そうだ」

「それでよろしいのですか？」

「よいもなにも、既に出撃命令を受けてそれに承諾した」

「殿下のご命令であれば、どのようなものであっても従われるというのですか？」

ルキアはビビとのやりとりに既視感を覚えた。それが先日のエリーヌとの会話だったと思い出し、短く嘆息する。

どのように言葉を繕おうとも、彼女たちを納得させることはできないだろう。そもそも、ルキア自身が納得していないことを、他者にどう理解させるというのだろうか。

ルキアはビビの肩のあたりに視線を落とし、一息に告げる。

「奴らは異教の蛮族だ。仕方あるまい」

「異教の蛮族だなんて、ルキア様の言葉とは思えません。シベリーはその容貌や習俗から軽蔑されているとはいえ、我々は先住民である彼らを尊重せねばならない……。そうおっしゃっていたのはルキア様ではありませんか！」

ビビとエリーヌとの違いは、言葉に棘を孕んでいるかどうかぐらいのもので、二人の考えは同じなのだろう。おそらく、彼女たちに限らず、反発を感じている者は軍にも教会にも多数いるに違いない。

「……理不尽に思っても、従わねばならぬことがある」

結局、ルキアに言えることは、この程度のことでしかなかった。たしかエリーヌにも同様のことを言ったと思い出し、口元に自嘲を浮かべる。

「生意気なことを言ってすみません。お辛いのはルキア様だというのに」

そう呟いた後、ビビは悲哀を漂わせてうつむいた。

ゴースティン＝ルドリア教会において、司祭の位は十五になれば賜ることができる。

ビビは優れた魔力を有し、既に十六歳になっているので、今すぐにでも高位司祭となることができるだろう。もしビビが高位司祭となっていれば、彼女は今回の戦への徴兵対象となっていたのだ。彼女がまだ叙階を受けていないのは教会傘下の学校を卒業していないためであるが、この心優しい少女が戦場に遣られずにすんだことがせめてもの救いだとルキアは思った。

「今回の戦はシベリー軍の殲滅だけなのだから、それほど長引くことはない。だからすぐに戻ってこられるさ」

ルキアが笑いかけると、ビビは小さくうなずく。

「無事にお戻りになられるよう、お祈りをいたします。それで私が司祭になったら必ず私をルキア様の弟子にしてくださいね」

それはルキアがこれまで散々ビビにせがまれてきたことだった。こんなときにまでをその頼みごとを繰り返す様に、ルキアからは自然と笑みがこぼれた。

「ああ、約束する」
「でも、ルキア様。もし、クラウスおじ様があんなにも早くお亡くなりにならなければ、ルキア様は司祭におなりではなかったでしょう？」

まだ諦められないのか、ビビは妙なことを言い始める。

「なぜ、そんなことを？」
「だっておじ様は、ルキア様を司祭にさせるつもりはないっておっしゃっていました。ルキア様だって、どのような道に進まれても良いようにと、様々なことを学んでいらっしゃったではありませんか」

父がそのようなことを口にしていたのはルキアも知っている。

――この子を教会と関わらせるつもりはない！

もう十数年も前、父が誰かに対しそう言い放っていたのをルキアはなんとなくだが覚えている。いつも穏やかな父が声を荒げていたため、その言葉だけが深く記憶に刻まれており、そんな父の意思に背いた道を歩んでいる自分を不孝者だと思う気持ちはあった。

「すみません、今さらこんな話……」

知らずのうちに表情が硬くなっていたのだろう。必死に謝るビビに、ルキアは首を振る。

「私は父のようになりたいと思っていたし、幸いにも魔道の才にも恵まれていたから、進んだ道は間違っていなかったと思っているよ」

ルキアは、誰に教えられることもなく、幼いころから魔道を扱うことができた。これはルキアに限ったことではなく、ごく少数ではあるものの、生まれながらに魔道の操る力を有する者は存在する。

もっとも、このような才能を有さずとも、正規の教育を受けることでその力に目覚めることは可能であり、力の程度によらず魔道を扱う者はすべて＞魔道士＜と呼ばれる。そのような魔道の教育機関はすべてゴースティン＝ルドリア教会の傘下にあり、教育を修めた者の大半は教会に属し、教会に属した魔道士のみが＞司祭＜と呼ばれることになる。

ルキアの場合は、父による手ほどきと独学により、八つになるころには高度な魔道を操るに至っていた。

「変なことばかり言ってすみません。でも、もしルキア様がミカヤ殿下にお仕えしていたら、前線に出られるなんてことにはならなかったんじゃないかって思ってしまって」

「かといって、軍人になっていれば、今と同じことになっていただろうさ」

「たしかにそうかもしれません。でもっ……！」

ルキアはじっと見上げてくるビビの肩に手を置く。

「どの道に進んでいたとしても、いずれなんらかの壁と向き合わねばならない時が来る。そのときに、おいそれと自分の選んだ道が過ちであったなどと思ってはいけない。本当に過ちであるならば認めなければならないが、今の私がそんなことを考えるのは逃げているだけなのだから」

ルキアは微笑みを残し、その場を後にした。

雪にけぶる視界は、さながら、ルキアの進まんとする道のように

薄靄（うすもや）に包まれていた。
ひらひらと雪は降り積もる。
彼の語った言葉を何度も胸に刻みつけるように。

足枷

白羊宮（はくようきゅう）の月、一日。

本日午前十一時、フェルダ大聖堂に国内のルドリア教の司祭らが一同に参じた。

高位司祭の合議は特別なことがない限り開かれないが、高位司祭及び下位司祭のすべてを集めた定例会議は三か月ごとに行われることとなっている。

このフェルダ大聖堂は、国内外のルドリア教会において最高峰の聖堂として位置づけられている。それはかつてこの聖堂に教皇座が置かれていたことによるが、その他にも歴代主教らの遺体が埋葬されていることに加え、聖イシスの遺灰が安置されていることも大きい。

王都には他にガルバンヌ大聖堂もあり、こちらでは国王の戴冠式が行われたり、王家縁の者が埋葬されることとなっている。

ゴースティン＝ルドリア教会は王家の従属組織とはいえ、ガルバンヌ大聖堂は建設されてからまだ二百年程度しか経っておらず、フェルダ大聖堂は千年近くもこの地で権威の象徴とされてきたために、依然としてフェルダ大聖堂のほうが上位に置かれているのだ。

定例会議が開催されるのは翼廊の最上部にある大会議場で、高位司祭二十一名、下位司祭約二百名が集っている。

この円形会議場の天井は高く、天井及び側壁には原始教典の内容が壁画とレリーフで表現され、最前部の総議長席の上方には、宗教画家ノワイユの手による巨大な絵画が議場を見下ろすように設置さ

れている。その絵は殉教者イシスが四人の弟子たちに自らの力を受け継がせる場面で、死の間際の情景ながら明るい色彩で描かれており、慈愛にあふれてさえ見える大作である。

総議長席のすぐ後ろには四大司祭が二人ずつ対座し、他の高位司祭は、前方の机とは切り離された別の席に叙階された順に着席している。

本来、総議長席の隣には主教席も設けられているのだが、現主教デルタ・マーシェルは病のため長らく定例会議には参加していない。

そして下位司祭らの席は、中央の高位司祭らが着く議席を囲むように設けられている。

先日、高位司祭のみが参加する臨時会議が開催された。その場において、エーゼン・サルファよりシベリー討伐への高位司祭の徴兵決定とその詳細内容が報告されたが、下位司祭らはまだその決定の経緯について知らない。

そのため、エーゼンが先日の臨時会議での内容を述べた途端、下位司祭らを中心として議場は紛糾した。

「では、合議すら行われなかったとあなたはおっしゃるのか！」

「サルファ司祭、あなたは総議長とはいえ、越権行為も甚だしい！」

「我らは戦場へ赴くために司祭の道を志したのではない！」

騒ぎ立てる司祭らに、エーゼンは冷たい光をたたえた視線を向ける。

「殿下のご所望は、高位司祭、とりわけ四大司祭の面々です。あなた方ではありませんよ、ご安心なさい」

エーゼンの言葉に、司祭らは一瞬押し黙ったものの、じきに怒号

が舞い始める。

その一方で、徴兵を受ける当の高位司祭らは、一人を除いて口をつぐんだままでいた。

高位にある者ほどエーゼンの顔色をうかがう傾向にあるが、それはエーゼンが総議長の地位にあるという以外に、元大司教の家系という彼の背後にある権力に掴まれているからでもある。

ゴースティン＝ルドリア教会は他国のルドリア教会とは異なる組織系統を有している。

三百年前に教皇位と司教位が廃されたことにより、国内の司祭には高位司祭と下位司祭の二階級のみとなり、その結果、最高位たる主教でさえ、高位司祭の主席という以上の権力を有しなくなった。総議長や四大司祭といった地位もあくまで高位司祭の中の役職という扱いで、他の高位司祭の権限とさほど変わらない。だからこそ、かつての教皇位・司教位の権威が依然として作用しているのだ。

組織系統以外にも大きな違いがある。

多額の寄進により高位が得られる他国の司祭とは違い、ゴースティンの司祭は魔道を扱えることが必須条件であるため、“実力主義”とも評されている。特に高位司祭は一定水準の高度な魔法を扱えることが求められるため、いかに財を積もうと手に入れられる地位ではない。

その一方で、下位司祭に求められている力の基準は極めて低く、育成機関において修練を積めば大半の者が下位司祭の地位を手に入れることができる。

ただし、その育成機関の授業料は富裕層でなければ払えないほど高額であるため、下位司祭のほとんどが貴族の次男・三男で占めら

れている。それゆえ下位司祭には、生家の宮廷における権力関係がそのまま反映されることとなる。下位司祭にはいくつかの派閥が形成されているが、ここ数十年、下位司祭を取りまとめているのは、国政と同様に王弟派の貴族出身者による派閥であった。

このような教会と有力貴族の癒着による派閥形成は、政治の腐敗につながるとされる。

たとえば今、徴兵されるわけでもない下位司祭がエーゼンに対し怒りを露わにしているのは、王太子命令にあっさりと従ったエーゼンの行動が、王弟派の者たちにとって不利益となるからである。ゴースティンでは聖職者が政に介入することを固く禁じており、教会権力が国の政治方針に干渉することはできないが、下位司祭には閣僚や上級将校の血縁者が多く、間接的に政治に影響を与えることが可能となる。

ゴースティン＝ルドリア教会が他国の教会より清廉潔白であるなど、とても言えたものではない。

荒れる議場は、エーゼンの毒を孕んだ説得によって徐々に鎮静化の兆候が見え始めていた。

下位司祭らも、このような場でどれほど騒ぎ立てようと、事態は好転しないとわかっている。シベリー討伐に関する全権は王太子ミカヤにあり、ミカヤには命令を撤回する気がまったくないため、司祭の徴兵決定が揺るぐことはない。

それでもなお、なにか文句を言わずにはいられないのだ。

ルキアは机上で指を強く組み合わせ、下位司祭らの無意味な主張に耳を傾けていた。彼らの主張はことごとくエーゼンにより潰されていき、次第にその矛先は、他の高位司祭にも向けられるようになった。

「ドートリッシュ司祭、あなたのお考えは……」

最後の細い糸へすがるかのように、一同の目はルキアへと注がれた。その瞬間、エーゼンが口元に笑みを浮かべるのをルキアは横目でとらえた。

ルキアは自嘲を噛み殺し、少々早い口調で告げる。

「司祭である我らは、本来、政に関与すべきでなく、戦に与するなどもっての外である。しかし、これは王太子殿下のご命令であり、それを覆すことはできぬ。ゆえに、我らの選ぶべき道はひとつである」

ルキアの冷やかに聞こえさえする言葉に、四大司祭の一人、ローザン・ゲーブルが声を荒らげる。

「ルキア殿、あなたはオトゥール王家に肩入れしすぎておられる！亡きクラウス主教は教会の国政への関与を一切断つよう腐心されてきた。その後継であるあなたが、なぜ、それをなさろうとしない！」

真正面から発せられたゲーブルの怒声は、物理的にも精神的にも耳に痛いものであった。

なにも言い返そうとしないルキアに対し、さらにゲーブルは当てこするような物言いをする。

「あなたの事情は理解しておるつもりだが、ドートリッシュの当主ともあろう者がなんと不甲斐ないことか。……まあ、クラウス主教とて合議決定において国王の外戚の権力に屈されたこともあったと聞くがな。まったく、司祭が王家と深く関わるから弱みを作ること

になるのだ。私情でしか動けんのは、私欲に忠実なのと変わらん。どうせ、あなたもあの王太子にそこをつけこまれたのだろう？」

ゲーブルの声はそれほど大きなものではなかったが、ちょうど議場が静まり返っていたため、その声は近くにいる高位司祭だけでなく、離れた位置にいる下位司祭にもはっきりと届いていた。

ざわつきが波紋のように広がっていく。

「謝ってください！」

下位司祭議席の後方から鋭い声が響き渡った。

その声は、ルキアにとって聞き覚えがあるようでいて、これまで耳にしたことがないような響きを持っていた。

ルキアはまさか、と思いながらも後ろを振り返り、声の主を見やった。亜麻色の髪の青年は、議場の前方へと進み出ながら、ゲーブルをにらみつけた。

「そのような放言、我が父と兄への侮辱に他なりません。謝ってください！」

「下位司祭ごときが偉そうな口をきくな！」

ゲーブルは激昂して立ち上がり、ルノーをにらみつけて咆哮を飛ばしたが、ルノーはひるまず応酬を繰り返す。

会議場の空気は一転していた。

ゲーブルの意見は下位司祭たちと共通しているが、彼らを侮辱する発言により、彼は約二百名の支援を失った。

ゲーブルは元々ゴースティンの人間ではなく、王家への敬意はほぼ皆無であるため、王弟派や王太子派などといった宮廷の派閥に興

味がない。そんなゲーブルの関心はひたすら自分の益につながるものばかりで、高位司祭の間でも彼は煙たがられており、殊にエーゼンとは誰の目にも明らかなほど不仲であった。

そのせいか、エーゼンは総議長であるにもかかわらず、彼らの諍いを治めようとしない。

ゲーブルの隣に座する四大司祭リーヴァ・エクランドが見かねて、ゲーブルを制しようと声をかけたが、彼の耳には入っていないようだった。

「ドートリッシュ本家の嫡子でありながら、下位司祭の叙階しか受けられんとはな。分家の者が三人も高位司祭となっておるというのに憐れなものだ。人には向き不向きというものがある。柔弱な貴族の子息は宮廷で王族の機嫌でも取っておれ！」

「あなたこそ、四大司祭という高位に就いていながら、ずいぶんと品位を欠く行いをされているそうではありませんか。以前から思っておりましたが、あなたの振舞いは神に仕える司祭のものではありません。司祭には魔道士とは違い、敬虔さや清廉さが求められていることをご自覚ください！」

「なんだと、この――」

ゲーブルが罵声を発しようとしたまさにそのとき、ルキアの隣から低い笑い声が漏れる。

その声は四大司祭クユラ・ウェーリックのものだった。ウェーリックは慌ててそれを咳でごまかそうとしていたが、その挙動は不自然極まりなかった。

なおも、ゲーブルとルノーの舌戦は、着席したままのルキアの頭上で飛び交っていたが、それはもはやただの罵り合いと化していた。

ルキアは、弟の短慮な行動に頭を抱えたくなった。

普段ルノーは気弱とも呼べるほど穏やかな性格で、怒って声を荒らげることなどまずない。それほどゲーブルの言葉に腹を据えかねたのだと思われるが、長年ともに過ごしてきた弟の意外な姿にルキアは困惑を隠せなかった。

かといって、会議場でのこのような振舞いを放っておくこともできない。

ルキアは前を向いたまま、背後のルノーに告げる。

「ルノー、下がりなさい」

「ですが兄上……」

「いいから下がりなさい！」

ルキアはゲーブルではなくエーゼンに向き直り、頭を下げる。

「失礼を……」

「いいえ」

エーゼンはさもおかしそうに首を振る。

ゲーブルは、いつもは青白い肌を真っ赤にしながら、荒々しく椅子に腰かけた。

ルキアはちらと後ろのほうを見やったが、ほぼ末席にいるルノーは人陰に隠れてしまい、ルキアの席からは見えなかった。その瞬間、胸を突き抜ける鋭利な痛みをルキアは感じた。

下位司祭に派閥があるのと同様に、高位司祭にも派閥は存在する。たとえば、クラウスはサルファ家の司祭を敵視しており、エーゼンや、その父であるロジェと激しく意見を対立させることが多かったという。ゲーブルが司祭となったのは今から五年ほど前のことであるが、彼はエーゼンを毛嫌いしていたため、クラウスに好意を抱いていた。クラウスの死後、サルファ家に反目する司祭らはルキア

に多大な期待を寄せていたが、その思惑が外れたことが彼らの苛立ちにつながっていた。

ルキアは、なにもできない自身を歯がゆく思っていたが、今日ほどそれを強く感じたことはない。ルキアはクラウスの遺志を継ぎ、教会内の不正を糾すべき立場にあるが、王家や有力貴族といった権力の渦に巻き込まれてしまった以上、父と同じ手を取ることは叶わなかった。

「皆様、もうよろしいではありませんか」

そう言って立ち上がったのは、最年少の高位司祭ラウル・アシリングであった。

「シベリー討伐は神が我々に与えられた使命であると私は思っております。四大司祭の方々の力をもって奴らを葬り去るのは、＞聖戦＜と呼ぶにふさわしいものなのですから」

アシリングは揚々と語りながら、長い金髪を指で背に流した。

よくも聖戦などという言葉が出てくるものだとルキアは思う。

かの聖戦においては、イシスは圧倒的に戦力差のあるヴァーロンの軍勢と戦った。彼は長年ヴァーロンの暴政に虐げられていた民たちのために立ち上がり、その命を捧げたのだ。

しかし、現状においてゴースティンはシベリーに支配されているわけではない。戦力にしても、シベリーだけが相手ならば西方軍の四分の三ほどを投入すれば事足りるにもかかわらず、高位司祭までを加えようというのだ。この戦は、圧倒的戦力をもって異民族に戦をしかけるもので、大義などありはしない。

アシリングの独演はなおも続く。

「高位司祭である私の力は、四大司祭の方々には到底及びませんが、それでも国のため、そしてこのルドリア教会のために尽力したいと思っております。皆様、考えてもみてください。この戦は、ルドリア教会の司祭が人知を超える力を有しているということを国内外に示す好機なのですよ。愛や友情などはすぐに消えてなくなるものですが、恐怖はそう簡単には消えません。畏敬……いえ、畏怖を与えることこそが、教会の威信を復活させるもっとも有効な手段なのです」

まるでエーゼンの受け売りのような言葉であった。

ラウル・アシリングはリーヴァ・エクランドの従弟であるが、穏やかで柔和なエクランドとは正反対の人物である。強い力に惹かれる質(たち)で、エーゼンに心酔している。彼に野心などないが、好戦的な態度を見せることが常であり、他の司祭らと衝突することもしばしばであった。それはエーゼンも同じであるが、アシリングの場合はそこに悪意がない点が異なっている。

大会議場にいるほとんどの司祭たちは、アシリングの発言に唖然としていた。彼と同じような考えを持つ者は少なからず存在するが、それをそのまま口に出そうとする者はいない。司祭という立場上、決して言葉に出してはならぬと弁えているのだ。

アシリングの主張に異論を唱える者も賛同する者もいなかった。要は、これ以上議論を交わせるような空気ではなくなっていた。

それにて、白羊宮の月の定例会議は閉会されることとなった。

足枷（後書き）

【補足説明】

白羊宮の月＝四月

嘲笑

会議終了後、ルキアは喧騒から逃れるように議場を早々に去り、回廊に囲まれた中庭へと出た。外気は少し冷たいものの、陽が差しているため寒さは感じない。

数週間前にはまだ冬枯れの状態であった芝生は、もうその半分ほどが新芽に生え変わっており、春の気配を所々に感じることができる。

この中庭には聖堂の大枠が完成した当時に植えられた薔薇の木が茂っており、あと二か月もすれば白い薔薇が一面に咲き始めることだろう。

今年はその薔薇を目にすることはできるのだろうか。

ルキアは心を静めるように目を伏せたが、背後から近づく気配を感じとり、目蓋をうっすら押し上げた。

「ルキア殿、先ほどは失礼を申し上げた」

先ほどとは違う、酷く慇懃な声色だった。

ルキアは振り返り、一礼する。

「いえ、私のほうこそ本当に失礼をいたしました。ゲーブル殿のお怒りはもっともですし、多くの司祭らが承服しておらぬ以上、発言に気を遣うべきでした。ただ、ルノーの軽率な振舞いについてはどうかご容赦ください。弟はなにも知らぬものですから……」

ゲーブルが言い放った「司祭が王家と深く関わるから弱みを作ることになる」というのは、クラウスがアルト＝ヴィジェ王の寵臣であったことを指しているわけでも、ルキアがミカヤの学友であったことを指しているのでもない。あの場にいた大半の司祭はゲーブルの真意を知っているはずだが、それを知らないルノーは、なんの根拠もない侮辱だとしか思わなかったのだろう。

いつかはルノーにも話さなければならないこととはいえ、できることならば、話さずにいられればよいとルキアは思っていた。

ゲーブルは太めの眉を寄せ、腕を組む。

「私とて、司祭の徴兵に反対したところで意味がないのはわかっているのだ。それに、高位司祭の力――すなわち＞念＜を込めた魔道の力についてだが、私はあれを戦争に利用するというのは良い手だと思っている。かつて強い＞念＜を込めて力を放ってみたことがあるが、最新の砲弾の五倍の威力はあると知り合いの軍人が言っておったぐらいだからな。……だが、＞神の力＜については別だ」

ゴースティン＝ルドリア教会は、黎明期に作成された原始教典よりも一千年前の聖戦後に作成されたアルゼ教典に重きを置いているため、＞四大司祭＜という他国にはない地位が存在する。

＞神の力＜は聖イシスが神により与えられた力であるが、彼は死の直前に弟子たちに自らの力を分け与えたとされている。ゴースティン＝ルドリア教会はその力を密かに受け継いできており、その継承者に与えられる地位が四大司祭なのである。

＞神の力＜はルドリア教会最大の権威であると同時に禁忌ともされており、継承者たちはその力を使用してはならないという一見矛盾したような戒律が存在する。

そのため、教会関係者でもその存在を知らない者は多く、四大司祭は高位司祭の中から特に強い魔力を有する者が選出されているだ

けなのだと思われているのだ。

「あの若造……ラウル・アシリングは＞聖戦＜などと言っておったが、まったくけしからんことだ。誰もあの男を咎めなんだが、まあ、それも致し方ないだろう。下位司祭らは＞神の力＜が実在していることすら知らぬ者が多く、高位司祭はそれを他言することが禁じられておるのだからな。ルキア殿、今ここで正直なお気持ちをお聞かせ願いたい。……あのような力を戦争に用いることについて、あなたはどう思われているのだ？」

ゲーブルの声色は威圧的であったが、その瞳の奥にはルキアへの懇願が宿っているか見えた。

ルキアはわずかに目をそらす。

「……私たちがあの力を用いれば、より早く戦に決着がつくのではないかと思っておりますが？」

「そうではない！　禁忌とされている力を使うことに抵抗はないのかと訊いておるのだ！」

ゲーブルは怒声を放ったが、すぐに口をつぐみ、苦々しげにため息を吐く。

「私は、まだ物心もつかぬころから魔道を操ることができた。私の力を忌まわしいと蔑んできた者たちを見返してやりたいと思い、この国の高位司祭となることを決めた。ゴースティンのルドリア教会は私のような力を持つ者が多数おり、その力が尊ばれているとくれば、故郷を捨てることにまったく抵抗はなかった。むしろ清々しささえ感じた。＞神の力＜の継承者に選ばれたときも、その感動に身が打ち震えたほどだ。このような栄誉は、片田舎の魔道士であれば決して手に入れられるものではなかったと、自分の選んだ道は間違

ってはいなかったのだと、心からそう思ったのだ。……だが、次第にこのような力を手にして本当によかったのだろうかと思うようにもなっておる」

「ゲーブル殿、あなたが気にされているのは、これまで四大司祭の地位に就いた者が皆、短命であることでしょう？」

ゲーブルへ向けられたルキアの視線には、かすかな憐みがこめられていた。ゲーブルが感じているものはまぎれもなく恐怖であるのだと、ルキアにはわかっていた。

ゲーブルはルキアとの距離をつめ、小声で告げる。

「マーシェル主教は、もう長くはないのだろう？　＞念＜を込めた魔道を放つとき、司祭はなんらかの代償を払っているとされる。それは精神力であるとも生命力であるとも言われるが、おそらくは、そのいずれでもあるのだろうな。あなたは四大司祭にしか言及されなかったが、実際には高位司祭が四十やそこらで命が絶たれる例が少なくない。儀式の際に用いる程度の、ごく弱い＞念＜しか込められていない魔道ですら、それほどの影響があるということだ。あなたはそれを知っておられるというのに、なぜ、＞神の力＜を使おうなどと思えるのだ……！」

ゲーブルの言うように、たしかに高位司祭には短命な者が目立つ。この国の貴族の平均寿命が六十歳半ばとされており、下位司祭らも同様であることを鑑みると、四十前後で亡くなるというのは早死と言えないこともない。

ただ、高位司祭は数が少なく、個々の価値が非常に高いため、一人失われるだけでも人々の記憶に残りやすいという側面もある。特にドートリッシュは主教や四大司祭となった者が多いので、その死により与える影響は非常に大きなものだった。

「たしかに、私の父などの例もありますが、受ける印象ほど、高位司祭らが早くに亡くなっているわけではないと思います」
「まあ、クラウス主教の場合は、サルファ一派による暗殺ではないかとも言われているがな」
「まさか……」
それはありえない、とルキアは苦笑まじりにそれを否定した。
ルキアにサルファ一門を庇うつもりなどないが、それは噂の域を出ないものであるとして信じていなかった。
クラウスの死はあまりにも急なものだった。マーシェルのようにはっきりと病の兆候が表れていたわけではなく、所用により赴いていたフェルダ大聖堂で突然倒れ、そのまま亡くなったのだ。ルキアは父の最期を看取ることは叶わなかったが、凶報を受けてすぐに聖堂へ駆けつけ、その遺体と対面した。
クラウスにはおよそ暗殺の痕跡というものは見られなかった。刃物を用いようと毒を用いようと、一切の痕跡を消し去ることはできない。たとえそれが魔道によるものであろうとも同じことである。
（あれは暗殺などというよりは、むしろ……）
ルキアは過去の情景を振り払うように一度強く目を閉じた。
それでもやはり、高位司祭の代替わりが下位司祭と比して激しいのは事実である。そのため、信徒の間では、教会内部の権力闘争に敗れた司祭は毒や秘術などを用いて暗殺されているのではと噂されているほどである。
教皇の時代ならばそのような事例もあったかもしれないが、不自然な死には検視が義務づけられている現在において、その噂を本気にする司祭はいない。

「いくらなんでもそれはありえません。たしかに父はサルファ一門の者と反目し合っていたようですが、父の死を彼らの手によるものであるとするならば、サルファ殿の父君ロジェ殿の件はどうなります。ロジェ殿の死も、父やドートリッシュ一門の者の手によるものだと？」

エーゼンの父ロジェ・サルファは、今のエーゼンと同じように総議長の座に就いていたが、十年ほど前に亡くなっており、当時二十歳になったばかりのエーゼンがサルファ家を継いだ。

ロジェは四十を過ぎたころから労咳とよく似た症状に悩まされ、医師の診断では奇病とされた。これはマーシェルも同様で、特異な症状が見られるわけでもないが、徐々に身体が衰弱しており、現在の医学では治療を施しようがないのだそうだ。

もっとも、そのような例は国内の至るところにあふれており、なんら特別なものではない。

「あれは私にとって不愉快な噂にすぎません。理由もなければ、証拠もございませんから」

「ならばなおのこと、魔道の乱用は命を縮めることになりかねないというわけではないか。教会が暗殺を行っているなどという前時代的な噂がまことしやかに流れるのも、高位司祭らの死が不自然だと思われているがゆえだろう。……まったく、このようなことになるなら魔道士のままでおればよかった。司祭などただ窮屈なだけだ」

ゲーブルは不満げに吐き捨て、短い栗毛をかきむしりながら、回廊のほうへ向けて歩き出した。

ゲーブルが先ほど語っていた司祭の道を選んだときの想いは偽らざる気持ちなのだろうが、今現在、司祭の地位を忌々しく思っているのもまた彼の本音なのだろう。

この大陸には、特別な修練を積まずとも魔道を操ることのできる者が稀に存在するが、彼らのすべてがルドリア教会に属しているわけではない。ゴースティンにおいて司祭はある種の特権階級であり、栄誉に与(あずか)ることができる反面、教会に属すことで様々な戒律が課せられるため、あえて魔道士の道を選ぶ者も珍しくない。

ローザン・ゲーブルも、元はそんな魔道士の一人だったのだ。

ゲーブルの苛立ちはまぎれもなく恐怖によるものなのだろう。ゲーブルが司祭となったこの五年の間に、クラウスが死に、マーシェルも明日をも知れぬ命とくれば、固い意思を砕かれたとしても無理はなかった。

「本当に、ゲーブル殿には困ったものですね」

ルキアの背後から声が投げかけられる。

「あの者は力にこそ優れ、四大司祭の地位を戴いてはいますが、あまりに短慮な気質で、教会の権力者の器ではありません。あのお人好しのルノー殿ですら、不愉快に思われるほど品性の欠片もない……。所詮は、平民出身の司祭、といったところでしょうか」

「司祭となる条件はなにも貴族に限られてはいないでしょう。それとも、そのような新しい規律ができたのでしょうか？」

ルキアは振り返ることもせず、エーゼンに言葉を返す。その声には吐息が混じっていた。

「規律ではなく慣例というものですよ。私が申し上げているのは、金のために身売りした者に司祭としての矜持を求めるのは無駄だということです」

ゲーブルが司祭になったのは、彼の優れた力を噂で聞きつけた教会関係者がゴースティンの司祭になるよう打診したのがきっかけである。

ゲーブルはケーニヒス辺境の農村で暮らしていたが、当時彼は二十代半ばで、若さゆえに野心もあり、ルドリア教会の高位司祭となる道を選んだ。その際に、多額の報奨金を教会より得るに至ったが、それもまた“慣例”によるものである。

ゲーブルの素行は褒められたものではない。暴飲に賭博、女遊びなど、司祭になったことで得た生活の余裕を自らの快楽のためだけに費消し、同輩から教会の品位を落としめていると散々批判されている。

ただし、教会にはゲーブルと大差ない不行跡を働く司祭も珍しくなく、金に物を言わせて司祭の地位を得た貴族に批判される言われはないと、ゲーブルは開き直る始末であった。

「そうそう、私の知る限り、ゴースティンの王族が司祭となった例は、教会の長い歴史の中でもございませんでしたね」

「それが、一体なんだと言うのです？」

「ミカヤ殿下は、いずれ王権によるルドリア教会掌握を実現なさりたいそうですよ。そのために、ルキア様が主教になればよいとおっしゃっていました」

ルキアが絶句しているうちに、エーゼンはルキアの前へと回り込んだ。

「ルキア様は“実力主義”ともいえる教会の体制がお嫌いのようですが、それはルノー殿が日陰者であることを忍びなく思われるからでしょう？　ドートリッシュを継がれるのは本来ルノー殿であったそうですが、当主が下位司祭では話になりませんからね」

反駁しようとしたルキアを制するように、エーゼンは言葉を重ねる。

「あなたはいずれルノー殿に当主の座を譲り渡されるおつもりのようですが、はたしてそれはルノー殿のためになるのでしょうか？却って、弟君に肩身の狭い思いをさせてしまうだけなのでは？」

「だとしても、それは父が決めたことです」

「現当主は、クラウス卿ではなくあなたです。ドートリッシュとサルファにのみ聖職者でありながら婚姻が認められている理由、そのすべては私たちの身体に流れる＞古代人＜の血統を維持していくために他なりません。その重要性を今一度お考えになってはいかがです？」

エーゼンの背後から差す陽光が、彼の顔に暗い影を落とし、ルキアはその表情を掴むことができなくなった。

沈黙がしばし続いていたが、ルキアの耳に深い吐息の音が届く。

「ルドリア教の起こりは原始教典によると一千五百年ほど前とされていますが、そのころはまだルドリア教の司祭は魔道を扱える者はおらず、イシスの聖戦以降になって強い魔力を秘めた司祭がゴースティン地方を中心に現れるようになったようです。ちなみに、アルゼ教典に記されている、イシスの＞神の力＜を受け継いだ司祭というのはドートリッシュの者であったとか……。その真偽のほどはわかりかねますが、聖戦後、ドートリッシュ一族は教会内で強い権力を有するようになり、その百年後には教皇としてルドリア教崇拝圏において権勢を誇るようになったとされています。教皇の側近であったサルファの当主もまた、強い魔力を有する司祭であったようですが、以前より、このような強い魔力を有する者たちは、＞古代人＜の血が強く出ているのではないかと言われてきました。すなわち、

魔力の強さを左右するのは古代人の血の濃さにあり、その血統の保持する必要があると考えられたのです」

現在、ドートリッシュ家はルキアを含めて四名の高位司祭、サルファ家はエーゼンを含めて五名の高位司祭を輩出している。それに加え、主教のデルタ・マーシェルも母系を辿ればサルファ家の遠縁に当たり、またリーヴァ・エクランドはかつて大司教であったころからサルファ家に仕えてきた司教の子孫に当たる。高位司祭の数は規律で定められているわけではないが、二十名前後で推移しており、教会組織の変革から三百年の間、ドートリッシュ及びサルファに連なる者だけで高位司祭の約半数を占めることが常であったと伝え聞く。

ルキアが黙りこんでいると、エーゼンから嘲笑が漏れる。

「初めて知った、というような顔をされていますが、私たちに様々な特権が付与された経緯すらご存じではないのですか？」

「あなたのほうこそ、どうしてそんなに……」

「一族の史書が遺されているからですよ。それは代々サルファの当主が受け継いできたもので、まったく同じ内容ではないにせよ、ドートリッシュにも一族と教会の関わりについて詳しく記された史書が遺されているはずです。もちろん、書には残さず、親から子へ口頭で伝えていく類のものもあるでしょう。クラウス卿が急死されたため、あなたにお伝えできなかったのは、仕方がないのかもしれませんが……。だからと言って、ルノー殿がご存じとも思えませんがね」

高位司祭と下位司祭は聖職者という区分は同じであるものの、本質的にはまったく異なるものであり、下位司祭が高位司祭に昇進することはありえない。それゆえ、高位司祭は概して下位司祭を軽く

見ているが、サルファ一門の者はその傾向が強く、特にエーゼンはそれを隠そうともしない。

ゲーブルの場合は自らの強い力を顕示する結果、下位司祭への侮辱につながっているだけだが、エーゼンの場合は表面を柔和に繕っているものの、力弱き者への侮蔑が露骨に感じられるのだ。

ルキアは苛立ちとともに声を低く抑え、エーゼンに問う。

「ひとつ、お訊きしてもよろしいですか？」

「ええ、どうぞ」

「＞神の力＜の使用を教会が禁じていたのはなぜです？　その禁を破れば、なにかが起こるとでも？」

「あなたほどの方が、なにを怯えておられるのです？」

「怯えてなど――！」

自分の一挙一動がエーゼンの手の内で踊らされているように感じ、ルキアは語気を強めた。

エーゼンは笑いをこらえるような素振りで、顔にかかる前髪を後ろにかき上げた。

「使用することよりも、継承することそれ自体が禁忌なのではないでしょうか？　本来、あれは人が手にすることはない神の力。それを手に入れようなど人間の驕りに他なりません。ですから、むやみに使用することを禁じたのは当然ではないかと。ただ……あなたの不安を煽ることになるかもしれませんが、あえて申し上げておきます」

エーゼンは赤褐色の瞳を酷薄に細め、口角を上げた。

「先ほどあなたとゲーブル殿がお話しされていたように、強い＞念

＜を込めた魔法は身体への負担を伴いますし、禁忌魔法におけるそれは、＞念＜を込めた他の魔道と比にならないのは事実です。また、いかに強い力を放つことができたとしても、あなた方は神ではありません。生身の人間です。……どうぞ、戦場では充分お気をつけになってください。権威の象徴である四大司祭が戦で命を落とすなど、あってはならないこと。司祭の徴兵はミカヤ殿下にとって宰相や大臣の反対を押し切るための口実なのですから、我々が前線で命を張る必要はないのです。戦など軍人に任せ、あなたは適当にあしらっておられればよろしいのですよ」

それでは、と微笑み、ルキアの心中を散々かき乱してエーゼンは去って行った。

ルキアはその後姿が消えるまで、身じろぎせずに目で追い続けていた。彼の姿が見えなくなっても、しばらくの間、そこから動く気にはなれなかった。

光と影

フェルダ大聖堂からドートリッシュ邸に戻ったルキアは、屋敷の離れにある書庫にこもっていた。この書庫はドーム型の建物で、最上部には三十を超える採光用の窓が設けられており、今日のような晴れた日の昼間ならば、ランプを持ち込まずとも充分な明るさが保たれている。

書庫には、現実に数えたことがないため定かではないが、十万冊を超える蔵書がある。王立大学の図書館に置かれていない書物や、一般に出回っている本の原本も多数残されているため、教授や研究者たちが本邸の書庫を訪れることもしばしばだ。

ルキアは幼いころからこの書庫にある本をたくさん読んでいた。そのころは比較的近年に出版された図鑑や文学が主だったが、長じてからは勉学に直接関わるもの以外目を通すことはなくなった。書庫にはルドリア教に関する書物が大半を占めているが、司祭を目指していたわけではないルキアにとって、それらの書物は学ぶ必要のないものだった。

いずれミカヤに仕えるためにと、まずは一般教養を、その次には法学や政治、経済の勉強に力を注ぐべきであるというのが父の教育方針だった。その次に力を入れていたのは剣術や馬術といった武芸方面であり、音楽や美術といった芸術方面については必要最低限の知識と技能しか身につけていない。一応、舞踊も教育課程に含まれていたが、今となってはあまり必要なかったとルキアは思っている。

跡取りであったルノーへの教育方針は、ルキアとは正反対と言えるほど異なった。

ルノーは司祭とならねばならず、ルドリア教についての深い知識と理解が求められており、それに加えて魔道の修練も必要であった。しかしルノーは身体が弱いこともあり、あまり勉学に打ち込むことはできず、武芸に至っては、剣など握ったこともなく、馬にも一人で乗ったことはない。また、ルノーはルキアのように宮廷を出入りすることも、貴族の邸宅での夜会に出席することもなく、十七歳で下位司祭となるまで、ほとんど屋敷の外には出ることのない生活を送っていた。そのせいで世間擦れしておらず、年の割に幼いと感じられることがある。

ルキアは濃緑に金の縁飾りが施された本を抜き出し、脚立に腰かけた。適当にページをめくっていると、背後から声がかけられる。

「ああ兄上、ここにいらっしゃったのですね」

ルノーが足早に駆け寄り、脚立の上のルキアを見上げた。

「ずいぶんと根を詰めて書を読まれていたようですが、ご無理はなさらないでください。また、お身体を壊されます」

ルキアはふっと微笑む。

「この程度のことで病を得たりはしない」

「ですが、つい数日まで酷いお風邪を召されていたと聞いております」

ルノーは二年前に司祭となってから、ドートリッシュ家の領地の一つであるデフトール伯爵領へと移り住んだ。そして今日のように

定例会議が開かれる日に合わせて王都へとやって来て、本邸に一週間ほど滞在し、再びデフトールへ戻るという生活を繰り返している。
そのため、ルノーはこの十日ほどの間に宮廷と教会で起こった一切のことを知らなかった。
昨夜、夕食の後でルキアはルノーにシベリー討伐と高位司祭の徴兵の件について告げたが、そのときのルノーの驚愕はルキアの予測を越えていた。ルキアがどれほど言葉を尽くして説明しようとしても、ルノーは驚きのあまり思考停止に陥っており、話が遅々として進まなかった。

「少し、気になることがあったのだ」
「シベリー討伐の件ですか？」
「それだけではないよ」

ルキアはそう答えながら本を閉じ、棚へと戻した。
その背表紙には、ジーゼル・サルファと著者名が金字で記されており、ルノーが目敏くそれを見つける。

「その書物、教会が禁じているものですよね。たしか、＞古代人＜についての記述が虚構じみているとかで」

古代人――この書の中では＞セルト族＜と記されている。＞セルト族＜とは、ガレ族が台頭する以前に大陸北中部に居住し、高度な文明と特殊な力を有していたとされる少数民族で、原始教典の中にも登場している。
一千年前に起こったイシスによる聖戦以後、＞セルト族＜に関する記述がどの文献にも遺されておらず、絶滅した、もしくは、初めから架空の存在であったと言われているが、ジーゼルの著書の中では、民族としての結びつきをなくし、ゴースティン地方に拡散していったと記されている。

著者のジーゼル・サルファ――エーゼンの祖父に当たる人物は、教会の高位司祭であったが、同時に歴史研究家でもあった。彼はアレイシス大陸の王朝研究において多数の論文を発表しており、五百年から千年前の歴史研究においては第一人者とされている。

その一方で、大陸各地で伝承として残っている古代人についての研究書物も執筆しており、この書物においては、教会の高位司祭たちの力は＞セルト族＜に所以するのではないのかとの記述がなされている。これについては信頼に値する原史料の公開がなされておらず、ジーゼルによるまったくの推測にすぎないとして、教会はこの著書を否定している。

しかし、この数百年の間に蓄積された史料を見れば、強い魔力を有する者にはなんらかの血脈が影響していることは明らかであり、ドートリッシュ家やサルファ家が高位司祭を確実に輩出してきたこともそれを裏づけていると言っていいのだろう。

教皇の一族のドートリッシュ。そして、大司教の一族のサルファ。この両家をニ大柱としていたかつてのルドリア教会は、なにもゴースティン王国にのみその力を及ぼしていたわけではない。このアレイシス大陸にはいくつかの民族が混在しているが、ガレ族はゴースティン・ケーニヒスといったニ大大国を構成する多数派民族であり、そのガレ族が唯一崇める神、それがルドリア神である。ゴースティンもケーニヒスも、古来より小国家群を束ねる王朝が勃興しては衰退し、それを繰り返していくごとに力を及ぼす規模は膨大なものになっていったが、そんな王朝盛衰の背後に存在し続けたのがルドリア教会であると言われている。

脚立から下り、ルキアはルノーの前に立つ。

「……ルノー。なぜドートリッシュやサルファにだけ王から特権が

与えられているのか、お前は知っているか？」

ルノーは目を瞬かせたのち、小首を傾げる。

「あ、えっとそれは……ゴースティン王が“呪い”を恐れたからでは？」

ルノーの返答を聞き、ルキアは嘆息する。

「あれ、違いましたっけ？　そういう風に聞いてたんですけど……」

「間違っているわけではないが、ルノーは呪いなどというものを信じているのか？」

「いえ、僕は信じてませんよ。でも、当時の人は信じてたんだろうなって」

ルノーがあまりに明るく答えるので、ルキアは拍子抜けしてしまった。自然と笑みがこぼれる。

三百年前、ドートリッシュがエクシュールの支配権をオトゥール王家に譲渡した経緯について、表向きは王権と教会の和解によるものとされているが、その深部に触れることは禁忌である。

エクシュールはゴースティン王国内にありながら、王権の一切及ばない教皇の領地であった。国内にはこの他にもたくさんの教皇領が存在し、ルドリアの司教たちの手によって統治が行われていた。加えて、ゴースティンの民の大半が敬虔なルドリア教信者であるため、民は王よりも教皇に畏敬を抱く傾向にあった。オトゥール朝に先立って興ったギルベイド朝、ハーシェリオン朝の時代においては、教会勢力が王権に介入してくることが珍しくなかったが、オトゥール王家は教皇の権勢を殺ごうと画策し、代を経るごとに教会権力と

の対立関係は激化していた。
そしてオトゥール朝第八代国王の時代において、とうとうゴースティン軍はエクシュールの教皇宮を包囲し、教皇国の解体と軍の解散を教皇に迫るまでの事態に至った。
包囲戦の最中、両者の間で和平交渉が行われようとしていたが、その矢先、宮殿に侵入していたゴースティンの間者が教皇エルジェ三世を殺害し、その首を上げた。

教皇の死はゴースティン国内に衝撃を与え、教皇領を制圧しようとする国軍と教皇軍との間で激しい武力衝突が生じた。
ちょうどそのころ冷害により飢饉が起こり、民は食糧不足に喘いでいたが、戦により状況は深刻化し、農村部では死者が多発する事態に陥った。さらに折悪しく、エクシュールを含むゴースティン中西部において疫病が蔓延し、数万もの民が命を落とし、国軍の指揮を執っていた王太子までもが病に倒れた。民衆はそれを“呪い”によるものだと恐れ、国王への反発が高まり、各地において信徒らによる暴動が起きた。

事態の収束を図るため、国王はドートリッシュ家及びサルファ家の地位の保証と、現在もなお続く特権の付与について記した勅書を発令することとなった。また、教皇の殺害は不測の出来事であり、王の意思に沿ったものではなかったとの主張がされたが、それまでの両者の対立状況を鑑みれば、宮殿に侵入していたのは間者ではなく、当初から刺客として放たれたものだと考えるのが自然であろう。

結果として、ドートリッシュとサルファがオトゥール王家の支配下に置かれたことで、国内外のルドリア教会の組織体系は一変した。国内のルドリア教会はゴースティンの国教会として新たに生まれ変わり、他国のルドリア教会はゴースティンとは異なる独自の組織体系と教義を持つことになるのである。

ゴースティン王はエクシュールへの遷都は果たしたものの、それから数十年は王家の権威回復に注力しなければならなかった。

その一環として、教会に多額の寄進を行い、ガルバンヌ大聖堂の建設にも着手した。これもすべて、王や貴族が“呪い”を恐れていたためである。

「教皇が亡くなった途端、民がばたばた死んでいく事態になれば、怖くなるのはわからないでもないですけど、でもやっぱりあんなの偶然だと思いますよ。だってほら、教皇の統治下でも飢饉や流行り病は起こっていたわけですし。それに、ドートリッシュ家やサルファ家に特権を与えることで、事態が沈静化するのを期待されても困りますよね。僕たち、神様じゃないんですから」

ルキアとルノーは顔を見合わせて笑った。

「そうだな。もういい加減、過去のしがらみからは解放されたいものだと思う」

「僕も同じです。まあ、一族の者でいまだに王家に反発心を抱いてる者もいますけれどね。……叔母上とか」

「まあ、あの人は気位の高い方だからな」

ルキアとルノーの叔母――イザベル・ドートリッシュは、クラウスの妻セルフィナの妹であり、クラウスにとっては義妹であり、従妹でもあった。つまり、イザベルとセルフィナの父は、クラウスの父方の叔父である。

これまでドートリッシュ一族は血族間での婚姻を結ぶ例が多く、千年をゆうに超える歴史を持つ家系であるにもかかわらず、あまり血族が拡散していない。ドートリッシュ家には司祭職に就いていながらの婚姻が特別に認められているが、その半数近くがあえて婚姻

しないことも理由の一つである。
　現在のドートリッシュ本家は、教皇エルジェ三世の直系筋ではなく、五百年ほど前に分かれた支流の末裔に当たるが、クラウスの母は教皇一族の出であり、分家にも一族の娘が嫁ぐ例が稀にあったため、本家にも分家にも教皇直系の血は受け継がれており、彼らがエルジェ三世を殺害したオトゥール王家に強い遺恨を抱くのは無理からぬことであった。

「そもそも特権といっても、あまりありがたくないですよね。与えられた領地は、元々ドートリッシュが保有していたものですし、侯爵位や伯爵位とかの称号にたいした価値は見出せませんから。……ああ、これは叔母上からの受け売りです。でも僕自身、デフトール伯爵って呼ばれても実感沸かないですよ。襲爵してもう二年が経ちますけど、伯爵って呼ばれたのは数えるほどしかありませんし」
「お前も宮廷を出入りしていれば、称号で呼ばれる機会も多いだろうが……」
「僕は兄上みたいに宮廷仕えなんて無理ですよ。田舎の教会で神父をやってるほうが性に合ってるんです。母上はよく、王都での暮らしは自分に合わなかったって言っておられますけど、たぶん僕も同じなんだと思います」
「……そうか。今の生活がルノーに合っているというのなら、それでいい」

　ドートリッシュが王家から与えられた領地は、セヴァンスというエクシュールの北にある保養地で、現在ルキアが侯爵位とともに継承している。
　セヴァンスには教皇の夏の離宮があり、三百年前からエクシュールを去った教皇の末裔が暮らしていた。夏の離宮は現在アルティス城と呼ばれており、ルキアは幼いころから毎年夏になると避暑に訪れていた。

ドートリッシュにはセヴァンス以外に、デフトール地方とマジェスタ地方の伯爵領も与えられており、これらを継承したルノーはデフトール屋敷に住まい、その教区にある聖堂を任されている。

「ところで兄上……」

ルノーの声が急に弱々しいものになる。

「今日は本当に申し訳ありませんでした。僕があのようなことを言ったところで、兄上に恥をかかせてしまうだけでしたのに……。僕は昔から兄上にご迷惑ばかりかけて……本当にすみません」

「いや、議場ではお前を咎めたが、久しぶりに面白い出来事だったよ。あそこは息がつまるから、ああいう騒動もたまには悪くないと思う。ウェーリック殿も笑っておられたしな」

ルキアは議場でのやりとりを思い出し、声を立てて笑ったが、ルノーは表情をますます硬くする。

「……いつも、ああなのですか？」

ルキアは苦笑を浮かべる。

「兄上、どうしてなにも言い返されなかったのですか？」

「私が父上のように振舞えたなら、あの者たちもなにも言わぬだろうな」

「そんなことありません！　兄上はよくやっておいでです」

「そんなことを言ってくれるのはお前だけだろうな」

二人の会話が途切れたとき、書庫の入口が開き、ベルチェがルキアたちのほうへと歩み寄ってきた。

「ルキア様、馬車のご用意ができました。そろそろお発ちになられたほうがよろしいかと……」
「ああ、わかった。ではルノー、私は少し出かけてくる」
身をひるがえそうとしたルキアを、ルノーの声が制する。
「マーシェル様のもとへ行かれるのですか？」
「ああ。先方に様子をお伺いしたが、ここ数日は落ち着かれているそうだ。最後にお会いしたのは、もう二か月近く前になるが、そのころ既にずいぶんと弱っておられた」
「そういえば、前回の定例会議にも出ておられませんでしたね。たしか、その前も……。本当に心配です。なんとか回復されればよいのですが……」
ルノーは悲痛に眉を寄せ、声を震わせた。
栄華を極め、成熟した文化を誇るゴースティン王国……。
国家間の戦も、疫病の蔓延も、干ばつや冷害による飢饉も、それらの記憶は遠く過去に捨て置かれ、死が身近な存在ではなくなってきている。それは王族や貴族に限らず、裕福な平民たちも同様である。
その結果、死というものに対し極端に憶病になる者が増え、さらに、風邪のような病や切り傷程度の怪我に対しても、過剰に反応するようになっている。
研ぎ澄まされていく繊細な感性は、次第に退屈や虚無を恐れるようにもなり、享楽に溺れて恐怖を忘れようとする者もいれば、恐怖を受け入れていくうちに死への憧れを抱くようになる者もいた。それは目の前の現世（うつつよ）を夢で塗り潰しているかのようでもあった。

このような感性がはこびる今の時代、もっとも恐怖を味わうのが、近しい者を失ったときである。ルキアにとっても、ルノーにとっても、そのすべては父の死に集約されている。人々の心が弱くなっていることを嘆く者もいるが、それこそが平和の証であると考えている者も多く、血生臭い時代に還るべきだなどと考えている者は稀であった。

悲壮な決意

ルキアは数日前の約束通り、四時過ぎにデルタ・マーシェルの邸宅を訪れた。

マーシェル邸は王都に多い青銅色の屋根に象牙色の外壁を持つ屋敷で、敷地はそれほど広くなく華美さもないが、庭も室内もよく手入れが行き届いており、清潔さにあふれた空間であった。マーシェル家はサルファ家の遠縁に当たるが、家柄としては貴族の中では下位に当たり、宮廷への出入りも認められておらず、官位に就いた者もいない。嫡子以外は聖職に就く者が多く、長年慎ましやかな生活を送っていた一族だった。

もっとも、デルタが主教及び宮廷司祭長となってからは、マーシェル家はその地位による特権を享受できるようにもなった。

高位司祭には教会領の一部が一代限りで付与されるが、四大司祭・総議長・主教ともなれば、その割り当てられる領地も広大なものである。高額な俸給に加えて、領地収入までが手に入るため、有力貴族並の生活が可能となる。

しかし、デルタ・マーシェルの私生活は、オルガン演奏や静物のスケッチなどの趣味を楽しむ質素なもので、余剰の俸給は病院や施設への寄付に充てることも常だった。そんな彼の清貧で慎み深い人柄は、誰もが認めるものであり、信徒の間でも非常に人気のある主教であった。

ルキアもまた、そんなマーシェルのことを尊敬していた。そして二人はルキアが司祭となったときより師弟の関係にある。

ルドリア教会の高位司祭は、強制ではないものの、弟子を持つことが推奨されている。師弟関係は高位司祭と下位司祭の間で築かれることが大半であるが、叙階された順の先後により高位司祭同士がその関係を築くことも稀にある。

この制度は当初、師匠が弟子を教え導くという意味合いに留まるものであったが、いつのころからか師匠の持つ権力の後継者という見方をされるようにもなってきた。

そのため、弟子の思想や立場は師匠のそれと同一視され、派閥形成を助長することにもなり、もうずいぶんと前から本来の意味合いは薄れてしまっている。それでもルキアがデルタと師弟関係を結ぶに至ったのは、立場上、ルキアを教え導くことのできる人間はデルタをおいて他にいなかったからである。

司祭となる者は、大抵の場合、修道士としての修業を一定期間積んでいるものであるが、ルキアは十七のとき急遽司祭となることが決まり、ただちに高位司祭の叙階を受けたため、なんの知識も心構えも持ち合わせないまま教会の権力者の一人となった。

当時、教会内にはドートリッシュ一族の高位司祭が数名いたが、彼らが一族の当主であるルキアを弟子とするのは少々問題があった。そこでクラウスの友人であり、新たに主教に就任したデルタがルキアの師となったのだ。

生前クラウスは主教であるとともに、宮廷司祭長の地位にあったが、デルタはその二つを同時に引き継いだ。それに伴い、弟子であるルキアはデルタの補佐として宮廷に召されることとなった。

初めてデルタとともに王宮の礼拝堂に出向いたときのことを、ルキアは今でもはっきりと覚えている。

王宮の礼拝堂はこれまで数え切れないほど足を運んだ場所だったが、祭服に身を包み、これまでと逆の位置から宮廷貴族らを目にし

たとき、自分という存在を失念しかけたほどだった。それは落胆であり、強い諦念でもあったが、どこか晴れやかでもある不思議な心地だった。

デルタのもとで司祭としての役割を果たしていくにつれ、心は平穏を取り戻し、初めのころに感じた落胆は影を潜めていった。

ルキアは過ぎ去った日々を懐かしみながら、首から下げた聖イシスのメダルに触れた。それは高位司祭の叙階を受けたとき、主教より賜ったものである。

ルキアは初老の執事の案内で、デルタの寝室へと向かった。

そこはとても静かな部屋だった。壁紙も涼しげな水色で、大きな窓からは午後の柔らかな光が差し込んでいたが、中央に置かれている寝台が白い寝具ばかりで統一されているために寒々しさを覚えた。

ルキアは少し離れた位置から、寝台に横たわるデルタの姿を見つめる。

酷いやつれ様に、彼は思わず息を呑んだ。眼窩は落ち込み、頬はこけ、病状は落ち着いたと聞いていたが、二か月前よりもはるかに病は進行しているようだった。

「……マーシェル様」

声を震わせないように、ルキアは平坦な声で呼びかけた。

「ルキア、来てくれたのか……」

身体を起こしかけるデルタを制しようと、ルキアは寝台に駆け寄った。

デルタは深く息をつきながら身を横たえ、軽く目を閉じる。その様子を見ているうちに、ルキアはまったくの平静ではいられなくなり、少し声を乱した。

「ご無理をなさらないでください。皆、マーシェル様のことを心配されているのです」

「……情けないことだ。呑気に寝ておる場合ではないと言うのに」

今、この国でなにが起ころうとしているのか、デルタは知っている。さすがに今日の定例会議の様子までは把握していないが、シベリー軍の討伐、そして司祭の徴兵についてはエーゼンから聞き及んでいるのだ。

「ですが、どうか今はご自分のことだけをお考えてください」

「そういうわけにもいかぬだろう。それに、私は一日中このように天井ばかりを眺めているのだ。なにか思案にでも耽っておらねば、他にすることがない。いくら考えても、答えなど見つかりはせんがな……」

自嘲するような口ぶりではあったが、決して自らの職責を放棄しているようなものではなかった。

ルキアは呆然と立ち尽くしていたが、デルタに勧められ、寝台の脇に置かれた丸椅子に腰かける。

「王命には逆らえぬ以上、私は了承の意思を示さざるを得なかった。……私にこのようなことを言う資格はないが、司祭らの力をこのようなことに使ってほしくはない。変えられぬこととはいえ、私の中には後悔しかないのだ」

膝に置いていたルキアの手に、デルタの手が伸びる。

「ルキア、お前の秘めている力はたしかに強い。だが、戦などに用いてよいものではない。敵兵とはいえ、相手は我らと同じ人間だ。それでもお前は、敵を滅せなどと、念じることができるのか？　そして戦が終わったとして、お前は信徒らの前でなにを祈るというのだ？」

喉の奥で声が鳴った。

既にその覚悟はできていると、ルキアはデルタに答えるつもりだった。それは、デルタを納得させるためだけでなく、自分自身を諦めさせるためのものだったが、デルタを前にすると上手く口にすることができなかった。

「クラウスと私がお前に魔道の扱い方を教えたのは、決してこのようなことをさせるためではないぞ」

デルタの声色は、ルキアを諭すような穏やかなものだった。

六歳になるころ、ルキアは既に＞念＜をもって魔道の力を放つことができた。しかし、ルキアは自らの力を持て余し、制御できずに暴発させることが度々あり、適切な対処を教えねば、自身も周囲の者も傷つける危険性があった。

クラウスとデルタはまだ幼いルキアに魔道の扱いを指南し、力は不用意に使ってはならぬと厳命してきた。ルキアはその言いつけを十七になるまでずっと守ってきたのだ。

「そもそも父は、私を司祭にさせるおつもりではありませんでしたから」

「まったくお前は、まだそんなことを言っておるのか」

「いえ、私は司祭の道を選んだことを後悔しているわけではないの

です。少なくともあのときは、私が家督を継がねばならなかったのですから。ですが、いずれは……」

貴族が家督を継ぐには、成人年齢とされる十七歳以上である必要があり、それ以下の年齢であれば後見人を立てることになる。クラウスの死に伴い、ルノーではなくルキアが家を継いだのは、高位司祭の叙階をすぐにでも受けることができ、なおかつ、成人年齢にも達していたということが理由のひとつである。

当時十五になるやならずだったルノーも、今では十九となっている。ルノーの心情や性格をよく理解している母はともかく、叔母はいまだにルノーに家督を継がせたがっている。ルキア自身、あくまで自分は仮の当主であり、いずれ本家の正統な血筋であるルノーに家督を譲るべきであると考えていた。早いうちに自分の真意をルノーに告げなければと思いつつも、弟を前にするとなにも言い出せず、他愛ない雑談でその場を取り繕うのが常だった。

今日のルノーとのやりとりを思い出し、ルキアは嘆息する。

「お前はルノーに家督を譲り、司祭は辞するつもりなのか？　反対はせぬが、四大司祭の地位を得てしまった後で司祭を辞するのは容易ではないぞ。おそらく、そのような前例はなかったはずだ。私もお前が＞炎の司祭＜に選定されるまでは実質的にその地位を手放すことはできなかった。だから少なくとも、新しい継承者候補が現れるまでは――」

「その心配は必要ありません。家督は譲っても、司祭を辞するつもりはありませんから」

デルタの問いをルキアはきっぱりと否定したが、ルノーに家督を譲ることもなかなか困難であろうと思った。

「マーシェル様、私はもはや他の何者にもなることはできません。ですから、戦が終わった後も司祭であり続け、神に変わらぬ祈りを捧げることでしょう。それが私の選んだ道ですから」

ルキアはデルタに微笑を向けたが、デルタは眉間に深く皺を寄せるばかりだった。

「お前はなにもわかっておらぬ。いや、わかった上でのその言葉なのだろうが……」

「どうかもう、なにもおっしゃらないでください」

消え入りそうな声で告げ、ルキアはデルタの手を握り返した。

そのとき、扉の開く音が聞こえた。

ルキアが顔を上げると、入口には、柔らかな空気をまとう壮年の女性が立っていた。

「ドートリッシュ司祭、あなたも来ていらっしゃったのですね」

エクランドはアシリングと同じ、長い金髪を揺らしながら、寝台の近くまで歩み寄ってきた。

「デルタ、思ったよりお元気そうで安心いたしました」

「ああリーヴァ、よく来てくれた。お前には前から話さねばならないことがあったのだが、なかなか私が人を呼べる状態ではなかったのでな」

エクランドは寝台の前で膝をつき、デルタをさらに近くで見つめた。

「あのマーシェル様、エクランド司祭とお話があるのでしたら私はこれで……」
「いや、よいのだ。できればルキアにも聞いていてもらいたい」
デルタは立ち上がろうとしたルキアを制し、窪んだ目に力を込め、エクランドと視線を合わせる。
「リーヴァ、今日お前をここに呼んだのは、お前に教会のことを頼みたいと思ってのことだ。おそらく、私の跡はお前に託すことになるだろうから」
唐突に振られた後継者問題に、エクランドは細い眉を寄せる。
「デルタ、私でよろしいのですか？　私よりもふさわしい方がおられるのでは？」
「現在、四大司祭長の地位にあるのはリーヴァだ。それにお前ならば派閥争いも激化せぬだろうと思ってな。……ルキアもそうは思わんか？」
ルキアが相槌を打つと、エクランドは苦く笑った。
エクランド家は旧体制下において＞司教＜を数多く輩出してきた家系である。
教皇や大司教とは違い、司教位にあった者たちには王家から特権を与えられず、また、エクランド家出身の司祭は他の司祭と同様に婚姻が禁じられているが、エクランド家はそれを合法的にこなしてきた一族である。
魔力の強さは血統に左右されるという仮説は、証明する手立てこそないものの、既に事実として扱われている。財産の分割を避ける

ために血族婚を好む貴族は多いが、エクランド家の場合は強力な魔力を生みだすために血族婚を行ってきた。婚姻が認められないため、秘かに儲けた子を兄弟や従兄弟らに養子として差し出し、彼らは血統の保持と家の存続に苦心してきた。

その甲斐あってか、エクランド家は数十年に一人は高位司祭を輩出してきており、今はリーヴァ・エクランドとその従弟ラウル・アシリングがともに高位司祭の地位に就いている。

ちなみに、この二人の表向きの関係は従姉弟であるが、血縁上の関係は叔母と甥である。

「デルタがそうおっしゃるならお引き受けしますけれども、総議長はどう言われるかしら？」

マーシェルは天井を見つめ、細く長い息を吐いた。

「……反対はせんだろう。エーゼン自身は主教になる気などないのだから。まあ、そうでなくとも、私はあれが主教になることには抵抗を覚える。ただでさえ、高位司祭の中にはサルファ家に気兼ねしてなにも言えぬ者が多いというのに」

力に優れ、清廉な人柄であったデルタが重い病の床に就いて一年近くになる。主教は教会の絶対権力者ではないが、その権威を蔑ろにする司祭はおらず、主教の立ち位置が司祭の派閥に与える影響は少なくない。

そのため、クラウスが亡くなり、デルタが不在となってからは、サルファ一門の横暴が以前よりも際立ち始めたと感じている者は多い。

「それならば、ドートリッシュ司祭を後継に押されるべきでしょう。私としましても、かつての主筋に当たるサルファ家が相手では、や

りにくさはございます。ですから主教は可能な限りドートリッシュの当主が担ってきましたのに」

「ですが私は……」

反駁しようとしたルキアを、エクランドは微笑で制し、デルタに向き直る。

「総議長はドートリッシュ司祭には敬意を払っておられますから、少なくとも高位司祭でドートリッシュ司祭に従わない者はいないと思います。……ゲーブル司祭は別ですけれど」

「ゲーブルか……。あの者の素行は褒められたものではないが、世俗の権力関係をまったく引きずらぬところだけは好ましく思う」

デルタは力なく笑いながらも、エクランドにきっぱりと告げる。

「いずれにしても、叙階を受けた順を考慮すれば、私の後継はお前かクユラであろう。ルキアもゲーブルも司祭となって五年ほどしか経っておらぬ。特にルキアはまだ二十一。お前の甥のラウルとは一つしか変わらんのだから」

「デルタ、私も一応女ですので、年齢の話はおやめください」

エクランドの冷ややかな声に、デルタは一瞬眉を上げた。

すぐにエクランドが、冗談です、と言って微笑むと、デルタは弾かれたように声を立てて笑った。

「そうであったな、すまぬ」

「それに、そういったお話はまだまだ先にしていただきたいものです。私たちはただ、あなたの病状が落ち着いていると聞きましたからお見舞いに参っただけですのに。ねえ、ドートリッシュ司祭？」

「ええ、その通りです」

ルキアはなんのためらいもなく、素直にそう答えることができた。
そのせいか、デルタのやつれた顔の中に、安らかな兆しが差して見えたような気がした。

この部屋に流れるのは、穏やかな空気だった。
ルキアはほんの少しの間、今自分の置かれている状況と、これから起こりうる事態とを頭の中から押し出していた。

まるで夢でも見るかのように、戦の終わった後のことを思う。
それは、どこまでも退屈で、そしてどこまでも平穏な日常であった。未来に馳せる情景は、ルキアの過去にあるものばかりに違いなかった。

三者三様　（1）

ゴースティン王国。

アレイシス大陸南中部一帯を支配していたガレ族により建国された王国であり、幾度か王朝の変遷を経ていく中で領土を拡大し、現在、オトゥール朝第十六国王アルト＝ヴィジェによる治世のもと、本国以外にも十を超える小国や島を属領とし、広大な領土と成熟した文化を持つ大国である。

気候は穏やかで、南東部を中心に肥沃な大地に恵まれているために農業が盛んであるが、北部は歴史的に鉱工業や紡績業の中心地として繁栄してきており、これらの産業の発展は国内だけでなく諸外国にも多大な影響を与えてきた。銃や大砲の開発により戦争の様相や築城方式が大きく変化し、また、服飾や建築様式の分野にはおいてはゴースティンが流行文化の発信地としての地位を確立するに至った。

この他にも多岐に渡る分野の学問が発展し、多くの書物が大陸中に出回っている。この大陸においてゴースティン語を公用語としている国は半数ほどであるが、それ以外の国も学問研究のほか、外交や社交のためにゴースティン語の習得に血道を上げている。

栄華を極めた王国の都には、五百年続くオトゥール王朝の象徴ともいえるエクシェール宮殿がそびえ立つ。

この宮殿には、本宮のほか、西側に王太子離宮とも呼ばれるアイオーン宮殿を、東側にはその他の王族が住まうヴァンチェスタ宮といった離宮を構えている。

広漠とした庭園の中心には巨大な噴水が設けられているが、そこに施された壮麗な像や彫刻は叙事詩をもとにしており、美しい水の流れとともに訪れる者の目を奪う。

白羊宮の月、四日。

久しぶりにエクシュール宮殿に伺候したルキアは、大理石の廊下を王の侍従数人とともに進んでいた。

宮殿内には多くの絵画が飾られているが、国王の私室へ向かうまでの長い廊下には、王の肖像画をいくつも目にすることができる。巻き毛を垂らした愛らしい幼児、王太子時代の凛々しい甲冑姿、即位したときの王冠を戴いた姿、成熟した風格を漂わせた壮年のころ……と、現国王の歴史を順に眺め、最後に現在の姿へと辿り着く。

王侯の肖像画は概して美化して描かれるものだが、若いころのアルト＝ヴィジェ王はその必要のない容姿をしており、彼の姿を実物以上に描くことなどできないと、腕の良い宮廷画家たちを苦悩させるほどだったという。当時を知る者は今では限られてきているが、年若い者たちの間でも生き伝説として語り継がれている。

しかし、病床にある老王の容貌は、肖像画に描かれた人物の数十年を経た姿だとにわかに信じられないものがある。老いとは、時間の経過によってのみ起こるものではない。王は国の繁栄よりも自身の快楽を追及した人物であるが、その快楽の中に彼を疲弊させるものが数多くあったのだろう。

絢爛とした金細工の天蓋から、臙脂（えんじ）色の天鵞絨（ビロード）が波打つように垂

れ下がっている。
靴先が深く沈むほど毛足の長い絨毯の上を歩き、ルキアは寝台の前に跪いた。
王は皺の刻まれた目尻を下げ、ルキアに語りかける。

「病に伏せっていたと聞いていたが、もうよいのか？」
「はい、ただの風邪でございましたので。長らく失礼をいたしました」
「風邪とはいえ、酷くこじらせておったそうではないか。これほど長く姿を見せぬから、お前の身になにかあったのではないかと……」
「ご心配をおかけして申し訳ございません。一週間ほどで回復いたしましたが、教会のほうで少々揉め事がございまして……そちらに手がかかっておりました」

ルキアが屋敷にこもっていた約二週間の間、王宮より幾度が様子をうかがう書簡が届いた。王からの書簡はなにやら大袈裟な様相であったが、その内容はルキアの容体を案じることに終始しているものだった。
ルキアはそれらのすべてに対し早々の返事を王宮に届けたものの、それだけでは王の憂慮を解消するに至らなかったのだろう。
ルキアは漏れ出そうになるため息を押し留め、柔らかな声で問いかける。

「陛下こそ、お加減はいかがですか？」

そう口にしながら、ルキアは伏せていた顔を上げた。すると、皮膚のたわんだ青白い手がルキアの頬に触れる。

「本当に、お前は母親に似ておるな」

その言葉がしたたかに耳朶を打ったとき、ルキアは睫毛を震わせながらゆっくりと瞳を閉じた。

ルキアの貌（かたち）を確かめるように辿る王の指先は、すがるような動きをしており、ルキアは物悲しさとともに虚しささえ覚えた。

「目に見えるものこそが揺るぎないものなのだと、かつて余は思っていた。だが今、アズノエルについて思い出せることと言えば、静かな眼差しや佇まい、穏やかな声……そんなものばかりだ。ここ数年、様々な記憶が次から次へと余から遠ざかっていってしまう。そのたびに寄る辺のない想いを味わっておるが、ふとした瞬間に思い起こす無形の心象が余に安らぎを与えてくれるのだ」

「……そうで、ございますか」

「不思議なものだな。お前には母親の記憶などほとんどないであろうに、これほどまでに同じ空気をまとっているのだから……」

かつての王は、ルキアの容貌にばかりアズノエルの面影を見出しているようであった。

しかし、そんな王の言葉は、あるときを境に変化が見られるようになった。

二年前の初冬、王は大病を患い、一時的に重篤な状態に陥った。なんとか回復はしたものの、それ以後は一日の大半を寝台の上で過ごすような生活を余儀なくされている。

宮廷医によれば、最近ではほとんど目が見えなくなってきており、光の加減や色の明暗ぐらいしか認識できていないとのことだった。その証拠に、今日ルキアは祭服ではなく礼服をまとっているが、王はそれを訝る素振りを見せない。

実は本日の午後一時より、アイオーン宮において将校と高位司祭を集めての軍議が開かれることになっていた。その軍議にはルキア

も参加するよう通知を受けていたため、ルキアはその時間に合わせて王宮へと向かったのだが、離宮の会議室に通じる廊下を歩いていたとき、王の侍従ら数名に出くわし、ルキアは本宮へと連れ戻される羽目になった。

国王直属の侍従は、長上着（ジュストコール）から靴に至るまで純白の衣装を身につけ、鬘（かつら）まで白いものを被っており、遠く離れた場所からでも目立つ出で立ちをしている。会議参加者で行き交う離宮の廊下の中央でそのような集団に取り囲まれたルキアは、耐えがたいほどの視線を集めることとなり、一刻も早くその場から離れたいという思いから、おとなしく応じた。

もっとも、ルキアがどう言葉を尽くそうとも、王の侍従らは了承以外の言葉を受けつけることはなかっただろう。彼らは忠義に厚く、仕事熱心であるものの、あまりに融通の利かない者ばかりである。軍議への召集がかかっていると告げたにもかかわらず、ともかく早くお越しください、の一点張りで、まったく取り合おうとしなかったのだ。

今、ルキアが王に召されたことに理由などない。

公式礼拝の最中でもない限り、いついかなる時でも、できる限り早く王のもとを訪れ、王が満足するまで夢物語のような話の相手をしなくてはならない。

これは四年前からルキアに与えられた役目で、ほぼ毎日のように繰り返されているものである。

アルト＝ヴィジェは先王の崩御により二十三歳で王位に就いたが、その数か月前、王太子時代において妃を亡くしている。熱愛していた妃と父王の立て続けに起こった死が彼に与えた影響は大きく、元来の内気で無気力な性格に、慈悲深さが混じるようになり、廷臣ら

のちょっとした諍いからも目をそむけるようになっていた。
ここ数年であれば、寵臣のクラウスが急死したこと、そして王自身も生死の境をさまよったことにより、絶えず夢を見ているような空気をまとうようになっていた。

ゴースティン国内において、王が国政の一切を王弟や廷臣に任せ切りにしていることは有名な話である。王が若く美しかったころは、宮廷でも民衆の間でも彼の人気は高かったが、長い間妃を娶らず、世継ぎを儲けなかったことにより、“多くの妾をはべらし政治を捨てた王”と嘲弄されるようになっていった。
ルキアは幼いころから王の姿を何度も目にしたことがあり、直接言葉を交わしたこともある。
王は歴代国王のみが身につけることを許される緋色の外套をまとい、堂々とした態度で玉座に腰かけ、王者にふさわしい華々しい様相をしていた。
そんな王の姿が目に焼きついていたルキアは、王についての悪評を耳にしても、嘘や誇張が入り混じっているに違いないと本気にしなかったが、宮廷に上がるようになってからは、その噂が流説でも捏造でもなくただの事実だったのだと嫌というほど思い知ることになった。
聞くところによると、もう二十年も前から大臣たちは重要な閣議決定であっても王への報告は不要としているという。

何十年もの間、“お飾りの王”と誹(そし)りを受けるぐらいならば、いっそ装飾でしかない王冠から解放されたほうがこの王にとって幸せだったに違いない。だが、ゴースティンの王位は終身制を取っており、譲位は認められていない。地位の安定を図るために設けられたその制度が、却って現在の宮廷闘争につながっているのは皮肉なことである。

しばらくの間、沈黙が続いていた。
そんな中、王が記憶を手繰りよせるように、弱々しく口を開く。

「ミカヤの様子はどうか？　あれはまったく姿を見せんが……」
「近ごろはミカヤ殿下が中心となられる政務が増えておりますので、なにかとお忙しいのでしょう」
「では、シベリー軍の討伐はどうなったのか？」

ルキアは言葉につまる。まさか王の口からその話題が出ると思っていなかったのだ。
これまで王は、政に関わる一切のことをルキアの前で口にすることはなかった。今年初頭にシベリーと西方軍の間で大きな紛争が起こったときですら、ほとんど関心を示さなかった。
ルキアは動揺を抑えながら、淡々と答える。

「殲滅作戦が開始されるのは金牛宮（きんぎゅうきゅう）の月ですので、今はまだ出撃に向けて準備をされているところではないかと思われます」
「シベリーの紛争などいつものことであろう。ミカヤがどうしてもと言うから許可を与えたが、そのように大事（おおごと）にする必要もあるまいに」

ルキアが曖昧な相槌を打つと、王は身体を大きく傾け、ルキアをのぞきこむように見上げる。

「ルキア、これはすぐに終わる戦なのであろう？　もしこれがきっかけで大きな戦につながりでもしたらと思うと胸が塞がれる思いがする。余は、もう誰かが死ぬところも悲しむところも見たくはないのだ」

ルキアは王の濁った瞳をまっすぐに見つめ、微笑みを返した。

「ご心配には及びません。陛下の御心を煩わせるようなことにはなりませんから……」

シベリー軍の討伐は、場合によっては数か国を巻き込む戦になる可能性があるが、ルキアはそれを王の前で口にするつもりはなかった。ルキアは王を心から敬うことはできなかったが、老いと病により気弱となった彼を苦しめることはしたくなかったのだ。

王もまたルキアのそんな気持ちを察しているのか、それ以上深く問うことはしなかった。

この王は、なにもわかっていないわけではない。ただ、見たくないものからは目を塞いでしまう。かつて、青玉のような深みと輝きを持つと謳われ、多くの者を魅了してきたその瞳に、今はなにを映しているというのだろうか。

王の瞳が視力を失いかけているのは、王自身が望んでいることのようにさえルキアには思えた。

さらに埒もない会話が続けられていたころ、王の私室の扉がおもむろに開かれた。

寝台へと歩み寄る二つの人影を横目でとらえたルキアは、すっと立ち上がり、脇へと下がる。

「兄上」

「おおキイル。お前がここに来るのは珍しいではないか」

王は暗く沈んでいた顔を一転させ、親子ほど年の離れた弟を迎え入れた。

クラヴィーエ公キイルは、先王とその二度目の王妃キャサリーゼとの間に生まれた第二王子である。キャサリーゼの生家であるハーシェリオン家は、先王の最初の妃を輩出したギルベイド家と双璧を成す権威ある家柄で、何百年にもわたり両家の間には強い軋轢が生じていた。

そんな外戚同士の不和にもかかわらず、この王と王弟には比較的良好な関係が保たれてきた。キイルは王の娘たちよりも後に生まれたこともあり、王はキイルを息子のように扱い、誰よりも深い信頼を傾けているという。

「ご無沙汰しており申し訳ありません、兄上。政務が立て込んでおりましたゆえ……」

キイルは理知的な青い瞳に、彼の情熱的な性格を表すような赤い髪を持ち、常に自信に満ちた笑みを口元にたたえている。ミカヤもキイルも、彼らはオトゥール王家の紋章である黒鷲を思わせる風格を漂わせており、その意味で国王とは正反対の人物であった。

父に連れ立たれて宮殿に出向くことが多かったルキアは、幼いころからキイルのことを見知っていたが、彼からは慄然とするような気迫を感じたものだった。それは宰相として、代王として、この国を統べる者としての威厳に他ならなかった。

その反面、時折、慈愛に満ちた言葉と笑みをミカヤやルキアに向けることもあった。それはもう遠い過去のことであるが、あまりに深く印象に残っているため、いまだに忘れることができないでいる。

王とキイルの会話に区切りがついたとき、キイルの後方に控えていた陸軍大臣ジーク・ラッセルが、ルキアに声をかける。

「セヴァンス侯、まだ少し顔色がお悪いが、ご無理をされているのではないのか？」
「いえ、お気遣い痛み入ります」
「愚息のために貴公をあのような目に遭わせてしまい、本当に申し訳なかったと思っている」
「そのようなこと……。あれは私の不注意ですのでお気になさらないでください。ご子息にお怪我がなくて何よりでございました」
「お身体には充分気をつけられたほうがいい。貴公は前線に出るのだろう？」
「……ラッセル伯爵」
ルキアは思わずジークをたしなめるような声を漏らしたが、ジークはそれをまったく気に留めることなく話を続ける。
「今はたしか“赤の間”にて軍議が開かれているはずだが、貴公にも出席要請が出ていたのではなかったのか？」
ルキアはジークの問いには答えず、静かな視線だけを返した。
今、キイルとジークが王の私室に出向いてきたのは、偶然ではないのだろうとルキアは思った。
先ほど、王の前にいるルキアの姿を目に留めたとき、彼らは驚いているようにも見えた。だからこそ邪推であると思いたかったが、たった今ジークが軍議の話題を振ったのは、まぎれもなく害意がこめられているに違いなかった。
ジークの言葉を王が聞いていなければいいとルキアは思った。
しかし、その思惑は儚くも砕かれ、普段は耄碌（もうろく）しているはずの王がすかさず訊ねる。

「キイル、それは一体どういうことか？」
「兄上、やはりまだご存じではなかったのですか？　ミカヤ王子がルドリア教会の司祭をシベリーの討伐軍に加えることを決められたのですよ。前代未聞のことですし、私や閣僚らもお止めしたのですが、王子がどうしてもと主張されましてね」
不敵な笑みをたたえながらキイルは答えた。
こういうときの彼の顔は、本当にミカヤとそっくりだとルキアは思う。
「では、ミカヤはルキアを戦場に出すというのか？」
王は濁った瞳に悲哀を浮かべ、ルキアを見上げる。
「陛下、ミカヤ殿下には殿下のお考えがあってのことです。魔道の力を戦に用いるのは、これまでにも検討されておりましたこと……。なにも特別なことではありません」
ルキアは王のために精一杯の気休めの言葉を取り繕うとしたが、ジークがそれをあっさりと遮る。
「工兵や衛生兵の補助として魔道の力を利用するというのであれば、私とて反対はせぬ。昨今、医学と魔道の融合はますます進んでおるようだし、優秀な司祭や魔道士を従軍させるのは当然のことだろう。ただ、どういう考えを持てば、高位司祭を前線に出すという結論に至るのか……。司祭らの操る魔道の力は強大なものという話ではあるが……まったく、私の頭では到底理解の及ばぬこと。ミカヤ殿下は少し人とは違う思考をお持ちのようだ」
ジークの毒の含んだ言葉をほとんど聞き流しながら、ふとルキア

は強い違和感を抱く。

今、アイオーン離宮において軍議が開かれているはずであるが、なぜ、キイルやジークが参加していないのだろうか。

シベリー軍の討伐は単なる報復ではなく、他国の軍隊の一部を殲滅するという意味合いを持ち、それゆえケーニヒスを敵に回しかねない危険を孕んでいる。いくらこの件に関しての全権がミカヤにあるとしても、事前交渉を行うためには宰相の力は不可欠であるし、軍の編成や配置、その他諸々の面で強い権限を有しているのは陸軍大臣のはずである。

大臣たちが出席要請を無視したのか、それとも王太子が彼らを排除したのか。

いずれにしても、出撃を控えたこの時期の軍議に、宰相と陸軍大臣が出席していないなど考えられないことである。しかし、それがありえてしまうのが、今この宮廷において勃発している“戦”ゆえなのだ。

「セヴァンス侯、貴公はご自分が徴兵されるにもかかわらず、いささかの異を唱えることもなく命令に従われたと聞く。それはそれで理解のできぬことだな」

ジークの鋭利な視線を受け止めつつ、ルキアはこれまで自分に言い聞かせてきた言葉を口にする。

「ラッセル伯爵がシベリー討伐に難色を示されているのは、自軍の兵を徒に消耗させぬためだと聞き及んでおりますが、高位司祭の操る魔道を用いれば、少しでも余計な犠牲を払わずにすみましょう。国にとって人は資源です。我らが出ることで多くの失われぬ命があるのではと考えております」

途中、ルキアの言葉にキイルの嘲笑が重なった。

「兵たちのために自らを犠牲にすることも厭わぬとは、見上げたものだ。だが、それは神に仕える者の言葉とは思えぬものだな。そなたは人を殺めることに抵抗がないと？　それとも、シベリーはルドリア教における“人”のうちに入らぬか？」

秘めた迷いを言い立てられ、ルキアの心に波が立った。

ルキアはミカヤの権柄さに少なからず反発心を抱いていた。しかし殊にキイルが絡めば、ミカヤの味方とならざるをえなくなる。

胸が、重く塞がれていく。それでも心にもない言葉を口にし、偽りの決心を守る壁を厚く塗り固めていくことしかできない。

「今回の徴兵命令に応じたのは教会の総意でありますし、教会の一司祭に過ぎぬ私が、それを反故にするわけにはまいりません。そもそも主命の前では、私個人の感情など無意味なものですから。なにより、シベリーによる暴動は我が国だけの問題ではありませんし、いずれは決着をつけねばならぬことでございましょう。……失礼ですが、殿下」

ルキアはゆっくりとキイルを見上げる。

「シベリー討伐の件、元はあなたが主張されていたことでは？」

キイルはくっと柳眉を歪ませた。

「……私が今になって反対するのを奇妙に思うのか？　あの王子とくだらない意地の張り合いをしているとでも？」

決してそうは思わなかったが、ルキアはなにも口にしなかった。

キイルは少し苛立たしげに息を吐く。

「私を非難しようというのか？　そなた……先ほど、主命の前では私情など無意味だと申したが、いまや教会の中では主教に次ぐ高位にある者が、教会の決定に盲従するとはどういうことだ？　なにもせずに、ただ見ていただけか？」

ルキアはキイルに言葉を返そうとしたが、ジークがそれを遮る。

「セヴァンス侯、貴公とあの王子はまるで似たところはないと思っていたが、その賢しいところはそっくりであられるな。長年連れ立っていれば、次第に通ずるものができてくるのであろうな」

「ラッセル、やめよ」

王のかすれた声が張りつめた空気を割った。そして王はルキアの腕に手をかけ、強く引く。

「ルキア、一体どうしたというのだ。お前がそのような物言いをするなど……」

ルキアは王の手を腕に絡めたまま、キイルに向かって頭を下げる。

「……殿下、失礼を申し上げましたことお詫びいたします」

その様子を憤然と見つめていたジークが、今度は王に迫る。

「しかし陛下、シベリーとの戦は、周辺諸国を巻き込みかねないものでして――」

「ああ、もうよい！　そのような話は余に聞かせてくれるな」

さも忌まわしいとばかりに王はジークの言葉を遮った。

このような諍いが周囲で起こるとき、王はいつも向き合うことはなく、その一切を拒否してきた。そんな場に幾度も居合わせてきたキイルは、もはや王になにかを口にする気はないようだった。

王太子派に王弟派、そしてルドリア教会。

その企みは三者三様で、その中心に国王がいる。なにも知らぬふりをする傍観者として。

人に悪意を抱かず、ただ、人を愛し、愛されることだけを望んだ王だった。情事の駆け引きは好んだが、相手を蹴落とすことにしかならない政争の駆け引きを極端に嫌った。そのことは廷臣たちに無用の争いを起こさせることにもつながり、今また、王弟と王太子の確執を生むこととなっている。

しかし、それでも彼は現実を見ようとはしない。ひたすら自分の愛した女たちのことを枕辺に浮かべ、幻惑の中で生きている。

ルキアはそんな王をただ羨ましく思った。

キイルとジークが退室していくとともに、王は眉間に深く皺を刻んだまま憮然と口を開く。

「……なぜ黙っていた？」

王がルキアに向けてこのような厳しい声を投げかけることは本当に珍しいことだった。

ルキアは微笑してうそぶく。

「陛下が反対なさるかと思いまして」
「当り前ではないか！　なぜお前を戦場になど遣らねばならん」

ルキアは王の怒りを受け流すように笑う。

「もしわたくしが武官になっておりましても、戦場に行くなと申されるのですか？」

今では見る影もないが、ルキアは元々武官を志望しており、剣術は一流の師について学び、学問も軍事学に関わるものに特に力を入れていた。そのことは王もよく知っているはずである。

王は肩のあたりに散らばる波状毛を振り乱し、荒い息を吐いた。

「勅許は取り消す」
「それはなりません」

ルキアは王にまっすぐに向き直り、決然と告げる。

「事態は既に動いております。この局面において陛下が許しを撤回されては、王太子殿下の威信に関わります」

現在、ミカヤの地位は決して盤石なものではない。王が病を患い、そう遠くない未来にミカヤが王位を継ぐと思われる今になっても、王弟派の権勢は依然として強い。だからこそ、王がミカヤを蔑ろにしているような振舞いは決してしてはならぬものだ。

「今になってそのようなことをなさるのならば、初めから、ミカヤ殿下にお許しを与えてはなりませんでした」

ルキアは無礼を承知で重々しく諫言すると、王は苦渋に満ちていた顔を徐々にほどいていった。その横顔は、再び夢を見ているかのように虚無をたたえていて、それを目にするルキアもまた虚脱感を味わっていた。

ルキアは自分が戦場に出ることを王に告げるつもりはなかったが、出撃すればしばらく王都を離れることになるため、王をごまかし続けるなど不可能だっただろう。その意味では、王に知られるきっかけを与えてくれたジークに感謝をしていた。

もっとも、このような形で知らせたくはなかったが。

やがて、長いため息が聞こえ、王は静かな声でルキアに告げる。

「暖炉の上に剣がある。それを、ここへ……」

ルキアはふっと後ろに視線を投げかける。

寝台から向かって右手にある暖炉には、たしかに一振りの剣が飾られていた。

なぜ王が剣などを、と訝りながらも、ルキアは暖炉の近くまで歩み寄った。台座に飾られた剣をじっくりと見つめる。

それは、とても美しい剣だった。

剣は鞘と柄が銀製で、全体に蔦模様が細かく彫られ、柄の先に埋め込まれた大きな紅玉には沈み彫りが施されている。そのインタリオは、冠を戴いた双頭の鷲――オトゥール王家の紋章であった。

台座から持ち上げると、予想以上の重みがルキアの手にのしかかる。同時に、しばらくの間にずいぶんと衰えた己の力を知るに至った。

剣を手にしたルキアは寝台まで引き返し、王の手を取り、剣の柄

と鞘を慎重に握らせた。
王は柄を握る指で紅玉に触れた。ゆっくりと確かめるようにインタリオに触れていく様子は、どこか祈りを込めているかのようにも見えた。

鞘に柄、そして鍔に施された彫刻をなぞった後、王はルキアのいるほうを見上げ、剣を差し出した。

「ルキア、お前にこれを……」

ルキアは王の言葉がすぐに理解できず唖然としていたが、すぐに気を取り直して叫ぶ。

「このようなもの受け取れません！」

ルキアが慌てると、王は声を立てて笑った。
いつもより深く皺の刻まれた朗らかな顔は、永く見ることの叶わなかった彼本来の素顔であるかのようだった。

「この剣は余が若いころに身につけていたものだ。いくつか肖像画を描かせたときも腰に下げていたものだが、幸いなことに余は一度もこの剣を抜いたことがないのだ。余の怠惰な生はそう長く続かぬだろうが、せめて、一度もこの剣を抜くことなく生を終えることができればと思っていた。余は民のためになることをただの一つとして成すことのできぬ王だった。だからこそ、最期のときまで平穏な世が続けば良いと、そのことだけを願い、祈り続けてきたのだ。……だが、所詮、祈るだけでは夢物語にしかならぬということだろう。まったく、無力なものだ」

王は眉を下げて、悲しげに笑む。

「ルキア……。余は、お前の望むことであればなんでも叶えてやりたいと思う。しかし、お前が余になにかを望むことはなく、お前がなにを本当に望んでいるのかわかってやることもできぬ。だから、この剣をお前に託したいと思う。この程度のことしかしてやれぬでな」

「陛下、そのようなことをおっしゃらないでください。それに、陛下のそのような祈りが込められているものを、わたくしなどが戴くわけには……」

「やれやれ、王として命令を下さねば、お前は余の好意すら受け取ってはくれぬのか？」

「いえ、そういうわけでは……」

「余にできることなど、お前の無事を祈るぐらいのもの……。せめてもの守りだと思い、受け取るがよい」

王はいつになく重厚な口調で告げ、ルキアの前に剣を押し出した。

ルキアは王と剣を交互に見やり、やがて、ためらいがちに王の前に跪いた。

自らの前に差し出された剣を両の手でしっかりと受け取る。

「ありがとうございます、陛下」

その剣の重みを感じながら、ルキアは明晰に謝辞を述べた。

三者三様　（1）（後書き）

【補足説明】

金牛宮の月＝五月

三者三様　（2）

紛争鎮圧から二か月。あと一か月で、国軍によるシベリー軍の殲滅作戦が開始される。

そこで本日、アイオーン宮殿“赤の間”において、特別軍議が開かれることとなっており、西方軍及び北方軍の上級士官、王太子付きの近衛将校が集められた。そして今回は特別にルドリア教会の高位司祭も出席要請が出ている。

その一方で、陸軍大臣ジーク・ラッセルは、他の調整事項があるとのことで、この軍議に参加しない。開戦を間近に控えたこの軍議に、陸軍大臣をはじめ、宰相や外務大臣までも出席しないというのは、異様と形容する他なかった。

彼らの不在は、まさしく無関心と呼べるものである。シベリー軍の討伐に関して全権を有しているのはミカヤであるが、この有事において外務大臣や陸軍大臣と足並みが揃わないというのは、戦を進める上であまりに不都合である。

ただし、それは常時から両者が協調関係にあることが前提でもある。今の宮廷の有り様では、余計な口出しをされるぐらいならば、無関心を気取ってもらったほうがよいのだ。

多くの将校たちは、ミカヤが王弟派をこの軍議から排除しようとしたのだと考えていた。それは、宰相や大臣以外にもう一人、重要人物がこの会議に欠けているためである。

その人物とは、マーテル＝フォー・ディラ・バルフォア中将――

前西方軍司令官を務めていた人物で、今年初頭のシベリー紛争時の責任者であるが、殲滅作戦の直接原因となった紛争鎮圧責任者の出席を強制しないというのは不自然極まりない。もっとも、バルフォアがジーク・ラッセルの配下であり、王弟派の軍人であるということを鑑みた途端、彼の不在が自然なものとなる。

“赤の間”は、かつてクラヴィーエ公キイルが筆頭王位継承権者で、この宮殿に居住していたころ、広間を改装して作られたものである。

四方を覆う深紅の壁紙には、王家の紋章柄が金糸で刺繍され、天井まで届く東の窓には、壁紙と同じ色合いのカーテンが掛けられている。天井から吊るされた巨大な三つの照明や窓枠には豪奢な金細工が施されており、赤一色に染められた部屋にさらなる荘厳さを与えていた。

室内の大半を埋め尽くしている紫檀の重厚な机には、陸軍大佐以上の軍人と、ルドリア教会の高位司祭が順に着席し、緋色の絨毯の上に、黒い軍服を身につけた王太子の近衛将校らが起立している。

ここでは月に一度、定例軍議が開かれているが、その参加者は大佐以上とされているため、少尉であるエリーヌが“赤の間”に入る機会は今まで一度もなかった。今回の特別軍議は非公式に開かれていることもあり、王太子付きの近衛士官はすべて出席するように指令を受けていたのだ。

ほどなくして、王太子ミカヤが現れ、前方に用意された肘掛け椅子に腰を下ろす。ミカヤは灰緑色の長上着を身につけており、それは彼の赤銅色の髪をより鮮やかに見せていた。

片肘をつき、薄く笑む。

「これより、特別軍事会議を開催する。皆も知っての通り、本日の議題はシベリー軍殲滅作戦についてであるが、この場においては、まず、殲滅作戦の概要説明を一通り行うこととする」

ミカヤが斜め横に座する壮年の男に合図をすると、一同の目はその男に注がれた。

席を立ち上がった男は、灰色地に紺の縁飾りの施された軍服をまとっており、肩章には少将の位を表す二つの五稜星（ペンタグラム）が付され、金の飾緒（しょくしょ）が肩から胸部にかけて吊るされている。

彼は、新たに西方軍司令官に着任したケールセン・グラッド将軍――バルフォア将軍の後任に当たる人物であった。

グラッドは、目の前に勢揃いする将校・高位司祭を見据え、悠然と口を開く。

「来たる金牛宮の月、一日。ベスラ要塞及びキウロス要塞よりシベリー軍の討伐に向けて進撃を開始することとなる。今作戦における討伐対象は、シベリー自治国の中でも暴動の中核となりやすいカールトン、ミレニス、リブロ、アパス、ルドン以上五つの州軍であり、それらすべての州政府を制圧することが目的である。討伐軍には西方軍の八割を投入し、さらに北方軍の一部を加えることとした。また、今作戦の切り札とも言える魔道軍についてだが、主力部隊に加えられるのは、ここにいる二十余名の高位司祭である」

司祭たちは、二十代から四十代半ばに見える者たちで、祭服を着ている者、礼服を着ている者、髪の長い者、髪の短い者など様々であったが、華美に過ぎる宮廷人と比べるせいなのか、彼らは質素で高潔さが透けて見えている。また、彼らからは軍人のような気鋭が感じられず、聖職者特有と言うべきか、どこか達観したような目をしている者が多くいた。

「諸君らの中には、たかだか二十名程度を戦に加えたところでなにが変わるのかと訝る者もいるだろう。たしかに、儀礼の際に用いられる司祭の力は何人も傷つけるものではない。しかし、あれは魔道の持つ本来の力が開放されていないものに過ぎないのだ。……今ここにいる諸君らには、それがわかることと思う」

この部屋には、なにやら凄まじい圧迫感であふれ返っている。その正体は、まぎれもなく高位司祭たちから放たれている魔力の波動であった。

ゴースティンの人間は礼拝堂や聖堂などで司祭の操る魔道を目にする機会は多いが、司祭の中でも特に選ばれし者とされる高位司祭らが二十人も集うと、その威圧感は暴力的と言ってもよいほどだった。

ミカヤやグラッドは余裕然としているものの、将校らはいびつに眉をひそめている者が散見される。

エリーヌは、昔からルキアから放たれる魔力の波動に慣れていたが、軍議が始まる前、室内に高位司祭の数が増えていくにつれて、酷く空気が張りつめていくのを肌で感じていた。そして今、そのあまりの威圧感に背筋を怖気が這っている。

同じ部屋に居合わせるだけでこの威力なのだ。司祭たちがその力を開放すれば、一体どれほどのものになるというのだろうかと、多く者が恐怖に近い好奇を抱いていた。

「司祭の方々には、砲兵と同様の役割を果たしてもらうこととなる。無論、あなた方の放つ力は砲弾など比べものにならぬものと聞き及んでいる。小銃も大砲もここ数年技術改良がされ、威力・射程距離・命中精度など改善されてはいるが、なにぶんまだまだ発展途上であり、最新式のものは数が足りぬ有り様……。とりわけ＞四大司祭＜のお力に我々は期待している。主力部隊は四つに分けて進撃させる

ことになるが、その各部隊に一人ずつ四大司祭を配置することとなろう」

ルドリア教会の四大司祭とは、高位司祭の中でも特別に精霊の加護を受けているとされる者たちで、＞風の司祭＜リーヴァ・エクランド、＞水の司祭＜クユラ・ウェーリック、＞地の司祭＜ローザン・ゲーブル、そして、＞炎の司祭＜ルキア・ドートリッシュ、以上の四名を指す。

主教に次ぐ高位とされる彼らの席次は、高位司祭の中でもっとも先に割り振られているが、今そこにルキアの姿はない。

グラッドはさらに説明を続けようとしていたが、怪訝そうな声がそれを遮る。

「ところで、あいつはどこに行ったのだ？　軍議の知らせは伝わっているのだろうな？」

ミカヤの問いが誰のことを指しているのか、この場にいるほとんどの者がわかっていた。エリーヌを含め、一部の者の間で緊張が走ったが、ミカヤの近くにいた近衛の佐官が遠慮がちに申し出る。

「セヴァンス侯はお越しになられていたのですが、その、国王陛下のお召しであるとかで、王の侍従らが……」

「なるほど」

愉悦とも不快とも取れない声が短く吐き出され、佐官の言葉を遮った。

「ならば、しばらく戻ることはできんだろうな……」

ミカヤは肘掛けに両腕を置き、まっすぐに前を見据える。

「後で私のもとへ来るよう伝えておけ」

「はっ……」

ミカヤの放った一言は、司祭から感じる威圧感とはまだ別の凄味があった。

その後、グラッドから軍編成及び現状についての概要説明が続く。

「磨羯宮（まかつきゅう）の月に発生したシベリーの暴動により、西方軍の第五連隊に多大な被害が発生し、その報復として、宝瓶宮（ほうへいきゅう）の月に紛争鎮圧が西方軍の主力を用いて行われた。その後にシベリー自治国アパス州の代表と講和に関する交渉が試みられ、最終的にそれが決裂したというのは皆も知ってのことと思う。交渉が決裂するに至った直接の原因は、シベリーと西方軍、先制攻撃を行ったのはどちらかということに食い違いが生じたためであるが、双方の主張が食い違うのはいつものことであり、真実がどこにあるのかなど追求するつもりは毛頭ない。重要なことは、国境線の紛争をいかにして終止符を打つか、それだけである」

ケーニヒスとの国境は八十年前に両国の間で起こった戦争の後に画定したものが基準となっている。

その際の講和条約において、現在シベリー自治国のアパス州を始め、ミレニス州やカールトン州付近の国境画定に関しては不備な部分が多く、その結果、シベリーとゴースティンとの間に相手側の越境について主張が異なるのが常だった。

ここ数十年の間、何度かゴースティンとケーニヒスとの間で国境画定について話し合いの席が設けられ、問題の箇所のいくつかは解決しているのだが、その決定がシベリーにまで徹底されていないため、結局は同じことだった。

「シベリー自治国はケーニヒスの従属国であるが、あやつらは宗主国の命令を遵守するような輩ではない。シベリー総督は好き勝手に権利を振りかざし、昨今ではゴースティンだけでなくケーニヒスの辺境の村までしばしば越境し、略奪を行う有り様だという。ケーニヒスの傘下に入って後、シベリーの人口は増加の一途を辿り、軍も拡張され、もはや辺境の蛮族と侮ってもいられん。これはケーニヒスが奴らに余計な知恵を授けた結果であり、国境防衛の捨て駒としてきたツケが回ってきたわけだが、もはや他人事ではない。これ以上シベリーを泳がせておけば、ゴースティンもケーニヒスの二の舞となろう。二か月前の紛争鎮圧によりアパス州は既に落ちたも同然だが、シベリー軍の主力は首都バードンに駐屯しており、交戦の状況によっては首都バードンをも陥落させねばならなくなるだろう」

「……グラッド将軍」

重々しい声が空気を割る。

「貴公は先ほど、今回の殲滅作戦は暴動の中核となる州の制圧が目的であると言われた。西方軍の精鋭である第五連隊にあれほどの被害が出た以上、シベリーを侮るのは愚行でしかないが、それでも西方軍だけで事足りるはず。もっとも、西方軍を全軍出撃させれば後顧に憂いが生ずる。だからこその北方軍派遣要請であると私は理解していたのだが、今の話を聞けば、双方の理解に齟齬があったと言わざるをえないのではないか？」

そう意見するのは、エリーヌの父――アシュレイ＝オーヌ・ディラ・グレンヴィル伯爵であった。彼は北方軍司令官を長年務めており、その階級は大将である。また、ケールセン・グラッドとは同い年で、士官学校時代の同期でもあった。

アシュレイはさらに続ける。

「シベリー軍だけが相手ならば、自治国のいくつかを占領下に置くことは戦力的にも容易であろう。また、制圧対象に挙がった州はいずれもゴースティンに向けて暴動を起こした歴史がある。その報復であるとするならば、ケーニヒスもまだ静観しているやもしれぬ。だが、首都バードンまでゴースティンが占領するとなれば、ケーニヒスは黙ってはいまい。そもそも、いくら報復とはいえ、シベリー自治国の全八州のうち五州を制圧するとなれば、一国を占領下に置くのと同じこと。西方軍の八割、北方軍の三割という軍編成は、初めからケーニヒスとの交戦を見越してのものと考えてよいのか？」

現在、既に北方軍の二個師団がキウロス要塞に向けて進軍を始めている。西方軍の八割に派遣軍を併せると、兵の数は十万を軽く超える。それはまさにケーニヒスと全面戦争を起こそうかという勢いの規模となる。

これに関しては、ゴースティンの閣僚・将校だけでなく、ケーニヒス政府も同様の推測を抱くことだろう。そもそもゴースティンとケーニヒスの確執は根が深く、二か月前にケーニヒスを交えてのシベリーとの交渉が決裂していることからも、ケーニヒスの参戦可能性を楽観視することはできなかった。

グラッドはわずかに目を細めてアシュレイを見やり、返答を告げようとしたが、ミカヤがその言葉を奪う。

「無論、そのつもりだ」

一瞬、“赤の間”には静寂が降り落ちた。

次第に百数十人の息づかいと固唾を呑み込む音が混じり合っていくにつれ、再びざわつきが生まれていく。

アシュレイの指摘は、シベリー討伐が決定したときから多くの将校たちの抱いていた懸念であるが、これまでに幾度か行われた軍議の中で、ケーニヒスとの交戦可能性について、明確に否定されることも肯定されることもなかった。

元は、国境周辺の州のいくつかを制圧するという作戦のはずであったのだ。それにもかかわらず、今ではケーニヒスと開戦にまで言及されている。そもそも、十万を超える軍勢をシベリー自治国へ差し向けること自体、ケーニヒスへの宣戦布告と取られても仕方のないものである。

思案に暮れていたアシュレイは、頬杖をついているミカヤに視線を投げる。

「しかし、殿下。シベリー総督との講和が決裂したのは致し方ないこととしても、その後ケーニヒスとの交渉は一体どうなっているのです？　不戦同盟の締結を推し進めているとも聞き及んでおりましたが……」

「ああ、できうる限りケーニヒスとの戦は回避したい。そのための手立てをいくつか試みているところだ。だが……」

ミカヤは小さく喉を鳴らし、おもむろに口角を上げる。

「シベリー軍の殲滅、ケーニヒスにとって願ったりだと思うがな。もはや、あやつらはケーニヒスのために動く手駒ではないのだから」

ミカヤが冷笑を含んだ声でゆったりと告げると、議場は再び水を打ったように静まり返った。

シベリー自治国は八つの州で構成されており、中央政府はバードン州に置かれている。

バードンではそれぞれの州代表者が集い、合同で政治を行い、その首長が総督と呼ばれる。シベリーがケーニヒスの支配下に置かれてから百余年が過ぎたが、年々、ケーニヒスの官僚から強い内政干渉が行われるようになっており、総督および州代表者による自治が機能不全に陥っているとされる。

また、ケーニヒスはシベリーを軍事力として利用しながらも、その自治権を縮減し、シベリーの領地を自国に組み込む政策を実行していた。それにより、シベリーはケーニヒスに対し自治権奪回を求め、暴動を起こすことも珍しくなくなっている。

しかし、属国内に軍が攻め入られて静観している宗主国などあるのだろうか。ゴースティンならば考えられないことだ。

シベリー軍殲滅戦に関して、ケーニヒスとはどのような交渉が行われているというのだろう。ミカヤの返答は言外に含みを持たせていたが、ケーニヒスが動かないという確信でもあるのだろうか。

二十数年にわたり外務大臣を務めているのはキイルの叔父――デデュー公爵ミシェル＝ロイ・ディラ・ハーシェリオンであるが、デデュー公はケーニヒス高官を始め諸外国の外務官と親しく、開戦前に事前交渉を行うならば、彼以上の適任者はいないだろう。だが、デデュー公までも今この場にいない。

沈黙の中、濃緑地に臙脂（えんじ）の縁飾りの施された軍服を身につけた北方軍の佐官らが、次々に口を開いていく。

「それならば、ファジールの動きが気になるところではある。……まあ、既に動き始めているのやもしれんが」

「ファジールはジョアン大公の代になってからというもの、無謀とも思える軍備拡張を行い、それが財政を逼迫させていると聞き及んでいる。才智にあふれた先代とはずいぶんと異なるお方のようだ」

「しかし、なぜジョアン大公はあれほど軍拡に力を注いでいるのだ

？　あれはケーニヒスへの牽制なのか、それとも……」
「よもやゴースティンに？」
「いや、まさかそのようなことは……。ルザーリやベイリーズなど、国力の劣る小国への侵攻を企んでいると考えるほうが自然ではないのか？」
「我が国と同じく、シベリーに軍を差し向けようとしているのやもしれぬ。殊にファジール国境に近いアパス州などには金や銀の採掘される鉱山があるゆえ、資源に乏しいあの国にとっては喉から手が出るほど手に入れたい地だろう。そもそも、ほんの二十年前まではケーニヒスを介してその恩恵を受けていたのだからな」

ファジール大公国は、東をゴースティン、北をケーニヒスと面している国家で、二十年ほど前に内乱を経てケーニヒスより独立した。その独立戦争において、ゴースティンはファジールを支援し、独立後も乱れる国内の平定に幾度となく力を貸してきた。当時ゴースティンの治世を行っていたのはクラヴィーエ公キイルであるが、ファジールへの支援はケーニヒスの国力を分散させ、なおかつファジールに恩を売っておく目論見があったのだ。

しかし、それが叶ったのも先代ファジール大公カールの治世下においてのみに過ぎなかった。

かつてケーニヒシとファジールは、ケーニヒス王がファジール大公を兼ねる同君連合が成立していたが、それが解消されてもなお、ファジールはケーニヒスの属国であり続けた。ファジールの統治を担っていたのはケーニヒス王家の傍系に当たるザイード大公家であるが、ケーニヒス王女を母に持つカール前大公は、ケーニヒス先王妹と王位を争って内乱を起こした。

その結果、カール大公のケーニヒス王位継承こそ叶わなかったが、ファジールを永きにわたる従属関係から解放することに成功したの

だ。

ゴースティンにとって誤算だったのは、現大公のジョアンが智謀に長けていた父とは対照的な人物であったことである。ジョアンは血気に逸る短慮な性格で、軍事・外交面に対する姿勢もただ貪欲なだけであり、その治世は善政とは程遠いものである。

ジョアンは長年ファジールを属国化してきたケーニヒスにいまだ強い反発心を持ち続けており、彼が行き過ぎた軍拡を推し進めていることからも、ファジールとケーニヒスには近いうちに戦争が起こりかねないと周辺諸国は危惧していた。

じっと沈黙を保っていたグラッドは、ようやく話を再開させる。

「ケーニヒスの出方についてだが、八十年前の大戦の折にゴースティンとケーニヒスの間で不可侵条約が締結されているものの、ファジールの出方次第ではそれが反故にされる可能性がある。ファジールも心情的にはゴースティン寄りであろうが、ゴースティンとケーニヒスが戦になれば、どちらにつくかは五分といったところだろう。ジョアン大公が領土拡大のためゴースティン及びケーニヒスに野心を抱いているのは明白……。不意を突かれる可能性を軽視するのは得策ではない」

ミカヤはグラッドの言葉を継ぐ。

「北方軍の三分の一をキウロス要塞に向かわせたのは、シベリーではなくケーニヒス及びファジールの参戦を視野に入れたものだ。状況が変われば、さらなる増援が必要となるが、その場合は王都周辺の駐留軍をまとめて派遣すればすむこと。司祭の徴兵に踏み切った目的もそれと同様のものだ。……だが、元より奴らなど恐れるに足らぬ」

初めから勝利を確信しているという口ぶりだった。

もちろんミカヤやグラッドに限らず、シベリーや隣国との戦についてゴースティンの敗走を思い描いている者などいない。それでもやはり、ゴースティンの人間にとってケーニヒスとの戦争はなんとしてでも避けたいという気持ちが強かった。

八十年前のゴースティン・ケーニヒス間の戦争は、ケーニヒス北部の属領で内乱が起こった際に、かつての領土を奪回しようと考えた三代前のゴースティン王ルイス＝ヴィジェが、国境を越えて侵攻したために起こった。

ゴースティン軍は勝利を重ね、当初の目的であるカールトン要塞及びヘリテ川河口付近を取り戻すことに成功したが、南西のミレニスまで侵攻しようとしたところでシベリーの猛攻に遭い、ケーニヒスからの講和の申し出に応じることとなった。

この講和はケーニヒスが大幅に譲歩し、ゴースティンに多額の賠償金を支払うことでカールトン要塞とヘリテ川河口付近の領土を再取得するというものだった。それはケーニヒスにとって不利な合意であったとはいえ、ゴースティンにもたらされた恩恵は微々たるものだった。

ゴースティンは開戦以前より度重なる要塞の建設により歳出が増大しており、戦争の遅延によりそれはさらに逼迫した。巨額の賠償金を得てもなお、財政の立て直しは難航し、貴族への課税に踏み切らざるをえなくなったのだ。

戦後、国力が落ちたのはケーニヒスも同様で、ファジールとの独立に絡む内乱以降は、ますます国内は疲弊している。ファジールは肥沃な土壌を有しており、ケーニヒス本国の食糧はファジールに依存している節があったが、ファジールの独立後は搾取が不可能とな

り、近年では穀物の輸入を不和の続くゴースティンに頼る有り様である。

そんなケーニヒスの現状を知っている者ならば、永く続いてきた平穏にひびを入れたくないと願うのは当然であろう。

軍議は一時間ほどで終幕を迎えたが、終始、張りつめた空気が緩むことはなかった。中央に座する司祭たちの存在はただただ物々しく、その威圧感を味わうためだけに軍人が集められたようなものであった。

三者三様　（2）（後書き）

【補足説明】

磨羯宮の月＝一月
宝瓶宮の月＝二月

悲しき恋の語りべ

軍議の後、エリーヌはアイオーン離宮の談話室を訪れた。もっとも、エリーヌが望んでその場に向かったわけではなく、談話室の前を通りかかったところ、顔見知りの貴婦人らによって強引に中へと連れ込まれたのである。

彼女たちは、流行のドレスや髪型、舞踏会に観劇にと、いつも華やかな話題に事欠かないが、今日に限ってはシベリー討伐が話題に上っていた。身内や友人に軍人を持つ者も多く、気にならないはずはない。

エリーヌが談話室に足を踏み入れ、幾人かの者と挨拶を交わしていると、近くにいた別の集団から先ほどの軍議の内容について質問攻めに遭った。あまり詳しい内容を話すわけにもいかなかったが、不安を煽るようなことは避けたいと思い、エリーヌは事実に虚構を織り交ぜて、彼女たちが納得できるような言葉を選んで説明した。

一通り説明し終わると、貴婦人たちは安心したのか、それとも飽きたのか、すぐにいつも通りの彼女たちへと戻っていった。

流行のドレスや髪型の話になど、エリーヌにはついていけるはずもないが、今はこういった浮ついた話題の方が好ましいと感じられた。

春の柔らかな日差しが降り注ぐこの部屋には、レースやフリルがふんだんにあしらわれたドレスを身につけた貴婦人たちが、色とりどりの菓子が並べられた猫足テーブルの間を蝶のように行き交って

いる。

花々が舞い踊るこの空間において、一見、戦争の話など不釣り合いにも思える。しかし、彼女たちが好む話題こそ、この場に不釣り合いなものであることが多いのだ。見た目は甘やかな砂糖菓子であっても、一度口にすると、そこに含まれている毒に気づくかのごとく。

喧騒を逃れようと、エリーヌは少し離れた席に着いた。すぐに給仕の者がエリーヌの前にティーカップを置き、お茶を注いでいく。

急須から注がれているのは南大陸の属領である諸島を原産地とするお茶であるが、透明度の高い琥珀色をし、渋みと甘い香りを持っている。そのままの味を楽しむ者も多いが、女性にはミルクや砂糖を混ぜて飲む者が多く、エリーヌはいつも角砂糖を三つ入れている。

「エリーヌ様」

その呼びかけに顔を上げると、エリーヌの前には、艶然とした笑みを浮かべるミルドレッド・レイヴァンの姿があった。

エリーヌはお茶をかき混ぜていたスプーンを置き、ミルドレッドに笑みを向けた。

「レイヴァン夫人、お久しぶりですね」

夫人と呼ばれるものの、彼女は既に寡婦であり、再婚をする気もなさそうである。

ミルドレッドは夫の死後にベアトリスという遠縁の少女を養女に迎えたが、ミルドレッドとベアトリスが並ぶと、とても母娘には見えない。ベアトリスとの実際の関係は又従姉妹であるが、ミルドレッド自身がまだ二十九歳で、見た目はその年齢以上に若く、姉妹と言っても良さそうなものである。

「エリーヌ様が談話室にいらっしゃるのは珍しいですわね。どなたかに無理やり連れて来られましたの？」

エリーヌが曖昧に苦笑すると、ミルドレッドは花の顔（かんばせ）をほころばせた。

ミルドレッドは宮廷人の間でとても人気のある女性だった。家柄はそれほど優れているわけではないが、男女ともに惹かれずにはいられない魅力を持っていた。

この国ではありふれた栗色の髪に金茶色の瞳をしているものの、高く結われた髪は誰よりもつややかで、片方の肩に垂らされた巻き髪が鎖骨にかかっており、白い肌と濃い色の髪との対比はなまめかしかった。長く濃い睫毛に縁取られた琥珀の瞳は、静かでありながら優美な視線を放っている。加えて、堂々とした振舞いといい、軽やかな足取りといい、扇子を持つほっそりとした手といい、なにもかもが貴婦人たちの憧れであった。

ミルドレッドは洗練された動きでドレスの裾を捌き、エリーヌの斜め横の椅子に腰かける。

「シベリー軍の討伐、もう間もなく始まりますのね。高位司祭までもが戦場に行かれると聞き及んでおりますわ。戦力の要は四大司祭らであるとか……」

ミルドレッドは教会に属していないものの、強い魔力を秘めた魔道士で、教会権力者――特にクラウス・ドートリッシュとは幼いころから親交があったそうだ。

教養が深く、知性に優れ、ただ噂に興じている貴婦人とはまったく別の人種である。

「ルキア様はどう思ってらっしゃるのかしら？」
「さあ、そのようなことを話す機会などありませんので、なんとも……。先ほどの軍議、高位司祭にも出席要請が発せられていたはずですが、彼は来ていませんでしたしね。私個人としては、軍事訓練も受けていない者を戦に出すなど、邪魔になるだけではないかと思いますが」
エリーヌはカップに口をつけ、お茶を一口飲む。
「高位司祭の使う魔道は強力なものよ。とりわけ四大司祭の力は計り知れないものだと言われておりますわ。きっとルキア様は、司祭らが戦うことで自軍の犠牲が減るのであればよいとでもお考えになっているのではないかしら」
「そうだとしても、ご立派な大義名分だと思うばかりですね」
エリーヌがそっけなく答えると、ミルドレッドは困ったように眉を下げた。
ミルドレッドはドートリッシュ家の者と親交が深いために、なんとかルキアを庇いたいのだろう。エリーヌもルキアの苦渋の決断を肯定したいと思っていたが、出撃の日が迫るにつれて割り切ることができなくなっていた。
なにより、エリーヌには司祭らの操る力がどれほどのものなのか予想がつかない。ミルドレッドが冷静に振舞っていられるのは、自らが魔道士であり、司祭の力を知っているからなのだろうか。ミカヤにしても、司祭に危険が及ばない確信があるからこそ、ルキアを戦場に遣るなどという決断を下したのだろうか。
そうであってくれればいいと思いつつも、エリーヌは募る焦燥を押し留めることができなかった。

「あの男はミカヤ殿下に盲従するだけしか能がなく、信念など持ち合わせてはいませんよ」

エリーヌが心にもない言葉を言い放った途端、あたりに漂う香水の濃度が増し、なんとも形容しがたい圧迫感を覚えた。視線を上げると、そこには十七、八の、まだ少女と呼んでいいような貴婦人たちが円卓を囲むように立っていた。

「エリーヌ様、そのようなことをおっしゃってはいけませんわ。だってセヴァンス侯は複雑なお立場でいらっしゃいますもの」

「そうですわ、本来であればクラヴィーエ公がミカヤ殿下の案に強く反対されたいはず……。けれど、クラヴィーエ公のお味方をされたいた以上、ルキア様はミカヤ殿下に従わざるをえなかったのですわ」

「もしルキア様が反対なさったために国王陛下が王弟殿下にお味方されるようなことになれば、ミカヤ殿下のお立場が悪くなりかねませんもの。ルキア様とミカヤ殿下は幼いころからのご友人同士ですし、いろいろと気を遣ってらっしゃるのだわ」

三人の少女たちはエリーヌとミルドレッドの間に入り、一気にまくし立てた。

エリーヌはその剣幕に呆然とし、カップを手にしたまま固まってしまっていた。ミルドレッドとの会話の最中、複数の視線をずっと感じていたが、どうやら彼女たちは二人の話に聞き耳を立てていたらしい。

この少女たちの主張は、噂好きの貴婦人の話を聞きかじったものにすぎないのだが、それに一理あるのは認めざるをえない。

王は息子同然のキイルに深い信頼を寄せ、国政の一切を彼に任せ

ている反面、昔からミカヤのことは粗略に扱っている。この状況において王が勅許について翻意しようものなら、これまでミカヤを軽んじてきた廷臣たちを増長させる可能性も高い。

ルキアはあの命令書を受け取ったとき、瞬時にそこまで判断していたのだろうか。

だとしても、今回のように自身が徴兵されるという事態に直面しておきながら、一切の異を唱えることもなく恭順したことは、不可解であり不愉快でもあった。

エリーヌはカップをテーブルに置き、ため息まじりに告げる。

「あなた方のおっしゃることもわかりますが、司祭でありながら徴兵命令にああも簡単に応じるなど、聖職者としての本分を軽視しているとしか思えないでしょう」

「いいえ、エリーヌ様。ご両親の悲恋を思えば、ルキア様が宮廷の諍いから身を引いてしまわれるのも無理ありませんわ」

「そうですわ。あんなに悲しい出来事があったのですもの……。わたくし、あの話を聞くたびにルキア様に同情いたします。いいえ、本当にお辛いのはクラヴィーエ公かしら……！　ああ、思い出しただけでも、わたくし、なんだか胸が苦しく……」

「ですけど、セヴァンス侯も胸を痛めておいでに決まっているわ。昔はもっと社交的で朗らかな方でしたのに、ここ何年かはいつも憂いた顔をしていらっしゃるもの。……お可哀想に」

ルキアを庇おうとする少女たちの話は、一気に横道にそれていった。彼女たちは話の核心を突いているつもりなのだが、エリーヌにとっては筋違いもいいところだった。

たしなめるような気持ちを込めて、エリーヌは貴婦人たちに問う。

「あなた方は、一体なんの話をされているのですか？」

少女たちは驚いたように目を大きく見開いたが、じきに白い手を口元に宛て、さもおかしそうにエリーヌを見る。

「いやですわ、かの有名な恋物語のことですわよ」

「まさかエリーヌ様、ご存じないのですか？」

その話を、エリーヌが知らないはずはなかった。近衛士官として宮廷に出仕するようになって二年、エリーヌは幾度もその話を耳にしてきた。今ではその話が始まると自然に心の耳が閉じていくようにすらなっていた。

エリーヌは憮然としたまま黙りこんでいたが、突然、甲高い声が耳朶に響く。

「まあ！　ご存じないのでしたら、わたくしが教えて差し上げますわ」

エリーヌはとっさに彼女たちを制止しようとしたが、それは間に合わず、少女の一人がうっとりとした口調で語り始め、他の二人は瞳を閉じて少女の話に耳を傾けていた。

「昔々、ある王国の宮殿で、見目麗しい王子様と可憐な貴族のお姫様が恋に落ちました……」

困惑したエリーヌがミルドレッドを見やると、いつものことだ、とでも言うように、ゆっくりと首を横に振った。

エリーヌは努めて顔には出さなかったが、内心うんざりしながらその悲恋物語を聞き流していた。

大国の王子と名家の姫との恋……。

将来を誓い合うほど深く愛し合っていた二人を引き裂いたのは、王子の兄である国王だった。王は早くに妃を失くし、後添えは娶らないと心に決めていたが、姫のあまりの可憐さに凍てつかせた心を溶かしてしまったという。

王子と姫が恋仲であることを知らない王は、姫を王妃にと望むようになってしまった。国王に逆らうすべなどなく、王子と姫は苦悩の中で別離を選んだが、王子のことを想い続ける姫は王の懇願を振り切って姿を消し、二人の愛を守るために一人で生きることを選んだ――。

五年ほど前、エリーヌが初めてこの物語を耳にしたとき、手垢のついた展開だという以外の感想を持たなかった。愛し合う二人が自分たちの力ではどうにもならない運命に翻弄され、決して結ばれないと知りつつも恋人を深く想い続ける……。これと似たような話なら他にいくらでも存在する。

大抵の娯楽に飽きた宮廷貴族がこの陳腐な物語に惹かれるのには、それ相応の理由があった。

今では宮廷中の貴族たちの知るところとなっているが、この物語は二十年ほど前にこのエクシュール宮殿を舞台として実際に繰り広げられた実話である。それが宮廷人の手により歌劇を思わせるほどに脚色された結果、貴婦人たちの間で定番の話題と化してしまっているのだ。

「――王子は姫だけを想い続け、生涯、妃を娶ることはしませんでした。悲しき恋人たちはヴァルハラでの逢瀬を心に誓い、やがて天へと召されたとき、ついに二人は結ばれるのです……」

物語を聞き終わったとき、エリーヌは大きなため息をこぼした。そんなエリーヌを嘲笑うかのように、再び甲高い声が彼女の耳に突

き刺さる。

「ああ、何度聞いても涙がこぼれてしまいますわ！」

「本当に、なんて悲しいお話でしょう！　地上では決して許されない二人の恋……。たった一人を死ぬまで想い続けるだなんて、そうそうできることではありませんわ」

「ああ、わたくしもそんな風に愛されてみたい！」

「あら、できることなら地上で結ばれたいものですわ」

「わたくしたちにできることといえば、観劇を見て美しい恋を夢見ることぐらいかしら」

彼女たちの上品な笑い声はエリーヌにとって不愉快な響きしか持っていない。それはどうやらミルドレッドも同感のようであった。

「……本当に皆さん、そのお話がお好きでらっしゃるのね」

ミルドレッドは呆れたように三人の少女を見やったが、彼女たちはそれを気にするでもなく、ますます高い声をあたりに響かせた。

彼女たちに限らず、この話を口にする少女たちは興奮からか、少々はしたなくなる。我先にとばかりにそれぞれの想いを口上にのせ、うっとりと夢に浸っていくのだ。

今から二十二年前のこと。

この歌劇を現実世界で演じた三人の役者は、宰相クラヴィーエ公キイル、国王アルト＝ヴィジェ、そしてアズノエルという名のドートリッシュ家の姫であった。

王子と姫の別離により第一幕が下りた後、幕間において姫は舞台を永久に降りたが、現在もなおこの宮殿において第二幕が演じられている。第二幕では姫の代わりにその子供が舞台に登場することとなった。

それがルキアである。

「……そういうわけですからエリーヌ様、ルキア様の心情、お察しくださいませね」

なにが、そういうわけなのだろうと思いつつも、エリーヌは彼女に向かってうなずくしかなかった。

少女たちはなおもおしゃべりを続ける。

「そういえば、あのお話を歌劇の題材にしたいとおっしゃった音楽家がいらっしゃるそうですわ」

「まあ、それは素敵ですわね」

「王子役は歌がお上手であることよりも、見目麗しい方に演じていただきたいわ」

もはやエリーヌは開いた口が塞がらなかった。

王子が生涯妃を娶らないだの、ヴァルハラでの逢瀬だのという件（くだり）に関しては、勝手な妄想も甚だしい。既に故人であるアズノエルに対してならばまだしも、いまだ若々しく壮健であるクラヴィーエ公キイルに失礼極まりないものである。

宮廷人たちの手でどんどん書き足されていった脚本は、既にキイルの耳にも入っていることだろう。それを想像するだけで寒気を覚える。

「エリーヌ様はどう思われます？」

「……それは、さぞや過激な内容になりそうですね」

少女の無邪気な問いかけに、エリーヌはひきつった笑みをもって答えた。

王宮の音楽堂では余興としてよく歌劇が上演されているが、稀に宮廷や社会情勢を風刺した内容のものが選ばれることもある。その手の歌劇は特定の人物や集団を笑い物にする低俗さが売りで、刺激に飢えた宮廷貴族たちはそんな劇を大いに楽しんでいる。しかし、さすがに王族を風刺するような内容を上演するのは止めたほうがいいだろう。あまりに不敬である。

……†……

エリーヌとミルドレッドは三人の浮かれた様子を尻目に、談話室を出ていくことを決めた。

少女たちが恋物語に大輪の花を咲かせたことにより、談話室内にいた他の貴婦人らも彼女たちの周囲に群がり始めていた。あの部屋は毒々しさを覚えるほどの甘ったるさに満ちており、もはや居続けることは限界だった。

離宮の中庭に出たとき、ミルドレッドがため息まじりに告げる。

「政治や軍事の話となると耳を塞いでしまうあの方たちも、かのお話となれば別のようね。……充分、政治にも軍事にも影響のあるお話ですのに」

「まあ、有事を目前としているというのに、あの空間だけは変わらず軽薄なほど平和で、いっそ安心しましたけれどね」

「……エリーヌ様はあのお話のこと、お好きではありませんのね」

「当たり前ではありませんか！」

わかり切ったことを訊くミルドレッドに、思わずエリーヌは語気を強めた。

「……不愉快に思われる気持ちはわかりますけれど、そういった恋愛に憧れているのはわたくしも同じですのよ」

ミルドレッドは伏せていた目を、ふと遠くに馳せる。

「わたくしは夫を愛しておりましたし、夫もわたくしを愛してくれていましたけれど、世間から見れば幸せな結婚であったとはいえませんもの。そんな世間への反抗かしら……。愛のない結婚よりは、周囲に認められなくても、祝福が与えられなくても、心から愛する人と結ばれた自分は幸せだったと思いたいのよ。おかしいでしょう？　こんな年増の未亡人がこんなこと思っているなんて」

ミルドレッドは結婚後二年ほどで著名な画家である夫ダグラスを事故で亡くし、その精神的打撃により、生まれてくるはずだった子まで亡くしている。

そのことを改めて思い出し、エリーヌは声を落とす。

「私があの話を不愉快に思うのは、あれが作り話ではなく実話だからです。甘い夢に浸るには、あまりにも生々しすぎますし、当事者らの耳に入ることを考えれば、とても……」

かつて、貴婦人らが優秀なルキアのことを褒めそやすように“未来の宰相様”などと呼ぶことがあった。その言葉は、暗にクラヴィーエ公キイルとの関係を揶揄しているものに他ならなかった。その真意を理解していた者はどれほどいたのかわからないが、少なくとも言い始めた者はわかった上で、宰相閣下の御子、と呼んでいたのだ。

美辞の裏に隠された毒を知ったとき、エリーヌは胸を衝かれる思いがした。どれほど陰湿なのかと、思わず唇を噛みしめた。

「そうね、的外れなことを言ってしまったわ。……きっとルキア様も、作り話であってくれればと思ってらっしゃるでしょうね。ルキア様がお可哀想なのは、もうずっとあの無責任な噂に晒されてきていることよ。あの方たちにはおわかりになれないでしょうけど」

毒の含んだ言葉であったが、エリーヌはそれを好意的に受け取った。

ルキアの置かれた状況は厳しいものであるが、あんな少女たちにまで「可哀想」などと言われてしまっては、ますます憐れさが増すというものだ。

そもそも「可哀想」などという上から見下ろすような感情はルキアにはふさわしくない。これまでずっと、エリーヌにとってルキアはそんな感情を抱いてはならない相手だった。だからこそエリーヌはルキアに多くの理想を求めてしまうのだ。

陽が雲に隠れ、少し強めの風が吹き始めた。

エリーヌは立ち止まり、風に煽られた髪を押さえる。

「ただ……噂に花を咲かせていられる今は、まだ幸せではないのかとも思うのです。もうあと少ししたら、事態は一変してしまうのかもしれません。そのときルキアはどうするのでしょうか？」

宮廷において語り継がれてきた有名な悲恋の物語。

それは噂好きの貴婦人だけでなく、閣僚、果ては軍人に至るまで、宮廷人たちを夢中にし、よほど鈍感でない限り、知らぬ者はいない。当然、外国の大使を通じて他国の宮廷でも話題にされているのだろうが、この悲恋物語がこれほどまでに注目を集めているのは、決し

て甘やかな刺激とときめきを与えてくれるからではない。
ひとえに、王太子ミカヤの地位に関わるためである。

現王アルト＝ヴィジェは、国内外問わず“病的な女狂い”と揶揄される人物である。
かつて王にはたくさんの愛妾がいた。それは王太子時代にレイリア妃を亡くし、その喪失感を埋めるためだったとされているが、王が六十の年になるまでに抱えた妾の数は、寂しさを言い訳にはできないほどのものだった。一夜の恋を楽しめる貴婦人だけに留めていればよいものを、臣下の妻や、妾の姉妹や母子、さらにはその侍女といった関係にある者にまで無節操に手を出し、その数、ゆうに百は超えていたという。

妾との間に生まれた庶子や私生児の数は相当数に上るが、他国の例に漏れず、ゴースティン王家においても妃以外の産んだ子に王位継承権はない。レイリア妃との間には二人の王女がいるものの、この国では王家の女子相続が認められておらず、長年、筆頭王位継承権者の地位にあったのは王の異母弟クラヴィーエ公キイルであった。
王の外戚に当たるギルベイド家は、いずれハーシェリオン家の流れを汲むキイルに王位が渡ることを苦々しく思っており、なんとか王に世継ぎを儲けてもらわねばと新たな妃候補を勧めていたが、死別したレイリア妃の面影を追い続ける王は頑として受け入れず、優秀で若い弟に政のすべてを委ね、享楽に耽溺する毎日を送っていた。

そんな王が、レイリア妃の死から十八年経って初めて自らの意思で再婚の意思を明らかにした。その相手こそ、当時十七歳のアズノエル・ドートリッシュであった。

アズノエルはドートリッシュ前当主クラウスの従妹で、両親亡き後に本邸へと引き取られ、クラウスが妹同然に接してきた娘である。

ゴースティン王妃となるには、しかるべき家柄であることが唯一絶対の条件とされているが、ドートリッシュはオトゥール王家をはるかに凌ぐ歴史を持ち、王家に匹敵する権勢を誇ってきた一族である。しかし、両家の間にある過去の確執を考慮すれば、いかに名家であろうと、王たっての望みであろうと、廷臣たちは手放しで賛同するわけにはいかなかった。

時を同じくして、王の妾の一人であったアイリーン・オルストンが男の子を産んだ。その子は数多くいる王の子の中で初めて生まれた男児であったが、王位継承権は持ちえないため、この件が宮廷において特別視されることはなかった。

また、オルストン家は下級貴族であり、宮廷の有力貴族とは一切つながりを持たず、いくら王の私生児を有していようとも野心など持ちようもないと判断されていたのだ。

しかし、事態は一転する。

王弟と妃候補の姫の不義密通により……。

多情な王は、自らが人妻に手を出すことが多かったため、妾が誰か他の男に奪われようとも意に介さないところがあった。王はいつまでもレイリア妃だけを愛しており、数多くの妾には一時的な執着すら持っていなかったとされる。

だからもし、アズノエルがそんな妾の一人に過ぎなければ、キイルとアズノエルの関係が問題になることはなかった。元々、キイルとアズノエルの関係は数年来に渡るものであり、それを知らない王がアズノエルに懸想しただけなのである。

不幸なことに、王がアズノエルを妃に望んでいることは既に宮廷

貴族たちの知るところとなっていた。さらにアズノエルがキイルの子を宿していることが発覚したために、二人の関係が国王への反逆に当たると主張する勢力が台頭した。

その結果、キイルは筆頭王位継承権者としての地位を失い、アズノエルは宮廷を追放されるという事態にまで陥った。

この一連の騒動は、ハーシェリオン家の血を王家に残したくなかったギルベイド家の陰謀であると当時から言われていた。

事態の発覚後、ギルベイド家の者たちはアイリーンを妃とし、その子ミカヤに王籍とともに第一位の王位継承権を与えるよう王に迫ったが、そのあまりに強引な主張は多くの廷臣の反発を招いた。また、ハーシェリオン家の力が強く及んでいたルドリア教会からも、国王とアイリーンの婚姻が著しく身分が釣り合わないとして、不許の達し発せられようとしていた。

しかし、教会は最終的にギルベイド家の要求を受け入れた。

このような暴挙がまかり通ったのは、当時主教の地位にあったクラウスに対し、アズノエルの件から多大な圧力がかかり、ハーシェリオン家もまた、キイルの国王に対する不忠をつけ込まれ、強く出ることができなかったからだと言われている。

国王の従弟――ダラス公爵アンジェ＝ヴォーヌス・ディラ・ギルベイドは、キイルの宮廷追放をも主張していたそうだが、王は弟への負い目からそれを許さず、キイルを宰相の座に据え、彼に国政を担わせ続けた。ただし、アズノエルを庇うことまでは叶わず、王はその罪悪感からか、しばらくは一切妾を持つことはなかったという。

宮廷貴族の間では、女狂いの王の気まぐれにより、恋人たちが引き裂かれることになったのだと語られており、キイルとアズノエルに対して同情の声が多数を占めていた。彼らの語る恋物語は脚色の

目立つものではあるが、国王がアズノエルに特別な想いを抱いていたことは明白であり、いまだにキイルが妃を娶らずにいることからも、事実のように扱われてしまっている。

引き裂かれた恋人たちを憐れに思う者たちの間では、アイリーンが王妃となり、本来であれば私生児にすぎなかったミカヤが王太子となったことへの反感は根強く、その余波がまだ残っているのだ。

一連の事態が収束した後、キイルは宰相として王族の務めを果たすようになり、対外的にはキイルがゴースティン王であると認識されるほどの影響力を持つようになっていた。

ハーシェリオン家当主のデデュー公ミシェルが外務大臣の座にあり、法務大臣を除くその他の大臣職もハーシェリオン一門やそれに連なる大貴族、キイルの学友たちで占められており、これまでミカヤは王太子でありながら、その地位にふさわしい扱いを受けてきたとは言い難かった。

だが、いずれ国王が崩御し、ミカヤが王位に就いたとき、そんな宮廷の勢力図が一変するのは間違いない。

王は二十数年前の騒動に辟易し、その後一切の宮廷闘争から身を引いている。争いを避けたいと考えているためか、ミカヤを王太子として扱うことに異存はなく、それを覆す気は毛頭ないようだった。二年前に国王が病に倒れたことにより、ミカヤの即位に現実味が増した。そんな中で宮廷貴族たちは王太子派の勢いに恐々としており、依然としてキイルへの敬意と同情を抱きつつも、自らの行く末を憂えるあまり、日和見的になっている。

シベリー軍の討伐にしても、多くの宮廷貴族たちは戦争そのものに興味はないのだが、徐々に変わりつつある変化の波に逆らわぬようミカヤに賛同する者が目立つ。

たとえば、宰相も大臣も出席しなかった本日の軍議……。
ミカヤが発言するたびに漂う張り詰めた空気が、現在の状況を如実に表していた。

揺れる心

エリーヌとミルドレッドは、風とともに離宮の庭園内を流されていた。

やや西から照らされる陽光に、エリーヌは目を細める。あたりは夕暮れ前の穏やかな空気に包まれており、目を伏せたエリーヌは思わず眠りに誘われそうになった。

「あら……」

ふと歩みを止めたミルドレッドが呟く。

その視線を追ったエリーヌは小さく息を吸い込んだ。白亜のガゼボの石壇には、柱に寄りかかるようにして座っている黒衣の男がいた。

「ご両親の悲恋を生まれながらに背負ってらっしゃる方よ」

「レイヴァン夫人……」

この夫人は生真面目ではあるものの、たまに今のような冗談めいた言葉をさらりと口にする。

エリーヌの呆れ声を聞き流すようにミルドレッドは微笑み、ここで失礼いたしますと告げ、優雅にお辞儀をした。本宮のほうへと歩いて行くミルドレッドの後姿を眺めながら、こういった気の遣われ方をするのは苦手だとエリーヌは思った。

青々とした芝を踏みしめ、ガゼボの近くへと足を進める。

「ルキア」

寝入っているのか、まったく反応がなかった。

エリーヌはため息を吐きながら、ルキアの珍しい姿をじっと見下ろす。

ルキアはいつも一点の汚れもない白い祭服をまとっているが、今日は黒い礼服に身を包み、首元はモスリン製のクラヴァットで飾っている。身をひるがえすたびに背にさらさらと流れる赤い髪は黒絹のリボンで結わえられていた。

幼いころのルキアの髪色は、今とはだいぶ違った。金髪に赤毛を混ぜたような、とても稀有な色をしていて、エリーヌはいつもそれを羨ましく思ったものだった。

年々赤みが増していった今では、ミカヤとは色調が違うものの、赤毛と呼べるような色合いとなっている。ルキアには、そんな赤い髪がよく似合っていた。

魔道を扱う者は、星宮の生まれや相性により、修得できる魔法の属性が異なるという。風のない湖面のように穏やかな気性のルキアが扱うのは炎の属性魔法である。エリーヌが初めてそれを知ったとき、ルキアにはそぐわないという印象を抱いたが、今となってはその違和感もない。

たとえば、時折見せる鋭い顔つき。彼はいつも静かな炎を心にたたえているのだと知る。

「ルキア」

もう一度名前を呼び、ルキアの肩を揺らした。

やがて彼は薄く緑眼を開き、エリーヌを力なく見つめる。

「軍議に出ておられなかったようですが、こんなところで寝ていたのですか？」

どこにいたのかを知りつつも、あえてエリーヌが訊ねると、ルキアはわずかに首を振った。

「いや、あのときは陛下のもとに伺っていたのだ」

ルキアが公式の謁見ではなく、私的に国王に呼ばれるのはよくあることだった。

昨年、宮廷司祭長であるマーシェル主教が病により宮廷を一時下がってからは、ルキアが司祭長の役割を代行するようになったが、彼が王に召されるのは司祭としてではない。それは宮廷貴族ならば誰でも知っている。

ルキアは緩慢に立ち上がった。

少し乱れていた着衣を正しながら、銀の懐中時計を取り出し、時間を確認する。ルキアの手の動きで長上着が揺られるたび、左手の中にある剣がちらちらと姿を見せる。その剣は、なにやら細かい装飾がふんだんに施されているものだった

剣を手にしているルキアの姿を、エリーヌは懐かしく思う。

ルキアは、銃は一切扱うことはできないが、剣の腕は本当に優れていた。幼いころから一流の教師ばかりに剣を習っていたが、教師たちは口々にルキアを褒め称えたものだった。

また、ほんの数年前までミカヤとルキアの剣術指南をしていたのは、現近衛連隊長――エリーヌの上官に当たる人物であるが、彼はふとした瞬間にルキアのことを懐かしげに語った。それらの賛辞は

決してお世辞ではないとエリーヌは身をもって理解している。これまで数え切れないほどの勝負を挑んでも、エリーヌがルキアに勝てたことは一度としてなかった。

「帯剣している司祭など初めて見ました」

エリーヌは意識的に不敵な笑みを作る。

「どうせなら、久々に剣の相手をお願いしたいものです」

「司祭に剣の手ほどきを願い出る近衛士官と会うのは初めてだよ、グレンヴィル少尉」

嫌味などまったく意に介さぬというように、ルキアはふっと微笑む。

「すまないが、私はこれからミカヤ殿下のもとに参らねばならないから、あなたの剣の相手をしている時間はない。……出撃までの間であれば、いつでも屋敷に来られるがよい。相手になろう」

そう言い残し、ルキアはエリーヌの横を通り抜けた。そのときにうかがえたルキアの表情は、なんの色も持っていなかった。白でも黒ではなく、かといって透明でもない。鈍い闇色とでもいえばいいのだろうか、そんな表情をしていた。

――昔はもっと社交的で朗らかな方でしたのに、ここ何年かはいつも憂いた顔をしていらっしゃるもの。

聞き流していたはずの言葉がエリーヌの頭を過ぎる。

「ルキア！」

思わず呼びかけると、振り返ったルキアは怪訝そうに眉をひそめた。

「あ、その……今日の軍議で我々近衛隊もキウロス要塞まで従軍することになりました。ミカヤ殿下がそこで作戦指揮を執られるから……」

「そうか」

一言だけ返し、眉一つ動かすこともなく、ルキアはまた身をひるがえそうとした。

「……あなたにとっては、関係のないことでしたね」

エリーヌが落胆まじりに呟いた数秒ののち、立ち止まったルキアは弾かれたように笑い出した。

突然のことに呆気にとられたエリーヌは、呆然としたまま、身をよじって笑うルキアを見つめていた。

ややあって、顔を上げたルキアは、懐かしい笑顔をエリーヌに向ける。

「あなたは昔からそうだったな」

「なんの話です？」

「私が手を差し出せば、その手を払いのけ、私が背を向ければ、すぐにその背を追いかけてくる」

「なっ……」

「ああ、そういえばこんなこともあった。数式のわからぬところを教えてやれば、そんなものはわかっていたと言い、欲しそうに見ていた菓子をやろうとすれば、いらぬ、子供扱いするなと怒り、剣術にしても――」

「もういい！」

エリーヌが怒鳴ると、再びルキアは笑い始める。

「あなたは……私を馬鹿にしているのですか？」

「いいや、昔を懐かしんでいるだけだ。気を悪くしないでくれ」

目の端の涙を拭いながら、ルキアは切れ切れに言葉を紡ぐ。

「エリーヌ、私はあなたの心配はしていない。ミカヤ殿下のおられるところは戦場とはいえもっとも安全なところだ。あなたにとっては初めて従軍する戦になるわけだから、それでも良い経験になるだろうとは思うが」

「あなたにとっても初陣でしょう？」

「そうだな、私は初めて人を殺めることになるだろう」

「余裕たっぷりのようですが、その覚悟は？」

「……覚悟など、あの書状を灰にしたとき既にできていたさ」

そのときルキアがエリーヌに向けたのは、笑った顔ではなく、歪んだ顔といったほうが正しいものだった。吹っ切れた、というよりも、投げやりになっているかのようにさえエリーヌには思えた。

「あなたにあえて告げることでもないが……この戦、我々に負けはありえない。なにがあろうと我々の勝利は約束されている。問題は、どれほどの戦力を投入し、犠牲を払うことになるかというだけのことだろう」

「……それは専ら、あなたたち高位司祭の力に左右されるものでしょう？　そもそも、魔道の力を用いることで、この戦が決行されるようなものですし」

エリーヌはルキアから視線をそらし、そう言い捨てた。
するとルキアはふっと息を吐く。

「あなたはあなたのなすべきことを、私は私のなすべきことをする……。それだけのことだろう、エリーヌ・グレンヴィル？」

我々のなすべきこと、つまり、自分たちの歩んでいく道は違うのだとルキアは言いたげだった。
ルキアは事あるごとにこのような物言いをする。それがエリーヌを苛立たせる。共に同じ道を歩まんとしていたころなど、ルキアはもう忘れてしまったかのようだった。

「あなたは……本当に、嫌な男だ」

エリーヌがそう呟いたが、ルキアは気に留める様子もなく、離宮へと続く石畳の上を進んでいった。エリーヌは彼の姿が消えるまで、その後ろ姿を見つめていた。

……†……

ルキアが本宮と離宮をつなぐ柱廊に差しかかったとき、前方を歩く長身の軍人の姿が目に入った。

「グレンヴィル伯爵、お久しぶりです」

ルキアは、どこか強張った表情のアシュレイに声をかけた。ルキアの礼装姿を珍しく思ったのか、アシュレイは瞠目したのち、端正な顔をほころばせた。

「最後にお会いしたのは、前回の定例軍議が開かれたときであっただろうか。お変わりなくて安心いたした」

「アシュレイ様が王宮に来られるときぐらいしかお会いする機会がございませんからね。アシュレイ様こそ、ご壮健のようでなによりです」

「そういえば、あなたは先ほどの特別軍議には……」

アシュレイの言わんとしたことを汲み取り、ルキアは苦笑を返す。

「ええ、欠席しておりました。今からミカヤ殿下のもとへ伺うところです」

「今日の特別軍議は形式的なものに過ぎぬ。先ほどまで准将以上の者を集めて、新たな西方軍司令官のもとで作戦の調整が行われていたのだ。ミカヤ殿下は独自に動かれているようだが」

“赤の間”のような大会議場で開かれる会議全般に共通しているが、ああいった場では決して物事の中核は明かされない。あくまで表向きの現状を告げるに留まり、核心部には触れない。仮に触れたとしても、それは嘘で覆われている。

ミカヤが独自に作戦を推し進めているのは、王弟派の士官が多数を占める西方軍に信用を置いていないためである。王弟派の貴族は、ミカヤが失策を犯すことを望んでいることだろう。宰相や大臣からの協力を得られないともなれば、まさに足の引っ張り合いでしかない。

「新しい司令官殿というのは……たしかグラッド将軍でしたか。有

能な方であるとお聞きしております」
「ああ、グラッドはこれまでその能力に応じた役職に恵まれずにいた者だ。ミカヤ殿下は人を見る目はたしかであると思う」

ケールセン・グラッドは、二年前にミカヤから直々に取り立てられ、わずかの間に少佐から一気に准将まで登りつめ、西方軍司令官となったことで少将に昇格した。グラッドは、長年ギルベイド家に仕えてきた軍人の家系の出身であることもあり、今や王太子派の軍人の中ではもっとも強い影響力を有するとされる人物である。

一方、アシュレイは宮廷の二大派閥のいずれにも属していない。アシュレイ自身はどちらかといえばキイル寄りの考えを有しているが、ミカヤに敵意を抱いているわけではない。そうでなければ、エリーヌを王太子付きになどしなかっただろう。

グレンヴィル家は代々王家に忠実な臣下であったが、王弟と王太子の対立に関しては中立な立場を取らざるをえない理由がある。
アシュレイの二十代半ばで夭折した兄エイルバードは、アルト＝ヴィジェ王の第二王女カレニーナと結婚していた。カレニーナは、叔父であるキイルとは三つ年上の姪という関係にあり、姉弟のように育ったために心情的には非常にキイル寄りで、異母弟であるミカヤに対しては辛辣な態度を取り続けている。

義姉と王太子の板挟みになっているアシュレイの気苦労は、宮廷闘争から完全に引いてしまっているルキアよりもはるかに深刻である。昨今、現役軍人でありながらアシュレイを陸軍大臣に推す声も上がっているが、彼はそれを頑なに固辞している。アシュレイが北方軍司令官の地位にこだわるのは、定例軍議の際を除いて王宮に赴く必要がないことと、王弟派が多数を占める西方軍とは違い、北方軍には中立姿勢を保っている士官が多いためだろう。

「よもや、このようなことになろうとはな……」

アシュレイは苦々しく呟き、ルキアを見据える。

「私も北方軍を率いて出撃することになるが、ルキア殿が所属する部隊と直接関わることはないだろう。……司祭らが危険に晒される可能性は低いようだが、前線でその力が求められることに変わりはない。特にあなた方、四大司祭の力は作戦の中でも重要な役割が与えられることだろう」

刻々と出撃のときは迫ってきている。

ルキアの心は今はまだ平静であったが、実際に戦場へ出たとき、自身がどのような心持ちになるのか予想もできなかった。

それでも彼は薄く笑む。

「ええ、承知しております」

アシュレイがわずかに眉を寄せたのがわかったが、ルキアは一礼ののち身をひるがえした。まっすぐに柱廊を進んでいき、離宮へと足を踏み入れた。

揺れる心（後書き）

【注釈】

ガゼボ……西洋風あずまや。休憩用や装飾用に庭に置かれる構造物。（Ｗｉｋｉｐｅｄｉａより）

好奇心

特別軍議の後、西方軍及び北方軍の上級将校と作戦をつめていたグラッドは、ある人物より受け取った書を携え、王太子の私室へと向かった。

グラッドがこの部屋に入るのはまだ数えるほどしかないが、そのたびに圧倒されている自分に気づく。

壁に飾られた絵画は、賢王と称えられた六代前の国王ラグナ＝ヴィジェの肖像で、王は黒い甲冑を身につけ、黒馬に跨り、兵を指揮するように剣を高く掲げている。

ラグナ＝ヴィジェの肖像画は多数遺されており、もっとも有名なものは緋色の外套を身につけた戴冠時のもので、本宮の大広間に飾られているが、この部屋に飾られているのは王の即位前に起こった戦争の様子を描いたものである。ミカヤがあえてこの絵を自室に飾った気概を、グラッドは好ましく思った。

ここ数十年、室内装飾は女性的で優美な意匠が流行っており、アイオーン宮も壁紙や調度品の多くが改装されているが、王太子の私室は、立ち並ぶ豪奢な調度品、壁に掛けられた剣や斧など、床から天井に至るまで威圧感を与える前時代的な意匠で埋め尽くされている。

ミカヤは華美なものを好まない。

軟弱で軽薄なものを嫌う彼の人柄は、臣下の登用についても表れており、貴族という下限を満たす者ならば家柄にこだわることがな

かった。

この国の貴族は大きく分けて二つの階級がある。

一つは“大貴族”であり、ギルベイドやハーシェリオンという王家との縁が深い一族を筆頭に、王から叙爵されたグレンヴィル伯爵家やラッセル伯爵家などのことを指す。ここには侯爵位とともに広大な領地が授けられたドートリッシュやサルファも含まれる。

そしてもう一つは大貴族以外――貴族全体の九割を占める“下級貴族”である。

ただし、下級貴族と一括りにされる者たちも様々で、宮廷への出入りを許されている者とそうでない者、官職に就いている者といない者……など細かく分けていけば切りがない。貴族とは名ばかりの、平民と大差ないような生活を送る者もおり、ミカヤの外戚であるオルストン家はアイリーンが王妃となったときに公爵位が与えられたが、今からニ十数年前は、下級貴族の中でもとりわけ下位に当たるような家柄であった。

ミカヤが国政においてその権力を振るうようになって数年、これまで大貴族によりほぼ独占されてきた官職に下級貴族が混じり始めている。ミカヤは自らの側近にはギルベイド家の者を重用する傾向があるが、有能であれば家柄は問わずに起用する側面もある。そのため、大貴族たちの間ではミカヤへの批判が燻っており、その際、母親が下級貴族出身であることを引き合いに出されることが多い。

家柄どころか、貴賤にこだわらないとも言える官職の任免は、ミカヤの強い劣等感の現れだと揶揄する者もいた。しかし、ミカヤが大貴族を蔑視しているのは、王族に媚びへつらい官位をねだる様に辟易しているからでもあるのだろう。

グラッドは、ほんの数年前まで、大貴族出身の上官のもとで軍役

を勤め上げてきた。縁故採用の上官たちは、軍人としてよりも宮廷人として生きることに精を出し、夜会や観劇に明け暮れてばかりであった。グラッドはすべての大貴族を論う気はないが、そんな者たちを多く見てきたからこそ、彼らを蔑視したくなる気持ちは身に染みてわかっていた。

「グラッドか、入れ」

その声を受けてグラッドが奥の間へと入室したとき、普段は閉ざされているはずの隠し扉から、一人の女性が走り去った。その衣装から察するに、宮廷への出入りが許された貴族の娘と思われた。

王と比較すれば微々たるものではあるが、ミカヤにも父王と同様の悪癖の兆候が見られる。妃も娶らぬうちに妾を持つなど好ましいことではないが、王の妾遊びの惨状を知っている者は、この程度のことでミカヤに諫言などしない。幼いころからミカヤを支えてきたダラス公爵ですら、この件に関してはミカヤの好きにさせている。

グラッドは視線を前方に戻す。

天蓋から流れ落ちる天鵞絨（ビロード）の奥、白い横顔と無造作に投げ出された片腕をうかがい見ることができた。

グラッドは構うことなくミカヤの近くへと歩み寄っていく。その途中、くぐもった声が投げかけられた。

「グラッド、奴らの動きはどうだ？」

「はっ……。開戦を避けるよう秘密裏にファジールへ打診しておるようです。しかし、ケーニヒスが参戦するとなれば、当然ファジールはゴースティンに対し兵を向けるでしょう。あのジョアン大公が

その機会を見逃すとは思えません。……さぞ、王弟殿下は苦々しく思っておいででしょう」

グラッドは跪き、寝台の上のミカヤに書を差し出した。

「こちらが、陸軍省が秘匿した西方軍の第五連隊に関する報告書にございます」

書を受け取ったミカヤは、一旦は広げたものの、枕の脇へ乱暴に置く。

「端的に説明しろ」

「これまで幾度か報告を申し上げておりました通り、シベリー紛争の端緒となった第五連隊奇襲事件について、マーテル・バルフォアの行った報告はまったくの虚偽に基づくものでございました。この報告書は、その確たる証拠となりましょう」

前西方軍司令官であったマーテル・バルフォアの報告は、以下のようなものであった。

アパス州東の国境地帯において、シベリー兵がゴースティン側へと越境したため威嚇射撃を行ったが、それでもなおシベリーの騎兵が攻撃を仕掛けてきたので、やむをえず第五連隊が応戦に当たることとなった。

一先ず、シベリー兵を撤退させることに成功し、敗走する兵に向けて追撃を行っていたが、ほどなくしてシベリーの別動隊による再度の奇襲があり、連隊長マティアス・バルフォア大佐を含む三人が重傷を負い、尉官が二人死亡する事態となった。

これを重く見たバルフォアは、西方軍の主力を率いてアパス州の駐屯地まで攻め入り、その紛争を鎮圧させた――というものである。

しかし、事実はまるで異なる。

「敗走するシベリー兵に対する追撃ですが、第五連隊がアパス州の南西部にまで踏み込んで行われたものでございました。これはケーニヒスだけでなく、ファジールとの協定にも抵触するものであり、軍務規定違反も甚だしい行為です。また、第五連隊に奇襲をかけたシベリーの別動隊は、ケーニヒスではなくファジールに所属するものであったようで、その件の処理に関しまして、ファジールと我が国の間で密約が交わされた模様です。そして、発端となった交戦についてですが、先制攻撃を行ったのはどうやら第五連隊のほうであったと……。これでは、シベリー総督との講和が決裂したのは無理からぬことでございます。いかにゴースティンがしらを切ろうと、ケーニヒスに責を帰することはできかねますから、先方の譲歩を引き出すことをゴースティンは早々に諦めたのでしょう」

まず、交戦地とされているシベリー自治国のアパス州であるが、ここはゴースティンとケーニヒスの国境に面していると同時に、ファジールの国境とも面している。つまり、アパス州の東部はケーニヒスの支配領域であるが、その南西部はファジールの支配領域となる。

これはファジール独立によって起こった弊害の一つで、現在のシベリー自治国は、アパス州の他にルドン、ジュダの三州がファジールとゴースティンの国境を分かつ形で存在している。その三つの州は、表向きこそケーニヒスに従属しているが、実質的にはファジールの及ぼす力のほうが強い。

また、公にはされていないが、シベリーを軍事利用しているのは宗主国であるケーニヒスだけではない。ファジールは傭兵としてシベリーを雇い、彼らにケーニヒス及びゴースティンの偵察を行わせている。第五連隊と衝突したのは、まさにその偵察部隊であったの

だ。

交戦時、第五連隊の連隊長を務めていたのはバルフォア将軍の次男マティアスであったが、越境してまで追撃を行った結果、マティアス大佐を含む三人が重傷を負い、尉官が二人死亡している。貴族の将校に死傷者が出たためにシベリー討伐を望む声が一時的に高まったが、半月が経つころ、その勢いは急速に沈静化した。

その半月の間に王弟派の外務官とファジールとの間で交渉が行われ、互いの違反行為を不問に付すための密約が交わされたのだろう。このことがミカヤの耳に入ったのは、今から一か月ほど前のことになる。

ミカヤが額に手を当てたまま物憂げに問う。

「ファジールとの密約、それにキイルが関わっている証拠はあるのか？」

グラッドは一瞬言葉に詰まったが、すぐに薄笑みを浮かべ、ゆったりと言葉を紡ぐ。

「証拠はございませんが、それを挙げる必要はないかと存じます。バルフォア父子の起こした不祥事は、外務大臣と陸軍大臣だけで処理し切るのは厳しいもの……。王弟殿下はザイード大公家と親交が深いと聞き及んでおります。殿下が口添えされたからこそ事態は早期に決したのだと、誰もが考えることでしょう」

「それもそうだな」

ミカヤは冷笑し、気だるげに呟いた。

バルフォア伯爵家はハーシェリオン家に連なる名家であるが、当主のマーテル及びその息子マティアスは家名にものを言わせて分不

相応の地位を手に入れた。
マーテル・バルフォアは陸軍大臣ジーク・ラッセル直属の部下ではあるものの、キイルの腹心とされる大蔵大臣ロベルト・ネイゲル男爵ら他の廷臣らと比べるべくもなく、キイルからの信頼はない。それにもかかわらず、ラッセル家やネイゲル家よりもはるかに良い家柄であることを鼻にかけ、主君にすら煙たがられている始末である。

「所詮、あれは将軍の器にはない男でございます。堕落し切ったバルフォア家の人間など、ハーシェリオンの者たちも扱いに窮しておるでしょう」
「それに比べて、メイローズは本当に役に立つ女だ」

ミカヤは二本の指で書の一枚をつまみ上げ、文末に記された署名に目をやる。

「父君のネイゲル男爵を裏切ることになっても、殿下に尽くされたいのでしょう。それほどまでに慕っておられるのでは？」
「グラッド、お前にしてはくだらんことを口にする。まるでルキアのようだ」
「セヴァンス侯、でございますか……」

グラッドはわずかに眉をひそめた。

セヴァンス侯爵ルキア＝ベルネスは、宮廷内の派閥に属さず、ただ国王にのみ尽くしており、その立場は完全に中立である。しかし宮廷におけるルキアの挙動は、中立ではなく何事にも無関心と表現するのが適切であった。彼の慇懃にすぎる無関心は徹底されており、却って無礼にすら感じられるものがあった。先ほども、火急でもない王の呼出に応じて軍議を欠席するなど、到底理解の及ばない振舞

いである。

グラッドは大尉となった十年前より宮廷を出入りしていたため、少年時代のルキアを見知っている。あの当時のルキアを知る者からすれば、ドートリッシュを継いでからの彼はまさに異様としか言い表す言葉がなかった。子供のころより物静かで沈着ではあったものの、昨今ではすべてを諦めたような佇まいをしている。聖職者には恬淡とした者が多いとはいえ、宮廷にそのような人間がいた試しはない。

だからこそ、グラッドは警戒していた。

「差し出がましいこととは存じますが、セヴァンス侯は一体なにを考えておられるのでしょう？　ミカヤ殿下にそむくようなことはなさらないと思いますが、真に信用のおける者と言えるのでしょうか？　あの者は王弟殿下の御子ではありませんか」

「父上の子かもしれんぞ」

起き上がったミカヤは愉悦を含ませた笑い声を立てた。

「そのようなことを……」

グラッドは主君の軽口をたしなめようとしたが、ミカヤは悪びれる様子もなく、グラッドを牽制するように見下ろすだけだった。

宮廷への出入りが許されている貴族の大半が、ルキアがキイルの子であると知っているが、それは噂の中で語られているもので、真偽については不明である。

ただ、キイルの不忠を契機に彼を廃位に追い込んだギルベイド家にとっては、キイルの子であるとするほうが都合が良く、また、キイルの醜聞を公にしたくないハーシェリオン家にとっては、クラウ

スの子であるとするほうが都合が良かった。
そんな両家の思惑が絡み合った結果が、今現在のルキア・ドートリッシュの立場なのである。

「ふっ……噂をすれば」

ミカヤの鼻を鳴らすような声に、グラッドは振り返り、ミカヤの視線を辿った。そして茶色の瞳を少し見開く。
ルキアの姿を目にした者は、妙な違和感を覚えることが多い。彼の容貌は、いくつかの面影が絶妙に絡み合っており、それらが代わる代わる浮かび上がってくるかに思えるのだ。

五百年続くオトゥール王家の人間は血が濃く、キイルとミカヤも、皮肉なほどその容貌は似ている。一方、ドートリッシュ家は一千年以上という長い歴史を持ち、血族婚を繰り返してきたためか、本家の者も分家の者も似通った容貌であるという。
王家とドートリッシュ家双方の血を併せ持つルキアは、髪の色こそ王家直系の者に近い赤い色をしているが、顔立ちは母アズノエルそのものであると評されることが多い。ただし、養父であるクラウスとも比較的近い血縁関係にあるため、似ていないということもなかった。
実母であるアズノエルは二十年以上前に王都を去っているが、その容貌を記憶している者は今なお多い。長い亜麻色の髪に翡翠の瞳を持ち、その微笑みは、宗教画の中に描かれている天使のようであったと、誰もが一様に口にする。
その宗教画というのはアルゼ教典の一節を描いたもので、本宮と離宮とをつなぐ階段に飾られている。病床につく以前の王が、アズノエルの姿を偲ぶようにその絵をよく眺めていたという。

「ミカヤ殿下、お呼びと伺いましたが……」

続きの間からルキアの声が響く。
ミカヤは無造作に投げ置かれていた黒いローブだけを羽織り、裸足のまま歩を進め、窓際に置かれたカウチに身体を沈めた。ミカヤは宮廷の儀礼やしきたりに無頓着で、煩わしい慣例などは積極的に廃止せんとしている節もあったが、このような姿を臣下の前で堂々と晒すことはなかった。

グラッドがミカヤの脇に立つと、ルキアはまっすぐにそこへ向かう。
途中、彼は分厚いカーテンに遮られた寝台のほうをちらと見やった。そののち、視線はわずかに落とされたが、表情はまったく変えなかった。

「珍しい姿をしているな、ルキア」

跪いたルキアに、ミカヤは興をそそられたような声を向けた。
ルキアは公式礼拝の場では白い祭服を、それ以外の場では黒い祭服を着用しているが、今はそのいずれでもない。それどころかサーベルまで手にしている。

「どうした？　久々に私の剣の相手になってくれるのか？」
「いえ、この剣はそういうつもりのものでは……」

ルキアの脇には銀細工の施された剣が置かれている。
その柄にはめられた紅玉には王家の紋章が彫られており、そのような剣を持つことができるのは王族に限られている。ミカヤはそれに気づいていないのか、それ以上のことをルキアに問わなかった。

ミカヤは脚を組みながら、短く息を吐く。

「先ほどの軍議、お前は出ていなかっただろう？　聞けば、離宮に向かおうとしていたところを、いきなり父上の侍従らによって連れ戻されたらしいな。まったく、父上の我儘には困ったものだ」
「近ごろ陛下は、とてもお気が弱くなられているようでして……」
「その話はもういい。軍議の内容は文書で送らせるから目を通しておけ。……それより、お前に厳命しておかねばならないことがある」
ミカヤは波打つ髪を煩わしげにかき上げ、冷たく言い放つ。
「司祭に犠牲を出すな」
「殿下……？」
ルキアは困惑の渦の中から、なんとか言葉を選び出そうとしていた。ミカヤは瞳を瞬かせるルキアを見返し、教会の総議長から聞いたであろう話を始める。
「〈神の力（レガロ）〉と言ったか？　四大司祭と呼ばれる者は特別に精霊の加護を受けているとされているが、その加護とやらの正体はずいぶんと強大な魔法らしいな。ルドリア教会は一枚岩ではないと思っていたが、よもや、そのような力を隠し持っていたとまでは思っていなかった」
ルキアはミカヤの出方を探るように黙したままでいた。
いかに王家に従順に見えても、所詮はルドリア教会の権力者であるのだとグラッドは推測する。高位司祭にとって、これは外部に漏れてはならない話のはずである。教会内の不協和音は王家にとって好ましいことだとしても、この戦にまで持ちこまれるようなことになっては少々面倒であった。

「私は実際に＞神の力＜とやらを目にしたことはないが、王家に秘匿せねばならぬほどの強大な力は、さぞ戦闘で役に立ってくれることだろう。だが、それほどの力を有するお前たちであっても、生身の人間であることに変わりはないのだろう？　他の高位司祭ならばなおのことであろうな」

ミカヤは軽く顎を上げながら目線を落とす。

「要は、高位司祭に犠牲が出るのは避けたいのだ。いまだ、司祭の徴兵を命じたことによる私への不満は燻っている。そんな中で司祭に死者でも出れば、司祭の特権を享受している貴族どもがここぞとばかりに非難を向けてくるだろう。シベリー討伐の流れが宮廷で強まったのも、貴族の将校に死傷者が出たことがきっかけだった。そうなっては面倒だからな。……元々、シベリーなどお前たちが前線で戦わずとも勝てる相手であり、司祭の投入をせずともゴースティン軍が敗れるなど万が一にもありはしない。それだけの戦力を初めから用意している。弱腰の宰相や大臣を黙らせるためには、さらなる戦力の存在が必要であっただけだ。所詮、お前たちは開戦に踏み切るための口実に過ぎぬ。その口実に死なれては困る。お前たちはその力を敵軍に知らしめることができたなら、後方に下がっていればよい。軍人と同じ働きなどお前たちに期待してはいない」

ミカヤの発言の最中、グラッドは徐々に眉を寄せていった。

シベリーのみが相手ならば、司祭を徴兵せずとも西方軍だけで事足りる。しかし、ケーニヒスやファジールと戦になることを考慮すれば、戦力を温存しておく必要があり、司祭らの力を前提として戦力の編成が行われている。彼らが戦わずともよいというのは、現在、詳細を詰めている作戦と矛盾が生じかねないものであった。

グラッドが憮然として二人の様子をうかがっていると、ルキアは

穏やかに笑み、深く頭を下げた。

「事情は理解いたしました。高位司祭らに犠牲者が出ぬよう、最善に努めます」

ルキアは恭しくそう告げた。

その様子を微笑ましげに見つめていたミカヤは、笑声まじりに呟く。

「私も前線に出てみたいものだな」

「そのようなお戯れを……」

「別にふざけてなどいない。お前の受け継いだ＞神の力＜とやらを見てみたいだけだ」

ルキアは短く息を吐き、憂いを秘めた瞳でミカヤを見上げる。

「幼いころ、戯れにお見せしましたでしょう？　それと変わらぬものでございます」

「ふん、あの程度のものなのか？　期待をしていないとは言ったが、あまりに役に立たんようでは困るぞ。それでは初期の戦力配分について再考せねばならなくなるからな」

「……いえ、魔道の力というものは＞念（ゼンゼ）＜の込め方によってその性質が変異するものなのです。つまり、傷を癒す場合、敵を殲滅せんとする場合、すべては司祭や魔道士の意思次第です。ですから、その……あのころお見せしたものとは性質も威力もまったく異なるかと思います。＞神の力＜に至りましては、なおのことでして……。申し訳ございません、嘘を申しました」

ルキアが所々引っかかりながら言葉を紡いでいると、ミカヤは肩を震わせながら哄笑を響かせる。

「ルキア、お前の気鬱は不要のものだ。よほどのことがないかぎり、私が本営であるキウロス要塞を離れることはない。当然、直属の近衛は要塞に留まり、戦場に出ていくこともないだろう」

そう告げるミカヤからは自然な笑みがこぼれていた。普段決して見ることのできないミカヤの表情により、グラッドは自身の抱いた気鬱は不要のものであると悟った。

ここ数年、ルキアは本宮の礼拝堂と王の私室を行き来するばかりで、アイオーン宮に寄りつかなくなり、王宮でルキアとミカヤが親しげにするところを目にすることはなくなっていた。誰の目にも、彼らの仲は拗れたかに見えたが、目に見えるものがすべてではなかったということだ。

そもそも、何事もなければ、ルキアはミカヤの忠実なる臣下となっていたに違いないのだ。さながら、王弟キイルに対するラッセル伯爵、ネイゲル男爵らのように。

話が終わったため、ルキアは剣を持って立ち上がり、ミカヤに向かって一礼をする。

「そういえば……」

ミカヤは深くもたれていた背を起こし、ルキアの持つ剣を指差す。

「その剣、見覚えがある。たしか父上のものだろう?」

今やっと気づいたという言い方ではあったが、おそらくミカヤは初めからそのことに気づいていたのだろう。

ルキアは特に驚いた素振りも見せず、淡々と答える。

「はい。先ほど、陛下より賜りました」
「そのようなものを易々とお前に与えることがなにを意味するか、あの方はなにも考えておいでではないのだろうな」
「陛下のお考えは、わたくしにはわかりかねます。それに、わたくしが知る必要もないことでしょう。それでは殿下、これにて失礼を……」

ルキアは優雅な所作で身をひるがえした。
その姿をしばし見つめていたミカヤは、側にいるグラッドの腕に手をかけながら立ち上がった。

端正な横顔が、微笑に歪む。
グラッドが腰のあたりに違和感を覚えたのも束の間、ミカヤはグラッドから剣を奪い、その懐からすり抜けていった。

グラッドはその場から一歩も動かなかった。グラッドがミカヤを止めようとしなかったのは、ミカヤが絶対的忠誠を誓う主君であるからではなく、ただ、その先を見届けたいという一個人としての好奇心からであった。
引き寄せられるように、ミカヤの背を目で追い、その先を歩くルキアの姿をも同時に捉える。

背後から迫り来る気配を感じ取ったルキアは、すぐさま振り返り、大きく見開いた目でミカヤを見上げる。
その後のルキアの動きを、グラッドは正確に捉えることは叶わなかった。次の瞬間には、剣を両の手で高く構えるルキアの姿があった。

鈍い音があたりに響く。

降り下ろされたミカヤの刃は、ルキアの剣の鍔で辛くも受け止められていた。

ルキアに剣を構えさせたのは、幼いころからの訓練の賜物か、それとも人としての本能か。

そのいずれにしても、ルキアの行動にミカヤは満足げだった。

当のルキアは、そんな自分の行動に困惑を隠せず、何度も瞬きを繰り返しながら視線をミカヤから外した。

刃を受け止めた手腕に対し、ミカヤは賛辞ではなく警告を与える。

「少しは剣の腕も磨いておいたほうがいいのではないか？　戦場ではなにが起こるかわからん。とっさに斬りかかられたとき、魔法を繰り出すよりも剣を抜くほうが有益だろう？」

ミカヤは剣を下ろし、口角を上げた。

「父上がお前にその剣を与えたのは、そのように考えられてのことだろう。あの方は思ったままを口にし、思ったままの行動をお取りになる。為政者としてはあまりに不適であられるが、私はあの方のそういった部分だけは好ましく思っている。宮廷に、そのような人間は他におらぬからな」

ルキアは剣を持ち直し、ミカヤに向かって再び深く頭を下げた。

そして、なにも口にすることなく部屋を後にしていった。

ルキアの退室を見届けたミカヤは、抜き身の剣をグラッドに押しつけ、再びカウチに腰を下ろす。その横顔に、グラッドは問いを投げかけた。

「殿下、もしやセヴァンス侯に王籍をお与えになろうとお考えなのですか？」
「いけないか？」
それになんの問題があるのかとばかりに、ミカヤは嘲笑混じりの声で答えた。
「ですが、それではハーシェリオン家の者たちを増長させかねないのでは？」
「案ずるな。私はあれをハーシェリオンの手駒とするつもりはない」
ミカヤはそう言い放ち、肘掛けにだらりと身をあずけた。
ギルベイド家とハーシェリオン家……。
宮廷を二分するこの二つの権門は、ともにオトゥールに先立って興った王朝の末裔である。一度その権勢は衰え、地方の一貴族として地位に留まっていたが、この二百年ほどの間に小国の王族を取り込み、なおかつ両家ともに先王の妃を輩出したために、オトゥール王家に対し強い影響力を及ぼすようにもなっている。現在の王弟派・王太子派という宮廷闘争は、厳密に言えば、四十年以上にわたるハーシェリオン家とギルベイド家の権力争いという図式になっている。
仮定を持ち出しても詮なきことではあるが、先王が初めの王妃であるオヴェリア・ギルベイドの後添いにハーシェリオンの娘を選ばなければ、そして、現王が異母弟に政治の一切を押しつけなければ、今の宮廷闘争は起こっていなかったに違いない。
王太子派の軍人であるグラッドは、王弟派の者たちと敵対しているものの、一個人に立ち返り、王弟キイルとその腹心であるラッセル伯爵やネイゲル男爵らを見るとき、彼らの評価はまったく別のも

のになる。

キイルによる二十数年の統治は、ハーシェリオンの力を行使する専制的なものであったわけではない。結果として閣僚・軍幹部高官らはハーシェリオンの息のかかった者たちで占められているものの、彼らの言いなりになっているわけでも、その利益を図ろうとしているわけでもなかった。

天秤をつり合わせるかのごとき慎重さで、譲歩と圧力を巧みに使い分け、ギルベイド家の権勢を殺いでいく様は見事であったとしか言いようがない。

専制的に物事を推し進めているかに見えるミカヤでも、国王の従弟であり自らの後見人でもあるダラス公アンジェ・ギルベイドの意向を無視することはできず、背後の力に突き動かされている面もある。特にほんの数年前までは、宰相や大臣らのもとで国政について学んでいる状態であったため、ミカヤの及ぼせる力というのは微々たるものだった。

もっとも、昨今ではそのころを払拭せんとするかのように、権柄に振舞うようにもなっている。

突然、独り言のようにミカヤは呟く。

「ファジールの独立……。あの男がザイード大公家を全面的に援助したのは、ケーニヒスの権勢を殺ぎ、膠着していたゴースティンとケーニヒスの均衡を切り崩すためであったのだろうな。専らゴースティンのための行為であり、決してファジールの利益を図ろうとしたわけではないであろうに……」

そんなキイルの思惑は別に、ザイード家はケーニヒスのセルバンテス王家からの離脱を画策していたため、ゴースティンによる軍事

及び経済援助は、まさに願ったりであったのだ。その経緯からファジールの高官たちは、キイルを始め、当時から外務大臣を務めていたデデュー公ミシェル・ハーシェリオンらに恩義を感じており、その政敵とも言えるギルベイド家を敵視する始末であった。

現大公のジョアン・ザイードに至っては、キイルが妃を娶らず、ルキア以外の子を儲けることをしないにもかかわらず、いまだキイルが王位に就くことを望んでいると伝え聞く。

（……滑稽なことだ）

グラッドがそう思った瞬間、ミカヤは唇を歪めて一笑した。

「ハーシェリオン家に加担するザイード家など、ともに堕ちてゆけばいい」

「そしていずれは、ケーニヒスも……ですか？」

その問いかけに、ミカヤはなにも答えなかった。

過ぎる面影

ドートリッシュ邸へと戻ったルキアは、かつては父の私室のひとつでもあった北の書斎へと向かった。

ここは一部の使用人を除いて立ち入りが禁じられており、この数年、“開かずの間”となってしまっている。掃除が満足に行き届いていないせいで、雑然としているわけでもないが、埃と湿気で陰鬱な空気が立ち込めていた。

ルキアは部屋の中心に置かれた肘掛け椅子に腰を下ろし、手にしていたサーベルを膝の上に置いた。

他の部屋とは違い、特別に分厚く誂えられたカーテンが閉め切られているため、まだ陽は陰っていないといないが室内は薄暗い。

そんな中、ルキアはさらに闇を深めるように瞳を閉じた。軽くうつむくと、横顔に長い髪がはらりとかかる。

元より長かった髪をさらに伸ばし始めたのは、司祭になってからだった。

宮廷において、髪を長く垂らしている者は少ない。男ならば、肩につくほどの長さがあればリボンや飾り紐で一つに結わえ、軍人ならば短髪の者が多い。女ならば鎖骨やデコルテラインを強調するドレスの流行により、髪は高く結い上げることが主流となった。

その一方で、聖職者は長く垂らしている者が珍しくないため、この四年もの間、ルキアはひたすら髪を切らずにいた。

王から賜った剣を手に取る。

刀身を引き抜き、ゆっくりと緑眼を開く。そこに映る自分の姿に向けて、ルキアは深いため息を吐いた。

幼少のころのルキアは、今よりも淡い髪色をしていたが、年を重ねるにつれて赤みが増していった。

この国において、貴族や平民の別なく赤い髪は見られるが、その数はごく少数であり、歴代国王に赤みの強い髪色がよく見られたために、赤毛はオトゥール王家の象徴のように捉えられている。ドートリッシュの人間は金髪に近い亜麻色が多いが、ルキアは表向きクラウスの庶子とされており、ルノーと母親が違うことはほんの子供のころから知っていたため、深く疑問に思うことはなかった。

十一のとき、ルキアは避暑に訪れていたアルティス城で、母と会ったことがある。

王都に戻ったルキアが、城にいた女性は誰なのかとクラウスに訊ねたが、父は悲しげに微笑み、はぐらかすばかりだった。そんな父の挙動から、詳しい事情はわからずとも、訊いてはならないことなのだと幼心に悟ったものだった。

結局、ルキアと母の邂逅はその一度きりであった。

その数年後、あのとき会った女性が自分の母だと知ることになったが、ルキアがクラウスに母のことを訊くことは叶わなかった。クラウスは、アズノエルのことをルキアに一切語らぬまま、その生を終えたためである。

ルキアが十二になったころ、ミカヤの学友として宮廷に召され、アイオーン宮に住まうことになった。その際、クラウスに連れられて国王に接見した折、王はルキアを見た途端に「アズノエル……」と小さく呟いた。

訳がわからず、ルキアは隣にいる父を見上げたが、その顔は苦渋

に満ちていた。傍に控えていた王の侍従たちもどこか焦ったような素振りを見せていたが、王がそれを気に留めることはなく玉座から立ち上がり、周囲が止めるのも聞かずルキアに歩み寄ったのだ。

ミカヤは父王のことを、思ったままを口にし、思ったままの行動を取る人物だと口にしていたが、それ以上に的確な表現もないだろう。

宮廷に上がれば、多くの貴族たちと顔を合わせ、様々な話を耳にする機会が増える。宮廷人たちとの会話は、まだ幼い少年にとって興味深いものもそれなりにあったが、辟易するものも少なからずあった。

目配せし合い、なにかを面白がっているような貴婦人たち……。扇の裏に隠された好奇と嘲笑を、あのころのルキアに理解することはできなかった。

ルキアに好奇の目を向けてきたのは、噂好きの貴婦人たちだけではない。いわゆる大貴族と呼ばれるような者たちは、なにやら値踏みをするような視線をルキアに投げかけてくることが多かった。

――本当に、アズノエル様によく似ておられる。

宮廷に上がるようになってからというもの、ルキアはたびたび“アズノエル”という名を耳にするようになった。ルキアは疑問に思うままに、それは一体誰のことなのかと彼らに訊ねた。

ある者は微笑むばかりでなにも答えず、またある者は、かつて宮廷に出入りしていた貴婦人のことだと答えた。

名ばかりを聞き続けた女性が母だと知ったのは、それからほどなくしてのことだった。それは、王の口から聞き及んだことであった。たまたま侍従たちが席を外し、周囲に誰もいなくなったとき、ルキアは王に直接、アズノエルとは誰か、と訊ねた。王は別段驚く風で

もなく、むしろ懐かしさを噛みしめるようにしてアズノエルのことを語った。

もっとも、王がルキアに教えたのはアズノエルとルキアの関係のみであり、それ以外のことを知るに至ったのは、また別の者の口を通してのことだった。

――許してくれ……。

いつのころか、王はルキアに向けて奇妙な謝罪を繰り返すようになった。

アズノエルは二十二年前の一件により、王都を去り、セヴァンスのアルティス城へと移り住んでいた。そこは彼女が十二の年まで生まれ育った城で、十八から十数年にわたり幽閉同然で過ごすことにもなった場所でもある。

アズノエルが亡くなったのは今から七年近く前のことであるが、彼女の葬儀は行われず、一族の墓にも葬られてはいない。王の妃にと望まれた身でありながら王弟との不義密通により、追放の憂き目にあったゆえの結果だと口にする者もいたが、まるで彼女の存在そのものが消されてしまったかのような不自然な扱いである。

その死の噂は静かに王都エクシュールへと届き、アズノエルのことを覚えている宮廷人らの間へと拡散していった。

孤独のうちに死へと追いやられた名家の姫の憐れな末路により、秘かに語り継がれてきた恋物語は一気にカタストロフィーへと向かっていった。

王がこのことを負い目に感じているとミカヤは話していたが、実際にルキアがそう感じることはしばしばある。王は、ルキアを呼びつけ、とりとめのない昔話を繰り返し、かつて深く愛した女の名を刻みつけてくる。それは、ルキアの中に見出すアズノエルに許しを

請うかのようだが、王の口のする言葉はあまりに泡沫的で、聞くごとに虚しさが募るばかりであった。

ルキアは感覚を閉ざすように、鋭利な刃だけをじっと見つめる。

それは、本当に綺麗な刃だった。

一度も抜いたことがないと王が話していたが、それは誇張ではなく事実だったのだろう。カーテンの隙間から差し込む一筋の光が、片刃にさらなる輝きを与えている。

ただひとつ、ルキアが母に似ていると言われなかったのがこの髪の色だった。そんな唯一の差異を王に誇示するかのように、彼はずっと髪を伸ばし続けていたのだ。

（あまりに、子供じみているな……）

数年前から今なお続く稚拙なこだわりに苦笑を浮かべ、ルキアは剣の柄を強く握った。

座っていると腿のあたりにまで届く髪を、背の中ほどで一掴みにした。そして、剣を首の後ろへと回し、そのまま一気に斜めに引いた。

はらはらと髪の散らばる感触が肌に伝わったとき、心のつかえが溶け落ちていくように思えたが、それはほんの一時だけ得ることのできた安息にすぎず、断ち切られた糸が再び複雑に絡み合っていくのをルキアは静かに感じていた。

背後で蝶番の軋む音がするとともに、室内一面に光が差す。

「自害でもするのかと思ったぞ」

さらりと投げかけられた不穏当な言葉に対し、馬鹿なことを、とルキアは苦笑まじりに呟いた。

「あれほど長くては、戦闘で邪魔になるだろうと思っただけだ」

剣を鞘に納め、脇に置き、ルキアはくつろぐように椅子に背をあずけた。

リジーは絨毯の上に散らばった髪の束を見下ろし、不満げな声を発する。

「髪を切ったりしたら、魔力が落ちるかもしれないぞ？」

「そうなのか？　そんな話は初めて聞いたが……」

リジーは炎を操る魔道士であるが、彼自身の髪は襟足の部分だけが肩甲骨のあたりに届こうかという程度で、ルドリア教会の司祭と比べて長いわけではなかった。そもそも強すぎる魔力など日常生活には必要なく、むしろ不自由なだけである。

「まあ、ただの迷信だろうけどさ。俺たちの一族の祈祷師たちはとにかく長く髪を伸ばしていたことを思い出したんだ。それをいろんな形に結っててさ、ある意味芸術って感じだったな」

リジーもかつてはそうだったのだろうかと思いながら、ルキアは一時的に頭の中から追いやっていたことを思い出し、わずかに眉を寄せた。

「私とお前は似たような力を使うが、シベリー族にはお前のように魔道の力を使う者は多いのか？」

「いいや。こんな力持ってる奴なんかほとんどいなかったさ。それに、いたとしても戦に使ってくることはないだろうから安心しろよ」

リジーは苦笑の中にそっけなさをのぞかせていた。まるで、それ以上訊いてくれるなと言っているようでもあった。

リジーの同族――シベリーとの戦は一月（ひとつき）もしないうちに決行される。

エリーヌには覚悟はできているなどと答えたが、なにをもって覚悟とすればいいのかルキアにはわからなかった。せめてこの戦に“大義”があればと甲斐のないことを願った。罪人を手にかけるならば、ここまで心が倦んでいくことはなかっただろう。

ルキアは前髪をかき上げ、そのまま額を強く押さえた。

「なあ、ルキア」

ルキアは上目でリジーを見やる。するとリジーは、気にするな、とでもいうように無邪気に笑んだ。そして椅子の肘掛けに腰を下ろし、ルキアの髪を一筋掬い上げた。

「なんだか昔みたいだな」

それは二人が初めて会ったころのことだろうか。

ルキアは薄く笑みながら、ふいに巻き起こる情景を目蓋の裏に感じていた。

こぼれる光の中で

強い陽光が薔薇窓やステンドグラスから差しこみ、身廊にあざやかな色を落としている。その光は、椅子に腰かけるルキアの頭上にもきらきらと降り注いでいた。

こぼれる光の中で、ルキアはじっと手の中の聖杖を見つめる。この紫水晶が埋め込まれた杖は、生前クラウスが使用していたもので、ドートリッシュの当主に代々受け継がれているものである。それをずっと辿っていけば、教皇エルジェ三世にまで行き着くことになる。

教皇エルジェ三世は、オトゥール王家にとって禁忌の存在とされているが、それはドートリッシュ家にとっても似たようなものであった。

エルジェ三世に関する文献はドートリッシュ本邸を始め、アルティス城やフェルダ大聖堂の書庫などに多数残されているが、そこに記されている彼の人となりについては、目をそむけたくなるようなものが散見された。エルジェ三世は非常に強い魔力を秘めていたとされるが、そんな自らの力を盾に、王家にも司教らに対しても高圧的な態度で臨む人物であったという。挙げ句、晩年には精神に異常をきたし“狂王”とまで呼ばれるようになり、そのことが身の破滅につながったというように評されていた。

そのためか、彼の肖像画はほとんど残されていない。エルジェ三世が殺害されたのは四十の半ばであったとされるが、晩年の肖像は一枚もなく、せいぜい十代半ばから二十歳までにしか見えないもの

ばかりが数点残されているのみであった。その肖像画は今もアルティス城に飾られているが、彼の容貌は、髪の色こそ違えどルキアとよく似ていた。

聖杖を持つ手に力をこめた。この杖には強い魔力が染みついている。

どこか懐かしさを覚える波動。それは父のものであるのか、それとも狂王のものであるのか。

出撃まで後十日。

ここ最近、ルキアは朝の公式礼拝と国王との謁見が終わると早々にエクシュール宮殿を後にし、それ以外の時間のほとんどをドートリッシュ本邸の聖堂で過ごしている。そこでなにをするというわけでもなく、彼はただ、無為に時間が過ぎていくのを待っていた。

ふいに、ゆるやかな魔力の波動があたりを漂う。

ルキアは顔を上げ、開け放たれた扉に目をやった。あたりには午後の強い光が降り注いでいるために、迫り来る人物の容貌を隠していた。横に広がったドレスの影からは女性だということしかわからないが、彼女から感じる波動はルキアの身に覚えのあるものだった。

「ルキア様、お久しぶりね」

「ええ、しばらくですね。……ミルドレッド」

ルキアの前にまで歩み寄ったミルドレッド・レイヴァンは、口元に手をやり、美しい微笑を浮かべた。

「お髪、どうされましたの？」

誰の目にも真っ先に目につくのだろう。髪を切って以来、屋敷の者たちでさえもルキアとすれ違うたびに驚きの視線を投げかけてくるほどである。

「戦争に行くのなら邪魔になると思いまして」

「ずいぶんな理由でお切りになったのね。これまでずっと伸ばしておられたから、なにか意味があるのかと思っておりましたわ」

ミルドレッドには稚拙な動機が見透かされていたのかもしれないと思い、ルキアは自嘲気味に口角を上げる。

「ええ、魔力が増強するという迷信がありまして」

「あら、よろしいの？　戦では魔法を使われますのに」

「……多少弱まったくらいで、ちょうどいいのかもしれませんので」

その言葉に、ミルドレッドは複雑そうに眉を寄せた。

ルキアが昔から強い力を秘め、その力に手を焼いてきたことをミルドレッドは知っている。しかしルキアの懸念はまた別のところにある。

髪を切るぐらいで魔力が弱まるのであればそれに越したことはない。そんな迷信にすがりたくなるほど、今のルキアは恐れを抱いていた。この恐れは、戦場に行くことに対してではなく、あの力を初めて使うことに対してである。

ルキアは椅子から立ち上がり、ミルドレッドの前に立つ。

「ミルドレッド、今日は一体どうされたのです？」

「用がなくては来てはいけませんの？」
「そういうわけではありませんが……。ただ、父が亡くなってから、あなたがここに来られることもなくなりましたからね」
「そうね。昨今、あなたとお会いするのは王宮ばかりでしたものね」

クラウスが存命のころ、ミルドレッドやベアトリスを屋敷に招いて晩餐をともにすることがしばしばあった。レイヴァン家とドートリッシュ家の付き合いは何十年も前から続いているが、殊にこの十数年、両家の親交はより強固なものになっていた。

きっかけは、レイヴァン家の跡取り娘であったミルドレッドが、ドートリッシュ家お抱えの画家であったダグラスと結婚したことによる。ドートリッシュはダグラスの後援者の中でもっとも有力な貴族であったため、幼いころのルキアやルノーの肖像画の大半をダグラスが手がけており、また、本邸の階段の壁に掛けられているクラウスの肖像も彼の手によるものであった。

ダグラスの突然の事故死により、二人の幸せな時間は長く続かなかった。そのことに胸を痛めたクラウスはミルドレッドを気遣い、晩餐や会合によく招いていた。また、クラウスの勧めによりミルドレッドは宮廷を出入りするようになり、王宮を彩る花の一人となっていった。

クラウスの死後、ルキアが父と同様の気遣いを続けなかったため、徐々にレイヴァン家とは疎遠となっている。

突然、ミルドレッドは大げさにため息を吐く。

「王宮にはたくさんの方がいらっしゃるから、なかなか込み入ったお話をする機会がなくて困っておりましたのよ。だからこちらに参りましたの」

どこか棘のある言葉に、ルキアは少しの焦りを覚えた。

ミルドレッドは昔から辛辣なことでも平気で口にする質であったため、ルキアは大人になってからでもどこか彼女に頭が上がらないところがある。

ルキアは探るような視線でミルドレッドを見やる。

「その、こみ入った話というのは？」

「ええ。実はこの間、たしか特別軍議が開かれていた日だったから？　久しぶりにエリーヌ様にお会いしましたのよ」

「そうですか」

「ルキア様も、離宮の中庭でお会いになったのでしょう？」

「ええ、まあ……少し言葉を交わしただけですが」

なぜミルドレッドがそのことを知っているのかと訝りながらも、ルキアは適当に言葉を返す。

「それで、エリーヌとなにかあったのですか？」

「なにやらずいぶんとあなたに否定的な物言いをされてましたけど、喧嘩でもなさいましたの？」

そのことかと、ルキアは安堵から微笑する。

エリーヌはミルドレッドにどのようなことを言ったというのだろう。ミルドレッドがわざわざ心配で出向いてくるほどエリーヌは怒っていたのだろうか。

勝手な空想がいくつもルキアの頭を過ぎっていき、自然と苦笑がにじんだ。

「先月、エリーヌがミカヤ殿下の命令書を私のところへ届けにやってきたのです。その、つまり高位司祭に徴兵命令が下ったときのことですが、少し言い合いになりまして……。そのことで怒っていたのかもしれません。ただ、この間会ったときは別に怒っているとい

う風ではなかったのですよ。どういった風の吹き回しか、剣の相手をしてほしいと言ってきたぐらいですから。出撃までの間なら屋敷に来ればいいと言っておいたのですが……まあ来ないでしょうね、あの人は」

「かといって、来るなと言えば絶対いらっしゃらないでしょうし……。あの方の扱いは難しいところね」

ルキアはミルドレッドと顔を見合わせて笑いながらも、徐々に笑みをほどいていく。

「別に、彼女に来てほしいわけではないのですよ。会ったところで一体なにを話せばいいのやら……。それに、私は長らく剣の稽古などしておりませんし、この鈍った腕で彼女の剣の相手をするのは骨が折れそうですから」

エリーヌの腕は、ルキアと最後に手合わせしたときよりもはるかに磨きがかかっていることだろう。エリーヌは子供のころから負けず嫌いで、その向上心の高さに比例するように、剣の腕もみるみる上達していった。十五で士官学校に入って以降、ルキアは彼女の腕前を直接目にすることはなくなり、噂として耳にするだけになっていった。その噂は、決してグレンヴィル家の名声によるものではなく、彼女自身に対する真実の評価であったに違いない。

淡く浮かび上がる追想を、ミルドレッドの声が遮る。

「ここ数年、あなたは社交というものを一切無視しておられるようですけど、グレンヴィル家とだけは堅密な関係をお続けになったほうがよろしかったのではなくて？　グレンヴィルはカレニーナ王女殿下の降嫁先ですし、王家の信任も厚く、宮廷での影響力も強いお家よ。当主のアシュレイ様は宮廷内の派閥に与することのない清廉

な武人でらっしゃいますし、エリーヌ様もまっすぐなご気性で、勝手な噂に振り回されるような方ではないわ。カレニーナ様だって、昔からルキア様に好意的でいらしたでしょう？」

「……そうですね。今の宮廷においては珍しく、真に信頼のおける方々だと思っておりますよ」

「そうお思いなら、エリーヌ様と和解されてはいかが？　エリーヌ様があなたに突っかかるような態度をお取りになるのは戸惑ってらっしゃるからよ。ろくに理由もわからないまま拒絶されたら、どうすればいいかわからないのは当然でしょう？　あなただって、同じような経験をされたことがおありでしょうに……」

ルキアはなにも反応を返さなかったが、ミルドレッドは神妙な声で言葉を続ける。

「あれから四年……いえ、もう五年が経つのよ。あの方はもう大人だわ。いつまでも子供だとお思いになって見くびってらっしゃるの？」

「そういうわけではありません」

ルキアが強い口調で言い切ると、ミルドレッドは憐れむような視線をルキアに返した。

「あなたのこと、心配しておいでよ。戦場になんて行ってほしくない、あなたに人殺しなんてしてほしくない、そう思っていてもあの方はそれを口に出すことができないから」

「私も、エリーヌには戦場に出てほしくありませんね。たとえ、ミカヤ殿下の護衛として要塞に留まるだけだとしても」

「そのお言葉、私ではなくてエリーヌ様の前でおっしゃればよろし

いのに」

ルキアはミルドレッドに微笑を向け、冷淡に問う。

「……あなたがいらっしゃったのは、そのような話をなさるためだったのですか？」

「まさか。本題は別にありますわ」

ミルドレッドは青灰色のドレスの裾を捌き、ルキアに一歩近づく。

「あなたが戦争に行かれるだなんて、クラウス様が生きていらしたら、なんて言われたかしら？」

明らかな非難の色が漂う声色だったが、ルキアはそれをはぐらかすように明るく答える。

「父が生きていれば、そうですね……まずは、勝手に司祭になったことを叱られそうです」

「それでしたら、叱られるのはルノー様も同じでしょうね。お言いつけ通り、家を継がなかったのですから」

「父から二人揃って叱られるだなんて、子供のころ以来で懐かしいでしょうね」

「おふざけにならないで」

口調とともにミルドレッドの目には険しさが宿る。

「今さらこのようなことを申し上げても仕方がないとわかっていますけど、この際だから言わせていただくわ。噂でお聞きしただけですけれど……司祭の徴兵命令が発せられたとき、あなたはそれに快諾されたとか……。それは本当でらっしゃるの？」

「本当です」

ルキアがためらいなく答えると、ミルドレッドは眉を上げる。

「エリーヌ様はあなたのこと、聖職者としての本分を軽視しているとおっしゃってましたわ。それについては私も同感よ。そもそも、他の司祭たちならばともかく、あなたが賛同なさるということがどれほど影響力を持つことなのか、ちゃんとわかっておいでなの？」

「お言葉ですが、私のような立場にある人間が、王家に背くことのほうが問題なのです。いつまでも教皇時代の権威にすがっているわけにもいきませんから」

「……それと同じこと、クラウス様の前でもおっしゃることができて？」

「シベリーへの報復はいずれ近いうちに行われたでしょうし、私が父の言いつけ通りに司祭になっていなくても、軍人になっていれば戦場に赴くことになっていたでしょう。ですから、父は仕方のないことだとお思いになるのでは？」

「その詭弁、ベアトリスにもおっしゃったそうね？」

「筒抜けのようですね……」

薔薇窓から差す光はさらに強い輝きを帯びた。ルキアはその日差しとミルドレッドの視線から逃れるように身をひるがえした。

その背に厳しい声が投げかけられる。

「絶対に生きて戻って来られる保証はおありなの？」

「私は外遊に行くのではなく戦争に行くのです。そのようなことには答えられません。そもそも、絶対の保証なんて何事にもありはしませんよ。……ただひとつ言えることは、私の操る力が強大なものであるということだけです」

「それは、四大司祭の方々の力ということかしら？」

「そうです」
「アルゼ教典の一節と同じことが起こると？」
「……おそらくは」

原始教典の中に登場する四聖獣――旋風の刃を放つ狼＞フレイド＜、長大な胴体を持つ水蛇＞アナート＜、獰猛な爪と牙で大地を引き裂く黒牛＞ガリアント＜、そして黄金の翼を持つ炎の鳥＞ベリアザーベル＜。

ルドリア神の御心により地上へと降り立った四聖獣は、その聖なる姿を人の形へと変え、眩い光を放ちながらイシスのもとに現れたという。四聖獣の力を分け与えられたイシスは、その化身となり、暴君ヴァーロンの軍勢をたった一人で壊滅させたとアルゼ教典には記されている。

もうすぐ、一千年前の聖戦以後初めて、＞神の力（レガロ）＜が使われることとなる。

かつてはお伽話にすぎないと思っていたその力は、ルキア自らの身をもって実在した力であると思い知らされることとなった。禁忌魔法を継承してからルキアは一度もその力を開放したことはないが、それがどの程度の威力なのか、容易に想像することができる。

戦場において“敵”を滅せと念じながらその力を開放するとき、迫り来る軍勢は一瞬にして炎の翼に抱かれることとなるだろう。さながら、エーゼン・サルファの私室に掛けてあったノワイユの遺作のままに。

＞神の力＜について考えるとき、ルキアの中にひとつの疑問が沸き起こる。

ゴースティンのルドリア教会が聖職者に魔道の力を求めてきたのは、教皇位廃止後ではなく、聖戦以後からであったと伝えられている、おそらく、教皇時代に＞司教＜と呼ばれていた者たちが、現在の高位司祭に相当するような力を有していたのだろう。

それならば、なぜ三百年前の内乱の折、教皇軍は＞神の力＜を用いなかったのだろうか。

内乱の詳細について、これまで王も貴族も隠匿せんと努めてきた。それにより、歴史書や関連書物において内乱の経緯や戦闘についての記述はことごとく削られており、王族や一部の貴族、教会関係者を除いて公のものとはなっていない。

だが、民衆の口を完全に塞ぐなど容易ではない。当時は一千年前とは違い、既に紙は貴重品ではなく、書物に残す技術も発達していた時代である。また、戦闘において多くの民を巻き込んだとはいえ、虐殺が行われたわけでもないのに、伝承としてすらまったく残されていない。加えて、教会が保持している史料や古い書物には検閲が及んでいないが、それらの中にも教皇軍が＞神の力＜を使用したという記述はないのだ。

敵とはいえ、ガレ族相手に＞神の力＜は使えないとでもいうのだろうか。しかし、教会と王権の対立の歴史を鑑みると、そのようなことを考慮するとはとても思えなかった。

「ねえ、ルキア様……」

ミルドレッドの呼びかけに、ルキアは視線だけを後ろに返す。

「＞神の力＜の存在、私は昔からそれを単なるお伽話だとは思っておりませんでしたわ。確信に至ったのは、あなたが四大司祭となられてからだったかしら？　あなたから感じる魔力の波動……魔道を

扱う者にとっては畏敬を覚えずにはいられないほどのものですから」

ルキアは聖杖に視線を落とし、紫水晶にうっすらと映る自分を見つめる。

「私自身、自分の中にある凄まじい力の塊には時折恐れを感じるほどです。力を意識的に抑えようとしなければ、子供のころのように暴発させてしまいそうになることもありますから」

「それと、あの伝承も本当だと思っておりますわ」

「……伝承？」

「イシスより＞神の力＜を受け継いだ司祭は、ドートリッシュ家の司祭であったとか……。あなたの強い魔力に触れれば、信じざるをえませんわ」

ミルドレッドの敬意をにじませた言葉を遮るように、ルキアは首を振る。

「いえ、それは本当に俗説に過ぎないものでしょう。おそらくドートリッシュの当主が教皇としての権威を手にしていく中、その正統性を高め、さらなる威信を得るために、自ら聖イシスの後継者を名乗り始めただけだと私は考えています」

「大事なのは人々がどう思うかということよ、真実ではないわ」

ミルドレッドはいつも華やかであるはずの顔に強い苦悩を漂わせる。

「今は、数百年前とは比べものにならないほど医学も発達して、悪魔の仕業と呼ばれた伝染病の蔓延にも対策がなされ、飢饉による食糧事情も改善されたわ。きっと、平和と呼ぶにもっともふさわしい時代なのでしょうね。そのせいか、神への感謝を忘れる者も少なか

らずいるわ。イシスの正統なる後継者、神の化身とも呼ばれたドートリッシュ一族に対してもね」

「それも一つの時代の潮流というものでしょう。平和ゆえに神への畏敬が薄れるというのであるならば、かまわないと私は思っておりますよ。そもそも私たちは神ではありませんし、一司祭に過度の敬意など不要です」

「あなたがどう思われようと、ドートリッシュ一族への畏敬は依然として存在しているわ。どれほど薄れようと、それは決して消えることはないものなのよ。あなた方のことを“眠れる獅子”だなんて呼ぶ者たちもおりますけど、それはいまだに教皇の一族を恐れているからだわ。三百年という年月が経っていようとも、あなた方はその血統を保ち、教会の権力者であり続けているのですから」

「私は自分をそんな大層な人間とは思っておりませんし、その力を振りかざす気もありません。あなたは、私にかの“狂王”のように振舞えとでも？」

ミルドレッドは耐えかねたように語気を荒らげる。

「話を極端な方向へ持っていかないで。ご自分の立場を軽々しく考えられるべきではないと申し上げているだけよ。あなたの一挙一動がどれほど影響力を持つものなのか、いい加減自覚なさったらいかが？」

ルキアは短い息とともに、反論しそこなった言葉を呑みこんだ。目をそらすことも沈黙することも卑怯でしかないと思ったが、これ以上空虚で愚かな反論を繰り返す気にもなれなかった。

ミルドレッドに指摘されたことは、つい先日、充分に思い知らされたことである。

強制的に徴兵命令がかかったのは高位司祭のみであるが、下位司

祭及び国内の魔道士についても、任意ではあるものの衛生班として後方支援部隊に従軍するよう呼びかけられている。ルキアはルノーにはデフトールへ戻るよう厳命したが、一族の下位司祭たちについては従軍するか否かは彼らの判断に任せた。

その結果、ドートリッシュ一族の司祭は、ルノーを除いたすべてが戦地へ赴くこととなった。いくらルキアが強制しなかったとはいえ、当主が前線に出る以上、彼らには否の選択など初めからなかった。たとえ残るように命令したところで、彼らは聞き入れなかったのかもしれない。

また、ドートリッシュ一族の司祭が従軍することで、他の下位司祭から選択肢を奪う事態にもなっていた。定例会議において、あれほど反対の意思を示していた者たちまでも従軍を決めたという話が、既にルキアの耳にも入っている。後方支援部隊には命の危険などまずないと思われるが、多くの司祭を巻き込んでしまったことを申し訳なく思う気持ちはあった。

強い自責と諦念が襲い、ルキアは片手で目元を強く覆った。

わずかな沈黙の後、ミルドレッドは労わるような声色でルキアに語りかける。

「あなたが強いしがらみを絶ち切れずに苦しまれていること、それは私も存じておりますわ。けれども、ドートリッシュの当主として重責は、たとえ宮廷闘争の前においても軽視してはならないものだわ。ルドリア教の信徒にとって、あなたという存在がどれほど大きなものであるのか、それをお忘れにならないで」

そう言いながら、ミルドレッドはルキアの手首を軽く掴み、目元からそっと手を引き剥がす。ルキアの瞬く瞳には、ミルドレッドの沈鬱そうな顔が映った。

「……決して誤解なさらないで。あなたを敬い慕う多くの者たちは、ドートリッシュの権威に縋ろうとしている者ばかりではないわ。そのほとんどが、あなた自身の人柄に惹かれてのものよ」

ミルドレッドの言葉は努めて冷静なものであったが、その端々に必死さを感じられるものでもあった。そのことをうれしく思わなくはないが、ルキアには慰めの言葉などもはや不要のもので、誰にも、なにも期待などしていなかった。

ただ、否定の言葉を告げることには心が倦み果てていた。

ルキアはミルドレッドに向けて儚い笑みを作る。

「そういえば、ビビからは弟子にしてくれと言われているんですよ」

「ベアトリスが、そんなことを？」

「ええ、反対なさいますか？」

ルキアが皮肉っぽく問うと、ミルドレッドは細い眉を寄せた。

「あなたが六年前に遠縁のビビを引き取ったのは、あの子をいずれ司祭にさせるためなのだと思っておりました。司祭になるには貴族であるほうがなにかと都合がいいですし、なにより、あの子は既に高位司祭の叙階を受けられるだけの力を有しておりますから。ですが、あなたはいまだビビを司祭にさせる気がないようですね。……私は、できればそのほうがよいと考えておりますけれど」

「ええ、私個人としては今のルドリア教会に対しては批判的な考えを持っているわ。もちろん、それは教義や王家との関わりがどうのということではないわ。司祭たちの在り方、与えられた特権、そして俗世との強固な結びつき……。疑問を抱かざるをえないことが散見されますもの。なにより、司祭が戦争に遣られるようでは話にな

らないわ」
「まったく、その通りです」
「多くの人を救うため、望んでその身を捧げる……そんな人柱のような精神は聖職者には必要なものでしょうね。人々が信仰のために命を投げ出した殉教者たちを崇めるのは、彼らを自らになぞらえるとき、その偉大さに打ち震える想いを抱くからに他なりませんもの。……ただ、今回の戦はいくらでも回避できたはずのものでしょう？」
「そうですね。シベリーへの報復と呼ぶには、少々行き過ぎているようにも思えます。それに、いくらシベリーが異教徒とはいえ、大義もないこの戦は＞聖戦＜にはなりえません」
「そこまでわかっていらしても、あなたはミカヤ殿下に盲従されるのね」

ミルドレッドは挑むような視線をルキアに向けた。
ルキアは柔い笑みをたたえたまま、透き通った金茶色の双眸をまっすぐに見つめ返す。

「私が拒否したところで、他の司祭らが戦場に遣られるだけのこと。ならば私の力を使いましょう。そのほうが、犠牲は少なくてすむはずですから」
「ご立派な大義名分ですこと」
「まるでエリーヌが言いそうな台詞ですね」
「その通りよ、エリーヌ様がおっしゃっていたことだわ」

ミルドレッドは落胆をにじませ、睫毛を伏せた。
ルキアは眩い光がこぼれ落ちる薔薇窓を物憂げに見上げて呟く。

「それでも私は、ルノーやビビまでもが徴兵されることになるのなら、必死に反対したのでしょうね。物わかりのいい振りをすることすらできなかったでしょう。……国のためだなんだと言いながら、

結局私は自分の周りの者たちが可愛いだけなのですよ」

久々に吐き出すことのできた本音は、ルキアの胸のつかえを溶かしてくれはしない。ただ、独り善がりな自身を思い知るばかりであった。

秘めたる炎

金牛宮の月、一日。

ゴースティン王国西部、アズーラ平原の中央に位置するキウロス要塞に国軍が集結し、それらが平原に整列している。

このキウロス要塞は百年近く前に二十年もの年月を割いて建設された稜堡式城砦都市で、これまでケーニヒスやシベリーとの戦いにおける本営となってきた場所であった。西方軍の駐屯地であるこのキウロス要塞を中心とし、国境周辺に点在している前進基地を物資の配給地として、シベリー自治国の州へと進撃を開始する。

また、キウロス要塞の北にあるベスラ要塞にも同程度の戦力が集っており、その部隊も時を同じくして出撃することとなる。

整列した大軍は、はるか遠くまでその列を広げており、それが軍隊であると思わなければいっそ痛快なほどである。

ゴースティンの軍旗は風を孕んでは翻り、形を変え、また一気に張り巡らされる。深紅の軍旗は、これから起こることが夢物語に思えるほど、今はまだ清浄なままである。メイスを掴んだ黒鷲の描かれた王太子の旗もまた同様であった。

国軍は大きく四つに分けられており、第一・第二部隊はベスラ要塞、そして第三・第四部隊はこのキウロス要塞に結集している。

ルキアが所属しているのは第四部隊で、その部隊は、エリーヌのいる場所から肉眼でとらえられる位置に整列していた。ルキアの姿をはっきりと見ることは叶わないが、おそらくは司祭と思われる五人ほどの集団を見つけることができた。彼らは正規の軍人とは異な

る衣装を身につけている。それは近衛の制服を思わせる黒い軍服だったが、上衣の丈がかなり長く、祭服に近い形をしていた。

出撃までの間、エリーヌがルキアのもとを訪れることはなかった。いつでも屋敷に来ればいいとルキアは話していたが、所詮、あれは社交辞令だろうと彼女は思っていた。十数年もの付き合いがあれば、その程度のことは容易に知れる。

「エリーヌ、そんなに気になるのか？」

食い入るように隊列を眺めていたエリーヌは、突然のミカヤからの問いかけに、思わず肩が震えた。

「なんのことでございますか、殿下」

「ルキアのことだ」

狂いなく言い当てられたミカヤの言葉に、エリーヌは驚きを隠すことができないでいた。

その動揺ぶりにミカヤが笑うと、エリーヌは必死にそれを否定する。

「わたくしは殿下の護衛のためにここにいるのです。他のことは気になどなりません！」

「見え透いた嘘はやめろ。お前ほど心が顔に出る者など他にはおらんぞ」

ミカヤの視線はいつも酷薄さをたたえているが、時折温かさをのぞかせる。エリーヌはそんなミカヤを懐かしく思いつつ、恐る恐る問う。

「殿下は、ルキアのことを心配しておいでではないのですか？」
「私があれの心配などするものか」
くだらないとばかりにミカヤは言い捨て、まっすぐに平原の先を見やる。
「あれを誰だと思っている？　あいつは生きてここへ戻ってくる、必ずな」
ミカヤは黒馬とともに前に進み出る。
ほんの一瞬うかがえたミカヤの冷然とした横顔は、ルキアの面差しを宿しているかに見えた。彼らに共通するのは、似たような赤い髪と緑色の瞳を持っていることぐらいで、顔立ちも顔つきも違う。ただし、彼らの本当の関係は従兄弟ということになるため、似たところがあったとしても不思議ではない。
エリーヌがルキアの出自について知ったのは、二年前、近衛士官としてミカヤに仕えることが決まったときだった。
エリーヌの伯母カレニーナは二十数年前の出来事を間近で知る数少ない人物である。カレニーナは、王宮で過ごす時間が長くなれば、いずれ噂として耳にすることになるだろうからと、ルキアの母アズノエルとキイルの関係、ミカヤが立太子された経緯のすべてをエリーヌに話した。その話はエリーヌを驚愕させるものだったが、同時に、家を継いでからのルキアの急激な変化の理由を知ることができて、安堵したところもあった。
この国において一般的に庶子や私生児の肩身は狭いものである。いかに権威あるゴースティン王家の血縁であろうと、正式な婚姻関係にない男女の間に生まれた子は蔑視の対象であり、アルト＝ヴィジェ王の数多くの私生児も、一定の年齢に達するとその大半が修道

院に遣られている。
しかしルキアは、クラウスがドートリッシュ本家の長子として扱い、一流の教育を受けさせていたため、向けられる偏見は軽かった。だからこそ、王太子の側仕えとして選ばれたのだ。
ミカヤとルキアは年が一つしか変わらないということもあり、幼いころから親しく、ルキアがミカヤの学友として宮廷に召されてからは、なおのこと気を許し合う仲になっていた。
それが一変したのは、まぎれもなく、ルキアの出自を互いが知るに至ったからだろう。ミカヤにとって、いわばルキアは政敵の子になるのだ。

カレニーナによれば、王弟派の重臣たちはともかく、キイル自身は決してミカヤを邪険に扱っているわけではないのだそうだ。むしろ、王太子であるミカヤに一定の敬意を払って接していたにもかかわらず、ミカヤが一方的にキイルを嫌っているということだった。ミカヤの後見人がダラス公アンジェである以上、キイルに悪感情を抱くようになるのは仕方ないのだと、カレニーナは悲観的に語っていた。

しかしここ数年、キイルの腹心である陸軍大臣ジーク・ラッセルや大蔵大臣ロベルト・ネイゲルらとミカヤの対立は激化しているのは事実である。きっかけはミカヤが次期国王として国政に携わるようになったことにある。
キイルの側近たちは軍事・政治において、なにかとミカヤに批判的な持論を展開する。それらの意見の中に建設的なものがどれほど存在しているのか、疑問を抱かざるをえない。少なくとも、シベリー討伐に関わる一連の流れについては、まるでミカヤを試すかのように、国政を仕切ってきた重鎮たちが一線を引いてしまっている。この件に関して全権を有しているのがミカヤであるとはいえ、王弟派の者たちの非協力的な姿勢は、ミカヤの独裁ぶりに反発し、水面

下で彼の足を引っ張ろうとしているようにしか見えないものだった。

この状況下において司祭を軍事投入したことは、その結果によっては反王子派を増殖させかねない。戦の中で稀少な高位司祭が一人でも失われるようなことがあれば、司祭の徴兵を強行したミカヤへの不満が教会でも宮廷でも噴出することだろう。

ミカヤには、いささかの敗北すら許されないのだ。

エリーヌはまっすぐに顔を上げて、目の前の光景をしっかりと目に焼きつけた。

初夏の、濃い緑の平原が揺れる。王太子の旗がはためく。

「全軍、進撃せよ！」

ミカヤの声は大地に響き渡り、深い色の空へと吸い込まれていった。

エリーヌは常々感じていたことがある。

超然としたミカヤの佇まいは、その場の空気を一転させてしまう。これは彼と関わった誰もが認めることではあるが、きっとこの戦場においては殊だろう。彼は生まれながらの王者であるとの思いを強くさせる。

ルキアのいる部隊も進軍を開始した。エリーヌはそれをじっと眺める。

ルキアの長かった髪は、胸の辺りで切り揃えられていて、彼がまだ少年だったころを思い起こさせた。しかしその横顔には、あのころのように柔らかな微笑がかすめることはなかった。

ただ静かに炎をたたえていた。

赤い夢

金牛宮の月、一日。

ベスラ要塞より第一・第二部隊が、キウロス要塞より第三・第四部隊がシベリー自治国へ向けて行軍を開始した。

第一部隊はカールトン州を、第二部隊はミレニス州のシベリー軍を攻略し、その後はシベリーの動きをうかがい、場合によっては、両部隊が合流して首都バードンの攻略に移行することになる。

一方、第三部隊はキウロス要塞からもっとも近く、これまで幾度も交戦してきたリブロ州のシベリー軍を、第四部隊はジュダ州及びルドン州といったファジール国境を分かつシベリー軍の攻略が目的で、ルドン州の制圧をもってその任務は完了することとなる。

ルキアの所属する第四部隊は、シベリー自治国最南端のジュダ州へと進攻するため、一日半をかけ、ジュダ州の南東に位置するエーヴェル要塞に辿り着いた。

エーヴェル要塞はキウロス要塞に比べて規模は小さいものの、マーヴェ川の支流で堀を囲んだ強固な造りの稜堡式要塞で、キウロス要塞と同様、西方軍の駐屯地のひとつである。

そして四日の早朝、二万七千の第四部隊はジュダ州軍攻略のため、エーヴェル要塞を出立した。

ジュダ州はシベリー自治国八州の中でもっとも小さく、これまでジュダ州軍が西方軍と交戦したことはほとんどない。つまり、報復という観点からではなく、ルドン攻略に向けてエーヴェル要塞からの補給路確保の必要性から、ジュダ州軍の殲滅に踏み切ることとな

ったのだ。

第四部隊はゴースティンの国境線を越え、アズーラ平原を西へと進軍し、ジュダ州の市街に入る手前の平野に布陣を広げた。全軍が隊列を整え、ジュダ州軍と向かい合ったとき、ちょうど正午に差しかかるころだった。

今日は朝から晴れ渡っていたが、風が強く、この季節にしては少し気温が低い。

ゴースティン軍が無数の赤い軍旗をはためかせ、物々しい様相で戦列を構えている一方、軍旗を掲げる習慣を持たないシベリー軍はどこか閑散としているように見えないこともない。しかし、偵察隊からの報告によれば、ジュダ州軍の数は約二万で、そのうちの約四千が騎兵ということであり、ゴースティン側が数で圧倒しているわけではない。

シベリー族は、成人した男のほぼすべてが軍属であると言っても過言ではない。国家として統一され、州ごとに代表者が治めているとはいえ、彼らはいくつかの部族ごとに遊牧を行って生活している。そのため、シベリーの男は幼少のころから馬術や剣術の鍛錬を当然のように積んできており、昨今ではあまり戦闘に用いられなくなったものの、長弓にも非常に長けている。

いかにゴースティンが武器の精度や戦術に優れていようとも、シベリー相手に白兵戦に持ちこまれたならば、圧倒的に不利となってしまう。八十年前の戦争においても、そんなシベリーを見くびったことがゴースティンに多大な被害をもたらした。

だからこそ、これまで戦に用いられることのなかった魔道の力を導入する価値が生まれたのだ。

「高位司祭の方々、どうぞ前へ……」

第四部隊の指揮官の補佐を務める陸軍大佐の導きに応じ、馬に跨った五人の高位司祭は、横列の歩兵と竜騎兵部隊、その後方に控える騎馬砲兵の前を抜け、部隊の最前列へと進み出た。

多くの兵たちの視線が馬上の司祭へと注がれる。司祭たちは軍服をまとっているとはいえ、下ろしたままの長い髪やほっそりとした体躯のために、およそ軍人には見えず、場違いな感は否めない。

第四部隊に割り振られた司祭は、ルキア・ドートリッシュ、エーゼン・サルファ、アゼリア・ドートリッシュ、オーウェン・サルファ、ラウル・アシリングの五名で、ルキアを除き、風属性魔法を操る司祭である。

現在、ルキアとデルタ・マーシェル、ローザン・ゲーブル以外の高位司祭はすべて、水属性魔法もしくは風属性魔法を操る者で占められており、とりわけ風属性の高位司祭が多い。他の三つの部隊も似たような配分となっているのだが、ルドリア教会の二大柱である権門の両当主、そして両家の中で当主に次ぐ魔力を秘めた二人の司祭で固められている。

つまり、この部隊編成には、戦力以外の事情が考慮されているのが明らかであった。

「それでは軍議決定に従い、セヴァンス侯のお力を敵軍の戦列歩兵へ放っていただきたい」

陸軍大佐がルキアに淡々と促した。

通常、戦の口火は両軍の間で砲戦が交わされることで切られるが、今回は四大司祭の＞神の力＜がその代わりとなる。人知を超えた力を初めに見せつけることで、敵の戦意を挫くことが主目的であり、また、異教の者たちに対し、ルドリア神より授かった力をもって応えようという皮肉もこめられている。

今まさに戦闘が開始されるという状況に身をおいてもなお、ルキアの心に迷いはあった。この件は軍議で決定された作戦の一環であり、それに迷いを抱いたところで覆ることなどないのだが、それでも一切の迷いを捨て去ることはできなかった。人を殺めること、そして、禁忌とされる力を使うことについて。

ルキアが微動だにせずにいると、背後より無数の視線を感じた。ためらいがちに後方を見やると、目の端にエーゼンの姿が目に入り、再び前方を見据える。

「ルキア様、私が先に行きましょうか？」

そう言いながらルキアの隣に並び立ったのは、ラウル・アシリングであった。その勝気な顔には、一際輝く自信に満ちた瞳があった。高位司祭らの戦闘に挑む態度は様々だった。使命を感じている者、背徳感から萎縮する者、傍観する者……。アシリングは誰の目に見ても“使命を感じている者”である。高位司祭の力は、このような場でもない限り最大限に開放されることはないため、類まれな強い魔力を有する彼はその力を誇示したいのだろう。

ルキアは言いようのない嫌悪感を覚えた。もちろん、それを容認している自分自身に対しても同様に。

「……いや、それには及ばぬ」

徴兵に賛同しておきながら、この期に及んで逃げ出すわけにはいかない。アシリングの申し出は、その意思と反して、ルキアの迷いを断ち切らせてくれた。

手綱を引き、少し前へと出る。

瞳を閉じ、胸に手を当て、身体の奥にある力の源に強く＞念＜を

こめると、ルキアの身体中の血が騒ぎ始める。
強く打ちつける鼓動を感じていた手を、ゆっくりと前に指し示すと、その手には凄まじい光を放つ魔力の塊が納まっていた。その光は炎へと姿を変え、次第にルキアの身体を包みこんでいった。
ルキアは、これまで一度もその身に宿した力を開放したことはない。しかし、これから起こることは、己の血が知っているかのようであった。

瞳の奥が熱い。喉が渇く。頭の中を白い光が何度も閃き、そのたびに仮想の視界には赤い情景が映し出されていく。身体の奥深い部分を針で刺されるような感覚が襲い、ルキアはその不快感に思わず身を固くした。

その途端、彼の身体を包んでいた炎がすうっと離れていき、巨大な鳥の姿を象っていく。強い光を放ちながら両の翼の悠然と開き、シベリーの軍勢へと向かっていった。
それまさに、原始教典の一節に登場する炎の鳥、ベリアザーベルの姿をしていた。
黄金の翼を広げた鳥は、その翼を閉じ、敵兵をその絶叫とともに呑みこんでいった。自らの姿を赤く燃え上がらせていく……。

しばらくの間、戦場には似つかわしくない静寂が訪れていた。
背後からのざわめきが聞こえ始め、ルキアはやっと我に返る。ゆっくりと双眸を開くと、彼が予測した通りの光景が、より鮮明さを増してそこに広がっていた。

草地は一瞬の間に焦土と化し、前方にいた約三百の部隊はなにやら黒い塊と化している。
それは、どことなく既視感のある光景のようであった。たしか、サルファ邸で見たノワイユの絵画であっだろうか、と思いながらふ

っと視線を落とす。そこにある彼の両手はまだ、あの絵のイシスのように血に塗れてはいない。

ルキアの口元に、安堵と自嘲が交互にかすめた。

「砲撃、放て！」

静寂を完全に打ち破るかのように、砲兵隊長の号令がかかり、砲撃の音が噴煙とともに地面に鳴り響く。

ルキアのすぐ後ろに控えていたアシリング、アゼリア、オーウェンの三人が一斉に強い＞念＜をこめた魔法を放った。

彼らの力は同じ風属性であっても、現れた力はそれぞれの意思により様々な形をしている。矢や剣といった武器の形もあれば、獰猛な牙や爪を持つ獣の形もあり、それらを象った風の刃で、敵兵の身体を次々に斬り裂いていった。

それが、この会戦を本当の意味で開始させる合図となった。

砲弾と風の刃を浴びて口火が切られたシベリー軍は、“敵”の布陣へと猛攻を開始した。彼らは前方に銃撃部隊が控えていることを承知で突撃しており、ゴースティン軍も一切の躊躇を持たずに次々と引き金を引いていった。

その様をルキアは遠くから眺める。自らの放った力の行く末も、聴覚を麻痺させるような爆音も、彼にはすべて非現実の世界の出来事のように思われていた。

「――炎の鳥、灼熱の翼を広げ大地に降臨す。両翼に抱(いだ)かれたその軍勢、刹那のうちに身を焦がし……」

その声は耳元で囁かれたかのように、ルキアの頭の中で直接響い

た。

「まさに、アルゼ教典のままでしたね」

はっと振り返ると、そこにはエーゼン・サルファの姿があった。無視を決めこみ、前へ進み出ようとしたルキアの隣に、エーゼンが並び立つ。ルキアは軽く手綱を引き、エーゼンを無言で見やった。

「ルキア様。その力、使われたのは今日が初めてですか？」

「……当たり前ではありませんか」

「あなたのその翡翠の瞳、片方が真っ赤に染まっていますよ。力を使われた影響では？」

エーゼンがルキアの右目を指差すと、ルキアは咄嗟に目を押さえながら顔をそむける。

力を放ってから、ルキアは眼底にまとわりつく痛みに近い違和感を覚えていた。それを不審に思っていたが、エーゼンの指摘でやっとその原因を知る。

さらに一歩近づいたエーゼンが、再び声を投げかける。

「教皇一族は過剰な血族婚を繰り返してきたと言われていますが、あなたのその力を見れば彼らが血の濃さに固執してきた理由にも納得できますね。あなたは一族の血を半分しか引いていらっしゃらないというのに、それほどまで強い力を有しておられるのですから」

「今は、そのような話をしている場合ではないと思いますが」

ルキアは手綱を取る手に力をこめ、強い口調で言い放った。

「たしかに、それもそうですね……」

苦笑まじりに呟くやいなや、エーゼンの両手に魔力を物質化した光の玉が現れる。

そのあまりの速さに、ルキアは思わず息を呑む。

エーゼンの手が前方を指し示した途端、視界が白むような閃光とともに、無数の刃が数十のシベリー騎兵を瞬時に切り裂いた。

馬上から転げ落ちた敵兵は自軍の騎馬に踏み潰されていくが、その馬を駆る兵もまた、夥しい血を流し続け、痛みに暴れる馬から振り落とされたとき既に絶命していた。

エーゼンから放たれた魔法の威力は他の三人のものとは比べものにならない。

なにより、魔力を瞬時に物質化させたこと。速さとは精度であり、すなわち、高位司祭に求められている制御力に優れているということを表す。エーゼンに言わせれば、これもサルファ家の血脈によるもの、ということなのだろう。

歩兵による一斉射撃による噴煙が消えていく中、ゴースティンの騎兵隊が総攻撃を仕掛け始めた。シベリー兵たちの断末魔の声は、銃撃の音、馬蹄の音、銃剣のぶつかり合う音、そして司祭らが放った力による爆音にかき消されていくが、平原にはまだまだ勢いの衰えないシベリー騎兵の群れを見ることができる。

シベリーは“辺境の蛮族”“ならず者”と蔑まれてきたものの、戦場におけるその姿は勇猛果敢と評するにふさわしいものだった。きっとそれは、この大陸のどの軍隊よりも優っているに違いない。

もっともこの状況においては、そんな猛々しさは、ただの命知らずとしか呼べないものであった。

「もう、勝ち目などないでしょうに……」

くすくすと笑うエーゼンの声を背に、ルキアは馬を駆った。

遠くを見据えながら右手に強い＞念＜をこめ、内なる魔力を開放し、再び劫火を放った。

……†……

戦闘開始より一時間も経たないうちに勝負は決した。

現在、ゴースティン軍の騎兵は敗走するシベリーへの追撃を行っており、歩兵や砲兵、そして司祭は次なるルドン州攻略のためにジュダ州を北上し始めた。

この戦における勝敗は、損害の規模で決せられるものではなく、シベリー軍の殲滅という目的の達成によってのみ決せられる。シベリー族はその大半が戦闘員であるため、軍の殲滅とはある意味、民族の根絶やしに近いとも言えた。

そして夕刻になり、第四部隊は宿営地へと到着した。

宿営のために必要な設備を積んだ荷馬車や工兵は、司祭や将校らに先立って宿営地に到着しており、既に大半の天幕が張り終えられていた。

五人の司祭は、さながら親征した王族のような扱いである。一人ずつ天幕が与えられ、中に設けられた寝台もしっかりとした造りで清潔なものだった。食事は将校らと同じものであるが、エーヴェル要塞から運ばれたパンや鮮度の保たれた肉や野菜が出された。近く

に川が流れており水の調達が容易であるため、ふんだんに湯を使うことも許されていた。いかに補給路が確保されているとはいえ燃料を無駄に消費するべきではないが、この戦において、重要な役割を果たす兵たちの士気を削ぐことのほうが不利益である。

野営においてルキアが感じた不自由は、せいぜい身の回りの世話をする侍従がいないことぐらいであった。

パンとスープの夕食を終えたルキアは、続きの天幕の奥へと戻り、寝台の上に寝転がった。

腰から下げていた剣を外し、片腕で剣を抱えながら、戦闘の様子を頭に過ぎらせていく。

今からほんの数時間前まで戦場にいたというのに、ルキアには起こった出来事のすべてが遠く、本当にあったことなのかどうかも疑わしく思われた。戦闘中にも感じていたが、まるですべてが夢か幻のようであった。

ルキアが魔道の力で人を殺めたのは今日が初めてだが、彼にはそのことへの感慨がまるでない。戦場には騒がしい音が錯綜していたが、それらが彼の心を乱すことはなく、平静を保ったままだった。

この数日、戦場へと足を踏み入れていくにつれて、人並みの恐怖は感じていたものの、いざ戦闘が始まるとその恐怖は消え去り、迷うことなく敵を葬り去っていた。

剣や銃剣を用いての戦闘ならば、人を殺めた感覚が手に残ったかもしれないが、魔法ならば、あれほどの人を一瞬で殺めてもまったく実感が沸かない。なにより、その瞬間のことをルキアはよく覚えていないのだ。

今日の戦闘において、ルキアは＞神の力＜を二度発動させたが、そのいずれも力を加減することは叶わなかった。一瞬、意識が失われ、気がついたときには目の前に辛うじて人馬の形を留めているものが無数に転がっていただけだった。

泡沫（うたかた）の世界で、屍を跳び越え、さらに屍を積み上げていた。越え切れぬ屍を目にしたとしても、夢の中を浮遊しているように感じたことだろう。

ゴースティン軍が圧倒的な優位に立っている以上、ルキアが戦闘に慣れるころ、既に戦は終結しているに違いない。

ほぼ戦闘が決着したころ、ルキアは馬上より息絶えたシベリーたちを見つめていた。ルキアが劫火で焼いたシベリーたちは、遺体であるかどうかの判別もつかない黒いものと化していたため、銃弾や銃剣で絶命したと思われる敵兵たちを、その瞳に映していた。

一般的に、シベリー族は銀髪に褐色の肌という特徴的な容貌とされているが、ルキアの眼下で折り重なっていた者たちは、シベリーと言えども様々であった。ガレ族とは一目見て異なっているが、肌の色が薄い者もいれば髪が濃い色の者もおり、むしろ銀髪に褐色の肌という典型的なシベリーは一人も見つけることはできず、その数はかなり稀少であるようだった。

ガレ族の台頭により強い迫害が行われるようになって、既に一千年以上経つと言われている。いかにシベリーが閉鎖的な民族であっても、ゴースティンやケーニヒスの者と交わっていく中で、既に本来の形質が失われているのかもしれない。

――敵兵とはいえ、相手は我らと同じ人間だ。

デルタの言葉が脳裏をかすめ、ルキアは剣を抱いたまま寝返りを打つ。師の言葉を頭から追いやるようにシーツに鼻先を埋め、強く瞳を閉じた。

そのとき、厚い天幕の向こうから、ルキアを呼ぶアゼリアの声が響く。

ルキアはうつ伏せていた顔の向きを変え、一体どうかしたのか、と問う。

「あの、エーゼン様がいらっしゃっているのですが……」

とっさに片肘をついて起き上がったものの、ルキアはどう答えるべきか逡巡していた。できることならば、今は誰とも会いたくはない。

前髪をかき上げ、すっきりとしない頭を片手で支える。

「……どうかされたのですか？」

無反応のルキアを訝ったのか、再度、アゼリアから不安げな声がかけられる。

「ああ、わかった。お通ししてくれ」

取り繕った明るい声で応え、ルキアは手にしていたサーベルを枕元に置き、脚を寝台から下ろした。

ややあって、天幕の布が上げられ、エーゼンが中央まで歩み寄った。そしてちらりと天幕の中に視線を馳せ、薄く笑む。

「どうも、戦場に来ているという気分にはなりませんね」

「あれだけ人を殺めておいて、実感がないというのもどうなのでしょうか……」

「砲兵隊の者たちも私たちと同じ心境なのでは？　魔法を放つのは、砲弾を撃っている感覚に近いように思いますよ」

平然と言い放たれて、ルキアは言葉につまる。さすがにそれは違

うのではないかと思いつつも、反論をする気になれなかった。ためらいがちに問う。

「……あの、私になにか御用があったのでは？」

「宿営地に着かれてから、負傷兵の治療に行かれていたとお聞きしましたが？」

ルキアがいびつな笑みを浮かべてうなずくと、エーゼンは労わるような声色で語りかける。

「休んでいらっしゃらなくてよかったのですか？」

「……気が昂ぶっているせいか、疲れをほとんど感じないのです。時間を持て余しているぐらいならば、なにか自分にできることを、と思いまして。幸いなことに負傷者の数はそれほど多くなく、軍医や従軍している司祭もおりましたので、それほど長居はしませんでしたが」

「死者の数も数十名ほどだという話ですね。この規模の戦闘においては異例の数とのことですが、そうでなくては我々が徴兵された意味がありませんからね」

「それならば、私たちは一人の命も失われぬよう努めるべきだったのかもしれませんね」

思わず皮肉っぽい声が出てしまい、ルキアは眉を寄せた。

「……それで、死者への祈りをささげられていたのですか？」

ルキアが瞠目して顔を上げると、エーゼンはわずかに目を細める。

「戦場を去る少し前、戦死した兵の前に立たれているお姿を拝見しました。お気に病まれているのではないかと思ったのですが」

「いえ、そういうわけではありません。ただ、そうするのが私の本来の役割だと……」

ルキアは強く否定しようとしたが、デルタに言われたことを再び思い出し、不自然に言葉を止めた。

戦場から丁重に回収された遺体を前にしたとき、ルキアは、彼らに向けてなにを祈ればよいのかと強い迷いを覚えた。

司祭が徴兵されずともこの戦は起こった。ルキアが王都に残っていたところで、戦の中で失われていく兵たちの運命は変わらなかっただろう。また、ルキアたち司祭が今日の戦にいなかったとしたら、ゴースティン軍の被害が数倍に拡大していたのも事実である。

だが、そのことをもって、自らの行いを正当化することはできなかった。

――お前は信徒らの前でなにを祈るというのだ？

死の苦しみに耐えた者には安息が与えられる。天に召される彼らを祝福の光で照らすべく、心からの祈りを捧げることが司祭の役割である。

しかし、その祈りに用いられる力は、シベリーを殺めたものと同じなのだ。

ルキアがそのまま黙りこんだため、エーゼンは別の話題を振る。

「そうそう、先ほどまで将校を集めての軍議が開かれていたようですよ。知人の将校から聞き及びましたが、予定では、六日早朝にはルドン州軍との戦いに入るとのことです」

当然のように、ルキアたち司祭にその連絡はなく、決定事項につ

いての報告もない。
第四部隊の指揮官であるメフィス少将は長年西方軍に所属していた人物であるが、彼は自身の力を過信しているのか、態度や言葉の端々から、司祭を疎んじているようであった。

ルキアはため息まじりに告げる。

「……あまり、私たちはよく思われてはいないのでしょうね」
「余計なことはするな、指示通りに動け、将軍はそう言いたいのでしょう。まあ、あの方たちの不満はわからないでもないですけどね。西方軍の損害を度外視すれば、司祭の投入などするまでもなかったわけですから。少々不愉快ですが、司祭にすべてを丸投げにされるよりはマシだと思っておきましょう。所詮、我々とて生身の人間……。強い＞念＜をこめるほどに精神力を激しく消耗する以上、次から次へと魔法を放ち続けるのは不可能です。＞神の力＜ならば、なおのことでしょう？」

ルキアは曖昧に微笑みながらうなずいた。

「あなたの疲労は私の比ではないでしょうから、早くお休みになってください。アゼリアが心配しておりましたよ」

最後にそう付け加えて、エーゼンは身をひるがえした。

エーゼンが去った後、ルキアはすぐに寝台の上に身を横たえたが、疲れはさることながら、眠気も感じなかった。かといって思考は正常に働いておらず、深く物事を考える気にならなかった。
顔を横に向けると、襟元から聖イシスのメダルがこぼれ落ちた。

銀のチェーンを指に絡めながら引き出し、イシスの横顔をじっと見つめる。そうしているうちに、白い祭服を血に染めながらヴァーロンの軍勢を屠っていくイシスの姿がぼんやりと頭に浮かんでいった。

（……この戦いは、きっとすぐに終わる）

声には出さず、唇だけを動かす。

ルキアは祈るようにメダルを握りしめたまま、静かに目蓋を閉じた。

……†……

第四部隊はさらに北へと進み、ルドン州を目指した。

行軍速度は初めのころと比べれば少し落ちてきているが、それは軍の士気や疲労によるものではない。六日の深夜より天候が少々悪くなり、今もまた小雨が降っているためである。歩兵や騎馬にそれほど影響はないが、食糧や資材を積んだ荷馬車や騎馬砲兵の引く大砲の車輪がぬかるんだ地面に引っかかり、常時の速度を保つことができなかった。

ただ、補給路がしっかりと確保されているこの戦線において、強硬に軍を進ませて兵の体力と気力を消耗させる必要はない。無理なく進めていけばいいというのが上層部の考えのようであった。

シベリー自治国ルドン州は、ケーニヒスのラウバル湖から流れるマーヴェ川により東西が分かたれており、東西をつなぐ大橋が州内に三つ存在している。

現在、順調に計画が遂行されていれば、第三部隊がルドン州の東へと行軍しているはずである。第四部隊はルドン州の西を攻略した後、ここから北東にあるガイール・ゼシカ大橋を渡り、第三部隊とともに東のルドン州軍と交戦する予定になっている。

金牛宮の月、九日。

西のルドン州軍は、市街の外れから小高い丘の中腹に向けて布陣していた。その数は約一万二千という話であったが、敵側は死角の多い地形である上に霧が出ており、その情報が必ずしも正しいとは言いきれなかった。

ルドン州はファジールに面するシベリー自治州の中でもっとも規模が大きく、駐留する軍も首都バードンに匹敵するものと言われている。一万二千というのはルドン州軍総勢の四分の一程度であり、偵察隊による報告は過小評価であるか、もしくは仮にその数が正しかったとしても、伏兵の存在について考慮する必要があった。

また、敵右翼は三つの堡塁（ほうるい）が築かれた強固な守りであることに加え、前衛には騎兵軍団が二重の戦列を配置していた。ただし、敵左翼には堡塁が築かれておらず、歩兵の戦列が二重に組まれているのみであったため、左翼側から攻めるのが定石であるという判断がなされていた。敵の片翼から攻めていくというのは、ゴースティンにおいて伝統的な戦法でもある。

先日の戦いにより、シベリー軍の持つ小銃はゴースティン軍が有するものより旧式で、射程が短いものであると判明している。ただし、今日は霧のせいで視界に難があるため、少々の射程の問題は意味をなさない。

さらに夜中に降り注いだ雨により地面がぬかるみ、砲兵隊が本来

有している機動性を発揮することができないのは明白だった。

そこでゴースティン軍の砲兵隊は、敵左翼への一斉砲火のため、三十門の大砲を最前列まで牽引して砲撃準備を整えた。そして、大砲の後方には、歩兵により突破口が開いた後に突撃を行うための騎兵部隊を待機させている。

司祭たちは先日の戦いと同じように戦列に加わろうとしたが、交戦が開始されようかという際になって、陸軍大佐が、こう言い放つ。

「しばらく、あなた方は静観しておられればよい」

これは軍議で決せられた作戦だと彼は言ったが、いくつかの面でゴースティンにとって不利な要因があり、予測戦力だけが有利であるすぎない本日の戦いにおいて、これが一体どんな作戦だというのだろうかと、ルキアは強い疑問を抱いた。

上層部の将校たちは先日の圧勝に酔っているのか、それとも、これ以上司祭の力に頼るわけにはいかないという軍人としての誇りが邪魔をしたのか。そのいずれであろうとも、彼らの行動は作戦遂行者として認められたものではなかった。

案の上、大佐の言葉に気を悪くしたアシリングが、苦々しげに吐き捨てる。

「まったく……あの者たちは武勲がほしいだけなのでしょうね」

「どうせ、あとで泣きついてくることになるに決まっています。私たちはせいぜい、敵の砲撃が届かない位置に留まってやることにしましょう」

エーゼンの部下であるオーウェンも、アシリングに賛同し、前衛部隊よりかなり後方に馬を停止させた。エーゼンは彼らの行動を殊

更に肯定しなかったが、諌めることもせず、そのまま事の成り行きを見守るつもりのようだった。

アシリングたちが不愉快に思うのはもっともであるが、能力を買われて戦場に駆り出された以上、ルキアは大佐の指示にそのまま従うことはできかねた。

それゆえ、アゼリアとともに前衛に向かい、そこで待機し、事態が動くのを見計らってから応戦に転じようと考えていた。

霧が晴れるまで待とうとしたのか、戦列が整ってからの約一時間、ゴースティン軍は動こうとしなかった。

時刻が午後一時に差しかかろうとしても霧が完全に晴れることはなく、視界不良のまま、ゴースティン側の砲撃により交戦が開始した。

ゴースティン軍の砲弾が、ルドン州軍左翼の前衛歩兵に向かって次々と撃ちこまれていく。しばらくは両軍の砲弾の撃ち合いが続いたが、ゴースティンの猛攻がシベリーの歩兵をなぎ払っていく一方、敵中央の堡塁からの砲撃は微弱であったため、ゴースティンは前衛の歩兵部隊を前進させ、進路の啓開に努めていった。

ゴースティンの歩兵は陣形をほとんど乱さないまま銃の射程範囲まで前衛を進め、射撃の構えに入る。

そして、シベリーの歩兵に向かって一斉射撃が行われようとしていた。まさにそのとき、先ほどまでほとんど止んでいた敵中央堡塁と敵左翼正面から十字砲火が開始され、砲火をまともに受けた前衛の歩兵が、なす術もなく倒されていった。それを見計らったかのように、丘の斜面に隊列を組んでいたシベリー騎兵部隊が姿を現し、突撃を開始した。

その光景が目に入った瞬間、ルキアとアゼリアは攻撃に転じる時期を悟り、二人はほぼ同時に前方に向かって魔法を放った。アゼリ

アの風の刃とルキアの劫火は、迫り来るシベリーの騎兵を狙ったものだったが、広範囲に散開しながら猛進する騎兵を一度に仕留めることはできなかった。

ジュダ州軍戦でも見られたことだが、シベリーの騎兵は砲撃も銃撃も、さらには魔法でさえも、まるで恐れずに突撃を仕掛けてくる傾向にある。

仕留めそこねたシベリー騎兵は、ゴースティンの歩兵や騎兵の列に突っこみ、砲兵までの距離を一気に縮めていった。歩兵は銃剣での応戦に転じたものの、隊列が乱れたことでその力を充分に発揮することができない。

死角で視認することが叶わなかった敵左翼の後方には、予備戦力とは呼べないほど騎兵が配備されており、敵左翼前方からの砲撃が止むやいなや、シベリー騎兵が斜面を駆け降り、ゴースティン軍へと向かって突き進んできた。

さらに敵右翼の堡塁から放たれた砲弾が唸りを上げながら上空を舞い、地響きとともに前衛部隊を目がけて落下し、あたりには鉄塊でなぎ倒される歩兵や、馬から投げ出される騎兵が続出した。

ルキアは馬を前方へ駆り、突進する騎兵に目がけて再び劫火を放つ。

二つに分かれた炎は数十の騎馬を両側から丸ごと包みこみ、一気に爆発炎上した。既に息絶えた兵と馬がぬかるんだ地に倒れ伏しても、炎は執拗に燃え続け、ばらばらに吹き飛んだ四肢から皮膚や肉を溶かしていった。

しかし、その攻撃によって敵に与えることができた損害は有益と呼ぶにはまったく足らないものだった。

正面から迫り来る騎兵の勢いはまだまだ衰えを知らず、なにより敵軍中央の堡塁からの攻撃は依然として止む気配がない。中央からの砲撃により、ゴースティンの前衛部隊は次々と倒されていく。前衛部隊は、その倒れた兵の上を踏みつけながらも、さらに前進を続けている。

そこでルキアは、なによりも先に中央の堡塁周辺の戦力を殺ぐべきと考え、＞神の力（レガロ）＜を発動させるべく意識を集中させようとしていた。

「――セヴァンス侯！」

近くから聞こえたその声の方向を見やった瞬間、ルキアの瞳に映ったのは、首から上を砲弾で吹き飛ばされたゴースティン将校の姿だった。西方軍の灰色地の軍服が、襟元から徐々に下へと赤く染まっていく様を、ルキアは瞬きひとつせずに見つめることしかできなかった。

あの声の主はどんな顔をしていたのだろうか。

肩章を見れば大尉の階級にあった者だったとわかるが、頭が上手く頭が働かず、それ以外のことはなにもわからない……。

胴のあたりまで血に染まった身体は、平衡感覚を失い、肩を大きく揺らしながら馬上から滑り落ちていった。

地へと崩れた身体は不自然に折れ曲がり、その片足は鐙（あぶみ）に引っかかったままとなっていた。

主を失った軍馬が歩を進めると、頭部のない身体がぬかるみの上を引きずられていく。

馬が方向を変えた弾みで身体が反転した際、鐙に引っかかっていた片足が落下し、あたりに血の混じった泥水が跳ね上がった。

目の前の光景が悪い夢であってくれれば、とルキアは願った。
ふと落とした視線の先には手綱を握る自分の手があり、その指先から二の腕にかけて血の飛沫や小さな肉片らしきものが付着していた。恐る恐る異物感を覚える頬に触れると、ぬるりと指先が滑った。

しばし放心していたルキアだったが、右前方からの猛射により、抗いようのない現実へと引き戻される。

戦列歩兵の指揮を執っていた士官が倒れたことも相まって、最前線は強い混乱に陥っていた。
当然、ルキアもその例外ではなかった。手綱を握る手にほとんど力が入らないのも、爆音が膜を隔てたように聞こえるのもすべて、彼の精神が乱れているからに他ならなかった。それでもルキアは、敵右翼の堡塁からの猛砲火を少しでも抑えるために攻撃を仕掛けようとしたが、そのたびに銃弾や砲撃に阻まれ、思いどおりに力を操ることが叶わなかった。
前衛の隊列の一部は崩壊し、兵たちは、攻撃はおろか防御に転じる隙すらなかった。

自軍後方から強い魔力の波動が迫る。前進した司祭たちが敵中央への一斉攻撃を行ったが、敵左翼の前方からも砲撃が放たれ、シベリー騎兵による一斉銃撃も今まさに開始されようとしていた。

前衛部隊の歩兵・騎兵は、砲撃を避けながら後退する者もいたが、そのほとんどが敵右翼からの砲火から逃れるように東へと壊走していくこととなった。

冷たい雨　（1）

伝令のためにキウロス要塞を発ったエリーヌたち三人の近衛士官は、エーヴェル要塞及び第四部隊へと向かっていた。まず九日の朝にエーヴェル要塞へと着き、その後すぐに第四部隊のもとへと発つ予定である。

九日現在の第四部隊の交戦地は、エーヴェル要塞からほぼ真北に位置しており、宿営地はそれよりも手前であるため、早馬を飛ばせば半日で辿り着ける距離であったが、昨日より雨が強く降り注ぎ、遠くの視界は白んでいる。朝と夜は一気に気温が下がるために羽織っていた外套は、防寒というより雨具としての機能しか果たしていなかった。

同日の午後五時過ぎ、三人の士官は第四部隊の宿営地に辿り着いた。そのころになると雨はほとんど止んでいたが、あたりは雨音の代わりに、なにやら騒がしい物音で満ちあふれていた。

宿営地とはいえ戦場の空気はこういうものなのだろうかとエリーヌは自分を納得させながら、指揮官メフィス少将のいる天幕へと向かった。

「メフィス将軍は、この中におられますか？」

近衛中佐が敬礼する兵に訊ねた瞬間、

「そんなことは言われんでもわかっている！」

天幕の外まで低くかすれた怒声が響き渡った。威圧的な口調から察するに、声の主はメフィスであろう。

「軍議の最中なのですか？」

「ええ、まあ……そのようなところでして……」

中佐の問いかけに、兵は微妙な間と含みを持たせて答えた。なんらかの異変を感じとったのか、中佐は険しい声色で兵に言い放つ。

「それならば、伝令の内容を作戦に考慮していただく必要がございます。至急、将軍にお取次を」

兵が慌てて中へ入っていってから、ややあって、天幕の布が左右に開いた。中へと入った三人は、地図の広げられた机を挟んで、メフィス将軍とその副官である大佐と向かい合った。

「……近衛士官らが直々に出向かれるとはご苦労なことだ。では、その伝令とやらの内容をお聞かせ願おう」

なにやら恐々としているメフィスに対し、近衛中佐が明澄な声ですらすらと告げる。

「八日未明、第三部隊の指揮官よりキウロス要塞へファジールの動きに関する伝令が入りました。この件につき、第四部隊に至急報告せねばならぬと判断し、こちらに参った次第でございます」

「ファジールの動きというのは……？」

「報告の前に、少々お訊ねしたいことがございます」

中佐がきっぱりと言い切ると、メフィスの副官の肩がわずかに揺

れた。副官だけでなく、天幕の端に起立する将校たちもなにやら表情に陰りを見せた。

「我らは伝令に加えて、第四部隊の作戦遂行状況の把握も任務として請け負っております。ジュダ州軍との交戦は早々に決したとの報告が中央司令部に入っておりますが、予定では本日、ルドン州軍と戦を交えるはずであったかと……。それについての説明をお願いできますか？」

「ああ……。早朝からの会戦予定であったが、実際には昼を過ぎてからの会戦となった。ただ、ルドン州軍との決着はまだついておらぬゆえ、そなたら報告することは、なにも……」

「ルドン州軍の規模はバードン州軍に匹敵するという話ですし、これほど早く決したというのならそのほうが驚きます。殿下への報告は、現在の状況についての詳細をお伝えせねばなりませんので、それについての説明をお願いしているのですが」

「いや、だから、それは……」

メフィスの歯切れの悪い言葉に、中佐は眉をひそめる。

「将軍……。先ほど、なにやら言い合う声が聞こえたのですが……。なにか急な事態でも発生しておるのでしょうか？」

その問いにより、将軍はとうとう黙秘を始めた。

苛立ちを見せる中佐に見かねたメフィスの副官が、私から説明いたしますと告げ、目線を机上の木目に固定したまま、たどたどしく現状を説明していく。

それは、耳がおかしくなったのではないかと近衛士官たちが思いたくなるほど、予想の斜め上をいった内容であった。

本日のルドン州軍との交戦において、ゴースティン軍は当初、堡塁のない敵左翼への攻撃を開始したが、それはシベリー側の誘導作戦であったようで、敵右翼と左翼正面からの十字砲火により前衛にいた兵たちに三百を超える死傷者が出た。

また、最前線に大砲を配置していたが、それらの砲はシベリー騎兵の突撃の際に放棄せざるをえなくなったのだという。

さらに、前衛にいた兵が東の湿地へと追い込まれ、彼らは退却できず、依然として行方不明となっているらしい。

「湿地にシベリー兵が潜んでいる可能性があるが、この悪天候であるし、じきに日も暮れる……。追撃の手は止むのではないかと私は思う」

メフィスは副官の説明にそう付け加えたが、それはあまりに希望的観測にすぎるものである。

シベリーはゴースティン兵を捕虜に取る気など毛頭ない。ゴースティンがシベリーに対して行ってきたのと同様に、敗走兵には容赦なく追撃を行い、再戦の機会を永久に奪おうとするだろう。

「……要は、本日のルドン戦において第四部隊は敗走したということなのですね」

近衛大尉が苛立たしげに呟く。

すると、前衛部隊の死傷者はジュダ州軍との戦に比べれば多いというだけで、通常の損失と比すれば最小限に食い止めることができた、とか、三十門の大砲は失われたものの、まだその倍の数を有しているため今後の戦いに影響はない、とか、あまりに酷過ぎる弁解をメフィスは繰り返した。

その言い訳の最中、上官である中佐と大尉の背後に控えていたエ

リーヌは、困惑と怒りの入り混じった視線をメフィスに投げかけていた。

近衛中佐は眉間に皺をますます深く刻んで、メフィスを見やり、憎々しげに問いかける。

「それで、湿地へ追い込まれた兵の数はどれほどなのです？」

「生存していれば、約百五十……といったところだ」

顔をそむけながら言い澱むメフィスに、中佐が鋭く切りこむ。

「では、その百五十名の中にいる高位司祭は何名です？　それほど焦っているからには、司祭が含まれているということなのでしょう？」

それを聞いた途端、エリーヌの背筋が粟立った。中佐の問いを耳にするまで、その可能性に思い至らなかったのだ。悪い予感は急速に募っていく。

「司祭は、一名……」

「どなたです？」

中佐が机に両手を勢いよくつき、メフィスにつめ寄る。エリーヌは祈るような気持ちで強く手を握りしめた。

「セ……セヴァンス侯が……」

メフィスが苦々しげに口を開いた途端、エリーヌは目の前が白んでいくような気分を味わった。

握り締めていた手から力が抜けていき、メフィスを真っ直ぐに見

据えていたはずの視線が、無意識のうちに上下に揺れた。

中佐の隣に控えていた近衛大尉が、もはや我慢の限界といわんばかりに声を荒げる。

「メフィス将軍、あなたは一体なにをされているのです！　一刻も早く救出のための軍を編成なさるべきでありませんか！」

大尉に意見されたことを不愉快に思ったのか、先ほどまで悄然としていたメフィスが勢いを盛り返す。

「じきに日も暮れる上に、あたりは敵兵だらけ……。この状態で、どう軍を動かせというのだ！　司祭一人を救出するためにあの湿地に軍を送りこむなど、あまりにも馬鹿げているだろう！」

「ですから、私たちが出向くと申し上げているではありませんか！」

怒気を孕んだ高い声が響き渡り、一同の目が天幕の入口のほうへと向けられる。

そこには、先ほどの声の主と思われる亜麻色の髪の女司祭と、静謐をたたえた黒髪の司祭の姿があった。彼らが前に進み出ると、天幕の中の空気が張り詰めたものへと変わっていく。

「この雨と視界の悪さでは小銃は役に立たないでしょうし、無用の犠牲を厭われる将軍のお気持ちはわかります。ですから我らがルキア様の救出に参ると申しておるのです」

エーゼンがゆったりとした口調で告げる一方で、アゼリアは優しげな顔立ちに不釣り合いなほどの強い怒りを浮かべながら、メフィスに詰め寄る。

「当主の一大事におめおめと安全な場所にいるわけにはいきません。あなたの許可など私には知ったことではありませんので、今すぐ出立いたします！」

アゼリアの迫力に気圧されたのか、メフィスは吃り出す。

「だ、だから先ほども申したではないか。……き、貴公らを敵地に送りこむのは――」

メフィスの情けない言葉の隙間に、エーゼンの失笑が滑りこむ。

「これ以上司祭の犠牲を出したくないと思われる気持ちはわかりますが、そもそも高位司祭には一人の犠牲も出さぬよう厳命されているはずです。さすがに第四部隊の司祭を全滅させるのは問題でしょうが、ルキア様の他に一人二人の犠牲が増えたところで大差ないでしょう。役に立たぬ大軍を率いて救出に向かうよりは、私とアゼリアの二人で救出に向かうほうが将軍にとってもよほど有益かと思います。ですから将軍、お早くご決断を」

エーゼンがすっとメフィスに冷たい視線を向けたとき、エリーヌは彼をすがるように見上げる。

「あ、あの、司祭殿！　私も連れて行ってはいただけないでしょうか！」

思わず声を張り上げたエリーヌに、二人の上官の目が注がれる。

「少尉、あなたはなにを……」

近衛大尉が呆れたようにエリーヌを見やり、近衛中佐は諭すよう

な口ぶりで告げる。

「我々は殿下のご命により伝令に向かったのですよ。気持ちはわからないではないですが、あなたには近衛士官としての役割があるのです」

「もちろん、それはわかっております。……しかし、このまま中央司令部に戻るなど、とても――」

エリーヌの言葉に、中佐は片手で頭を抱えながら、沈鬱に呻く。

「まあ、たしかに……この状況をそのままミカヤ殿下に報告するというのは少々、いえ、かなり問題でしょうね」

大尉も腕を組みながらそれに続く。

「このままキウロス要塞に帰還しては、殿下は私たちのことを伝書鳩以下だとお怒りになるかもしれませんからね」

「なにを言うのですか、大尉。伝書鳩を馬鹿にするものではありませんよ。軍鳩（ぐんきゅう）のほうが我らよりよほど速く目的地へ着くのですから」

「それなら本当に伝書鳩以下ではないですか……」

そう言い合って、二人の上官は重々しく息を吐いた。

エリーヌは上官たちと同様の考えから、エーゼンに同行を申し出たわけではなかった。専ら、役目放棄と知りながら、ルキアの救出に向かいたいと思った一心での発言だった。

ただ、改めて考えてみると、上官たちの言う通りなのである。第四部隊の敗走に加え、ルキアまで行方不明というこの状況を、そのままミカヤに報告するというのはかなり問題がある。

この宿営地からキウロス要塞へ帰還するには最低でも一日半かか

る。ルキアを含めた百五十もの兵が行方知れずとなって既に四時間が経つが、状況が刻一刻と変化する今の状況をそのまま伝えてもなんの意味もない。むしろ、一刻の猶予も許さないこの状況に立ち会っておきながら、なんら手を打たずに要塞へ戻るほうが役目放棄と呼べるものであろう。

エリーヌが再びエーゼンに声をかけようとすると、彼のほうが先に口を開く。

「別に私はかまいませんよ。ご自分の身だけ守っていただけるのであれば、足手まといにはなりませんからね。……ルキア様のこと、ご心配なのでしょう？」

当たりは柔らかいものの、さらりと厳しい毒の含んでいる言葉だった。なおかつ、反論したくてもできないような威圧的な空気を孕んでいた。

中佐は、やむをえませんね、とエリーヌに許可を与えた。それはまさに苦渋の決断であるという風な声色だった。

エリーヌは上官である中佐と大尉に一礼した後、エーゼンとアゼリアに向かって告げる。

「それでは、一刻を争いますのですぐに出立しましょう」

「――勝手な行動は慎め！　どうするかを決定するのはこの私だ！」

事の成り行きを唖然として見守っていたはずのメフィスが、遅ればせながら、机を叩きながら勢いよく立ち上がった。その怒声が放たれたことにより、一同はやっとメフィスの存在を思い出すことができた。

しかし、エリーヌたちにとって、メフィスなど既に無用の人と成

り果てている。第四部隊の総責任者が四時間かけても決することができなかった方針を、近衛と司祭がものの五分で組み立て、それがすぐに決行されようとしているのだ。

「しかしメフィス将軍、他に取りうる策を提案することはできない、かといって、我らの策に許可は出せないでは、こちらとしても……」

中佐が呆れ果てたように告げると、その態度に気を悪くしたメフィスは、再び意味のない怒声を張り上げる。

「だから今は策を練っているところなのだ。貴様らも軍人ならば、上官の指示に従え！」

上官の指示、とはいうものの、西方軍と近衛では管轄が異なるため、いかに陸軍における階級が上だとしてもメフィス少将の指示に近衛中佐が従う必要はない。おそらくメフィスは頭に血が上っているためにそのことを失念しているのだろう。

そもそも、四時間かかって策が浮かばないならば、一晩考えても結果は同じだろう。メフィスは、決断力もないくせに権力だけは振りかざすという、上官としては非常に厄介な人物である。

エリーヌが胸中でそう毒づいた途端、鋭利な声が飛ぶ。

「あいにくと、私は軍人ではありませんのでね」

エーゼンは目を鋭く細めてメフィスを見やる。

「仮に軍人であったとしても、あのような見え見えの誘導に乗せられる指揮官には従えませんよ」

「なにをっ……！　貴公にはあれが初めから奴らの誘導だとわかっ

ていたとでも言うのか！　後からではどうとでも言えるものだ！」
「失策の言い訳は後でなさってください」
冷たく言い放ち、机から身を乗り出しているメフィスへとにじり寄る。
「お忘れになっていませんか？　ルキア様は、高位司祭の中でもっとも失われてはならぬ方……。この件、あなたはミカヤ殿下にどう報告なさるおつもりなのですか？　あなたが保身に走れば走るほど、あなたの首は胴から離れていくことになると思いますよ」
エリーヌは、エーゼンとメフィスのやり取りを呆然と見つめていた。仮にも司祭ともあろう者の言葉とは思えないものであった。
エーゼンは何年か前に宮廷司祭であったため、エリーヌはエーゼンのことを見知っていたが、そのころの彼はいつも柔和に笑んでいたため、優しい司祭だと思っていた。よもや、一度（ひとたび）口を開けば毒矢を吐き出す人物だと思いもしなかった。
とはいえ、この場でもっとも頼りになりそうなのは、この黒髪の司祭であるに違いなかった。
「御身大事なのでしょう？　ならば、あなたのなされるべきことはひとつです」
エーゼンはメフィスに有無を言わせないほど凄絶な笑みを向け、了承を取りつけた。

冷たい雨　（2）

薄闇が徐々に濃くなっていくころ、木陰に身を潜めたルキアは、恐れとともに苛立ちを募らせていた。

第四部隊の最前線にいた兵の一部は、東の湿地へと誘い込まれていた。敵左翼正面と中央からの猛攻から逃れるには、その先が湿地であろうと東へと向かわざるをえなかったのだ。

部隊を分断され、敗走せざるをえなくなったとしても、敵の攻撃さえ止めば南西の陣地まで戻ることも可能だと兵たちは思っていた。

しかし、湿地にはシベリー軍が待ちかまえており、ゴースティン軍は追撃のために湿地へ向かったシベリー軍との挟み撃ちに遭うことになった。湿地ではただでさえ馬が泥や水に足を取られ、騎兵は不利となる。地の利はシベリー側にあることを忘れ、自分たちの力を過信したことが仇となったのだ。

悪いことは重なるもので、突発的な豪雨により西に流れるマーヴェ川が氾濫したため、湿地には足首の高さまで水が浸っていった。加えて、霧が深く立ちこめ、視界が悪く、竜騎兵の小銃はまるで戦力にならなかった。

この豪雨はシベリー兵にとっても予想外であったが、あらかじめ隊列を整然と組んでいる彼らと、なんの準備もなく散り散りに湿地へ迷いこんだゴースティン兵とでは歴然とした差があった。騎兵は銃を放つことは叶わず、逃げ惑いながら敵兵に銃剣で応戦することが関の山だった。ルキアは何度も魔法を放とうとしたものの、その

うち発動させることができたのは二度だけで、それもほとんど＞念＜を集中させることはできず、小銃の射程外に逃れることを優先した。

このような混戦になるなど、ルキアは予想もしていなかった。銃弾と剣の入り乱れる中、どれほど敵を駆逐することができたのかもわからない。周囲を見渡しても、自軍の兵らしき者は見当たらず、自身の置かれている状況を判断することはできなかった。

早くこの湿地を抜け、第四部隊の陣地へと辿り着かねばならないが、その方向がまったく掴めない。なんとか木立に辿り着き、身を隠したものの、その必要がないほどあたりは霧に包まれており、敵も味方もその姿を見ることが叶わない。

ルキアは懐を探り、時計を取り出そうとしたが、落馬の衝撃で落としたことに気づいた。

先ほどまでなんとか視界は確保されていたが、今では完全に陽が落ちている。時間の経過がまるでわからなくなり、そのことは強い恐怖へとつながった。

苛立ちを抑えきれず、こぶしを強く握りしめた。

その途端、腹部が鋭く痛む。

この木立の中へ逃げこむ途中、ルキアは敵の銃剣をまともに受けた。とっさに身を捩ったが間に合わなかった。精神力を消耗したために注意が散漫になっていたのだ。

傷は治癒魔法で大方塞いだものの、まだ腹部には違和感が残っている。脈動する痛みを抑えんと腹をさすっていると、その手が腰に下げたサーベルに触れた。

戦には似つかわしくないほど過剰な装飾が施された剣。これこそが、今もっとも彼を助ける武器となるのだ。

ルキアはぼんやりと紋章のインタリオをなぞりながら、わずかに

刀身を引き抜く。

先ほど、ルキアは初めてこの剣を振るった。ただ無我夢中で、敵の頸部を突き刺した。子供のころから懸命に剣の鍛錬を積んできたにもかかわらず、冷静さを欠く実戦ではまったくと言っていいほど思う通りに剣を振るうことができなかった。そもそも、接近戦に持ち込まれたら司祭にはなす術がない。それは初めからわかっていたが、戦場に出て十日近く経ってやっと、そのことを思い知ることになったのだ。

――私は神など信じぬ。

ふと、懐かしい声がルキアの頭を過ぎる。それは彼が幼いころ、ミカヤから散々聞かされてきた言葉であった。ミカヤがそう口にするたびに、ルキアは幼い王太子をたしなめていたものだった。しかし、いざ運に見放された状況に置かれると、その言葉に同意したくもなる。

とはいえ、このような殺戮行為に神が味方などされるわけがなく、彼の身に降りかかった災厄はまさに天罰と呼ぶにふさわしい。

――必ず生きて戻ってこい。

はたして、その命令を守ることはできるのだろうかとルキアは朦朧とする頭で考えた。

ほんの数時間前、自軍の兵が敵の砲弾で次々となぎ倒されていった。戦いの最中はいろんな感覚が麻痺していたためにルキアは危機意識すら持てていなかったが、あの中に彼自身がいたとしてもなんら不思議ではなかった。

湿地に追い込まれた他の兵士たちのことを想う。

雨の勢いはだいぶ弱まっているが、夜になると一気に気温が下がり、じっとしているだけでも濡れた身体からどんどん体力が奪われ

ていく。深い霧と暗闇に敵の気配も味方の気配も遮られ、冷静な思考も閉ざされていく。

ルキアは自分の歯がカタカタと鳴る音を聞いたが、これは寒さのせいなのだ、と思いこもうとしていた。恐怖によるものであるなど、絶対に認めたくなかったのだ。

また、じわじわと傷が疼き始める。

ルキアは詰襟を開け、いつも首に下げているメダルを取り出した。チェーンを指に絡め、聖イシスの横顔に口づける。

助かりたい、そんな考えが頭を浮かび、メダルを握る手に力をこめる。そう願うことすら、神への背信であるとさえ感じた。ルキアは自虐の中で、恐れと苛立ちを沈めようとしていた。

柔らかな雨粒がルキアの頬を打つ。彼はしばらく意識を失っていたが、わずかに耳をかすめる馬のいななきで目を覚ました。

敵か。味方か。主を失った馬が戦場をさまよっているだけか。

木立の幹に寄りかかりながら立ち上がり、冷え切った指で剣の柄を強く握った。

馬蹄と水の飛び散る音が徐々に迫ってきたとき、ルキアは剣を抜き、木立の陰から飛び出した。馬は、飛沫を散らせて二、三度足踏みをしたのち、ルキアのほうへゆっくりと歩を進めてきた。

淡い角灯の光が、雨粒の中できらきらと拡散し、ルキアは思わず目を細めた。

馬は二頭いた。そのうち一頭には馬上に人影が見えたが、もう一方には誰もいなかった。

徐々に光に慣れた目を凝らす。闇に浮かび上がる人影は小さかった。とても屈強なシベリー兵とは思えないほどであった。

ルキアはかすれた声を絞り出す。

「……なぜ、あなたがここにいる？」

「殿下からの伝令を受けて、第四部隊へ向かったら、あなたの行方が知れないと聞いたから、それで……」

エリーヌが途切れ途切れに答えると、ルキアは剣を納めて彼女を見上げた。

「伝令に向かったのであれば、すぐに中央司令部へ戻り、殿下に結果を奏上すべきだろう。それなのに、あなたという人は、なぜこんな勝手なことを……」

他に言いたい言葉はあった。しかし、口をついて出てくるものは、ルキアの意思に反しているものばかりだった。

エリーヌが馬から降り、うつむいたままのルキアの前に立ったとき、再び複数の馬蹄の音と高い声が後方から聞こえる。

ルキアがはっと顔を上げると、二つの灯りがあたりを照らした。

「ルキア様！　ああ、ご無事でいらしたのですね……！」

馬から飛び降り、駆け寄ってきた女性の姿にルキアは瞠目する。

「アゼリア……それにサルファ殿……。どうして……？」

エーゼンは濡れ髪をかき上げながら、馬上からルキアを見下ろす。

「メフィス将軍が保身のために賭けに出た結果ですよ。ただ、説得

に手間取ったせいで、救出に参るのが遅くなってしまいました。本当に、ご無事でなによりです」

ルキアは混乱をなんとか抑え、三人を見つめる。

助けがくるなど思ってもいなかったルキアは、自分の目の前の光景を信じることができなかった。しかし、頬を打つ雨はたしかな冷たさをルキアに伝えている。

「あなた方は、まさか三人だけで？」

「ええ」

ルキアはエーゼンを見やり、すがるように問う。

「湿地に追い込まれた兵士は私の他にもたくさんいるはずですが、彼らはどうなって――」

「救出命令が出ているのはルキア様だけなんです」

アゼリアが沈鬱そうに眉を寄せてルキアに告げた。

「なぜ、そんな……」

吐息のような声でルキアが問うと、エーゼンがアゼリアの言葉を引き継ぐ。

「要は、高位司祭が一人でも失われることがあれば指揮官の首が飛ぶのです。兵士の犠牲が一千人に上ろうとも、将軍には一切の処分がなされないでしょうが、もしあなたの身になにか起こった場合、将軍は降等処分ではすまないでしょう。ですから私たちをここへ遣ったのです」

馬鹿な、とルキアはエーゼンの言葉を遮る。

「将軍はなにを考えておられるのだ。司祭を敵兵のあふれるこの地へ遣ったりすれば、なおのこと事態が悪化するやもしれないというのに……！」

「この天候と暗闇の中、大軍を遣っても、いらぬ犠牲が増えるだけのことです。私たちは雨の中であろうと暗闇であろうと、ある程度戦えますから、あなたを救出できる可能性の高いほうに賭けざるをえなかったのでしょうね」

「それならばエリーヌはどうして……？」

ルキアが問いかけると、エリーヌは決まりが悪そうに顔をそむけた。微妙な空気の漂う二人の間に、アゼリアがためらいがちに口を挟む。

「あの、エリーヌ様はともに伝令に訪れた近衛中佐殿の了承は得ておられますから……」

アゼリアは妙に含んだ物言いをした。話を総合すると、上官である近衛中佐はエリーヌの行動に許可を与えたものの、メフィス少将はそれに積極的な許可を与えることはせず、黙認の姿勢を取った、ということである。

エーゼンはうんざりしたように息を吐く。

「もし私たちの身になにかあれば、将軍は私たちが無断で湿地に向かったと報告するかもしれません。無事に戻ったならば、自らの采配の賜物だとでも言い出すのでしょうね。……まあ、私たちとしても無事に戻ることができれば、戦後あの者がどうなろうと知ったことではありませんがね」

苦笑を噛み殺しながらエーゼンは続ける。

「ラウルやオーウェンも連れてこようかと思いましたが、さすがに司祭すべてを敵地に遣るのは上層部も渋ったでしょうから諦めました。結果として、数人で動いたことは良かったと思っています。交戦地付近にはシベリー兵がまだ多くおりましたから、国軍の騎兵を大勢引き連れて動けばシベリー兵を回避することができずに混戦になったことでしょう」

陽が落ちてから第四部隊の陣地を出立した三人は、ルドン州軍と交戦した地へと向かい、そこから湿地へと入る経路を選んだ。

当然、シベリーはゴースティンの動きを警戒し、その周辺には兵を駐留させていたのだが、エーゼンとアゼリアはそれを極力避けつつも、必要に応じて魔法で蹴散らし、湿地へと一気に駆け抜けた。湿地に入ってからはシベリー兵と遭遇することはなかったが、水に浸ってしまった草地や点在している沼地のせいで速く馬を駆るのは難儀であった、とエーゼンは語る。

ルキアは足元に目をやり、ふと思う。

豪雨のために草地がうっすらと水に浸かっており、この湿地には道と呼べるようなものはない。

ルキア自身、シベリー兵から夢中で逃げたため、自分がどのようにしてここまで進んできたのかもわからないのだ。

「それにしても、あなた方は一体どうやってここまで……？」

「それは、その馬が勝手に……」

ルキアの問いに、エリーヌは連れていた馬の手綱を引いた。

薄闇の中でとらえることのできた白い軍馬は、たしかにルキアの乗っていたものだった。敵に傷を負わされたときに落馬し、そこか

ら戦いながら逃げたためにはぐれたままだったのだ。

「波動のおかげですよ」

ルキアが馬に手を伸ばそうとすると、エーゼンが声をかける。

「まずはあなたの魔力の波動を辿って、おおまかな方向を掴んだのです。つまり、司祭同士でなければ見つけることはできなかったでしょう。……ただ、あなたも我々も精神力をほとんど使い果たしているせいか、微弱な波動しか感じることができませんでした。ですから、その軍馬を見つけなければ、あなたと落ち合うことはできなかったかもしれませんね」

エーゼンは穏やかに目を細めて馬を見やる。

「その馬、まっすぐにあなたがいるほうへ向かっていったのですよ。なにか感じるものがあったのでしょうか……。人よりも動物のほうが第六感に優れているとよく言われますが、それは本当なのかもしれませんね」

「そう、だったのですか……」

ルキアは馬に近寄り、丹念に馬の脚や胴を見て回ったが、目立った怪我はしていないようだった。ルキアは濡れたたてがみを撫でて、生きていてくれたことへの感謝を示した。そして、彼らをここまで導いてきてくれたことについても。

エリーヌたちは何事もなくルキアと落ち合うことができたからよかったものの、もし彼らが敵陣に足を踏み入れてしまっていたら大変なことになっていた。エーゼンとアゼリアの放つ魔力の波動はたしかに弱まっており、ここに辿り着くまでにだいぶ魔力を消耗した

のがわかる。シベリー族は気の荒い民族であり、この状況下において、敵と見なせば容赦などしないだろう。ルキアを刺したシベリー兵の瞳には、強い憎しみがこもっていた。

「これはルキアのでしょう？　鐙（あぶみ）に引っかかっていたのだけれど……」

エリーヌが差し出したのは銀の懐中時計だった。上蓋に獅子と薔薇の紋章が彫られていることから、ルキアが落としたものに間違いない。

「ああ、すまない」

ルキアがそれを受け取ろうと左手を伸ばしたとき、エリーヌの視線がルキアの右脇腹に注がれる。

「もしかして、怪我を？」

ルキアがずっと庇うように押さえていたため、不審に思ったのだろう。ルキアはとっさに腹部を押さえていた手を下ろし、抑揚のない声でに告げる。

「ああ。だが、もう傷は塞いだ。かすり傷のようなものだ」

「あなたはどうしてそういう嘘を……！」

「傷を塞いだのは本当だ」

ルキアは強く言い切り、その話を切り上げた。今はとても押し問答を続ける気力などなかったのだ。腹部の痛みは徐々に強くなっているように思われたが、ルキアはそれを気のせいだと思いこむことにした。

懐中時計を開き、時間を確認する。

「もう、四時なのか……」

ルキアが呟くと、エリーヌはさっと顔色を変え、声を乱す。

「ルキア、八日に第三部隊からの伝令がキウロス要塞に届きました。アパス州の占領軍が、ルドンの北中部でファジールの軍隊を見たと」

「ファジールが動いたのか！」

ルキアは驚いてエリーヌを見やる。

「それはたしかな情報なのか？　もちろんファジールの動きは予想されていたことではあるが、少々早すぎるのではないか？」

「たしかに早すぎますが、いくらなんでもシベリーとファジール軍を間違えるわけがない。偵察隊の報告を聞く限りでは、ファジール軍がシベリーへの援軍なのか、ゴースティンに対する牽制のつもりなのかは判然としないようですが、この状況では援軍であると考えておいたほうがいいでしょう。甘く見て、足元を掬われるよりは……」

援軍であるとするならば、この戦がゴースティンとシベリーの間だけで収束する可能性は潰えたも同然である。開戦前は閣僚も上級将校もケーニヒスの動きを殊に気にしていた。ファジールのほうが先に動くなど、どれほどの者が予測していただろうか。

「ファジール軍が南下すれば、第四部隊がまっさきに交戦する可能性が高いと偵察隊の者が話していました。ファジール軍のとる行路は、既にゴースティンが落としたアパス州ではなくルドン州を経由しようとするのが当然であるから、と。この報告が中央司令部に入

ってから、既に二日が経ちます……。だから、早くここから抜けて本隊と合流しなければ危険です。ただでさえ、ルドン西のシベリーとは再び交戦になるのですから」

エリーヌの話を聞き、ルキアは眉を寄せたまま声を絞り出す。

「たしかに、できる限り早く湿地を抜けたほうがよいだろう。ただ、陽が昇り始めるまでは動くべきではないと思う。目印になるものがなにもないし、方向がまったくわからない」

「そうですね、我々はあなたの波動を辿ってここまできただけですし、この周辺の地理などまったくわかりませんからね」

エーゼンの言葉にアゼリアが続く。

「せめて夜が明けるまでは待つべきでしょう。といっても、あと一時間ぐらいでしょうし」

ルキアは三人を見つめながら告げる。

「では、夜明けを待ち、このまま南へ突っ切ることにしよう。下手に西に向かうと、再びルドン州軍の挟み撃ちに遭う可能性もあるだろう。ここから直接エーヴェル要塞へ向かうとなると、かなり時間がかかってしまうが、それが一番安全だと思う。要塞までの間には自軍の警戒陣地もあるだろうから、そこまで辿り着くことができれば……」

ルキアは星ひとつ見えない空を見上げ、顔に降りかかる雨粒を浴びながら、深く息を吐く。そしてエリーヌを見やり、感慨深げに柔く微笑んだ。

「散々な初陣になったものだな。私も、あなたも」

……†……

四人は木立に身を潜め、時が流れるのを待った。

闇が薄く溶け始める。明け方になって雨の勢いは若干強まり、霧もまだ残っているものの、やっと方向が掴めるようになった。

吸いこむ空気は冷たく澄んでいて、心地良い緊張が全身を包んでいる。

ルキアは馬に跨り、隣にいるエリーヌと向き合う。

「魔道の力というのは無尽蔵のものではない。強い力を放てば、そのぶん精神力も体力も消耗する。サルファ殿もアゼリアも昨夜までにかなりの魔力を消耗しているだろう。私の力ももうそれほど当てにはできないと思う。……すまないが、なるべく自分の身は自分で守ってくれ」

「言われずとも、初めからそのつもりです」

エリーヌは昔から意地を張るときに見せる顔をルキアに向けた。

ルキアはこれまで一度もエリーヌの強がり当てにしてこなかったが、今はそれを信じるしかない。

前方のエーゼンとアゼリアにも告げる。

「決して、敵に深追いをしてはならない。目的は自軍に辿り着くことだけなのだから」

「……了解いたしました」

アゼリアがそう答え、エーゼンは薄く笑んだ。

ルキアは左手で手綱を握り、深い呼吸を二度繰り返す。

「では、行こう……」

四人は同時に手綱を引き、一気に駆け出した。丈の長い草を蹴散らし、幅のある沼を飛び越えると、着地とともに水飛沫が上がる。

馬を疾駆させる四人は、薄い霧にかすむ視線の先に、あざやかな衣を身につけた集団をとらえた。その姿が徐々に明らかとなっていく。浅黒い肌に、茶や金の髪。臙脂に藍、濃緑色の巻衣。見まごうことなくシベリー兵である。

その数は約三十。武器は銃剣。すべて歩兵。

最低でも半数は仕留める必要がある。

アゼリアとエーゼンが風の刃を放つ。半数近くの敵兵は、全身を刃で切り刻まれながら、冷たい草地の上へと吹き飛ばされた。シベリーの引きつれた叫び声に、エリーヌの放った短銃の音が重なる。剣を握る腕を銃弾で撃ち抜かれたシベリーは地に這いつくばりながら呻き声を上げた。

ルキアは馬を加速させながら剣を抜き、銃剣を向けるシベリーの上腕部を一気に貫く。肉を引き裂く感覚が手に伝わったのも束の間、すぐに剣を引き抜き、残りの者の肩口を切り裂いた。

ひたすらアズーラ平原へと向かう四人の背後から、数発の乾いた銃撃音が鳴り響く。まだ銃を放てる兵がいたのか、とルキアは頭の隅で考えるが、己の手を見やった瞬間、その思考はすぐに切り替わる。

ルキアの手には赤い粒が飛散していた。無論、それは彼自身の血ではなく、先ほど切り捨てたシベリー兵のものである。剣を納めることをせず、手綱と柄を一緒に握ったまま馬を走らせていたために、次第に血が刃を伝い、振動で手にまで飛び散ったのだ。

ルキアは手綱を握る手にさらなる力を込め、、馬を先へ先へと進ませる。血など、すぐに雨が洗い流してくれるだろう。

再び沼を飛び越えたころ、突如、ルキアは腹部に鋭い痛みが走るのを感じた。剣を強く振り、なおかつ、馬上で激しい揺れを受けたために昨夜の傷が開いてきたのだ。

奥歯を噛みしめる。指に不自然なほど力をこめ、痛みに耐える。

湿地はまだ眼前に広がっているが、少し馬を駆ける速度を弱め、後ろを振り返った。そこにはエリーヌの険しい顔があり、ルキアは安堵の息を漏らす。

「エリーヌ、怪我はないか？」

横に並んだエリーヌが眉を寄せた。

「私のことなど放っておけばいいでしょう。それよりもルキアのほうが――」

「あなたが無事ならば、それでいい」

ルキアは強く言い切り、馬を駆る速度を上げた。

太陽は徐々にその輝きを増していき、草地から飛び散る滴に煌めきを与えている。あまりに幻想的で雄大な景色を瞳に映しているうちに、ルキアの意識は泡沫（うたかた）の中へと沈む。

昨日ルキアは、首から上を砲弾で吹き飛ばされ、軍服を血に染めながら馬から転がり落ちる士官の姿を目にした。手や顔に付着した

血の感触を、雨は洗い流してはくれなかった。そして、敵の刃を受け、夥しく流れる己の血を見た。激しい痛みと寒さに耐えんと、必死に歯を食いしばっていた。それらはルキアを泡沫の世界から容赦なく引きずり出したが、今、彼の眼前に広がる現実は、夢と大差ないものだった。

そんな空想に囚われていたのも束の間、前方になにやら白い集団をとらえることができた。それは、先ほどのシベリー兵と比較にならない規模で、しかも騎兵であった。

四人は馬を止め、その様子をうかがう。

「……あの白い隊服は、ファジールの竜騎兵です」

単眼鏡をのぞいたエリーヌが、引きつれた声で告げると、エーゼンは半ば諦めたような笑いを漏らす。

「今度はガレ族が相手、というわけですか……」

その数はざっと見たところ百はゆうに超えている。いや、二百はいるだろうか。

ファジールとルドン州の国境にはファジール軍の駐屯地が置かれている。眼前に立ち並ぶ軍は、その駐屯地から湿地を南下してきたのだろうか。ファジール軍が今ここにいるということは、数日前には国境の駐屯地を発っていたということになる。

「もしかしたら、ルドン州の東部を南下して、ガイール・ゼシカ大橋を渡って西にやってきたのかもしれません」

エリーヌは気落ちした声で呟いた。

ルドン州東部は、まだ第三部隊による制圧が行われていない。ファジール軍がゴースティンの目につかぬよう、ガイール・ゼシカ大橋を渡ってルドン州西部に入り、敢えて湿地を行軍する可能性も考慮するべきであったのだ。

エーゼンもアゼリアも、さすがに疲労の色は隠せていない。彼らは昨夕よりシベリー兵が潜む湿地に入り、雨が降り注ぐ中で馬を走らせ、神経をすり減らしながら何度も魔法を放ってきたのだから無理もない。加えて、昨日のルドン州軍との戦いにおいてもその力を用いている。

ファジール兵もルキアたちの様子に気づいたようであった。しかし、たかが四名の騎兵を彼らはどう見るのだろうか。

ファジールにはゴースティン軍がルドリア教の司祭の力を戦力としていることまで伝わってはいないはずだが、遠目に見ても、ルキアたち四人がシベリーに見えることはないだろう。司祭の身につけている軍服は珍しいものであるが、軍服に黒を採用しているのは周辺諸国においてゴースティンだけである。また、エリーヌの軍服を見ればゴースティンの近衛士官であることは一目でわかる。

ファジール兵の停止している位置は、ぎりぎり小銃の射程範囲外なのだろう。前列の騎兵は既に小銃を構えており、これ以上前に出れば一斉放射を始めるつもりに違いない。

ルキアは思わず息を呑む。

開いた傷の痛みは急速に増しており、手綱を握る手すら痺れを伴っていた。こんな状態で、ファジールの正規兵とまともにやり合うわけにはいかない。

肉体は、もはや戦闘に耐えることはできないほどに衰弱している。それでも、魔道の力を用いればこの窮地を打破できるかもしれない。

一度に仕留めきれなければ、この近距離ではすぐに銃弾を浴びることになる。

それならば、とルキアは右手を胸に当て、＞念＜を集中させた。ここを突破しない限り、エーヴェル要塞に辿り着くことはできない。ここで力を使い果たしてもかまわないのならば、最後の一撃に賭けるしかないだろう。

ルキアの肌がざわりと粟立ち、右の手のひらに小さな赤い玉が生まれた。血が沸き、頭の中が真っ白になるような心地に包まれる。手の中の魔力の塊は＞念＜をこめるごとに肥大し、強い光を放ち始めた。

その燦然と輝く炎は、徐々に鳥を象り始め、ルキアの手が指し示すままにファジール兵へと悠然と向かっていった。

再び地上にその姿を現したベリアザーベルは、広げた両翼で敵兵を包みこむ。縦横に炎が行き交い、炎の爆ぜる音と無数の悲鳴が混じり合った。

「……だいぶ、手加減されたのですね。初戦で見た＞神の力＜はこの数倍の威力はあったように思いましたが」

エーゼンの呟きに、ルキアは炎が敵を呑みこんでいくのを見届けながら、苦笑を漏らした。

これは手加減などではない。今はもう、これが精一杯だったのだ。強い疲労が沸き上がる。この疲労は腹部の痛みに耐えているせいではなく、専ら精神の消耗により生じるもののようであった。

ルキアは気を取りなすように微笑み、エリーヌに先を促す。

「あと少しで湿地を抜ける。早く要塞へ向かおう」

エリーヌは青褪めた顔をしたまま、なかなか馬を走らせようとしない。なにかあったのかとルキアは不審に思うが、すぐその理由に気づく。

エーゼンやアゼリアの放つ風の刃で切り裂かれた敵兵は、剣で切り裂かれたり、銃弾を浴びたものとそう変わらない。だが、ルキアの放った炎はそれらとはまるで違う。

エリーヌは、魔法で人を殺めるのを見たことはあっても、炎に巻かれ悲鳴を上げながら逃げ惑う人間を見たのは初めてなのだ。王太子付きの近衛にいれば、剣で暴漢を切るような機会すらない。なにより、今のように人外の力で多数の命を奪う様を見る機会など、この大陸のどの軍隊に属していようともありはしない。

数日前、ルキアは初めて魔法を用いて人を手にかけたが、それにはたった一日で慣れてしまった。剣を用い、その手に肉を引き裂く感覚を味わうことにも、もはや抵抗は感じていない。

立った数日で変わるものだ、とルキアは自虐を口元に浮かべてエリーヌに問う。

「怖いか？」

沈黙が続く間、空から落ちる雨が炎を引かせていく。それとともに、奇怪に折れ曲がった黒い死体が焦土に伏せられていく。

「くだらないことを……。それよりも先を急ぐべきでしょう」

エリーヌはそう言い捨てて馬を駆る。ファジール兵の屍の山の前にさしかかったとき、彼女はしばしそこで立ち止まり、視線を落としていた。ルキアが声をかけると、顔をそむけ、迂回をしようと手綱を引く。

そのとき、山の一角が動いた。それはほんの一瞬の出来事だった。

仕留め切れなかったファジール兵の銃剣が、エリーヌの乗っていた馬の脚を切り裂いた。馬が大きく暴れたために、エリーヌは地面に叩きつけられた。それでも素早く短銃を懐から手に取り、引き金を引いたが、弾は剣の柄に当たり、高い音を立てて跳ね返った。

敵兵は無残に焼け爛れた皮膚から血を垂れ流しながらも、怯むことなく、まっすぐに剣先をエリーヌに向け、彼女の右肩を切り裂いた。

エリーヌの悲鳴が澄んだ空気中に響き渡る。

短銃は泥水の中へ沈み、鮮血がその上へと滴り落ちていく。

「早く剣を取れ！」

ルキアは馬を走らせ声の限り叫んだが、エリーヌは肩を押さえたまま、身を固くしている。敵兵の銃剣が再び振り上げられても、エリーヌはまだ剣を抜こうとしない。

あの態勢では逃げ場がない。アゼリアが魔力を高めようとしたが、今から魔法を繰り出しても間に合わない。

ルキアはさらに馬を加速させ、自分の剣を男に目がけて投げつけた。

男の悲鳴が上がる。

剣の切っ先は男の胴のあたりをかすめて地に落ち、泥水を跳ね上がらせた。

敵兵がひるんだ隙に、ルキアは馬から飛び降りてエリーヌを引き寄せ、敵兵が手にしていた銃剣をもって、その息の根を止めた。

泥水と血を飛び散らせながら、ファジール兵の男は、今度こそ地に横たわった。

ルキアは深く安堵の息を吐き、泥水の中へと落ちたサーベルを拾い上げた。神に祈りを捧げるようにインタリオをなぞり、刀身にこびりついた血を払いながら、剣を納めた。

腕の中で抱き止めていたエリーヌを見つめ、静かに問う。

「……大丈夫か？」

エリーヌはなにも答えず、身体を小刻みに震わせていた。出血からすると、彼女の傷はそれほど深くないと思われたが、この場合は傷の深さの問題ではないだろう。

エリーヌの髪や頬には敵兵から流れ出た血が滴り落ちていた。傍に倒れている男に改めて目を落としたとき、その凄まじい形相にルキアは思わず顔を引きつらせた。

「ルキア様、お急ぎを……。この場にこれ以上留まるのは危険でございます」

馬上から投げかけられたアゼリアの言葉はもっともだった。

おそらく、先ほどの竜騎兵は偵察部隊だったのだろう。あの数を切り抜けられたことだけでも上出来であるが、結果として、一人も残さずに仕留めることができたのはよかった。ただし、ファジール軍が進軍しており、いつ本隊が現れるとも限らない以上、まだ油断はできない。

エリーヌの乗っていた馬は脚をやられてしまったため、ルキアは自分の馬にエリーヌを乗せ、彼女を抱いたまま馬を走らせる。幸いなことに、そこからはシベリー軍と鉢合わせることもなく、三騎はアズーラ平原へと抜けることができた。

ルキアはかすむ目に力をこめ、平原を見渡す。

この一帯に、敵兵の気配は感じられない。エーヴェル要塞まではまだ距離があるが、その間に点在しているゴースティン軍の警戒陣地までは、あと数時間で辿り着けるはずである。

やっと悪夢から向け出すことができた、とルキアが胸を撫で下ろすと、小さな呻き声が腕の中から聞こえる。思わずエリーヌを強く抱き寄せたとき、どちらのものとも知れない血の臭いが彼の鼻をかすめた。

冷たい雨　（2）（後書き）

【補足説明】

この話は現実世界の十八世紀ヨーロッパをモデルにしています。
戦闘で使用されている小銃はマスケット銃のことで、前装式で連射はできません。
また、マッチロック式ではなく、フリントロック式であり、天候にはそれほど左右されず、雨天時でも問題なく撃てます。
ただ、ゲリラ豪雨の中でも銃が撃てるか、となると微妙なところだと思います。完全に湿気てしまうと不発になるでしょう。

作中で細かい説明はしていないのですが、ゴースティンは銃の開発に力を入れており、従来のものよりも飛距離と命中精度が飛躍的に向上した“ミニエー銃”らしきものが一部に出回っているという設定にしています（現実世界では十九世紀半ばに登場する銃です）。
ただ、軍で制式採用はまだされていないので、上級将校が開発途中のものを使っているという感じです。もちろん、戦列歩兵の兵士は使っていません。

エリーヌの使用している短銃は、リボルバー式で連射が可能です。
これも軍が制式採用しているものではなく、大貴族の将校が特別に作らせて所持している高価な代物です。

夢の跡

静かだった。目覚めたルキアの目には闇しか映らず、今が夜なのだと知る。しかし、あれからどのくらいの時間が経ったのかわからない。

肘を立て、身を起こそうとしたとき、腹部に激痛が走った。たちまち傷が脈を打ち始め、ルキアは痛みを逃すように熱い息を吐いた。柔らかな敷布の上では、現実は夢と化していたが、痛みは夢を現実へ帰していく。目を閉じたまま、じっとその痛みに耐える。

「エリーヌ……」

ルキアは熱で乾いた唇を動かし、彼女の名を呼んだ。

……†……

シベリー軍殲滅作戦の中央司令部が置かれているのは、西方軍の半数が駐屯しているキウロス要塞であったが、ファジールの参戦に伴ってエーヴェル要塞へと移されることとなった。

ゴースティンは東と南が海に面しているため、陸軍所属の軍隊は北と西に集中して置かれている。その一角である西方軍は、元はシベリー軍に対抗するために作られた軍隊ではなく、専ら対ケーニヒ

スのための軍隊であった。
一方、二十年前にファジールが独立してのち、対シベリー及び対ファジール防衛の拠点として西方軍の駐屯地となっているのが、このエーヴェル要塞である。

金牛宮の月、二十三日。
ファジール参戦の報が入ってから、当初の予定において予備戦力としてベスラ要塞に駐留させていた北方軍の二個師団が組み込まれることになった。そこで、北方軍司令官であるアシュレイ・グレンヴィル伯爵が軍を率い、一旦エーヴェル要塞まで到着した。
現在、二個師団は一週間の休息を摂っており、数時間後には既に占領下に置かれたルドン州を抜けてファジールへの進軍を開始する。

ファジール攻略戦についての軍議の後、眉を寄せて思案に耽っているアシュレイのもとへ、グラッドは歩み寄りながら声をかける。

「グレンヴィル伯爵、ずいぶんと考え込まれているようだが？」

ケールセン・グラッドとアシュレイ・グレンヴィルは士官学校の同期であったことから、互いのことはある程度ならば知っている。グラッドは今では王太子派の中心的存在の軍人であるが、アシュレイが宮廷の派閥に属していないこともあり、彼らの仲が変に拗れることはなかった。元より友人と呼ぶほど気安い仲でもないが、張り合ったり牽制し合うような相手ではありえなかった。アシュレイが少将となった二十八のとき、グラッドは中尉だったのだから、対抗心を燃やすだけ無駄というものである。
ただし、必要以上に慣れ合う必要のないアシュレイのような人間は、グラッドのとって好ましいものだった。

アシュレイは顔を上げ、ゆるく開かれたカーテンの隙間から遠く

を見やる。

「頭を抱えたくもなるだろう。ファジールが参戦したことにより、ケーニヒスが動く可能性はますます高まっているのだから……」

二か月前に行われた特別軍議の場においてミカヤは、北方軍派遣は対ケーニヒスの戦力であると明言したが、その言葉とは裏腹に、ミカヤはファジールの動きのほうを危険視していた。多くの者がファジールの参戦可能性についてケーニヒスほど重要視していなかったのは、ファジールが独立したのち、ケーニヒスとの関係が冷え切っている一方、ゴースティン相手には相互防御同盟が結ばれていたためである。しかし、所詮それは紙切れ一枚の同盟であり、あまりに頼りないものであった。

アシュレイは訝しげな視線をグラッドに投げる。

「グラッド将軍、貴公はこの派遣軍についてどう考えておられる？聞けば、王都駐留軍からの増援までこの要塞に向かっているという話ではないか。そこまでするのは一体、なんのためだ？」

「念のためだ」

「ケーニヒス参戦の情報を既に掴んでいるからだろう？」

はぐらかすグラッドに、アシュレイは即座に切り返した。

グラッドはそれを否定せず、どこか愉しげに言い放つ。

「デデュー公もラッセル伯爵も必死に開戦を避けようとされているそうだが、いっそ、ケーニヒスも参戦してくればよいのだ。司祭ら……特に四大司祭らの働きは予想以上のものだ。彼ら一人の力で何千という敵兵が散っていったのだ。ファジールとケーニヒス、そしてルザーリまでを相手にしても我々に負けはありえないだろう」

「だが、第四部隊の被害は当初の予測に比べれば大きい。ゴースティンはシベリーに比して戦略や武器の精度ではるかに勝ると自負してきたわけだが、ルドン州軍戦においてはシベリーの策略にまんまとのせられ、敵の砲や銃に翻弄され続けた。加えて、あの急激な天候の変化だ……。ファジールの動きも早く、第四部隊への援軍が遅れれば被害はさらに拡大したやもしれぬ。今は優位に立っているが、なにもかもが順風満帆というわけではない。そのように現状を楽観視し、いたずらに戦への道を歩もうとするのはどうかと思うが？」

グラッドは、アシュレイの静かな怒りを受け流すように、笑みを深く刻む。

「八十年前の大戦においても、ミレニス州付近での交戦において我が軍は甚大な被害を被った。今回の作戦においても、首都バードン攻略までを含めれば第一・二部隊にもそれなりの死傷者は出た。それに比べれば第四部隊における五百人未満の死傷者など微々たるもの……。不測の事態は発生したが、その割には上出来だというところだろう。問題は、高位司祭に犠牲者が出るところだったということだな。それだけはなんとしてでも避けねばならなかった。セヴァンス侯の無事が確認されるまで、メフィス将軍は生きた心地がしなかったであろう。まあ、よもやあの者たちが警戒陣地に現れるとは、私も思わなかったが……」

このシベリー軍殲滅作戦において、もっとも重要かつ危険な役割を果たすのはミレニス州や首都バードンを攻略する第二部隊であり、グラッドがその総指揮を担っていた。その反面、行軍距離こそ長いがもっとも危険は少ないと考えられていたのが、ジュダ州とルドン州西部を攻略する第四部隊であったのだ。

第四部隊から中央司令部にセヴァンス侯ルキア＝ベルネスが戦場で行方不明となったという報告は、十日正午の時点において中央司

令部であるキウロス要塞には入っていなかった。首都バードン攻略後、ファジール戦に備え、ただちにエーヴェル要塞へと向かっていたグラッドは、エリーヌを抱きかかえたルキアが要塞の北にある警戒陣地に現れたところを、まさに目にすることとなった。

九日の夕刻、高位司祭二人と近衛士官一人が敵地へ向かったのは、第四部隊の指揮官メフィス将軍の判断ではなく、彼らの独断であったと報告されている。第四部隊の宿営地を無断で出た三人は十日未明にルキアと合流し、夜明けを待って、エーヴェル要塞へと退避することに決めた。その退路を主張したのはルキアであったとのことだが、賢明な判断であったとグラッドは思う。

もし、第四部隊と合流しようと西へ進んでいれば、シベリー軍はさることながらファジール軍の一部との遭遇戦になった可能性が高い。偵察隊からの報告によると、ニ万を超えるファジールの軽竜騎兵及び歩兵が、ゴースティン国境へと向けて南下していたという。いくら＞神の力＜とやらを有する司祭であっても、手負いの上、足手まといを抱えていては、とても切り抜けられはしなかっただろう。

もっとも、ファジールの偵察隊約二百人を一発で仕留めたことはさすがと言わざるをえないものであった。

警戒陣地に辿り着いたルキアは、エリーヌを横抱きにしたまま馬から降り、その場に彼女を下ろした。

駆け寄ったグラッドが、一体なにがあったのかと問うと、ルキアは第四部隊に起こった事態と、自らの身に起こった事態の経緯について簡潔に説明した。さらに、ファジール軍の動きについて伝令を出すよう指示までした。

その口調は明晰で、意識ははっきりしているようだったが、一度膝を折った後は再び立ち上がることはできず、しまいには目を伏せて身を横たえた。驚いたグラッドはルキアを抱え起こそうとしたが、

その身体の冷たさにグラッド自身の背筋が冷たくなった。
先ほどまで意思に満ちていたはずの深緑の瞳は、もう二度と開かれることはないと思えるほど、固く閉じられていた。目のあたりには濃い影が落ちており、唇は土気色で、陣地に駐留していた軍医がその様子を見た途端、たちまちに色を失くしたほどだった。

「それにしても、セヴァンス侯には驚かされた。あなたに酷く詫びられて」

アシュレイは腕を組んだまま椅子に背をあずけ、秀麗な顔を曇らせる。

「……娘が負傷したことについては、あの方が詫びられることではない。聞けば、あの子が殿下から大役を仰せつかっておきながら、勝手に高位司祭らとともに敵地へと向かったというではないか。それでは却ってルキア殿や他の司祭の手を煩わせただけではないのかと……」

「それでもミカヤ殿下は満足そうであられたがな。ご息女に処罰など必要ないとおっしゃっていた」

二日前、エーヴェル要塞でアシュレイと顔を合わせたルキアは、自分のせいでエリーヌを巻きこんでしまって申し訳ない、と頭を下げたのだ。必死に詫びるルキアを、アシュレイが留めさせていた。
その光景を、グラッドは不思議な感覚で眺めていた。
戦場では一瞬で何百という敵兵の屍を作り上げた男が、命に関わるわけでもない切創ごときであれほど取り乱すなど理解しがたかった。傷を負ったのが顔だというのならまだわからないではないが、軍医によれば、利き腕でもない左上腕部に負った傷であり、魔道による治癒を併用すればほとんど傷跡も残らない程度のものであるという。

それに対して、ルキアの傷は右脇腹を銃剣で貫かれていた。自身の魔法で傷を塞いだが、退却の際にそれが大きく開き、陣地に辿り着いたときには夥しい血があふれていた。。

司祭たちは丈が長く、黒い軍服をまとっているため、グラッドはルキアが重傷を負っていることにすぐ気づくことができなかった。倒れたルキアを受け止め、軽く腹部に触れたとき、その指の隙間から鮮血がこぼれていった。こんな状態で馬を駆って陣地まで辿り着いたなど、とても信じられないものだった。

「ルキア殿があのように取り乱されるところは初めて目にした。私はあの方を幼いころからよく存じ上げているが、クラウス卿が非常に厳しく接しておられていたせいか、十になられることには隙のない振舞いをされるようになられていたからな。家を継がれてからではなおのことだった」

アシュレイは含み笑いをしながら、どこか寂しげに呟く。

「しかし、おかしなものだな。まさかあの子らが戦場に出ることになるなど、昔の私は考えもしなかった。私から見れば、今でもあの二人は幼い子供のように思えてしまうところがある……。このようなことになるならば、娘が士官学校に入ると言い出したときにもっと反対しておけばよかった」

「グレンヴィル伯爵、あなたのような冷血の武人でも、愛娘のこととなればお甘いのだな」

アシュレイをからかいながら、グラッドはルキアたち四人が陣地に現れたときの様子をミカヤに報告したときのことを思い出していた。

あのとき、ミカヤは本当に愉快げに笑っていた。グラッドが訝し

んでいると、彼はいつものように不敵に笑む。

『知らないのか？　エリーヌはルキアの元婚約者だ』

それは初めて耳にした話ではあったものの、グラッドにとってそれ以上に納得のできる答えはなかった。

『だが、ルキアが一方的に破棄をした。ドートリッシュを継いだときにな』

二人の婚約は正式に披露されていたものではなかったが、近しい者の間では暗黙の了解事項であり、クラウスが存命であれば、今ごろルキアはグレンヴィル家に婿入りしていたはずなのだという。

彼らの婚約はなんら訝しいものではない。ドートリッシュの息子を他家の婿にやるというのは珍しいが、ルキアの出自も考慮すればグレンヴィルほどふさわしい家もない。

グレンヴィル家は、アシュレイの兄がアルト＝ヴィジェ王の第二王女を、そして甥が王の庶子を妻に迎えており、王家との縁が非常に深い。その二人ともミカヤの異母姉に当たるが、王が花嫁を差し出したのは、グレンヴィル家が何代にもわたり王家に忠実な臣下であり続けたからこそだろう。

人を疑うことを知らないような王であるが、不思議と、グラッドはその見る目が曇っていると感じたことはない。その証拠に、王自らが推薦・任命した官僚は非常に優秀な者が多く、ギルベイドやハーシェリオン出身者であっても欲深な者からは一線を引いており、王なりに彼らの権勢を殺ごうとしているのが見てとれる。それでもやはり、宮廷闘争を治めることができないでいる以上、あの王は暗愚と呼ぶしかないものであった。

二年前、そんな王の不甲斐なさが一因となり起こった事件がある。

新年を祝う宴が宮殿で開かれたときのこと、ミカヤがその席でバルフォア家の長男マートンと諍いを起こした。バルフォア家当主マーテルの妻はハーシェリオン分家出身であるが、ハーシェリオンはかつてのゴースティン王家の家系であるため、非常に気位が高く、オトゥール王家への敬意はそれほど強くない。その流れを汲むマートンもその手の人間で、王太子とはいえ下級貴族の妾の子であるミカヤへの敬意など持ち合わせておらず、それは直接口に出さずとも態度に表れていた。

ミカヤは、自らの前に跪いて口上を述べるマートンに対し、型通りの挨拶などいらぬ、とその言葉を遮った。

『思いのままに申してみればよいのだぞ？　卑しい血筋の者が玉座に着くことが我慢ならぬ、なぜこのような下賤の者に頭を下げねばならぬのかとな』

冷ややかな視線を落とし、強い侮蔑を舌先にのせる。

『貴様が大貴族としての誇りを命よりも尊んでいるのならば、今ぐらいは胸の内を秘匿し、低頭に振舞ってみればどうだ？　ここにいる大勢の者と同じようにな』

ミカヤの挙動に不快さを感じ、周囲の者は眉をひそめ、広間には動揺が広がっていた。あの場には、クラヴィーエ公キイルのほか、ロベルト・ネイゲルやジーク・ラッセルら王弟派の重臣がいたが、国王は居合わせなかった。王はその一か月ほど前に大病を患い、まだ公の場に姿を見せられるほどに回復していなかった。

そのことが、ミカヤの箍（たが）を外してしまったのだろう。

『宮廷には家柄を鼻にかけるしか能のない輩がのさばっているが、

その最たる者が貴様だな』

すぐ傍にいたルキアが見かね、たしなめるように声をかけたが、ミカヤはそれを無視し、腕を組んだまま立ち上がった。そのまま前へと歩み寄り、床に置かれたマートンの手を靴先で鋭く払った。

とっさに手を引いたマートンに向け、嘲笑をぶつける。

『しばらくそのままでいるがいい。さすれば、私が王となった暁には高位を保証してやってもいい』

腰をかがめ、手を伸ばし、マートンの髪をぐしゃりと握る。

『這いつくばり官位を強請るのが貴様には似合いだ。所詮、そのぐらいしか能がないのだろう?』

誇りを床に叩き落とし、その落ちたものを踏みにじる、そんな言葉だった。そう言い捨てたミカヤは、哄笑を響かせて身をひるがえした。

マートンは手と肩を震わせながら跪いたままでいた。誇り高い生まれの者が大貴族らの集う宮廷において恥をかかせられたことへの屈辱は想像に難くなく、このやり取りを眺め見ていた宮廷貴族らはマートンに同情し、ミカヤに強い反感を抱いたことだろう。いつもはミカヤの好きにさせているダラス公アンジェも、あのときばかりは少し焦りを覚えているようであった。

広間に漂っていた華やかな空気は、一転して重苦しいものへと変わっていた。ただ、席へと戻るミカヤの顔は満足げなもので、彼がこれ以上なにか騒ぎを起こすとは思われなかった。

そんな皆の期待を裏切ったのは、マートン・バルフォアのほうであった。彼の行いは、若さによる短気、と庇い立てすることも滑稽

なほど、愚かなものだった。

ゆらりと立ち上がったマートンは剣を抜いた。切っ先はまっすぐにミカヤへと向けられ、そのまま猛進していった。壇上の脇に控えていた近衛はすぐに動いたが、それに先んじて素早い反応を見せたのはルキアだった。

ミカヤのもっとも近くにいたルキアは、ミカヤの差していた剣を抜き、マートンが振り下ろそうとした刃をなぎ払い、切り返しとともに剣を床へと叩き落とした。

高く、乾いた金属音が謁見の間に響き渡った後、ほんの一瞬、静寂が訪れた。

ミカヤはマートンに切りかかられたことよりも、ルキアの行動に驚いているようだった。すぐさま近衛が男を取り押さえたことで、再び広間はざわめきに包まれたが、二人の間には異質な空気が流れていた。

ルキアはミカヤの前で跪き、剣を両手で水平に捧げる。

『とっさのこととはいえ、失礼をいたしました』

ミカヤはルキアをほんの少しの間見下ろし、冷笑を漏らした。

『お前は、本当に司祭なのか？』

ルキアの手から剣を受け取り、鞘へと納める。

『だが少し、腕が鈍ったようだ。今のお前が相手なら、私は勝つことができるやもしれんな』

ルキアの上腕部には一筋の切れ目が走っており、白い長上着の裂け目は徐々に赤く染まっていた。その様子を目にしてもミカヤは動

揺する素振りを見せず、近衛に拘束されているマートンに向かって歩を進めていく。ミカヤの手は剣の柄を握っており、それが今まさに引き抜かれようとしていた。

跪いていたルキアが急いで駆け寄り、ミカヤの手を押さえる。

『殿下、お止めください！』

ミカヤはルキアの肩を勢いよく突き飛ばし、構うことなく剣を抜いた。

『邪魔をするな！』

『剣をお納めください。この者を裁く権限はあなたにはございません』

『私に権限がないだと？　ふざけるな！　こやつは私に切りかかった罪人なのだぞ』

『いいえ。罪人であるからこそ、この場で手討ちになどなさってはなりません』

ダラス公もミカヤに歩み寄り、静かに諭す。

『ミカヤ様、わたくしからもお願いでございます。王太子ともあろう方が、御手を罪人の血で穢されることはありません。この者は、しかるべき場において断罪されるべきと存じます』

王族に剣を向けたことは重罪であるものの、ミカヤに直接危害が及ばなかったこと、また明らかにミカヤの言動に非があったこと、マートンがバルフォア伯爵家の長男であること、れらを考慮すれば、温情がかけられる可能性はあった。

なんとかミカヤは剣を納めたものの、その怒りが収まることはなく、マートンに言い放った。

『貴様が傷を負わせた者も王族だ。死罪は免れぬものと思え！』

この一件は、近衛隊の面目丸潰れの出来事でもあったが、もうひとつ、大きな事態を引き起こした。これまでは噂の域を出ないとされていたルキアの出自は、ミカヤの一言により暴露され、王太子を斬りつけようとした大逆事件とともに宮廷中に知れ渡った。

その日を境に、ルキアの宮廷での立場は誰の目から見ても悪くなっていった。これまでも、彼は一部の廷臣らの前では酷く萎縮していたが、まるで不祥事を起こした貴族の身内のような空気をまとうようになっていた。

ドートリッシュには国内外問わず付き従う貴族が多く、王家に取り入らずとも安泰であるため、宮廷司祭の地位を辞するほうがルキアのためであったに違いない。だが、王が強く引き留めているために、宮廷を下がることはできなかったのだろう。

アルト＝ヴィジェ王には多くの子がいたが、王が本当に可愛がっていたのは亡き妃との間の双子の王女のみで、数十人に上るとされる私生児には義理のような温情以外をかけることはなかった。だからこそ、実弟の私生児にすぎないルキアに対する王の態度は、異様と呼ぶにふさわしいものだった。

幼いころなどは、国王自ら抱き上げたり、傍に呼び寄せ、優しく言葉をかけたりしていたものだった。長じて司祭となってからは、ミカヤではなく自らの側近として宮廷に召し上げる始末である。

お飾りとはいえ、王にそれほど目をかけられ、舞い上がらぬ者はいない。それ幸いにと王に取り入り、官位を強請ろうとするのが常であるが、ルキアはそれをしない。誰にも媚びへつらうこともなく、王のためだけに忠義を尽くし、王以外とは一切の関わりを絶とうとしていた。

もっとも、ルキアがいかに慎ましく振舞おうと、王のルキアに対する目のかけようは度を越しており、実は国王の落胤ではないのかとまで噂される始末である。ルキアに愛情を傾けることは、王なりのキイルへの罪滅ぼしのようにも思われたが、それによりルキアが肩身の狭い思いをしていることに王は気づいていないだろう。

一方、ミカヤに対する王の態度は、王太子として大事にしている様子は見てとれるものの、二十三年前の一連の騒動に辟易させられたために、ほとんど無関心を決めこんでいる。ミカヤの立場を明確にし、その地位が絶対的なものであると保証することで宮廷の争いも解決できそうなものだが、曖昧な王の態度がミカヤを蔑ろにしているかに見え、結果として王弟派をのさばらせてしまっている。

王は息子同然のキイルに深い信頼を寄せており、何十年もの間、なにをするにしてもキイルに任せ切りであった。かの一件により王への反逆とされ、筆頭王位継承権者としての地位を失い、宮廷追放が相当とまで言われた者を、周囲の反対を押し切って王の一存で宰相の座にまで据えるほどである。

宮廷の闘争に決着をつけるためにはミカヤが王位に就くしかない。王太子派の貴族はギルベイド家に縁や恩のある者が多いのは事実だが、中道派の間では王弟派の権勢に辟易し、王太子寄りの考えを持つ者もそれなりに存在する。

宰相クラヴィーエ公を始め、優秀な閣僚たちが多いものの、ハーシェリオン家の権勢が長く続いていることにより、表に出てこないだけで汚職が起こり、末端においては機能不全に陥っている部署も少なくないとされる。上層部においても財のやり取りによる高位の任免のほか、業務執行者と監督者の癒着が起こり、不祥事の隠匿も珍しくない。マーテル・バルフォアによる“シベリー暴動に関する虚偽報告”もその一例に他ならない。

（もっとも、これは戦後大きく変わりうるものだ）

グラッドが胸の内でそう呟いたとき、アシュレイの感慨深げな声が耳をかすめる。

「それにしても、シベリーの制圧は呆気なかったものだと思う。今はもう占領統治へと移行しているが、まさかこれほど早く首都バードンまでを陥落させることができるとはな……」

グラッドは腕を組みながら口の端を上げる。

「たしかにな。これまで散々シベリーの暴動に悩まされていたことが馬鹿馬鹿しくなる」

「百年ほど前からケーニヒスがシベリーを属国化していたが、それで納まりがつくならば、シベリーもそれに越したことはなかったであろうに……。大国の保護下にはいればまだ、最低限の保障にありつけたというのに、あの者たちはそれを自らの手で壊していったようなものだ」

「所詮は異教の蛮族、共生などできはせぬ。ケーニヒスもよくこれまで耐え忍んだものだと感心する。まあ、これで肩の荷が下りよう。我らに感謝してもらいたいものだ」

グラッドの言葉に、アシュレイはほのかな怒りの気配を漂わせた。

アシュレイはシベリーに対して同情しているのだろう。彼のような人間は貴族の中ではそれほど珍しいものでもない。これまでシベリーの被害を目の当たりにすることのなかった者だからこそ持ち得る感情と言えばよいだろうか。国境周辺に住まう民の苦難など、王都の大貴族にとっては知るべくもないものである。

グラッドは気にせず言葉を続ける。

「そうそう、ミレニス州軍戦の際だが、私はあのお伽話の〉神の力〈をこの目で見ることができた。地の司祭ローザン・ゲーブルであったか？　あの者がミレニス市街周辺に築かれた塹壕をことごと潰していく光景は圧巻であったな」

「アルゼ教典の一節か……。私は直接目にしてはいないが、報告は受けている。あのような力が本当に実在したのだな」

「ファジール戦でも見ることはできるであろう。その目で確かめられればよい」

　司祭の放った光の中から、獰猛な爪と牙を持つ巨大な黒牛が現れ、雄叫びとともに大地を引き裂いた。その姿はまさに、教典の中のガリアントそのものであった。ガレ族にとっての唯一の神、ルドリア神の御使いの放った力により、シベリーたちは無残にその命を散らしていった。

　ガレ族の台頭、殊にゴースティンとケーニヒスの規模が拡大するにつれ、シベリーは両国の国境へと追いやられていった。この大陸のどこにも彼らの安住の地などありはしない。だからシベリーはケーニヒスに従属していたのだ。たとえ捨て駒とされてでも、この地に留まり生き抜くためには選ばざるをえない道だった。どれほど迫害されようとも、この地は我らのものだと言わんばかりにシベリーは抗い続ける。ゴースティンとシベリーの争いは不毛なものであるが、そもそもシベリーの存在自体が、ガレ族の支配するこの大陸において不毛なものなのだ。

　それならば、こうして殺してやることが慈悲ではないのか、とグラッドは思う。異教徒に向ける言葉ではないが、生活を保障することや命を助けてやることだけが慈悲深さではないだろう。

　だが、もはや今となってはそのようなことを考えるだけ栓なきことである。

シベリーとの戦は終わったのだ。ゴースティン軍の圧倒的勝利において。

去りゆくその背を　（1）

エーヴェル要塞に、前線部隊にいるグラッド将軍より書簡が届いた。

現在、ゴースティン軍はシベリー戦の際に分けられた四つの部隊が再編成され、ファジール国境に向けて進軍している。そこには北方軍の二個師団も加えられている。

いくら可能性として考慮に入れていたとはいえ、ケーニヒスとの関係が冷え切っている今、ファジールとの戦はできれば避けたかった事態である。ファジールはゴースティンよりもはるかに国力の劣る国であるものの、落とすとなれば一筋縄ではいかない。

ファジールの軍の四分の一を占めるのは、ルザーリの傭兵部隊と言われている。ルザーリはファジール西に位置する王国であるが、国土の大半が山地で農業がそれほど盛んでなく、かといって他に有益な産業もなく、次第に傭兵稼業が重要な産業となったという歴史がある。その武勇は大陸中に広まっており、特に隣国であるファジールは独立戦争の際もルザーリ傭兵の力を導入し、現在も近衛連隊の一部にファジール傭兵を組みこんでいる。彼らはファジールの正規兵よりもはるかに実戦慣れしており、なおかつファジールに対する忠誠心も持ち合わせているため厄介な存在である。

グラッドからの書状に目を通すミカヤは、エリーヌの目に上機嫌に映った。この書簡は戦況が優位に立っているという知らせであろうが、なにか彼にとって特別な報告でもあったのだろうか。

横目でさりげなくその様子を見つめていると、ミカヤから声がか

かる。

「エリーヌ、怪我はもう良いのか？」
「はい、ご心配をおかけして申し訳ございません」

エリーヌはミカヤのほうへ向き直り、胸に手を当てる。

「だから言っただろう？　あれを心配する必要はないと」
「はい……」

あれから二週間余り経って、エリーヌは中央司令部となったエーヴェル要塞での隊務に復帰した。怪我はそれほど酷くはなく、翌日から復帰しても支障のない程度であったため、復帰は少々遅すぎるほどだった。

その間、エリーヌはエーヴェル要塞の一室にこもっていた。それは心身を癒すためのほか、謹慎の意味合いも含まれていた。

予想されていた結果ではあるが、メフィス将軍は司祭たちとエリーヌが勝手にルキア救出のために敵地へ向かったと中央に報告をした。メフィスはルキアの救出劇を自らの手柄にしようとしたが、ルキアが瀕死の重傷を負ったことへの責任追及を逃れようという浅知恵から、とっさにそのような報告を上げたのだと思われる。

当然、エリーヌの上官である中佐と大尉がそれは事実と異なると主張したが、表向きはメフィスの主張が通る形となった。中央の将校らは、第四部隊の采配に対するメフィスの明らかな失策を知っているため、それが事実と異なるであろうことは理解しているようだった。

とはいえ、エリーヌが伝令の役目を受けておきながら、その途中に身勝手な行動をとったことは事実である。一時的な謹慎以外のお

咎めがなかったのは、ルキアを救い出したことが影響している。自軍の兵士の命が千あっても、司祭一人分の価値もない。特にルキアはその地位、立場からして決して失われてはいけない人物だった。もし彼の身になにかあれば、戦後、第四部隊の指揮官の首は確実に飛んでいただろう。

ただ、ルキアには救援など不要であり、彼一人でもあの窮地を切り抜けることのではないだろうか。そう思えるほど、ルキアの力はエリーヌの予想をはるかに超えていた。

魔法を使うルキアをエリーヌが目にしたのは、あれが初めてではない。まだ分別のない子供のころなら、戯れに炎を繰り出してみせることがあった。兵士の傷をたちまちに回復させるのを幾度か間近で見てきた。そして、ミカヤからの命令書を燃やして灰にしてしまうところも。

しかし、あのときは違った。

ルキアの手から放たれた劫火が敵を一瞬にして呑みこんだ。敵は炎から逃れようとのた打ち回り、呻き声を上げながら、すぐに息絶えた。その様にも大きな衝撃を受けたが、エリーヌが恐れを抱いたのは、力を使ったときのルキアの姿だった。彼は炎に巻かれた敵を、眉ひとつ動かさず涼しい顔で眺めていた。深い緑色をした彼の瞳が不気味に赤く光る様は、なんとも言えぬほどに恐ろしかった。

「ルキアは、本日中にも部隊に合流するそうだ」

「そうでございますか……」

「第四部隊からの報告がたしかなら、あいつの働きは予想以上だな。渋っていたわりに、よくもあれだけ屍の山を作れるものだと感心している。司祭などよりも、よほど軍人のほうが向いている。そうは思わないか？」

エリーヌは曖昧に相槌を打ち、わずかに話の軌道を変える。

「なんにせよ、司祭への被害が出ておらぬのは好ましいことですね」

「一人の被害も出すわけにはいかぬからな……。前線とはいえ、出しゃばらず、距離をとって戦えばいい。出撃前にそう厳命してある」

ルキアがそのような戦い方をしていることを、エリーヌはただひたすら願うことしかできない。

五日前の夜、やっと床から起き上がれるようになったルキアが、エリーヌのいる部屋を訪れた。明朝から部隊と合流することになり、発つ前に話をするためにここへ寄ったのだと彼は言った。

『……あなたは、馬鹿ではないのですか？』

エリーヌは思わずそう口にしていた。

ルキアの傷はあまりに深いものだった。陣地まで辿り着いた途端、彼は倒れ、それから三日も意識が戻らなかった。開いた傷はアゼリアの魔法でなんとか塞ぐことができたものの、それから一週間もの間、高熱が下がらないままだと聞いていた。

ルキアは腹部の傷をかすり傷だと言っていたが、それは単なる虚勢だった。夜が明けゆく中で見た彼の顔は、あまりに青白く、今にも消え入りそうだった。エリーヌを気遣う言葉を紡ぐ唇は、既に色を失っていた。それにもかかわらず、ルキアは血路を塞ぐ敵を一瞬のうちに駆逐し、傷を負って呆然としているエリーヌを抱え、陣地へと辿り着いた。

エーヴェル要塞に辿り着いたとき、ルキアの腹部からは夥しい血

が流れていた。あれほどの傷を負いながら、自身に追い打ちをかけるような振舞いをしたのだ。たかだか十日程度で体力が回復しているはずがない。

呆れるエリーヌをよそに、ルキアは平然と言いのける。

『私はもう戦えるのだから、戦線復帰するのは当然ではないのか？』

『もう、充分でしょう？』

『まだ戦いは終わってはいない。シベリーはほぼ片がついたとのことだが、ファジール攻略戦に間に合うよう戻らねばならない。それに、いつケーニヒスが動くやもしれぬのだ。司祭が戦えば、より自軍の犠牲が少なく、より早く決着がつくのだから、悠長に寝ている場合ではないだろう』

エリーヌは、あまりにルキアを見くびっていた自身を恥じた。

この戦はルキアにとって望ましいものではないため、相応の理由がつけば、ルキアはすぐにでも戦線離脱するものと思っていた。そもそも、あれほどの深手を負えば、大抵の者はその後の戦闘に参加しない。後方支援部隊に残るのが関の山で、前線復帰などまずありえない。なにより、ルキアのような力を持っているのなら後方部隊で負傷兵の治癒に当たることも許されるはずなのだ。

ルキアがこれほど早い復帰を決めたのは、被害の不要な拡大を防ぐためであり、強いてはミカヤのためだろう。

『たしかに、我が軍にあなたの力は今すぐにでも必要なのでしょう。あなただけでなく、司祭たちの力はとてつもないもの……。私など、足手まといになるだけだったのですから』

エリーヌがそう口にしながらうかがい見たルキアの顔は、玻璃のように冷たい光を放っていた。そのようなルキアの表情はこれまで

目にしたことのないもので、エリーヌは訝しさとともに不安をもかき立てられた。

『以前から思っていたが、あなたは武官向きではない。昔から感情に走りすぎるきらいがあったが、今回のように途中で役目を放棄するなどあまりに軽率だ。いくら上官殿の許可を得ていても、あなたが言い出さなければその許可も与えられなかったものだろう？　あなたは父君が止めるのも聞かず、武官の道を志し、今その地位にある。あなたがそこに辿り着くまでどれほど腐心してきたか、私は知っている。だが、いかに剣の腕が立っても、実戦で使えなければ意味がないことに早く気づかれたほうがよい』

ルキアの言葉はいつも柔らかな響きを持っているものだが、今はいやに棘を含んでいた。

エリーヌは動揺を抑えつつ、ルキアを正面から見据える。

『なぜ、あなたにそこまで言われねばならないのです？』

『もう、あなたに甘いことを言うつもりはないからだよ。今までにも厳しいことは言ってきたつもりだったが、あなたはまるで耳を貸そうとしなかった。……だが、この際だからはっきり言っておこうと思う。シベリーとの戦いで我が軍にもそれなりの被害が出ている。ファジールの正規軍と戦を交えれば、死者や負傷者はますます増えるだろう。あなた程度の怪我で戦線を離脱する軍人などいない。あなたは殿下に害を加える者がいれば、切り捨てねばならない立場だということを忘れてはいけない』

数年前、エリーヌはそれと同じような言葉をルキアから言われたことがある。

あれは、エリーヌが近衛に入隊して数か月が過ぎたころのこと――ちょうど王弟派の勢力に陰りが見え始め、それを加速させるよう

に国王が大病を患ったころだった。国王の病状について医師らは回復の見こみはないと匙を投げ、とうとうミカヤが即位するかと思われていた。

ミカヤは長年、王太子としての正統性に疑問を投げかけ、中傷を繰り返す宮廷貴族に苦しめられてきた。一六になるころを境に、ミカヤは彼らに対し強烈な敵意を向けるようになったが、そのことがますます宮廷貴族たちの反感を買うようにもなっていた。

燻っていた火種が一気に爆発した、まさにそんな事件だった。

新年の宴の席でにおいて、ミカヤはある伯爵家の嫡子と諍いを起こした。それは、ミカヤの傍若無人な言動に耐えかねた相手の男が、ミカヤに剣で斬りかかるというとんでもないものであった。

結果として、ミカヤは怪我を負わずに済んだ。男が斬りかかったとき、近くにいたルキアがミカヤを庇い、腕に傷を負いながらも男から剣を奪ったのだ。男はすぐに近衛によって拘束され、その様子をその場の大勢の者が固唾を呑んで見守っていた。ミカヤの怒りは凄まじく、その男を自らの手で処断しようとしていたが、それをルキアやダラス公が必死に止めた。

ミカヤが退席するやいなやエリーヌはルキアに駆け寄り、言葉をかけようとした。しかしその言葉が放たれることはなく、彼を労わろうとした手は空(くう)を切った。

――あなたのすべきことは別にあるだろう。

そう言い残し、ルキアは赤く染まった腕を押さえながら退席していった。

あれ以来、エリーヌにはルキアを見返してやりたいと思う気持ちもあった。しかし、それ以上に、なぜルキアが司祭の地位に留まろうとするのか理解できなくなった。

あれほどミカヤに忠義を持ち、才能にも恵まれている人間がなぜ、なんの力も持たない国王に仕えているのだろうか。ルキアこそ、なすべきことは別にあるはずではないかと思うたびに、もどかしさや悔しさは次第に怒りへと変わっていく。

『……偉そうに言われるが、所詮この戦いは侵略で、あなたのやっていることは殺戮にすぎない。あなたが国王陛下に殲滅作戦の中止を進言すればこのような事態は避けられたやもしれないというのに、ただ流されるがままとなった結果がこれではないのですか』

『ああ、そのことを否定する気はない。だからこそ、私はどのような手を使っても早々にファジールを落とし、この戦を終わらせる』

『戦を終わらせて、それであなたはどうするのです？』

『……生きて戻ることができたら、元の生活に戻るだけのことだ。私は司祭としての役目に一生を捧げる』

エリーヌは侮蔑をこめて一笑する。

『あれだけ人を殺しておいて、まだ司祭であり続けるつもりだとでも？　手を血で汚した僧侶など聞いたこともない』

あえてルキアの傷を抉るような言葉をぶつけたが、ルキアは表情を変えず、事もなげに言い放つ。

『仕方あるまい。人を殺めたことで今の地位を辞していては、戦後この国には高位司祭がいなくなるのだから……。あなたのほうこそ、退役を考えてはどうか？　アシュレイ様も今回のことで、そう望んでおられるようだったが』

北方軍司令官である父アシュレイは、ファジール戦に向かうために北方軍の二個師団を率いてエーヴェル要塞に来ている。エリーヌ

の怪我を聞きつけてこの部屋にやってきた父からは、その経緯を問いただされ、結果として散々小言を浴びせられた。

そんな父とルキアは会ったのだろうとエリーヌは推測する。

彼らはなにを話したのだろうか。退役するよう説得してほしいとでも父から言われたのだろうか。父は、今さらルキアになにを頼ろうというのだろう。

二人の会話を思い浮かべていくにつれ、エリーヌの心に暗い影が落ちる。

『……父上は、元より私を軍人にしたくなかったのだ。グレンヴィル本家に嫡男がいないせいで、私が襲爵することになると十年以上も前から決まっていた。……けれど、私になにかあれば、叔父上のところから養子をもらい、跡を継がせればいい。私がどのような道を選ぼうと、あの家にはなんの影響もない』

『家のことではない。あなたの身を案じてのことだ。それがわからぬわけではないだろう？』

ルキアは怒鳴った。表情も声も乱しはしなかったが、エリーヌにはそう思えた。

『……そのぐらい、わかっている』

エリーヌはうつむき、そのまま口を閉ざした。

ルキアは、どんなに腹に据えかねたことがあったとしても、一方的に怒ることは絶対にしない人だった。過ちを指摘し、諭し、納得できる形で受け入れさせようとするのが常だった。二人はそれほど年が変わらないというのに、悔しくなるほどに彼は大人だった。

『すまない、少し言い過ぎた』

エリーヌが顔を上げると、彼は眉を寄せて、小さく首を振った。

『勝手なことを、と思うかもしれないが、私はあなたに自分の願望を重ねているところがある。私自身が思うように生きられぬせいだろうか……。本当は、あなたには好きに生きていてほしい。ただ、あのような無茶はもう二度としないでほしいのだ』

口を閉ざしたままのエリーヌに、再びルキアは子供に諭すような口ぶりで声をかける。

『これは指図ではなくお願いだよ、エリーヌ。私があなたになにかを願い出ることなど滅多にないのだから、今回ばかりは聞き入れてはくれないだろうか？』

それが指図であろうと願いであろうと、エリーヌはルキアに逆らえない。優しい彼の言葉に、態度に、いつも懐柔させられてきたのだから。

エリーヌがわずかに首を縦に振ると、ルキアは安堵したように微笑した。そしてエリーヌの手をとり、なにかを握らせる。

『これを、あなたに……』

エリーヌが恐る恐る手を開くと、そこにあるのは聖イシスの横顔が刻印されたメダルだった。これはルキアが司祭となったとき、主教から賜ったメダルである。

『ルキア、しかしこれは――』

『よいのだ。別にこれは司祭の証になるものでもなければ、軍人の勲章に値するものでもない。私のような不心得者のメダルなど、どれほどの加護があるか知れたものではあるが、せめてもの守りに…

…。あなたに聖イシスのご加護のあらんことを』

ルキアは微笑を浮かべ、＞古代語＜で祈りの言葉を唱える。すると、重ねられた手の隙間から、きらきらと輝く眩い光の粒がこぼれて、夢のようにすうっと消えていく。

エリーヌはメダルをきつく握りしめながら、ルキアの顔をじっと見つめた。

ルキアの微笑みは、まるで宗教画の天使のようだ。エクシュール宮殿の階段に飾られた絵画の中に、彼とよく似た天使がいる。その絵の前に立つと、慈愛に満ちた瞳をした天使が、なにかを語りかけてくるような気になる。

十歳くらいのころ、あの天使がルキアに似ていると告げたとき、彼はありがとうと言って笑ったのだ。それは憂いなど一切感じさせない、屈託のないものだった。あの絵を見るたびに、幼いころのルキアの顔を思い起こさせ、彼女の胸を熱く、切なくさせる。

こうやって、すぐに昔を懐かしんでしまうのは、そのころが自分たちにとってもっとも幸せだったように思えるからだ。

『……なぜ、私たちは昔と同じようにいられないのでしょう?』

エリーヌは思わずそう口にしていた。

ルキアが家を継いでから二人は疎遠になった。エリーヌが近衛に入隊して宮廷に上がってからは、王宮で顔を合わせる機会はいくらでもあったが、私的な会話をすることはなかった。ルキアはエリーヌとすれ違っても目を合わせることすらせず、エリーヌもまた、意地を張るようにルキアを無視するようになっていった。拒絶されることをわかっていたから、かつてのように彼の背を追うことはできなかったのだ。

ルキアはふっと嘲りを含んだような笑いを漏らす。

『おかしなことを。いつまでも子供のままでいられはしないだろう？』

『私は、そういうことを言っているのではありません』

『わかっているよ』

ルキアは即答する。穏やかな声だったが、エリーヌには酷く冷たい響きをもって届いた。

『いいや、あなたはなにもわかっていない！』

エリーヌがなおも食い下がろうとしたが、ルキアはエリーヌに有無を言わせぬかのように苦笑し、そのまま部屋を出て行った。

その場に取り残されたエリーヌは、目の前に靄（もや）が広がっていくような感覚に支配されていた。手の中のメダルに熱がこもっていくにつれ、虚しさもまた彼女の中に降り積もっていく。

ルキアの去りゆく姿を見ることは、エリーヌにとって苦く、辛い情景を思い起こさせる。

それは五年前――やっと十七歳になったばかりの、まだ儚げだった少年の姿だった。

去りゆくその背を　（2）

クラウスの葬儀の数日後、エリーヌがドートリッシュ邸内の聖堂へ赴いたとき、ルキアは祭壇の前で跪いていた。それは祈りを捧げている風ではなく、ただなにも考えられず、そこにうなだれているだけのようだった。

ためらいがちに声をかけると、立ち上がったルキアはエリーヌのほうを虚ろに見やった。

エリーヌがドレスを引きずりながら一歩一歩ルキアに近づいていくと、ルキアは倒れこむようにエリーヌを強く抱きしめた。背に回された手が震えていて、泣いているのだろうかと思った。エリーヌは下ろしたままだった腕を、恐る恐るルキアの華奢な背に回し、長上着の生地を爪でかくように掴んだ。

しばらく二人は抱き合ったまま、微動だにせずにいた。

やがて、エリーヌから身体を離したルキアは、一呼吸を置いてから顔を上げた。ルキアの顔は涙に濡れてはいなかったが、しばらくの間眠ることも食べることもできなかったせいで憔悴しきっていた。そんなルキアの姿を目にした途端、エリーヌの胸は強く軋んだが、次の瞬間、鼓動は強い高鳴りへと変わっていった。

ルキアは震える指先でエリーヌの髪に触れ、愛おしむように撫で始めた。そして指先を滑らせるように移動させ、手のひらでエリーヌの頬を包む。エリーヌが戸惑いながら視線を上げると、ルキアの顔が近づき、それとともに唇に柔らかいものが触れた。

一瞬、なにが起こったのかエリーヌにはわからなかった。

それまでルキアから贈られた口づけは額や頬へと軽く触れるだけのもので、恋情よりも親愛に近いものでしかなかった。婚約者とはいえ、ルキアはまるで幼いころの延長のようにエリーヌに接することが常で、周囲の大人たちはそんな二人を微笑ましげに見つめていたが、エリーヌはそれを少々不満に思い始めていた。たった二歳しか変わらないというのに、ルキアはずっとエリーヌを子供扱いしていた。

また、ルキア誰にも頼ろうとはせず、弱音も決して吐かない少年だった。それは誰に対しても同じであったが、これから共に生きていこうとする人間相手にくらいは寄りかかってくれればよいのにとエリーヌは思っていた。だからもし、ルキアが誰かを初めて頼ろうとしているのなら、それはエリーヌにとって望ましいことだった。

しかし、そんな甘い期待はすぐに打ち砕かれることになる。

塞がれていた唇が自由になっても、エリーヌは恥ずかしさから俯いたままでいた。やっとの思いで顔を上げると、そこには薄く笑んだルキアの顔があった。それはとても綺麗な笑顔だったが、これまでに見たこともないほど硬質な印象を受けるものだった。

『エリーヌ、婚約は解消しよう』

なにを言われているのかわからず、エリーヌは瞬きを必死に抑えてルキアを見つめたが、ルキアはすぐに顔をそむけた。零れ落ちた横髪のせいで、ルキアの表情はわからなくなった。

『私がこの家を継ぐ。だからグレンヴィル家へは行けない。アシュレイ様には私から話す。あなた方に迷惑はかけられないから……』

ルキアはエリーヌの肩に置いていた手を下ろし、すっと横を通り

抜けていく。身廊を進んでいくその後ろ姿を、エリーヌはなにも考えられずに見つめていることしかできなかった。

それから幾日もの間、ルキアの思いつめたような顔と、彼が絞り出すように告げた言葉がエリーヌの頭から離れなかった。

ルキアの言う“迷惑”とはなんなのだろうか。こんなときに頼ることもできないような関係だったというのだろうか。これまで共に過ごした日々はなんだったのか。弟のルノーと同い年だから頼りない子供だと思っているのだろうか。初めからルキアの人生になんの影響も持たない人間だったのだろうか、と自問を繰り返した。

尊敬していた父親が急に亡くなり、酷く気落ちしているにしても、ルキアの一方的な別れの言葉とが理不尽なものにしか思えず、行き場のない想いは次第に怒りへと変わっていった。

その数か月後、エリーヌは士官学校に入学した。それを境に、エリーヌはルキアのことを考えないように努めていた。目が回るような忙しさから、過去を振り返ってばかりもいられなかった。

そんな折、カレニーナに連れられて出向いた王宮で、エリーヌは夕方からの公式礼拝に参加する機会があり、王室礼拝堂の祭壇に立つルキアの姿を初めて目にすることになった。上級聖職者が身につける白い祭服、背に流したままの長い髪、ゆるやかに振るわれる聖杖、そこから放たれる赤い光……。

あまりに神聖な光景に、エリーヌは思わず目を奪われた。幼いころから傍にいた少年に初めて神々しさを覚えたあのとき、自分たちはもう決して交差することのない道を歩み始めたのだと思い知った。

二年後、エリーヌが近衛士官として宮廷に出仕するようになっても、ルキアの姿を目にする機会は少なかった。ルキアはアイオーン

離宮には寄りつかず、本宮の礼拝堂と王の私室とを行き来する毎日を繰り返していた。

ミカヤがルキアを傍に召したとき、エリーヌは彼の姿を近くで目にすることができたが、ミカヤの前で跪き、頭を垂れる姿も、ミカヤに向ける玻璃のような瞳も、なにもかもがエリーヌには衝撃だった。一見、優美である笑顔ですら脆く、儚く見えて、精巧に作られた陶器の人形を目にしているかのようだった。

ルキアは、王弟派・王太子派を問わず、宮廷の有力貴族たちから快く思われていない。もう何年も前から、彼らから嫌みを吐かれたり侮蔑を含んだ視線を投げかけられ、貴婦人らからは口先だけの同情を向けられている。キイルもミカヤも、公の場においてルキアに冷たい素振りを見せることが多く、それが廷臣たちのルキアへの態度に反映されていた。

かつてキイルは、ルキアに対し無関心ではなく、幼くして宮廷に召されたルキアによく目をかけていたという。しかしアズノエルの死を境にキイルは冷たい性格に変貌していき、それに伴い、ルキアへの態度もよそよそしいものになってしまったのだとカレニーナが話していた。

ルキアを取り巻く状況にはカレニーナも心を痛めており、あんな風に神経をすり減らしてまで宮廷に身を置くべきではない、とも口にしていた。

エリーヌも伯母と同様の考えだった。ルキアが宮廷に召されたのが国王の命であったとしても、固辞すればすむ話である。王はルキアの頼みを無碍にはねつけたりはしないだろう。

――私自身が思うように生きられぬせいだろうか……。本当は、あなたには好きに生きていてほしい。

ルキアの自嘲を含んだ言葉がよみがえる。

もう五年も前のこと、大蔵大臣ロベルト・ネイゲル男爵が、ルキアにその出自を突きつけ、王太子に仕えるのを辞めて宮廷を去るよう迫ったと聞く。王弟派の中でもっとも忠義に厚いとされるロベルトは、主君の子が政敵の王太子に仕えているという状況を見過ごすわけにはいかなかったのだろう。

主君を想うロベルトの気持ちはわからないではないが、ルキアの責任ではないことを彼に負わせようとするのはあまり理不尽であろう。その一件を知った王がロベルトに激怒し、その後ロベルトには一切の謁見を認めていないというが、エリーヌはロベルトに同情はできなかった。

――あのような無茶はもう二度としないでほしいのだ。

エリーヌは思わず首元に手をやり、服の上からメダルに触れた。ファジール兵に斬りつけられたときのことを思い出してしまったのだ。

あれほど大口を叩いておきながら、すぐに剣を抜いて応戦することができなかった。自分を殺そうとする敵兵を前にして、感じたものは恐怖しかなかった。腕を斬られたときの焼けつく痛みに加え、ずたずたに裂けた皮膚から血を垂れ流す敵兵がただ恐ろしく、身体がまったく動かなくなったのだ。

そんなエリーヌを抱き上げたルキアの力強さは、昔の彼にはなかったものだった。五年前に比べれば、背も伸び、肩や胸には少し厚みが増していた。弱々しさを帯びた少年の影は徐々に薄くなっているというのに、かつてよりも脆さと儚さが増している。

なぜこんなことになってしまったのかと、エリーヌは空漠たる想いを抱いた。

「ミカヤ殿下！」

別室より駆け込んできた士官の声に、エリーヌは空想より現実に還る。

「王都より、マーテル・バルフォア中将がお越しになりました。至急お目通りをとのことでございます」

「ならば早く通せ」

ミカヤは正面を見据えたまま冷たく言い放った。

廊下を歩く騒がしい靴音とともに、一人の男が中央司令部の会議室へと現れた。バルフォアは現在、王都駐留軍の司令官を務めており、シベリー討伐には加わっていなかったが、前西方軍司令官として文官たちとともに作戦遂行の補佐を行っていた。そこで、陸軍大臣ジーク・ラッセルからの書状を持ち、早馬で駆けつけてきたとのことだった。

バルフォアは酷く神妙な顔をしていた。陸軍大臣からの至急の書状とのことだが、バルフォアの表情から察するに、それが良くない知らせであるというのはわかる。

ミカヤの前に跪いたバルフォアが書状を差し出す。ミカヤはそれを素早く広げ、目を通した。

頬に手を置いたまま文字を追っていくミカヤからは、うっすらと笑みが浮かんでいた。それはどこか奇妙に思える光景であった。

「これは、面白い……」

ミカヤは書を握り潰すとともに、たしかにそう呟いた。ほとんど聞き取れないような声だったが、彼の近くにいた者は認識すること

ができただろう。
ミカヤの言葉に、バルフォアの顔色が変わる。バルフォアは目を白黒させながら、なにか言葉を発しようとしていたが、次第にうなだれ、跪いたまま静止していた。
ミカヤは顔にかかった髪を後ろへと払い、立ち上がる。
将校たちの視線が一斉にミカヤへと注がれ、辺りは張りつめた空気に包まれた。

「皆、聞くがよい。今しがたジークより報告が入った。ケーニヒスがファジールとの交戦に参戦するとのことだ」

ケーニヒス駐留の大使から外務大臣であるデデュー公に向けて急使があったという。それによると、ケーニヒスがファジールに向けて数万の軍を派遣したとのことだが、その軍はファジールに差し向けたわけではなく、あくまで対ゴースティンのための戦力だと判明しているそうだ。

室内にどよめきが広がる。
それぞれが、来るべきときが来たのだという思いを抱いていた。
現在までゴースティンは圧倒的優位に立っていたが、ファジールに加えてケーニヒスまでがともなれば、被害も拡大し、当初の予定よりもかなり戦が長引くことになるのは避けられない。これがいかに予想されていた事態とはいえ、兵の士気に大きな影響を及ぼすことだろう。
ジーク・ラッセルは、ケーニヒスはもちろんのこと、ファジールとの交戦も避けようと尽力していたが、ゴースティンがこれだけの大軍を擁して国境で戦を繰り広げている状況において、ケーニヒスにしてみれは手をこまねいているわけにはいかなかったのだろう。
従属関係が解消されたとはいえ、ゴースティンによるファジール占領を許すわけにいかない以上、ケーニヒスの参戦は当然であった。

「案ずることはない。ケーニヒスが動くのは、もとより承知の上だ。そのための策は既に講じてある」

ミカヤは徐々に静まりゆく部下たちを満足げに眺め、命令を下す。

「バルフォアよ、お前は今から西方軍と合流しろ。そして直ちにグラッドとともに西方軍の指揮を執れ。ジークのもとへ戻る必要はない」

「はっ、はい。了解いたしました……」

バルフォアは歯切れの悪い応答をし、再び頭(こうべ)を垂れた。

「私はこれよりファジールへ向かい、戦場において直接指揮を執ることとする。近衛隊、そなたらも供をせよ」

士官たちは一斉に敬礼をする。

会議室を退室していくミカヤの後ろ姿を見つめながら、エリーヌは前線にいるルキアを想う。

彼は今も炎を繰り出し、敵を殲滅しているのだろうか。これ以上、彼に手を汚してほしくないと思うのは我儘でしかないが、それでも願うことは止められなかった。

断ち切れない過去への愛執が、彼女をそうさせていた。

砂塵のごとく散る

ルキアが戦線を離脱している間に、ジュダ・アパス・オーリアの三州を除くシベリー四州が制圧され、既に首都バードンにおいて総督が降伏の意思を示していた。各州にはゴースティンの占領軍が置かれ、州代表は拘禁されており、州軍は解散を迫られた。厳密には、軍隊はほとんどがゴースティン軍との戦闘で失われてしまったため、軍は解散されたも同然であるのだが、占領軍に対する反乱を未然に防ぐため、処刑という名の残党狩りが行われている。

そして双児宮の月、十日。

ゴースティン全軍はファジール領内へ侵攻を開始した。第一・第二部隊も占領軍を除いて第三・第四部隊へと合流を終えている。

ファジールの首都マーロは領土のほぼ中心に位置しているが、その手前にはダンテクト要塞が築かれており、首都までの進軍を阻んでいる。ダンテクト要塞から南東に位置する荒野に、総勢十一万のゴースティン軍が集い、ファジール軍を前に横に長い隊列を整えていた。

対するファジール軍の中にはルザーリ傭兵の軍旗のほか、黄色地に黒の斜めラインが入った旗が混ざっており、既にケーニヒスからの援軍が布陣しているのが見受けられた。ケーニヒスがファジールについたとの一報は前線の各部隊にも入っているが、それがどの程度の影響を及ぼすのか、皆、計りかねているのが現状である。

グラッド将軍の弁によれば、ファジールは厚かましくも同盟関係

にないケーニヒスに援軍を要請し、ファジールとの再統一を目指すケーニヒスは、その要請に応じ、援軍を送ることに決めたのだという。

ただし、今のケーニヒスにはゴースティンと正面切って戦えるほどの力はない。それはファジールの兵力と合わせても同様である。ケーニヒスの判断は明らかに戦局を見誤っているが、その失策がまったく不可解なものと思えない土壌もたしかに存在していた。

ケーニヒス国王フェルナンド・セルバンテスは気が弱く、一説には病であるとも言われており、私利私欲に走る王子や重臣たちの言いなりになっていると伝え聞く。ケーニヒスはセルバンテス王家による支配体制をとりつつ、いくつかの分家筋に地方領地の統治を任せているため、政情が不安定な側面がある。さらに、国政は現王と王太子が取り仕切っているが、王太子を含めた四人の王子たちは協調関係が築かれておらず、内政の混乱はゴースティンの比ではないという。事実、ファジール地方の独立を許したのは先代のカール大公が辣腕家であったことによるが、悪評高いジョアン大公の代になって五年が過ぎてもなんら手を打てないでいるのは、フェルナンド王が為政者として暗愚であることを表していた。

ケーニヒスはベイリーズなどの小国を属国扱いしており、国外にも強い影響力を及ぼしてはいるものの、フェルナンド王の代になってからのニ十数年で、ファジールの独立を許したことを契機とし、国力は目に見えて落ちていった。ほんの数十年前であれば、ケーニヒスとゴースティンの国力は拮抗しており、先制攻撃をかけることもできずに睨み合っていたというのに無常なものである。

本日の戦においては、四大司祭のすべてがひとつの軍に集結した。

その結果として、司祭たちは異教の蛮族だけでなく、同じガレ族である隣国のファジールやケーニヒスの軍隊を、＞神の力＜をもって葬り去ることになった。

三百年前にゴースティンだけが独特の教義を持つようになったルドリア教会であるが、フレイド、アナート、ガリアント、ベリアザーベルという四聖獣の登場する原始教典は、どの国のルドリア教徒にも強い影響力を有している。四大司祭らの放つ力は、ルドリア神を崇める同族でありながら、神の加護はゴースティンだけに向けられているのだとでも告げるかのように残酷なものだった。

ファジール及びケーニヒス連合軍はゴースティンに匹敵する十万もの大軍であったが、中央の戦列歩兵に対し、一斉に＞神の力＜が放たれ、一瞬にして何千もの兵の命が奪われた。

「ほう。なかなかのものではないか……」

青褪めている近衛士官たちを尻目に、ミカヤがそう呟いた。

ゴースティン軍の布陣する荒野の後方には小高い丘が広がっている。そこで近衛騎士団と王太子ミカヤは、戦の成り行きを見守っていた。

「エリーヌ、お前は既にあの力を目にしたことがあるのだろう？」

ミカヤの問いには、なにをそんなに怯えているのだ、という揶揄が言外に含まれていた。なにも答えられずにいたエリーヌは、再び、怖気が走るほどの強い魔力の波動を肌で感じた。

眼下には、噴煙が立ちこめている。その隙間からわずかにのぞくのは、なぎ倒され、折り重なる歩兵の遺骸であった。

軍の両翼に配置されている高位司祭たちは、敵の砲が届かない位置に留まり、次から次へと魔法を撃ち続けている。

その様子を悠然と見下ろしていたミカヤは、満足気に口を開く。

「司祭らは、魔力のすべてが尽きるまで延々と魔法を放ち続けることはできないのだそうだ。それより先に体力が尽きてしまうからな。……だが、司祭らの限界を考慮する必要はなさそうだな」

戦闘開始から数十分が過ぎるころ、三万の敵兵が強大な魔法によりその命を失っていた。もはや勝敗は決したも同然であるが、戦いはまだ終わらない。

「これが、かつて＞聖戦＜で用いられたという力なのですね……」

北方軍の第二師団長が恐怖と感動の入りまじった声で呟いた。現在、第二師団は丘の中ほどに整然と隊列を組み、お伽話の中で語られていた司祭の力を眺めている段階である。

「少将の地位を戴いておきながら、このようなことを口にするのは憚られるのですが……」

アシュレイの横で馬に跨る師団長は、半笑いで口を開く。

「私は今、軍人である己の無力さを思い知らされるばかりです。どれほど剣や銃の腕を磨こうとも、あのような力に立ち向かう術などないのですから……」

アシュレイは、部下の言葉を肯定も否定もできず、ただ目の前に広がっていく惨劇を見守ることしかできなかった。

第二師団の後方には、黒い軍服を身につけた近衛士官たちと、王太子ミカヤの姿がある。

親征していたミカヤは、シベリー殲滅戦における作戦指揮に関し

ては要塞に留まっていたが、ケーニヒスの参戦により、近衛士官を伴ってとうとう戦場まで出てきた。事態がここまで動いた以上、ミカヤはすべてにおいて自らの手で事を進めようと考えている。なにより、一度も戦場に出ずに帰還するのはミカヤの誇りが許さないのだ。

総指揮官である王太子が戦場に出てくるともなれば、兵の士気は非常に高くなる。ファジールもジョアン大公が直接指揮を執り、この異様な戦闘で挫かれそうになる兵の士気を奮い立たせていた。

ファジールは、大公が過剰な軍備増強を行っていたため、ゴースティンとの交戦が急遽決定したわりには数も質もそれなりの兵を揃えていた。実戦経験のない兵士の多さからすれば、その戦いぶりは充分見事なものであった。ルザーリの傭兵部隊はその名声通りの勇猛さを見せ、士気も高く、統率にも優れていた。それはケーニヒスからの援軍も同様だった。司祭を徴兵しなければ、ゴースティンは勝率五分以下の戦いを挑まざるをえない相手だっただろう。

戦況の悪化に伴い、大公は側近から退避を求められ、ダンテクト要塞まで引き上げることとなった。その際に騎兵の大半とルザーリ傭兵も要塞へと向かった。ケーニヒス軍も、指揮官が冷静に撤退の時機を悟り、既に退却を終えている。

この戦場に残されているのは、数百の騎兵と砲兵、そして新兵を多分に含んだ二千の歩兵のみで、それらの兵の指揮を大公より任されたのが、バルゼ・カーリエ総司令官であった。

「突撃、開始！」

司祭による攻撃が一段落ついたとき、ゴースティン騎兵隊が、ファジール砲兵隊に猛攻を浴びせた。サーベルで応戦するファジール兵も中にはいたが、ほとんどが砲を捨てて自軍後方へと逃走してい

った。

勝負が完全に決した今、カーリエ司令官のなすべきことは、防戦しながら兵を引き、ダンテクト要塞での戦いに備えることのはずである。しかしカーリエは、ゴースティン騎兵の突撃に対し、無謀な応戦を命じた。それにより目を覆いたくなるほどの惨状が荒野に広がっていくこととなった。

猛攻により魔力を消耗した司祭たちは、馬をゆったりと駆りながら、自軍の兵を避けつつ、敗走する敵兵を背後から仕留めていく。一方ルキアは、地を這いながらも手向かってくる兵のみを剣で殺めていた。ファジールが早々に降伏すれば、このような殺戮は行わなくてもよいのに、と虚しさを噛みしめながらも、彼は既に五人の兵をその手で葬っていた。

ぼんやりと戦場を見渡す。

ファジールの軍服は白を基調としているため、血や泥がよく目立つ。ほんの数時間前までは清浄であったはずの服も肌も、今では見る影もない。

この戦の当初の目的は、シベリー軍を殲滅し、国境周辺の州を制圧することだった。そのためシベリーの敗走兵には追撃を行っていたが、ファジール軍に対しては、歯向かわぬ者ならば命を奪うことはせずに捕虜とし、取引材料とすればよいのだ。ゴースティン側としても、彼らが降伏すればすぐにでも攻勢を緩める用意がある。それにもかかわらず、彼らは部隊が壊滅するまで戦い続けるつもりのようだった。

もっとも、兵の士気は決して高いとは思えない。戦闘の続行は、兵の意思ではなく、戦況も読めぬ指揮官の意思に他ならないのだ。

「――ルキア様！」

自分に向けられた声にルキアが顔を上げると、左斜め下方より銃剣の切っ先が迫ってきていた。

ルキアはそれをなぎ払おうと剣を構えたが、柄を握る手がぬめぬめとした血で滑った。切り返しが間に合わない。

（一旦、左腕で刃を受けるか……）

そんな考えルキアの頭を過ぎったとき、銃剣を持つ手が宙を舞い、敵兵は耳をつんざくような叫び声とともに、荒野に身を伏せた。その身は無残に切り裂かれ、軍服が赤く染まる。

アシリングが馬を駆り、ルキアの横で止まった。

「ルキア様、お怪我は？」

「ああ、大丈夫だ。すまない」

「……なぜ、魔法を使われないのです？」

アシリングの氷のような青灰色の瞳が、ルキアを責め立てるように射抜く。

ルキアは本日の戦闘において禁忌魔法は二度しか使っていない。それ以外の魔法にしても数えるほどしか使っておらず、戦闘にほとんど決着がついた今では、ほぼ剣のみで戦い続けていた。ルキア一人が魔法を使用せずともゴースティン側の優勢はまったく揺るがないほどになったとはいえ、司祭がサーベルを手にして敵兵を屠っていく様は異様に映ることだろう。

「……少し、＞念（ゼンゼ）＜が乱れているだけだ」

それは嘘ではなく、ルキアはこのところ思うように炎を操ることができないでいた。まだ腹部の傷は完全に癒えていないが、それが

影響しているわけではないだろう。魔道の力は肉体の不調に影響はされることはほとんどなく、精神に深く依存するのだと、父が話していたのを思い出す。

戦線に復帰してすぐのこと、ルキアがファジールの軍勢に向けて神の炎を放ったとき、身体の内側から全身を刺すような痛みに襲われた。

まるで自らを罰するかのように。

「奴ら、引くことをしませんね」

アシリングが辟易したように遠くを見つめる。ルキアも同じ方向に視線を馳せる。

「いたたまれんな……」

そう口にしながら、よくもこんな言葉を吐けるものだとルキアは思う。

無能な指揮官の命令だと知りつつ、ゴースティン軍は戦う意思のない敵兵を次々と手にかけている。それもまた、自分たちに下された命令であるためだが、いかに命令であるとはいえ、目の間に広がる惨状には同情を禁じえないものがあった。

砂埃と泥に塗れ、散り散りに切り裂かれた国旗、捨て置かれた砲、軍服をまだらな朱に染めていく者、サーベルや銃剣を握りしめたまま固くなった者、屍の山の下でうごめく虫の息の者……。

初めて戦場に踏みこんだころならば、ルキアはこの光景をまるで夢のように虚ろな心持ちで眺めていたことだろう。だが、もはや夢に落としこめて逃げ切れるほど現実は甘いものではなかった。

ルキアはずっと考えないふりを続けていたが、第一・第二部隊が第三・第四部隊に合流したということは、シベリーの北方の州の制

圧は完了したということになる。
ゴースティンの人間にとって、シベリー族と聞いて真っ先に思い浮かぶのが、馬に跨り、鮮やかな衣をまとい、大きく湾曲したサーベルを振りかざしている姿である。しかし、そのような特徴的な姿を持つシベリーは全体で見ればせいぜい三分の一程度であり、その他のシベリー族はこの大陸に数多くいる、ありふれた日常を送っている者たちとなんら変わらない。

州の制圧は、最終的に市街戦となり、軍属以外の者の犠牲者も多数出ることとなる。シベリーは男だけでなく女も武芸を身につけることが当然とされていると聞く。軍に属していない者であっても、武力を持って抵抗してくれれば、その者たちを手に掛ける必要がある。ゴースティンの軍人は市街地に居住する女子供にも容赦なく銃を放ち、剣を振り降ろし、司祭たちは彼らを“敵”と見なして魔法を放っていったことだろう。

（直接手を下さずにすんだ私は、どれほど恵まれていたのだろう……）

卑怯な安堵を胸に沈めながら、ルキアはファジール兵の亡骸に目を落とす。数え切れぬ者を手にかけていく中で、胸を悪くするような血の臭いにはもう慣れてしまっていた。

前方より唸り声が上がり、ルキアは視線を上げる。
最後の生命線と思われる歩兵部隊が突撃を開始した。その数は三百といったところで、銃剣を抱えている。既に弾薬は尽き、剣による戦いを挑む以外に道は残っていないのだ。

「一気にケリをつけてやる」

低く呟いたアシリングが、両手に＞念＜をこめる。
ルキアは剣の柄を強く握りしめる。既に返り血は乾き、むせ返るような臭いは消えてしまっている。しかし、再びこの剣は血に塗れるのだ。
腕に巻かれた包帯を解き、剣の柄とともに手に巻きつける。柄にはめ込まれた王家の紋章は包帯で隠れていく。
強い光とともに、アシリングの放った無数の刃が敵を切り刻む。
アシリングに続き、砲兵隊も一斉に砲撃を開始する。あたりは一瞬にして爆音と粉塵に包まれた。

絡み合う糸　（1）

交戦開始より二十七日――巨蟹宮の月、七日。
ファジールの首都マーロは陥落した。
ゴースティンは何度もファジールに停戦を申し入れていたが、それらが受け入れられることはなく、首都マーロの陥落及びダンテクト要塞の攻略まで戦闘は続くこととなった。

ゴースティン軍はダンテクト要塞を攻略するに先立ち、高位司祭を中心とした三万の部隊だけを残し、主力部隊には要塞の南を迂回し、マーロへと向かわせた。「敵の主力は要塞に駐留しているが、首都さえ落とせば戦は終わる。包囲戦に時間を費やす意味などない」というミカヤの一言により作戦は遂行された。

ダンテクト要塞は一見、強固な造りである。キウロス要塞やエーヴェル要塞とほぼ同時期に建設されたもので、幾重にも稜堡（りょうほ）が組まれており、死角の少ない様式はとてもよく似ている。しかし、その稜堡をことごとく司祭が破壊していったため、ゴースティン軍が包囲戦を開始するころには、要塞としての機能はほとんど失われていた。

主力部隊がマーロへ行軍するために障害となるのは南と西の稜堡であった。そこで司祭たちは真っ先にそれらの稜堡を潰し、すぐに主力部隊はマーロへの進軍を開始した。当然、ゴースティンの主力がマーロへと向かうとなると、ファジール軍は要塞より打って出てくることとなったが、その軍勢は四大司祭の＞神の力＜にて一瞬のうちに葬り去られた。それによりファジール軍は籠城を決め込み、

首都防衛はジョアン大公とともに要塞から事前に撤退していた騎兵とルザーリ傭兵に託すことに決めたようだった。

そのころ、ようやく敗戦を悟ったジョアン大公は、マーロ陥落前にケーニヒス国境ベスランへの脱出を図ろうとしていた。しかしその途中、マーロ北部の村でゴースティンの騎兵と交戦し、ルザーリ傭兵は最期まで大公を守り、その命を散らした。近衛騎兵に守られながらベスランへと急いでいた大公は、国境まであと少しというところでゴースティン騎兵により拘束されることとなった。

その知らせがダンテクト要塞内へと入り、バルゼ・カーリエ司令官が降伏に応じ、ファジールとの戦は終結した。

現在、中央都市マーロに駐留している西方軍が戦後処理に当たっているが、ファジール軍はその組織自体が壊滅状態に陥っており、西方軍の役割は、マーロ市民に対する占領統治が主目的と化している。亡命を断念せざるをえなくなった大公は、マーロ宮殿にて講和条約締結に向けての準備を行っているという。

そして、マーロ陥落より一夜明けた今日、ダンテクト要塞において、ケールセン・グラッド少将及びマーテル・バルフォア中将がファジール軍総司令官バルゼ・カーリエと対面することとなった。その席には、西方軍の上級士官に加え、ミカヤの指示により列席した高位司祭もいた。

会談が行われるのは要塞の貴賓室であるが、この部屋の室内意匠は、ゴースティンにおいて主流のものとは少々趣向が異なる。もともとゴースティンとケーニヒスの国境は文化の分岐点とも言われることがあり、言語、服飾、料理、建築など、あらゆる文化面におい

て大陸中の国々がゴースティン流とケーニヒス流とに分かれている。ファジールは同君連合が形成される以前よりケーニヒスの影響を強く受けていた国だったため、いわゆるケーニヒス流が主なのだ。

これは言語についても同様で、ファジールの公用語はケーニヒス語である。ゴースティンとケーニヒスの言語は綴りこそよく似ているものの、発音がまるで異なり、文法もケーニヒス語のほうが複雑な面が多々見られる。とはいえ、シベリー語ほど習得に難儀するものではなく、大陸全土にあらゆる学問の書物が広く流通しているため、ある水準まで学問を修めた者であれば、両国の言語は一通り理解できる。

しかし、この会談の席で交わされるのはゴースティン語である。敗戦国に払う敬意などあろうはずがない。

グラッドが低く響く声でバルゼ・カーリエ司令官に問う。

「まずは、貴公にお訊きしたい。なぜファジールは、我が国とシベリーの戦に参戦された?」

グラッドの前に対座するカーリエが苦々しげに口を開く。

「……白々しいことだな。そなたら、元々シベリー軍の討伐だけで終わるつもりなどなかったのだろう? あれほどの大軍を擁するなど、我らに戦をしかけるつもりだったとしか思えぬわ。しかもあの魔道士はなんだ? 聞けば奴らはルドリア教の司祭だというではないか。貴様らは軍人としての誇りも捨てたのか!」

カーリエはルキアたちをにらみつけ、捕虜には珍しい威勢の良さを見せた。

グラッドは眉一つ動かさず、静かな口調でカーリエに語りかける。

「我々は、ケーニヒスは元よりファジールにも危害を加えるつもりなどなく、あくまで今年初頭に起こった暴動に対する報復としてシベリー軍の討伐を遂行したまでのこと。国王陛下は隣国との戦争を望まれてはいない。貴公らが兵を挙げたために我らも応戦したにすぎないのだ」

カーリエはますます気色ばみ、グラッドに食ってかからんばかりに身を乗り出した。

「あの色に溺れた王などどうでもよい。実権を握っている王太子はファジールもケーニヒスも潰すつもりなのだろう！　あの王子の悪評はいくらでも耳に入ってくる。野心家で傲岸不遜な人物であるとクラヴィーエ公も申されていた」

キイルの名が出た途端、ルキアは顔を強張らせた。その様子を見届けたグラッドは、意表を突かれたような表情を作ってから、カーリエに向き直る。

「これは奇妙なことを。貴公は敵国の王族の言葉を鵜呑みにされるのか？」

「クラヴィーエ公ならば信頼してもよいだろう。この国の独立はあの方の助けなしには成せなかったこと。この国の者は皆、クラヴィーエ公が王となり、我が国と良好な関係が築かれることを望んでいたのだ。……それを、あのような若造が王位に就こうとしているとはな」

室内にざわめきが広がっていったが、グラッドはそれを咎めることはせず、捨て置いたままでいた。

これまでキイルがファジールに友好的であり、シベリー軍の殲滅に異を唱えていたのは、ケーニヒス及びファジールと戦争になるこ

と避けるために他ならない。キイルの望むものは、民を疲弊させる戦争という手段は取らずにケーニヒスの力を殺ぎ、ゴースティンをアレイシス大陸の宗主に仕立て上げることであった。いずれはファジールをゴースティンの支配下に置く算段であったと思われるが、八十年前のような戦争を避けることが為政者として選ばざるをえない道だと考えてのことである。

つくづく、理想主義に凝り固まった貴人であるとグラッドは思う。

そんな王弟派の重臣の振舞いは、王太子派に対抗するためだけのものに見えることが多く、これまでファジールに向けて行ってきた少々度の過ぎる支援は、その目的が崇高な理想に基づくものであるからこそ、胡散臭さを漂わせているのも事実であった。

カーリエの発言は、そんな空気を一気に後押しするものとなった。一度芽生えた疑念は、そう簡単に刈り取ることはできない。

グラッドは神妙な顔をして、カーリエに向けて問いを重ねる。

「しかしカーリエ殿。貴公らが我が国の王太子を快く思っておられずとも、ファジールがゴースティンと良好な関係を望んでおられたのならば、シベリーに与する理由などないはずだが？」

「……シベリーは所詮、我らにとってはルザーリよりも安上がりな傭兵というだけのことだ。今はもう、ケーニヒスの支配を受けていたころとは違う。シベリーを傭兵として利用はするが、保護をしてやる必要など一切なく、我らにはシベリーに与しようなどという気は毛頭ない」

口の軽い男だ、とグラッドは内心ほくそ笑んだ。

司令官の口から、ファジールがシベリーを傭兵としていたことを白状してくれたのはグラッドにとって好都合であった。

望み通りの話の流れができたこの好機を、彼が逃す理由はない。

「その安上がりな傭兵が、我が国の軍隊に無体を働いたことについて、貴公はどうお考えなのだ？」

「そのようなこと、なにを今さら……！　その件についてはデデュー公に詳しく説明申し上げており、とっくに決着しているはずだろう！」

完全に頭に血が上ったカーリエには冷静さなど微塵も残っていないようだった。声を乱して言葉を発し続けるカーリエを、グラッドはなにも言わずに見守る。

「だからこそ我々もゴースティンの暴挙を不問としてやったのではないか。貴様らには協定を遵守する気もないのか？　そのようなものシベリーと同じ、いや、それ以下の野蛮で下劣な行いではないか！」

「協定の順守？　貴公は一体なんのことを言われているのやら……」

グラッドが薄く笑いながら問いかけると、カーリエはさっと顔色を変え、口をつぐんだ。

当然と言えば当然であるが、カーリエはゴースティン宮廷の派閥について完全に理解しているわけではないようだった。少なくとも、グラッドのことを王弟派の軍人であるとでも思っていたのだろう。西方軍の将校は、概して王弟派の軍人が多く、王太子派のグラッドが司令官に就任したのは異例中の異例であったのだから無理もない。

グラッドは青褪めた顔で机上をにらんでいるバルフォアを一瞥し、さらにカーリエに問いつめる。

「シベリー暴動の件……。貴公の主張によれば、あれはファジール所属のシベリーであったということなのか？　それを我が国の外務

大臣に詳しく説明されたということだが、そのような話、私は初耳なのだがな……」

ゴースティンにおいて、シベリーの暴動の真相とファジールとの密約について知っていたのは、王弟派の一部の閣僚と将校だけである。そして、この場においてそれを知っているのは、当事者であるバルフォアと秘密裏に情報を入手したグラッドのみである。

さすがにカーリエも気がついたのだろう。糸が切れたように、諦めと嘲りを含んだ笑みを漏らした。

「やはり、貴様らはシベリー討伐など建前で、初めからファジールに戦を仕掛けるつもりだったということではないか……」

荒んだ目でグラッドを見上げる。

「もうよい……。あの王太子が王となれば、遅かれ早かれ今と同じことになったのであろうからな。下賤の女の産んだ私生児がゴースティン王となるなど、まったく……五百年続いたオトゥール王朝も地に堕ちたものだな」

「カーリエ殿、我が主君を侮辱するのはそこまでにされよ。……誰か、カーリエ殿をお連れしろ」

グラッドは側に控えていた部下に、今までとは打って変わった冷たい声で命じる。

カーリエはうなだれたまま、ゴースティン兵に抵抗することもなく退室していった。それと同時に、グラッドはバルフォアに問いかける。

「先ほどの話、貴公はどう思われた？」

うつむいていたバルフォアの肩がわずかに揺れる。

「今年初めの、西方軍第五連隊をシベリーが奇襲したことに端を発した暴動……。あれはどうやらファジール所属のシベリーであったようだ。ファジール軍の最高責任者であるカーリエ殿がそれを認められているのだから、それは事実ということなのだろう」

「……そうだとすればなんだ？　なぜ、そのようなことを私に訊く？」

やっと口を開いたバルフォアの声は滑稽なほど裏返っていた。

グラッドは笑いをこらえてバルフォアに視線を投げる。

「ファジールの関与があったなど、貴公が提出された紛争鎮圧の報告書に一切書かれておらなんだのでな。貴公はなにもご存じではないと思っていたのだ。……だが、カーリエ殿の話を聞かれても驚かれた様子がない。もしや、貴公は初めから知っておられたのではないのかと――」

「失礼なことを申すな！　そもそも、あのような男の言っていることなど当てにならんではないか！」

「そう考えるのが自然だが、あの男、あまりに口が軽すぎる。あれではろくに奸計を図ることもできぬだろう。だからこそ、敢えて貴公に訊いているのだ。貴公は私の前任者なのだから、西方軍のことは私よりも詳しいはずであろうからな」

「だから、なにが言いたいのだ！」

「シベリーによる第五連隊奇襲の件、私は常々不可解に思っておったのだ。第五連隊が報復としてシベリーに応戦したとのことだが、それは真か？　よもや、シベリーに攻撃を仕掛けたのは第五連隊からではあるまいな？」

バルフォアから得ることのできない返答を待つことなく、グラッ

ドは先を続ける。

「おそらく、カーリエ殿の言われていた“協定”というのは、西方軍による暴挙を不問に付すという取り決め、言わば密約のことであろう。とすれば、一体デデュー公はなにを取引材料にされたのであろうな？」

グラッドの言葉を聞いたバルフォアは、グラッドから目をそらさずにいるのがやっとという状態だった。彼もまた、カーリエと同種の人間だということなのだろう。その場に居合わせた者は皆、バルフォアの引きつった顔をその目に焼きつけていた。

しばし黙ったままでいたグラッドは、鼻で笑いながら席を立った。そして、驚いて顔を上げるバルフォアを冷やかに見やる。

「まあ、その一件について今は訊かぬこととしよう。それが真実であったとして、貴公を断罪するのは私ではないのでな。今はなにより、シベリー軍の殲滅という長年の目的がやっと達せられたことを喜ぶべきであろう。さらに、目障りなファジールを我らの支配下に置くこともできた。自軍の被害を最小限に留めた上でな。これはすべてミカヤ殿下の知略によるものである。……そうであろう、司祭殿？」

グラッドは司祭の中でも敢えてルキアを見やった。ルキアはうなずくことはせず、じっとグラッドの顔をにらみ据えていた。

「とはいえ、我が国最大の兵力を有する西方軍がゴースティンの誇りを傷つけるような無体を働き、あまつさえ王太子殿下に対し虚偽の報告を行ったのが事実ならば、私は西方軍司令官としてこの問題を捨て置くことはできぬ。昨今、西方軍内において軍規が乱れてい

ることも、この事態を招いた要因であろうからな」

グラッドはもう一度バルフォアに視線を戻す。

「戦後直ちに軍法会議が開かれるだろう。その中で真実を明らかにされよ、バルフォア中将殿」

そう言い残し、グラッドはその場を後にした。

貴賓室を出て、長い廊下を歩きながら、グラッドはこれまでずっと張りつめていた神経を弛めていった。

ここに至るまでの大きな関門、それはファジールを参戦に踏み切らせることができるかどうか、ということであった。

ミカヤがシベリー軍の討伐を検討し始めたとき、当然、ファジールとケーニヒスを刺激しない方法を優先的に模索していた。

それを一変させたのは、王弟派が秘匿していたファジールとの密約をミカヤが知ったことによる。この密約は、元々は独立戦争時に締結されたもので、表向きは相互防衛同盟であったが、裏ではシベリー国境付近における権益拡大などの条項も含まれており、その期限は二十年とされていた。つまり、シベリー暴動の際に交わされた密約とは、この同盟の延長を求めるものだったのだ。

今のファジールとこのような同盟関係に置かれていることは、決してゴースティンにとって有益ではない。初めからバルフォア父子を罰し、ファジールとの同盟を破棄すべきものであったはずのだ。

それをキイルやデデュー公が避けようとしたのはなぜだったのだろうか。

まだファジールを切り捨てる時機ではないと踏んだのか、それともバルフォア家の当主と息子を罰すれば、その主筋に当たるハーシェリオン家にも類が及ぶことを恐れたのか。

いずれにしても、それが王弟派の者たちにとって付け入られる隙となったのだ。

シベリー軍討伐に関し、王弟派の外務官はケーニヒスと開戦を避けるべく交渉を行っていたが、ミカヤは自ら手配した外務官をケーニヒス王太子の派閥に向けて送り、直接交渉を推し進めていた。ケーニヒスの宮廷が複数に分裂していることは鼻から承知であったが、彼らがゴースティンの王弟と王太子のどちらに味方するかは一つの賭けであった。

結果として、ケーニヒス王太子はミカヤにつくことを選んだ。“影の王”と呼ばれる宰相ではなく、いずれ王座に座る者であるミカヤに手を貸すことに決めたことは、優柔不断とも評されるあの王太子にしては英断であったと言わざるをえない。グラッドにとっては運を天に任せるように思えた計画であったが、当初の目論見はすべて叶ったのだ。

ケーニヒスはファジールに対ゴースティンの同盟を持ちかけ、その証として援軍を送った。それが、ミカヤにとって勝利を確信した瞬間だったことだろう。ケーニヒスは、ゴースティンとの盟約に基づいてファジールに偽の同盟を働きかけ、早々に撤退させる予定の軍を送ったに過ぎないのだ。

なにはともあれ、国外の戦争も国内の政争もこれで決することとなった。

グラッドはこれまでの長い道のりを振り返り、勝利を与えられた神に向けて、心からの祈りを捧げた。

絡み合う糸　（2）

（……茶番だ）

ルキアは退室していくグラッドの後ろ姿を見つめながら、冷静な怒りを胸に沈めていた。グラッドに怒りを感じる一方で、、明らかに分が悪いのはバルフォア並びに、彼に連なる者たちであるということもルキアにはわかっていた。もしグラッドの指摘したものが真実ならば、王太子派の者たちは国内の政争についても勝利宣言を下すこととなるだろう。

疑う余地もなく、グラッドは証人として不必要に多くの者をこの会談に列席させたのだ。会談の内容について他言無用と厳命していたが、内心はすぐに知れ渡ることを望んでいるに違いない。

シベリー軍の討伐はファジールと交戦するためのよい口実だったのだろう。当初の戦力配置等の采配を改めて考えると、初めからこうなることをミカヤは予測していたようにすら思える。それは、単に軍略や洞察力に優れているという言葉では片づけることのできないものであった。

たとえばファジール戦において、予備戦力としてベスラ要塞に駐留していた北方軍が投入された件。

北方軍の投入は開戦前から決まっていたことではあるが、シベリー戦の開戦直後に中央司令部より、ケーニヒスの参戦いかんにかかわらず、北方軍の五割を西方軍に合流するよう通達があり、援軍がエーヴェル要塞まで到着していた。それは、ミカヤがジーク・ラッ

セルからの書簡を受け取るよりも前のことである。

貴賓室を後にしたルキアは、近くの階段を上ってテラスへと出た。今日は朝からとても暑い日で、分厚い生地の黒い軍服は煩わしいものである。丘の上の要塞には心地良い風が吹いており、それが階段まで流れ込んでいる。

あたりを見渡しながら、テラスを歩いていたルキアは、視線の先に見慣れた後ろ姿があることに気づき、足を止めた。

「まったく、とんだ茶番でしたね。あなたもただ白けるばかりだったでしょう？」

石壁の手すりに寄りかかっていたエーゼンが、乱れる黒髪を押さえながら振り返る。

「それにしても、あれが西方軍の元司令官ですか……。上層部があのような男に国内最大の軍隊を統率させていたなど信じがたいことです。磐石に見える我がゴースティン王国も、思わぬところで綻びが生じているのかもしれませんね」

「……そうですね」

ルキアが吐息まじりに呟くと、エーゼンは彼特有の無表情な笑みを浮かべ、すらすらと語り始める。

「まあ、初めからわかっていたことでしたがね。私たちは開戦を押し切るためのただの駒。そしてシベリー討伐は、ファジールとの前哨戦のようなものなのだと」

「あなたは、王弟派の閣僚がファジールと密約を交わしていたことも知っていらしたのでしょう？」
「まさか、私はなにも知りませんでしたよ。王弟派の大臣方がああも強く反対されるからには、なにかあるのではと思っていただけです」
白々しい、とルキアが胸の内で呟くと、エーゼンはふっと苦笑を漏らした。
「廷臣たちはこう噂していましたね。キイル殿下はミカヤ殿下を厭うゆえに開戦に難色を示されていたのだと。しかしそれはありえません。そのようなくだらない私情に振り回される人間が、二十数年にも渡って国を導けるわけがないのですから。とはいうものの、この結果については少々失望いたしました。よもや、キイル殿下がこのような失策をなさるとは……」
「あの一連の事態、指示されたのはクラヴィーエ公なのでしょうか？」
「ルキア様がお信じになりたくない気持ちはわかりますが、首謀者がラッセル伯爵であろうと、デデュー公であろうと、キイル殿下がご存じでないはずがないでしょう」
バルフォアが一貫してすべて自分の企みであると主張したとしても、武官であるバルフォアにそのような権限はない。
バルフォアの報告が虚偽と知りつつ、それを隠蔽したのは、陸軍省のトップであるジーク・ラッセルであり、ファジールと裏取引を交わしたデデュー公ミシェルがその関与を言い逃れることはできなくなれば、クラヴィーエ公キイルにその責が及ぶのは確実だった。
「ここ数年、キイル殿下はどこか鈍重になられたと思いませんか？腹心のネイゲル男爵が非常に有能な方ゆえ、失政につながるよう

なことはございませんでしたが」
「……なにより、ずいぶんと人が変わられたようにも思います」
「そうですね。かつてはミカヤ殿下にずいぶんと気を配っておいでしたのに、今では酷く冷淡なものですから」
当時のことを思い出したルキアは、やるせない想いに駆られた。脈を打ち始めるこめかみを押さえ、強く唇を噛む。
「あなたはミカヤ殿下が王となられるのを望んでいらしたでしょう？　殿下が敬われ、宮廷において強い権勢を誇られるのは、あなたにとっても喜ばしいことではないのですか？」
「だからといって、このような結末を望んでいたはずがないではありませんか！」
ルキアが理不尽な徴兵命令をあっさり呑んだのには、いくつかの理由があった。抗うだけ無駄だと考えたのもその一つだったが、常に不安定であったミカヤの立場を悪くしたくないという思いもあった。さらに、ミカヤへ降りかかるであろう批判を恐れていた。もしルキアが命令を拒んだことで、それに倣う司祭が出てくれば、ミカヤは彼らを容赦なく罰したに違いない。そうなれば、元々悪評の立ちやすいミカヤへの非難は熾烈を極めることとなっただろう。
しかし、シベリー殲滅戦の目的は、国境紛争に終止符を打つためではなく、王弟派排除に主眼が置かれたものだったのだ。それを初めから知っていれば、ルキアはまったく別の行動を取ったことだろう。知らずのうちとはいえ、キイルを貶める策に手を染めた自身に、ルキアは言いようのない嫌悪を抱いた。
横髪をかきむしるように握り締めた。疼き続ける頭痛のせいで、吐き気さえ覚えていた。
「そういえば、開戦前に不敬な噂が流れていたのをご存じですか？

このようなこと、噂になど耳を傾けないあなたには意味のない問いかもしれませんが」

「……不敬、というからには、ミカヤ殿下に関することでしょうか？」

「ルキア様にも関わることですよ。ミカヤ殿下が司祭の徴兵を強硬に推し進められたのは、あなたの命が戦場で失われればよいとお考えになられているからだ、というものです。他にも、シベリー軍討伐の勅許は精神薄弱の王を脅して得たものであるとか、あまつさえ、国王の病は殿下が毒を盛るよう指示をしたためである、といった類の噂も囁かれていました。まあ、それはいつものことですが」

このような噂は、なにも驚くようなことではない。

司祭の徴兵の件は、ルキアがミカヤと不和であると周囲の者たちに思われているためであり、国王の件は、ミカヤが父王を嘲ったり蔑ろにするような発言を平気でするため、病床の王の死を願っていると邪推する者がいるためである。

いい加減な噂であっても一旦流されてしまえば、真実は捨て置かれてしまう。先ほどカーリエ司令官がミカヤの悪評について言及していたが、あれがキイル自身の言葉であるはずがない。王弟派の、口さがのない者の発言に違いないのだ。

「ご心配なさらずとも、それはまったくの出まかせですよ。ミカヤ殿下が排斥なさりたいのはキイル殿下であって、あなたではありませんから。むしろルキア様をかつてのようにご自分の側近に据えたいとお考えです」

エーゼンの声色はルキアを労わるような響きを持っていたが、それが錯覚に過ぎないことをルキアは身に染みてわかっている。

おもむろに顔を上げ、エーゼンをにらむように見やる。赤褐色の瞳の奥は、いつものように闇色が煌めいていた。

「戦後、宮廷の勢力図は大きく変わるでしょう。当然、あなたを取り巻く環境も……。早々に覚悟を決められたほうがよろしいと思いますよ」

なまめいた風が吹き、髪と服を緩やかに揺らしていく。エーゼンは酷薄の色を強めた瞳でルキアを一瞥したのち、悠然と身をひるがえした。

……†……

マーロ陥落より半月後。巨蟹宮の月、三十日。

ゴースティン軍はマーロ北部ケーニヒス領土内において、ケーニヒスの正規軍と交戦するに至ったが、ケーニヒスは本気でゴースティンを相手にする気などなく、数日のうちに停戦講和を申し出てくる始末であった。

ファジールのように首都陥落及び君主の捕縛といった経過をケーニヒスが辿らなかったのは、事前にゴースティンとの間で交渉が行われていたからに他ならない。

そして、獅子宮の月、十三日。

かねてよりの手筈通り、マーロ宮殿において、外務大臣デデュー公並びにジーク・ラッセルとケーニヒスの最高軍事責任者であるイグレシア元帥及びファジール大公ジョアン・ザイードとの三者が集い、講和条約が結ばれた。賠償問題については、後日の会談で決せられる予定である。

シベリー軍の殲滅に始まりファジール及びケーニヒスまでも巻き込んだこの戦は、これにより終結することになる。このまま戦を続行すれば、終結までに年単位の歳月を要し、ゴースティンの被害は拡大しただろう。ゴースティンに敗北などありえないが、ケーニヒスに勝利したところでそれほど有益はなく、戦の続行は賢明でなかった。

ゴースティンやケーニヒスは、自国の領土を拡張していく中でいくつもの小国を呑み込んできた。強国にとっては戦も外交もある種のお遊びに過ぎないが、弱小国にとっては食うか食われるかの瀬戸際に立たされることとなる。生き残りをかけた小国の君主や大臣たちは、冷静に強者を見極め、臆面もなく自らを貶めて媚びへつらう。この戦においては、あの大国ケーニヒスがこれまで征服してきた弱小国と大差ない振舞いを強いられることになった。

ケーニヒスは再びファジールとの統合を望んでいたが、ファジールがゴースティンに完全制圧された以上、ゴースティンに歯向かい、ファジールにおける権益のすべてを失う事態だけは避ける必要があった。いずれゴースティンの手に落ちたファジール領土を奪い返すにしても、有益な外交手段を整えておかなくては話にならない。なにより、八十年前の不完全な不可侵条約を確固たるものとせねば、かつての属国だけでなく、本国の領土割譲をゴースティンに迫られる事態にすらなった可能性もある。

だから、ケーニヒスはファジールを捨て、ゴースティンの要求を呑んだのだ。すべては、生き残るために……。

終戦に伴い、ゴースティン軍も西方軍の一部を除き、帰還することとなった。この戦争は、被害よりも圧倒的に収益のほうが上回る。勝ちの見えていた戦とはいえ、ここまで優位にことが進んだことにより、大義の存在価値など無へと帰した。

忘れえぬ想い　（1）

三国間の講和条約締結より二週間前。王都エクシェール、ヴァンチェスタ宮殿にて。

クラヴィーエ公キイルは、執務室の窓から眼下に広がる中庭を眺めていた。ここから見える庭には、シューゼランという年に二度咲く白い花が植えられているが、咲くのは春と秋の二度であるため、真夏である今は青々とした草地になっている。そこに強い光が差し、背の高い木々が暗い影を落としている。

ファジール首都マーロの陥落について、キイルは既にジークより聞き及んでおり、まもなくケーニヒスと交戦になるという報告も書簡で受けていた。それによると、ケーニヒスとは形式的に開戦することにはなっても、決して長引くことにはならないという話であった。戦力差の問題ではなく、元よりケーニヒスにはゴースティンと開戦できるほどの準備が整っていない。いや、整える必要などなかったと言うほうが正しいだろうか。

始まる前から既に終わりの見えていた戦だった。事前に多くの糸が貼りめぐされており、それに絡め取られた者たちが一本の道へと向かうように誘われていった。

ジーク・ラッセルはミカヤからの要請に従い、近く行われるであろうファジール及びケーニヒスとの講和に参加するため外務大臣デデュー公ミシェルとともに王都を発った。ジークはそれが陸軍大臣として最後の責務となることを覚悟しているはずだ。

半年前、シベリーの暴動についてファジールの関与を揉み消し、第五連隊奇襲に関する捏造の報告を容認したことが、ここまで取り返しのつかない事態に陥ることをジークは予想していなかっただろう。もちろんそれはデデュー公やキイルも同様だった。

それは一つの賭けだったのだ。

シベリーからの一方的な奇襲となれば国内の不満は募る。特に今回は将校に死傷者が出た。暴動の平定だけでは納まらず、シベリーへの報復の流れへ至らない確信があったわけではなかった。むしろ、そう遠くない未来に討伐が行われるのは避けられないとも思われていた。

もう何十年もの間、この国は平和そのものだった。だからこそ、それを脅かすシベリーこそが災厄の根源だと考える者は多い。その存在が、平穏と戦乱とを分かつ堰であることも忘れて。

八十年前に起こったケーニヒスとの戦ののち、ゴースティンとケーニヒスの間には不可侵条約が結ばれていたものの、ファジール独立の際にゴースティンがザイード家に支援を行ったことにより、もはや紙切れのような効力と化してしまっていた。キイルも十数年ほど前からシベリー軍の討伐を主張していたが、ファジールはともかく、ケーニヒスと交戦する可能性が捨てきれず、西方軍を強化し、守りに徹するしかなかった。そんな状況を打開するために、ケーニヒスと新たに強固な条約を結ぼうとしたが、その計画は不測の事態が発生したため頓挫してしまった。

あれから七年、その間に状況は変わっていった。

カール大公の死、ケーニヒスによるシベリー自治権の縮小……。

小さな赤い実が落下し、恣意的に踏み潰され、赤い染みがあたりに波及していくかのようだった。

マーテル・バルフォアについては、以前より西方軍司令官ではなく王都駐留軍の師団長あたりを務めさせるのがせいぜいだろうと多くの者が口にしていた。なにより、バルフォアのもとでは西方軍の規律が乱れるばかりで、例の一件の責任を取らせる形でバルフォアを更迭しようとしていたところ、ミカヤから新たな西方軍司令官の推薦があった。

後任のケールセン・グラッドはギルベイド家の息のかかった将軍であったが、派閥など考慮することなく、ジークはグラッドの司令官就任を承諾した。今の西方軍をまとめるにはグラッド以上の適任はないと判断したことと、これ以上バルフォアに問題を起こされてはかなわないと誰もが思っていたためだ。

その一方でキイルは、バルフォアの失策について呆れてはいたものの、ほとんど怒りを感じていなかった。これまでにも、外戚であるハーシェリオン家の意のままとなることはあった。バルフォア家には大臣職に就いている者もおり、長年ハーシェリオン家に仕えてきたバルフォア家を失うわけにはいかないという事情は理解していた。デデュー公の顔を立てる必要もあり、また、あのような男一人の扱いなどどうとでもなる、キイルはそう高を括っていた。それを王太子らにつけ入られるなど、考えてもいなかったのだ。

ファジールは、先代カール大公のころこそ友好関係を築いておく利益のある国であったが、五年前、ジョアンが大公位を継いでからというもの、国益を損ないかねないほどの軍備の増強を図り始めた。西の小国ルザーリから傭兵部隊を雇っていたのは先代のころと同じだが、それに加えてシベリーの軍隊をケーニヒスのみならずゴースティンへの監視のために雇い始めたのはジョアンの代になってすぐのことであった。

だからこそ、今後ファジールがケーニヒスとの関係悪化によりゴ

ースティンに擦り寄ってきたとしても、ゴースティンはケーニヒスにつき、ファジールに対してはカール大公の時代のような援助をするつもりはなかった。現在のファジールに同盟国を気取られるのは不愉快でしかなかったが、好戦的なジョアンが大公である今は、相互防衛同盟を継続せざるをえなかった。現段階においては、それが最善であるとの判断だった。

つまり、王弟派の閣僚たちはミカヤの企みをまったくと言っていいほど知らなかった。

既にはっきりしていることは、ファジールの挙兵はケーニヒスからの働きかけがあったためであり、その働きかけは、ゴースティンにより持ちかけられたものだということである。

ファジール参戦の報を受けたジーク・ラッセルが、それを知らせるべくエーヴェル要塞のミカヤのもとへバルフォアを遣った際、ミカヤはバルフォアの王都への帰還を許さず、そのまま西方軍に合流させた。それが宣戦布告だったのだろう。それでやっと罠にかかったことに気づいた。

あまりに遅すぎたとしか言いようがない。

「――殿下」

背後から何度か声をかけられていることにキイルは気づく。振り返ると、そこにはロベルトの沈鬱な顔があった。

ロベルト・ネイゲルは、キイルが十になったときに宛がわれた学友である。ロベルトはそれほど有力な家柄ではなかったものの、キイルは彼をもっとも深く信頼し、その優れた知性を買って厚遇してきた。ロベルトの忠義と能力は、誰もが認めるものであった。

ロベルトは三十を過ぎたころから口髭を蓄え始めたが、顔立ちそのものは少年のころとそれほど変わっておらず、ふとした瞬間に昔の面影が過ぎることがある。だが、この数か月で彼はずいぶんと老けてしまっていた。後ろに流した栗色の髪には、所々白いものが混じり始め、目の下にも暗い影が落ちている。

キイルが思わず苦笑を漏らすと、ロベルトは怪訝にキイルを見やった。

（……もう、いいだろう）

キイルはそう口にしかけて、なんとかその言葉を押し留めた。

扉を叩く音がする。

キイルは特に気に留めることもなく入室許可を与えた。そのとき扉越しに告げられた声を聞いた途端、キイルは眉をひそめ、その姿を見たときには顔が強張っていた。

入室してきたのは、ミカヤの重臣、ダラス公アンジェであった。アンジェは王とさして変わらない年齢の、老人と呼んでよいような男であるが、その身からは逞しさとしたたかさがいまだにほとばしっている。そのすべては彼の精神に起因するものなのであろう。アンジェは若いころから険のある顔つきをしていたが、老いるごとに目尻が垂れ、柔和さを帯びるようになった。それでもなお、彼の顔からは峻険さが失われていなかった。

キイルから動揺を感じ取ったロベルトは、顔色を変えてアンジェにつめ寄る。

「あなたは、一体なにをしに来られたというのだ」

「やめよ」

「ですが、殿下……」
「よいのだ、ロベルト。悪いが外してくれ」
キイルが微笑をたたえて告げると、ロベルトはアンジェを苦々しげに見やりながらもキイルに一礼をし、身をひるがえした。
ロベルトが退室していったのを見届け、キイルは椅子に腰を下ろした。ちらとアンジェを一瞥し、すぐに視線を机上へと落とす。
「近いうちに、そなたがここにくるだろうとは思っていた。……思ったより早かったがな」
キイルは強い諦念を小さな吐息にのせた。
アンジェはキイルの執務机の近くまで歩み寄る。
「殿下は気づいておられたのでしょう？　ミカヤ様がなにを思って、シベリー軍の討伐を決行されたのか……」
キイルは否定とも肯定とも取れぬように苦笑した。
気づいていたというにはあまりにお粗末で、有効な策を講ずることは叶わなかった。また、気づかなかったというには、気位が邪魔をした。耄碌した自分を許せなかった。ミカヤからどれほど恨まれているのか、キイルはわかっているつもりではいたが、国内の政争に決着をつけるために他国に戦を仕掛けるなど思いもしていなかったのだ。
「ファジールの件、どのように釈明なさるおつもりで？」
「そのようなもの、不要だ」
「それでよろしいのですか？」
「もう充分だろう？　これ以上私になにをせよと言うのだ」

アンジェは片眉を上げ、歪んだ笑みを浮かべる。

「あなたらしくもないお言葉ですね。まあ、ここ数年ほどのあなたは、かつてのあふれんばかりの精彩を失ってしまわれておいででしたが。閣僚らにハーシェリオンの縁者たちが名を連ねているために、一見すると殿下による専制が敷かれているかのように見えますが、その内部実態は酷い不協和音が生じていたようですね……。大蔵大臣の娘に軍事機密を暴かれるような有り様なのですから」

「それがどうした、そなたらには願ったりであっただろうに」

「殿下、勘違いをなさらないでいただきたい。わたくしはあなたを認めていたのです。あなたはたしかに、この国の王であられた。そう、かの賢王の再来であると思えるほどに……。ですからわたくし個人としては、あなたであれば王位に就かれてもかまわないとすら思っていたのです」

「心にもないことを」

「信じていただけなくてもかまいませんが、先王と伯母上との間に生まれた王子がなぜあなたではないのかと、わたくしは長年悔まれてなりませんでした。正直なところ、わたくしはアルト＝ヴィジェ陛下に一欠片の敬意も抱いておりませんので」

（なにを今さら……）

キイルにはもはやアンジェの言葉を真に受ける気はなかった。また、その言葉の裏を探る気も失せていた。

「私に話があったのだろう？　一体なんだ。そんな話をしにここへ出向いてきたのではあるまい？」

キイルはアンジェからわずかに視線をそらしたまま、強い口調で言い放った。すると、アンジェから含み笑いが漏れる。

「これまで、殿下とは私的にお話しする機会はほとんどございませんでしたね。なにぶん、あなたの腹心らはわたくしの姿を見るやいなや殿下から遠ざけようとするのですから。……今日、わたくしがここに参りましたのは、数十年来の確執がやっと収束に向かおうとしているからです。殿下にお話したいことは数多くあるのですが、ひとまず、今日のところは二十三年前の一件について……」

「なるほど……。これでやっとそなたらの望みが叶うわけだからな。過去の確執など寛大にも水に流してやると告げるためにわざわざ出向いたのか？　ご苦労なことだ」

言葉の端々に余裕のなさがにじみ出ていることをキイルは自覚していた。

もうずっと前から、アンジェと対峙するたびにキイルの心には波が立つ。おそらくアンジェはそれを感じ取っているのだろう。兄王とはまったく異なる輝きを持つ青い瞳がそう語っていた。

「教会の高位司祭、特に四大司祭らの力について、殿下は報告を受けておられますか？」

一見、無関係に思える話題を振られたことにキイルは瞠目したが、アンジェの言わんとしていることを悟り、吐息のような相槌を打つ。

「……ああ」

「ご心配ではなかったのですか？」

「なんの心配だ？」

キイルは思わず鋭利な声を放っていた。どうとでも解釈のできる、曖昧な問いかけが不愉快だったのだ。

はぐらかすキイルに、アンジェはさらに問いを深めてくる。

「かなりの重傷を負われたと、わたくしのほうには報告があったのですが、殿下のお耳には入っておられないのですか？」
「実戦経験のない者をいきなり前線に出せばどうなるか、考えるまでもないことだろう」
「その、実戦経験のない者たちの存在が、我が国の圧倒的勝利へとつながったのですよ」
アンジェの返答に対し、キイルは不快さに顔をしかめた。
ミカヤが下した司祭の徴兵命令は、結果としてゴースティンに多大な益をもたらした。魔道の力を戦に用いるなど前代未聞のことで、聖職に就く者を戦場に駆り出すなど神への冒涜に他ならないと熱心な信徒からの反感も強かった。しかし、これほど短期間にシベリーとファジールを陥落させ、なおかつ司祭に死者は一人も出なかったため、少なくとも宮廷においてはミカヤへの非難は一旦影を潜めた。
ただ、開戦前に囁かれた不穏な噂は、今もなお燻っている。
ミカヤへの悪評が囁かれるようになったのは今に始まったことではない。さらに、次期王たるミカヤの噂は国内に留まることはなく、大使を通じて外国の宮廷にも飛び火している。
キイルは重々しく口を開く。
「アンジェ、お前に主人を想う心があるのなら、もう少し穏便に事を進めるようにしたらどうだ？　あの王子は、敵を作りすぎる……」
一瞬の間をおいて、アンジェは弾かれたように笑い出した。
キイルの言葉など、アンジェには負け惜しみにしか聞こえなかったのだろう。キイルはアンジェの笑声に包まれながら、今の自分の立場では説得力などありはしないと虚無を噛みしめた。

「殿下のほうこそ、ご自分の腹心の軽挙についてどう考えておられるのです？」

アンジェは、眉を寄せたままのキイルを見つめ、色褪せた唇を皮肉っぽく歪めた。

「私どもが必死にミカヤ様のお耳に入れぬよう腐心しておりましたのに、ネイゲル男爵がルキア殿に話してしまわれた。それによりルキア殿に奇行が見られるようになり、結局、わたくしがミカヤ様にすべてをお話せねばならなくなってしまったのです。殿下はルキア殿にあの件を打ち明けるつもりなどなかったのでしょう？　あなたのご意思を無視なさるとは……まったく、ネイゲル男爵はあなたの腹心の中で一番の忠義者と言われておりますが、その忠義とやらが聞いて呆れますね」

「そなたは、あの王子の意思に忠実であるとでも言うのか？」

「わたくしはギルベイド家の当主として、その流れを汲む王子に対し、間違った振舞いをしてきたとは思っておりません」

「なんとしてでもギルベイドの血をオトゥール王家に残したいか。見上げたものだ、その心がけだけはな……。ハーシェリオンもギルベイドも元を辿ればエルバータ朝から派生した同一族だというのに、そなたがそれほどまで執念を傾けることが私には理解できぬ」

「デデュー公からすれば、わたくしよりもあなたのお考えのほうが理解しがたいと思いますがね。二十三年前、あなたはハーシェリオンの意向を軽んじ、自身に代わる第一位の王位継承権をミカヤ様にお与えになろうとされた。……なぜ、あのようなことを？」

キイルは背を椅子にあずけ、深く息を吐く。

「アンジェ……。そなたはミカヤを王位に就かせたかったわけでは

なく、新たな王朝における玉座を自身のものにしたかったのだろう？」

アンジェはなにも答えない。

キイルは顎を軽く上げ、煽るような視線をアンジェに向ける。

「それならば、今少し静観しておればよかったものを……。私が死ぬまで待っておれば、オトゥール朝は断絶……。念願のギルベイド王朝復活というわけだ。私よりも長く生きていれば、そなたを後継に指定してやってもよかったのだぞ？　兄上に比べれば、はるかにそなたのほうがゴースティン王にふさわしい」

「なぜ、そこまで王位に就くことを厭われたのですか？　色恋にかまけて王座を投げ出そうとされたとでも？」

「そればかりではなかった。だが……」

結果としては、まさしくアンジェの言う通りだった。

キイルは十代のころより摂政として兄王に代わり国政を任されていたものの、未熟さゆえに外戚であるデデュー公やその腹心らの言いなりにならざるをえない期間がしばらく続いた。それゆえキイルが成人を迎えるころ、ハーシェリオンの権勢は王家が危機感を覚えるほどに強まっていた。だからキイルは、兄王の子を王位に就かせ、自身は引き続き摂政を務めることによりハーシェリオン家とギルベイド家の均衡を図ろうと考えていた。

しかし、その思惑のさらに奥には、抑えようのない欲望があった。王位どころか、王族であることを捨ててもよいとさえ、あのころのキイルは思っていた。

キイルは正式に立太子されていなかったとはいえ、生まれてすぐに筆頭王位継承権者となり、次代の王はキイルであると考える者も多かった。そんな周囲の思いとは裏腹に、兄王が新たな妃を娶り、

王子が生まれればよいとキイルは強く願ってきた。そうなれば、自分を縛る枷のような地位から解放されると思っていたのだ。

そのため、私生児のミカヤに王籍を与えるべく、王の妾であったアイリーン・オルストンを妃に迎えるよう兄王に進言した。

彼の願いは叶った。しかし、それと引き換えに失ったのは、己の責務を唾棄してまで手に入れようとしていたものだった。

キイルがそれ以上なにも口にせずにいると、アンジェは心底呆れたというようにため息を吐いた。

「ドートリッシュは教会権力を王権に抱き込まれるのを避けるため、ゴースティン王家の縁戚となることを忌避してきた一族です。記録に残る限りでは一千年以上だとか。なにより、オトゥール王家とは三百年前の確執がございますからね。ですから、あのころのあなたが王座にもっとも近い人間であった以上、アズノエル殿との婚姻をクラウス卿は簡単にはお認めにならなかったでしょう。特にあの方は教皇一族の男系直系筋の姫で、最後の生き残り……。エルジェ三世に直接つながるような者との婚姻は、本来であれば決して認めてはならぬものでした。国王陛下があれほど望まれていたからこそ、周囲の者も異を唱えることができなかっただけのことです。殿下は、あの方を妻とするために臣籍に下るべく、なにがなんでもご自分より上位の王位継承権者が必要だった、そういうことでしょうか？」

「今さら、わかりきったことを訊くな」

「王位に固執されないのであれば、なぜ、アズノエル殿とともに王都を去られなかったのです？　元々あなたは窮屈な宮廷を嫌っておられた。ご自分に課された責務よりも愛する者のほうが大事だと思われるのなら、どこかの王領地でお暮らしになればよかったのです。そうすれば、少なくとも今のような事態にも陥らずにすんだでしょうに……」

キイルは瞬きひとつせず、机上を見つめていた。彼の心はどこか虚ろだったが、アンジェの不愉快な言葉だけは鮮明に認識できていた。

「殿下、おわかりですか？　戦後、あなたは確実に失脚します。今回ばかりは、国王陛下もあなたを庇うことはできないでしょう。王の見初めた娘を奪うよりも、他国と通じて戦を引き起こすことのほうが、よほど名誉を失墜させる行いです。国王、いえ、国家に対する反逆なのですから」

反逆という言葉を耳にしたとき、キイルはうっすらと笑んだ。

今回の件に関しては、ケーニヒスと通じてファジールとの開戦を目論んだのはミカヤとその重臣たちであるが、独立戦争以後、キイルやデデュー公はファジールに深く肩入れしており、そのことがケーニヒスとの不和を助長したのは事実である。また、シベリーとの紛争をファジール傘下の部隊であったことを秘匿したことが、ファジールとの交戦予測を見誤らせ、国軍に被害を招いたと指摘されれば反論の余地などない。王太子派の者たちに反逆を糾弾される隙を作ってしまったことこそが問題だった。

キイルはゆっくりと視線を上げた。視界の端にアンジェが映る。

「私は、彼女とともに在ることはできなかった。……その資格がなかったからな」

その返答にアンジェは怪訝な顔を作ってみせた。それがキイルを苛立たせる。

「白々しい真似をするな。そなた、わかっていたのだろう？」

「なんのことです？」

キイルは荒々しく息を吐いた。しらを切り続けるアンジェを前にしていると、苛立っている自身が馬鹿のように思えたのだ。昂ぶり始める心をわずかに静め、一息に言い放つ。

「あれは兄上の御子だ」

口をついて出た言葉が、棘を帯びながらキイル自身にはね返っていった。その痛みに、身を強張らせる。

「殿下には、その確信がおありだったのですか？」

「確信など――」

キイルは自嘲をこめて一笑し、そして呟く。

「私の子であるはずがない、それだけだ」

アンジェはその返答を待ちわびていたというように、満足げにうなずいた。

「やはり、そうでしたか。そうではないかと思っておりましたが……」

室内にアンジェの哄笑が低く響き渡る。

「ギルベイド家としては、アルト＝ヴィジェ陛下にお世継ぎがお生まれになればそれでよかったのです。いつまでも亡き妃にこだわっておられた王が、やっと新たな王妃を迎えると言われた。わたくしがどれほど歓喜したか、あなたにはおわかりにはなれないでしょう。

今さらこのようなことを申しても栓なきことですが、アズノエル殿がお産みになったのは男子……。あのまま事が進めば、今、王太子の地位にあらせられたのはルキア殿だったでしょう。それならば、教会を敵に回してまで、私生児に王籍を与えるなどという暴挙に出る必要もありませんでした。あなたの信奉者から王太子の正統性に疑問を投げかけられることもなかったでしょう。……それもこれもすべて台無しにしてしまわれたのは殿下、あなただ……！」

アンジェからは先ほどまでの冷静さが剥がれ、秘めた怒りが浮き出ていた。

「なぜ、国王陛下にアズノエル殿との関係をお話になったのです？　宿しているのは自分の子であるなどと、陛下に挑むような真似をされたのです？　あなたが口をつぐんでおられれば、あなたもアズノエル殿も名誉だけは保たれたでしょうに……。あれは一体どういうおつもりだったのですか？　悪あがきだとしても、陛下への反抗だとしても、あのような愚かな行いをされては、誰もあなたを庇うことなどできませんよ」

たわんだ目元に侮蔑の色を漂わせ、これまでの鬱積を吐き出すようにアンジェはキイルに向けて全力で怒っていた。アンジェの言葉は、キイルに自身の甘さや愚かさを容赦なく刻みつけてくる。かつて、アンジェによって負わされた深い傷は長い時間を経て癒えていたが、いとも簡単に開いて再び血を流し始めていた。

キイルが十八になったとき、ハーシェリオン家からの強い働きかけにより、王室法に基づいて正式に立太子されることが決まりかけていた。それに伴い、デデュー公から妃候補についての話をこれま

で以上に持ちかけられるようになった。デデュー公がもっとも推していたのはファジールのカール大公の娘であった。

キイルはアズノエル以外の女を自分の妃に据える気はないと打ち明けたが、デデュー公は、どうしてもアズノエルを手元に置きたいのならば妃ではなく妾にすればよいと告げた。キイルはそれをはねつけた。堕落し切った兄王と同じ道を歩むなど、彼には耐えがたいことだった。

ちょうどそのころ、王の妾が男児を産んだ。王には私生児が山ほどいたが、そのいずれもが女ばかりであったため、その子は初めて生まれた男児であった。王には妾の子を認知するつもりはなく、その子はそのまま捨て置かれる運命にあったが、あのときのキイルにとっては利用価値のある手駒だった。

それほど有名な話ではないが、第十一代国王の時代、王弟が兄王の庶子に王太子の座を奪われたことがある。庶子といっても、その母である妾は後に王妃の座に納まり、正式に王族として認められた者だった。

そのような前例を知っていたキイルは、生まれたばかりの兄の子を自身の代わりとするべく、その母である妾を王妃の座に据えんと画策しようとした。

しかし、その計画は王がアズノエルを王妃にと望んだために脆くも崩れ去った。

王がアズノエルを見初めたきっかけは、おそらく、アズノエルがカレニーナと親しくしていたことにあるのだろう。キイルはアズノエルとの関係を周囲にひた隠しにしていたが、姉のような存在のカレニーナには隠し切ることができず、次第に逢瀬の手引きを依頼するようにもなっていた。カレニーナがグレンヴィル家に降嫁することが決まり、王宮で堂々と会うことができなくなるため、キイルは

二人の関係を早々に公のものにしたいと考えていた。
そんな矢先の出来事だったのだ。

キイルには、なぜ兄王がアズノエルを王妃に望むほど入れこんだのかわからなかった。アズノエル自身、なぜこんなことになったのかわからないと酷く混乱していた。
王の妾遊びの惨状を知っているクラウスは、アズノエルが王の妃となることには強く異を唱えていた。宮廷貴族たちの間にも混乱が広がっていたが、ギルベイド家の者だけが嬉々としているのはとても異様な光景であった。

そんな中、キイルは兄王のさらなる翻意をどこかで期待していた。これは気の迷いだったのだと、自分にとっての妃は生涯レイリアのみであるのだと、あの気まぐれな兄が言い出すに違いないと、なんの根拠もない期待を持ち続けていた。
だが、それは儚い願いだった。事態は悪くなる一方だった。その数か月後、キイルは打ちのめされながら王のもとへ向かった。それはアンジェの言う通り、悪あがきとしか言えない愚かな行為だった。

『なぜ、そのような大事なことを今まで黙っておったのだ。もっと早くにわかっておれば――』

アズノエルが宿しているのは自分の子だとキイルが告げたとき、王は言葉をつまらせた。王は元来、気が弱くて情深い人間である。だからこそ、キイルの真意を見抜いた上で、嘘を本当にしようとしていたのだ。このような事態を引き起こした以上、キイルは罰せられる覚悟もしていた。しかし王はすべてを許し、アズノエルとの婚姻も認めると告げた。それをアンジェが無残に断ち切った。

『陛下、これは国王に対する反逆でございます。いかに弟君であろ

うと臣下は臣下。そのけじめはつけるべきでございましょう』

たしかに、アンジェの言葉はもっともなものであった。

アズノエルは既に王の婚約者としての扱いを受けており、内情はどうあれ、対外的にキイルは王の婚約者を孕ませたということになる。これは王の権威を失墜させる行為であり、それを王の外戚であるギルベイド家が看過するはずもなかったのだ。

キイルの宮廷追放を赦免する条件としてアンジェが王とキイルに突きつけたのが、アイリーン・オルストンを妃とし、ミカヤを王太子とすることであった。アズノエルに関しては王の妃に望まれながら不義を働いた女と詰り、宮廷追放が相当であると言い放った。

『今後どうあっても、アズノエル殿はあなたの妃となることは叶いませんよ』

キイルは、自身の愚かさを責められるのは仕方がないと思っていたが、アズノエルのことを侮辱されることは耐えがたい苦痛だった。それでも、己の軽挙によりアズノエルが罵られているのだと思えば、それに耐えなければならなかった。王の前で無様に跪いたまま、なにも言い返すことができずに、キイルは降り注ぐアンジェの声を受け入れていた。

『アズノエル殿がお産みになる御子ですが、公に殿下の御子とお認めになりませぬように』

なぜそれさえも許されないのかとキイルが唖然として反駁すると、アンジェは冷笑を落とす。

『ハーシェリオンに余計な手駒を与えるわけにはまいりませんからね』

そのようなもの貴様らの都合ではないかとキイルは激し、思わずアンジェに掴みかかった。

『今回の事態を招いたのは、すべてあなた様の軽挙によるものではありませんか！』

見開いたキイルの双眸に映るのは、勝ち誇ったようなアンジェの口元と、悲哀に満ちた兄王の瞳だった。それは、すべてが終わったことを悟るには充分なものだった――。

「あなたの廃位を陛下に進言したのはわたくしでしたが、あなたはあっさりと引き下がられ、一切の申し開きもされなかった。あなたの愚かな振舞いには苛立たされましたが、その潔さには感服したのですよ。さすがは、賢王ラグナ＝ヴィジェ王の再来と褒め称えられた王子であると。……ですが、わたくしにはそのことが次第に不可解に思えるようになったのです。あのころの殿下ならば、アズノエル殿と共に出奔なさるぐらいのことを考えておられたのでは？　その気になれば王領地に住まい、今後一切宮廷に伺候しないとすることで、陛下に結婚の許しを請うこともできたはず。あの気弱な陛下があなたを罰するなどできるはずもないのですから、そうなさるのが賢明であったはず……。なぜ、取りうる手も取らず、無謀にも王に直訴しようとされたのか、やっとその理由を解することができましたよ」

アンジェは低く笑う。二十三年前、キイルに向けられたものと同じ微笑が、アンジェの口元にゆらめいた。

「見捨てられたのでしょう？」

キイルはふっと顔を上げ、アンジェの顔をぼんやりと眺めた。アンジェの言葉は、あまりに滑稽でいびつな形となってキイルの胸に響いていた。

ふいにおかしさが沸き起こる。キイルは笑いを噛み殺しながら、不自然なほど冷静な声をアンジェに返す。

「……なんだと？」

「殿下はアズノエル殿を見捨てられたのでしょう、と申し上げたのですよ」

丁寧にそのままを復唱しながら、アンジェはキイルのほうへ歩み寄る。

「陛下と一度でも関係を持たれたこと、ご自分への裏切りだと思われたのでしょう？　深く愛しておられたがゆえに酷く憎らしくなり、その結果、あのように捨て置かれて――」

「黙れ、そなたにはわからぬ」

キイルは冷やかに遮り、アンジェをにらみつけた。

アンジェは意に介さぬという素振りで言葉を続ける。

「そうですね、あなたのお気持ちを理解するのはわたくしには無理でしょう。デデュー公があれだけ苦心されても妃を娶られなかったというのに、妾はいらしたということですし……。いずれにしても、アズノエル殿をセヴァンスから連れ戻そうと尽力されるでもなく、お亡くなりになるまで、ついぞ会いにも行かれなかった。これはまた、ずいぶんな仕打ちでございますね」

抗うことに疲労を覚え、ついにキイルは微笑をこぼした。

「手紙だけは何度も送ったがな。アズノエルからは一度たりとも返事はなかったが――」

皺の刻まれた手が机上にすっと伸び、キイルは言葉を止めた。アンジェが差し出したのは古い手紙だった。薄茶に変色した封筒には、赤い封蝋の剥がれた跡がかすかに残っている。

キイルは茫然として、机上の手紙とアンジェの顔とを見比べる。

「クラウス卿から預かっていたのですよ」

「馬鹿な……」

キイルは弱々しく呟きながらも、心の中で強く打ち消した。クラウスがアズノエルからの手紙をアンジェなどに託したりするわけがない。あの男ならば、アンジェの手などには委ねず、確実にキイルの手に渡るようにするはずだ、そう自分に言い聞かせた。

だが、クラウスが王のこともキイルのことも快く思っていないのは明白だった。クラウスは聖職者というものを体現したような人格者であったが、ずっと可愛がってきた従妹の名誉を傷つけ、その果てに憐れな死に追いやった元凶を赦すことなどできなかったのだろう。

キイルは一度、なぜアズノエルから引き離してまでルキアを本家に迎えたのかとクラウスに訊ねたことがある。そのときクラウスは重々しい声でこう言った。とてもアルティスの城に置いておける状態ではない、アズノエルは気が狂(ふ)れてしまっているのだから、と。

クラウスはルキアを自らの庶子として引き取った。正式な妻以外の女との間に子を儲けるなど、いくら妻帯の認められたドートリッ

シュの司祭とはいえ、名誉を失墜させる行いであった。当主として主教としての自らの栄誉を傷つけてまで、クラウスはルキアを自分の子として扱い、それを周囲にも認めさせ、最期まで一切を語らなかったのだ。クラウスのそんな行為は、アズノエルを無残に見捨てた男に、その子供を委ねるわけにはいかないと言っているかのようであった。

キイルは手紙に触れようとした手を押し留め、手のひらに爪が食い込むほどに強く握りしめる。

「これは一体、いつの……？」

「ルキア殿がお生まれになって二年ほど経ってのころでしょうか。失礼ながら、クラウス卿の前で開封させていただきました。この手紙をあなたにお渡ししなかったのはわたくしの勝手な判断でございますが、クラウス卿がわたくしにこの手紙を託されたお気持ちは、お読みいただければご理解いただけるかと思います。とても、このようなものを殿下にお見せできぬとクラウス卿は思われたのでしょうね」

さも呆れたと言わんばかりにアンジェは長いため息を吐く。

「クラウス卿のお話では、アズノエル殿は気狂いとなられたと聞いておりましたが、先ほどの殿下のお話を聞いた以上は、それが事実であったと思わざるをえません。あのような馬鹿げたことを臆面もなく殿下に向けてお書きになるとは、まさに狂気によるものとしか……。あの家系は精神錯乱者も多いとのことですし、なんらおかしなことではありませんがね」

「なにを、言っている……？」

一つの考えがキイルの頭に浮かんでいた。しかし、それは彼にと

ってあまりに悲痛なものだった。決してその先を告げてくれるなとアンジェに言いたかったが、声が喉で絡まり合い、呼吸さえ、いびつに止まった。

アンジェは容赦なくキイルに告げる。

「キイル殿下の御子である、などと……」

侮蔑と憐みを込めた言葉がキイルに届く。それは、アズノエルに向けられたものなのか、キイルに向けてのものであったのか。

キイルは動揺を取り繕うこともできず、ただ虚ろにアンジェを見つめていた。アンジェの視線はほんの一瞬険しさを強めたのち、ゆっくりとキイルから外された。そして殿勲に頭を下げ、そのままキイルに一瞥をくれることもなく退室していった。

忘れえぬ想い　（2）

扉の閉じる音が、室内に冷たく響き渡る。
キイルは経年により脆くなった書を丁寧に開き、あまりに懐かしい精緻な文字を目で追い始めた。
既に二十数年が過ぎているというのに、鈴のような声がよみがえり、したたかに耳朶を打つ。そこには、誰かへの恨みなど綴られてはいなかった。あるのは、キイルへのあふれんばかりの思慕でしかない。

ぐらりと視界が揺れ、キイルは片手で顔を覆った。
この手紙は、今までキイルが目をそむけてきたことを一気に突きつけるものだった。アズノエルが自らを狂気の渦に落とし込むほど苦しんでいた理由を、これまでキイルは考えなかったわけではない。むしろ、充分にわかっていた。それを受け入れることができなかっただけだ。
政治を捨てようと、飾りと誹られようと、兄はまぎれもなく王だった。ゴースティン王という永い歴史に彩られた絶対的な権威を有する者だった。その王を拒むすべなど、アズノエルにあるはずがなかったのだ。

――見捨てられたのでしょう？

アンジェの言葉がキイルの胸を抉る。
キイルはその言葉を否定し切れなかった。自身の心のどこかに、兄王と関係を持ったアズノエルへの疑心があったのは抗いようのな

い事実であり、そんな暗い想いを抱く自身に、キイルはずっと悩まされてきたのだ。

アズノエルが王都を去り、非業の死を遂げるまでの十四年間、キイルは一度も彼女と会う手立てを講じなかった。数か月に一度アズノエルのもとへ手紙を届けさせてはいたが、何年も反応が得られなかったために、手紙を送る間隔は次第に空いていき、八年目にはついには途切れた。

アズノエルはキイルに対してなにも求めない女だった。一度として、愛してほしい、共に生きてほしいと口にしなかった。

「王になどなりたいわけではない」「お前以外の妃を娶るつもりなどない」とキイルが口にしたときも、ミカヤを身代わりの王太子に仕立て上げようとしたときも、アズノエルは怒りさえにじませ、王族としての立場を第一に考えるようキイルを諭した。

それに対してキイルは、「私は兄上のようにはならない」「政治を捨てることはせず、王太子の補佐に心血を注ぐつもりだ」「決して己の責務と立場を見失うことはない」と彼女に告げた。

それにもかかわらず、王がアズノエルを妃にと望んだとき、キイルは怒りや憎しみ、絶望に駆られ、道を踏み外した。そのせいで、アズノエルは宮廷より追放され、生涯、日陰者として過ごさねばならなくなった。

追放もされず、王族としての栄誉は残され、宰相の地位まで王より賜ったキイルが、人知れずアズノエルの不遇を嘆き、苦悶しようとも、彼女がその身に引き受けた不名誉に比べれば、贅沢な悩みにすぎなかった。甘い汁を吸っているだけの自分が、相応の罰を受けずにいるのは許されないことだとキイルは思った。

彼にとって、アズノエルとの約束を守り通すことが彼女への償いであり、己の愛の証でもあった。その償いを終えたときこそ、アズノエルを迎えに行くことが許されるのだという考えに取り憑かれて

しまっていた。
それは、アズノエルとの別れののち、キイルの中で様々な葛藤がいびつに混ざり合った結果だった。

キイルが宰相となって二年後、彼はファジール独立戦争に介入した。それから数年間は、ファジールの内政に干渉しつつ、独立に伴い混乱が続くファジール国内の平定に尽力した。
ゴースティン国内についても、父王の時代に行われた改革や施行された法令を徹底的に見直していった。内政改革に没頭し続け、そのほとぼりが冷めたころ、デデュー公より再び縁談が持ちかけられるようになったが、キイルはそれらのすべてを断っていた。彼にとって、己の妻の座に就くべき者はたった一人しかいない。
いつかアズノエルと再び巡り会う日を、彼は信じていた。アズノエルの死後であっても、彼女への想いを断ち切ろうとしたことは一度もなかったのだ。
そんなキイルの本心は、秘匿され続けたために誰にも理解されることはなかった。

「……お前を失ってまで、望むものなど他にありはしなかった」

もはや届くことのない言葉を慟哭にのせた。
キイルは手紙を机の上にぱさりと置き、目のあたりを強く手で覆う。
悩み、苦しみ続けた果てに、彼の望んだものはなかった。からからに乾いた心に一滴の水さえ垂らすことはなく、いつも失ったものばかりを追い求めていた。

……†……

ミカヤが王太子の地位を得ても、キイルの代王としての役割は変わらなかった。

アルト＝ヴィジェ王は妾を持つことを控えるようになっていたが、今さら政に関わることもできず、あいかわらず趣味の楽器演奏や観劇に時間を割いていた。宰相となったキイルは内政の全権を握ることとなり、王太子の教育係や侍従の選定などの差配も行うようになった。

キイルがミカヤの姿を初めて目にしたのは、その誕生から一年を経てのことだった。その間、アイリーンを妃とするための手続きがアンジェを中心に進められていたが、宮廷も教会も紛糾し、アイリーンとミカヤに王籍が与えられるまでには少々時間がかかった。そのため、アイリーンは王妃の地位を得ることなくこの世を去ることとなった。産後に強い心労を重ねたことが原因のようであった。

キイルはそれまで己が身の不運を嘆いていたが、そのとき初めてボード上の駒のような扱いをしてきた者たちに対し申し訳なさを覚え、自らの行いがどれほど愚かであったのかを思い知った。この強い自責は今に至るまでキイルの中に残り続いていくこととなる。

それから十年が経つころ、ミカヤがキイルに向ける視線には強い嫌悪が含まれていた。

大貴族の下級貴族への蔑みは並々ならぬものがある。ミカヤは王太子ではあるものの、オルストン家のような脆弱な後ろ盾しか持たないため、多くの廷臣から軽んじられ、悪意に晒されることとなった。王がミカヤに無関心であることもそれに拍車をかけていた。後見人であるアンジェは、ミカヤをギルベイドの流れを汲む王子とし

て大事にしているものの、元は私生児であったミカヤに心からの敬意を払ってなどいなかった。

また、ギルベイド一門の者たちは、幼い王子に政敵であるキイルの悪評を吹きこんだ。それによりミカヤは、自分が立太子されたのは、キイルが王の妾に手を出して廃位されたためだと信じこみ、己の身に降りかかった不幸のすべてはキイルに起因するものと考えるようになっていた。

キイルはミカヤから面と向かって“廃太子”と呼ばれたことがあるが、それに腹を立てることはなかった。ミカヤから向けられる害意は正当なものであるとさえ、彼は思っていた。

かつてキイルが蒔いた種はいくつかの火種を孕んでおり、伸びた蔓は導火線のようだった。

ミカヤは幼いころから聡明ではあったものの、気難しく、癇癪を起こすこともしばしばだった。そんなミカヤの激しい気性はキイルを前にしたときに強く出ることが多かったため、キイルは次第に王太子の教育の一切を侍従らに任せるようになっていた。ミカヤは権力者の掌（たなごころ）で弄ばれているにすぎず、心ない中傷に耐えている姿は憐れなものであった。

だからキイルは、ミカヤと年の近い貴族の子弟を学友として迎え入れてはどうかとアンジェに提案した。

かつてキイルの学友であった者たちは、今では大臣をはじめとする高位に就いてキイルを深く支えている。いずれ王となったミカヤのもとで、誠心誠意尽くすことのできる人材が必要であるとキイルは思った。これは罪滅ぼしのつもりではなく、自らが捨てた王座に就く者の行く末を憂えたゆえのことであった。

よもや、アンジェがルキアを推挙してくるなどと、キイルは考えてもいなかったのだ。

ルキアが選ばれた理由を、アンジェはもっともらしく説明した。家柄も良く年齢も近いということに加え、教養が高く宮廷作法を心得ているという点を重視したのだという。ドートリッシュ家で家庭教師を務めていた王立大学の教授らが、ルキアを口々に褒め称えていることはたしかに宮廷でも有名だった。

この決定について、キイルは酷く驚いたものの異議を述べることはなく、アンジェに了承の意を示した。キイルはそれまでルキアとじかに接する機会はほとんどなかったが、クラウスがたびたび王宮に連れて来ていたため、ミカヤと遊んでいた姿を遠目に見ることはあった。気難しい王子とも不思議と気が合うようで、互いの出自を深く知ることさえなければ、これほどお誂え向きの相手もいないだろうという楽観的に考えていた。

ほどなくして、クラウスとともに宮廷へと出向いたルキアの姿を、キイルは久々に目にすることになった。

一目見たとき、キイルは細く柔らかな衝撃に貫かれ、思わず息を呑んだ。静謐をたたえる穏やかな翡翠の瞳と、垣間見せる表情や所作は、時を逆戻りさせたかのような感覚を彼に与えた。

キイル以上に衝撃を受けていたのは王のほうであった。王はその驚きを隠そうともせず、ルキアの近くに歩みより、本当に幸せそうに言葉をかけていた。そんな王の挙動に、周囲の者は止めこそしなかったが、慌てているのが見てとれた。その様子を眺めていたキイルの胸に暗い影が過ぎったが、彼はそれに気づかないふりをした。

アンジェの意図はさておき、ルキアは周囲の要求に充分応えていた。子供らしからぬ思慮深い性格で、主君の短気を治める術に長けており、気立ての良さと控えめな振舞いにより、ミカヤの教育係たちとも上手くやっていた。

ルキアはアイオーン離宮に居室が与えられ、一日の大半の時間をミカヤと過ごしていたため、キイルはルキアと一日に何度も顔を合

わせるようになった。キイルはルキアに言葉をかける際、ミカヤに対するのとはまた別の緊張を味わっていた。あふれんばかりに過ぎるアズノエルの面影を前にして、どう接してよいかわからなかったのだ。

それでもしばらく経つころには、なんの裏も意図もなく自分を慕ってくれるその姿に、愛しさを覚えるようになり、キイルは穏やかな気持ちでルキアと向き合うことができるようになっていった。

それにつれ、ミカヤとも以前よりは和やかに言葉を交わすことができるようになっていた。キイルはミカヤに許されようとは思わなかったが、ミカヤが王たるにふさわしい人物となることだけは望んでいた。それが、謀略うごめくこの世界でミカヤの身を助ける唯一の武器になると考えていた。

穏やかな時が流れ、かすかな幸せを感じて始めていた。そんな折のことだった。

別離より十四年、アズノエルがセヴァンスのアルティス城で亡くなったとの報がキイルのもとへ届いた。

二人が出会ったのは、まだ幼さの残る十二のとき、キイルがお忍びで訪れたセヴァンスのアルティスだった。そこは美しいエルド湖が広がっており、シューゼランの花が湖畔一面を白く覆っていた。

――私が王となれば、アルティス城に似せた新しい離宮を造ろう。庭園も、お前が気に入るように造り変えよう。そうだな、エルド湖畔のシューゼランを庭に移植させようか。

――お前を娶ることが叶わずとも、私は決して自分の隣に他の女を並ばせはせぬ。……なにがあろうと、私にはお前だけだ。

頬を寄せ、指を絡め、なんのてらいもなく愛の言葉を囁いてきた。

そんな儚い夢のような日々を胸に抱き、キイルは十四年という長い時間をたった一人で生きてきた。

彼女は生まれ育った城で穏やかな日々を過ごしているだろうか、いつか見える日は訪れるだろうかと、静かに祈り続けていた。

……胸の奥にしまい続けてきたささやかな願いが、永久に断ち切られた瞬間だった。

それからというもの、キイルはアンジェの姿を見るたびに、萎えたはずの怒りと潰えたはずの悲しみが揺り起こされていく感覚を味わった。彼女の忘れ形見の姿を目にするときには、愛しさと後悔が募っていったが、王が過剰なまでの愛情を傾けて見せるとき、それは憎しみと呼べるような感情へと変貌していくように思えた。

そんな想いを抱く自身をキイルは恐れた。自分にはもう二度と安息など訪れはしないのだと悟った。

次第に、キイルのまとう空気は冷たく硬質なものへと変化していった。側近たちは主君の変化の理由を慮り、恐々とした態度で接するようになっていた。彼らの挙動を却って煩わしく思い始めたキイルは、一部の腹心を除いて自分から遠ざけるようにもなっていった。

そんな彼の振舞いが、ロベルトを暴走させることになった。

アンジェはミカヤとルキアに互いの関係を決して知らせまいとしていた。廷臣たちはアンジェを恐れ、かの一連の事件にまつわる一切を、あの二人の前で口にしなかった。

しかし五年前、ロベルトがルキアにその出自を突きつけ、宮廷を去るようにと迫ったのだ。

――申し訳ございません、殿下……。

絶望を宿らせた翡翠の瞳には幾筋もの光る涙があった。

突然のことに訳がわからず、キイルはルキアを押し留めようとしたが、ルキアは激しく頭(かぶり)を振り、何度も謝罪の言葉を告げた。

――知らぬこととはいえ、これまで御心をお煩わせいたしましたこと、どうかお許しください……。

お前のせいではないと、ただ一言を告げればすむことだった。しかしキイルはルキアになにも言わなかった。それどころか、それ以後一切声をかけることも、目を合わせることもしなくなった。

すべてを知ったルキアと向き合うことなど、キイルにはできるはずもなかった。

そうして目をそらし続けた先に、過ちは降り注ぎ、もはや振り払うこともできないほどに、深く降り積もっていった。

過去の絆

王都に戻ったルキアは、その数日の内にエクシュール宮殿に伺候した。国王への謁見の他、ミカヤからの呼び出しがあったためである。

王は、さも待ちわびたというようにルキアを迎えた。数か月ぶりに目にする王はそれほど変わった様子はなく、そのせいか、ルキアは酷く懐かしさを覚えた。王と顔を合わせてうれしさを覚えたのは、おそらくそれが初めてのことだった。

ここ数年、ルキアにとって王と過ごす時間は無為に思えるものであったか、安らぎを覚えるものになっていたことに気づく。交わされる会話はいつものようにとりとめのないものばかりで、戦場での話を王はまったく訊いてこなかった。それはルキアにとって有難いことだった。

一時間ほど王の私室で過ごした後、アイオーン宮へと向かう。ルキアが侍従に通されたのは、離宮の謁見の間ではなく、王太子の私室だった。

広い室内を見渡したが、そこにミカヤの姿はなかった。部屋の中央まで進み出たとき、カーテンがそよいでいることに気づく。薄い絹のカーテン越しに、バルコニーの手すりにもたれかかるミカヤの姿が透けて見えた。

その後ろ姿に声をかけたとき、風がカーテンを大きく煽る。振り返ったミカヤは、ルキアを見るなり苦笑した。

「やつれたな……。戦闘で深手を負ったというのに、すぐに戦線に戻ったりするからだ」

負傷して戦線を離れた際、ルキアはエーヴェル要塞でミカヤと会った。それはルキアの意識が戻ってすぐのことで、床から起き上がることすらできないころだった。

突然ルキアの部屋を訪れたミカヤは、傷の具合やシベリーとの戦いについてなど、さして興味もなさげに訊ねてきた。ルキアはそれに対し簡潔に言葉を返した。ミカヤは去り際に、念押しをした。命令は必ず守れ、と。

ルキアがすぐに戦線に戻ったのは、「あの蛮族を根絶やしにしてこい」というミカヤの命令を守るためだったのだが、それを告げるのは嫌みでしかないと思い、話題を変える。

「殿下、お召しと伺いましたが……」
「なぜここに呼ばれたか、わかるか？」

なんとなく予想はついていたが、ルキアはなにも答えないでおいた。

ミカヤはバルコニーの手すりから身を離して室内へと入っていく。そして黒檀の肘掛け椅子に腰を下ろすと、ルキアの顔を見ることもなく不躾な問いをぶつける。

「初めに確認しておくが、お前は司祭に戻るつもりなのか？」
「戻るもなにも、わたくしは司祭を辞したつもりはありません」
「なぜ、そんなに司祭にこだわる？　父上への義理立てか？」
「義理立てというわけではなく、臣下が国王陛下のご意向を無碍にするわけには――」

「父上はそう長くはないだろう。そうやっていつまでも王命を盾にできると思うな」

ミカヤの嘲笑がルキアに降りかかった。ルキアは王に対する不敬葉をたしなめる気にもなれず、ただミカヤの出方を待った。

「さっさと弟に当主の座は譲り、グレンヴィル家に婿入りしてはどうだ？　そうすれば、お前にはいずれ宰相の座を約束してやる」

「これまで何度も申し上げてきました通り、わたくしはもう政治に関わるつもりは――」

「お前も呑むか？」

その返答を聞くつもりはないとばかりに、ミカヤは机上に置かれた酒瓶を手にしながらルキアに問う。

グラスへと注がれていく赤い液体を、ルキアはじっと眺めていた。彼は決して酒に弱いわけではなかったが、なぜか今日は葡萄酒の濃い色彩と酒精の匂いに気分が悪くなった。血の臭いのせいで嗅覚は麻痺したと思っていたが、戦場を離れればすぐにでも回復するものらしい。

顔を不自然でない程度にそらし、酒の勧めを慇懃に断ると、ルキアの答えがわかっていたとばかりにミカヤは一笑する。

「お前は時に利口とは言いがたい振舞いをするが、少なくとも馬鹿ではない。貴族には珍しく私欲とは無縁で、地位や財を盾に利用されることもない。権力者におもねり、その寵をねだることもな」

「それは、わたくしを買い被り過ぎではないかと」

「そう卑下するな。第一、誉めているわけでもない」

ミカヤはグラスに口をつけ、なにかを思い出したように笑みを浮かべた。

「あのような男でも、子は可愛いらしい」

ルキアは瞳を瞬かせると、ミカヤは意味ありげに口の端を上げる。

「バルフォアの息子、さっさと死んでいたほうがマシだったやもしれんな。顔を切られて落馬、さらに逃走の際に脚を撃ち抜かれている。顔は二目と見られぬ有り様、撃たれた右脚は二度と使い物にならず。そのような姿になった上、軍事法廷で晒し者だ。そのようなことをさせるのは忍びなく、せめて名誉だけは守ってやりたいと思い、バルフォアはあのような馬鹿げた茶番を引き起こしたのだと聞く。……しかし、それすら叶わぬというのは憐れなことだな」

あまりに陰惨な内容を紡いでいるというのに、ミカヤの声にはいささかの憐憫の響きすら伴っていなかった。それどころか、嬉々として話を続ける。

「たしか……西方軍の第五連隊だったか？　奴らがファジール傘下のシベリー兵に対して発砲したことがあの暴動の原因とのことだが、それを引き起こした連隊長がバルフォアの次男なのだ。それにしても、あれだけの騒動を起こしておきながら、おめおめと逃げ帰ってくるとはな。軍法会議で軍務規定違反を問われれば死罪は免れんというのに……。バルフォアは息子を庇うため、アパス州軍による関与をでっちあげようとし、紛争鎮圧と称してアパス州へと攻め入ったのだ。まったく、あんな愚行を引き起こす男が西方軍司令官を務めていたとはな。しかも、その処理に王弟の手まで煩わせるとは……父子揃って使えん奴らだ」

ルキアは動揺を抑え、静かに言葉を返す。

「今回の戦の発端となったシベリーの暴動は、ファジールの関与があったということは聞き及んでおります。それにはクラヴィーエ公らも関わっておられるということでしょうか？」

「バルフォアは頑として口を割らんようだが、キイルも関与しているに決まっている。バルフォアのような愚鈍な男一人になにができるというのだ？　キイルは暴動が平定されればそれで片がつくと安易に思っていたのだろうが、よもや、それを契機にファジールが潰される事態になろうとは考えてもいなかったのだろうな。さすがの父上も、二度目の反逆の汚名までも庇うことはできぬだろう。まあ、ファジールなどに肩入れしたことがあの男の敗因だ。奴らが恩を仇で返すような輩だと見抜けなかったわけではあるまいに」

ルキアは胸の奥で燻る怒りをなんとか沈め、ミカヤに問う。

「殿下は、初めからそのことをご存知だったのですね？　シベリー軍の討伐とは建前で、本当はファジールやケーニヒスを――」

「ああ、メイローズを介して知っていた。ファジールとの密約の情報を得た私は、グラッドを西方軍司令官に据え、シベリー討伐を口実にファジールも潰すことに決めたのだ。ルドリア教会の司祭を投入し、シベリー討伐を行うと中央会議で提案した際、あやつらの慌てぶりは見物だったな。お前にも見せてやりたかった」

ミカヤはさもおかしいとばかりに肩を震わせる。

シベリー暴動の経緯については、ファジールとの会談の席におけるバルフォアの動揺ぶりを目にすればある程度の予想はつく。バルフォアの不祥事を知ったミカヤが、それを看過するはずがないということも頭では理解できる。しかし、用いる手段が常軌を逸している。

「ですが殿下、この戦はファジールだけでなくケーニヒスまでもが

参戦いたしました。もし一歩間違えれば――」
「ケーニヒスとは初めから話をつけていた」
ルキアの喉から、息の絡まったような声が漏れ出た。
グラスから口を離したミカヤは、酒精まじりの息を吐く。
「お前にはなにから話せばよいのやら……。とにかく、ファジールへ軍を派遣するようケーニヒスに打診したのだ。ケーニヒスが味方につくとなれば、ファジールはゴースティンに対し攻撃姿勢に転じると私は考えた。要は、あの目障りなファジールを潰すためのきっかけをケーニヒスに作らせてやったというわけだ。その見返りは不可侵条約の締結及びファジール領土の一部割譲そして食糧支援……。フェルナンド王では話にならんから、王太子のほうへ使節を送り、交渉を行っていた。あやつらが私の申し出を拒むわけがないと思っていたが、思ったより早く動いてくれて助かった。だが、少々早すぎたせいで、お前たち第四部隊がファジール軍と早期に交戦する羽目になってしまったのだ」
ルキアは唖然としながらその話を聞いていた。
ケーニヒスが早々に停戦を申し出てくるあたり、水面下でなんらかの交渉が行われているのだろうとは思っていたが、それはあくまでケーニヒス参戦後になんらかの条件を提示し、早期の終結を図ろうとしたためだとルキアは考えていた。まさかミカヤがケーニヒスに対し、ファジールとの戦を前提とした交渉を開戦前に行っていたとまで思っていなかった。
たしかにケーニヒスとの取引材料はいくつかある。たとえば食糧支援の件。ケーニヒスは頼みの綱である属国のベイリーズもケーニヒスと同様に冷害にやられ、二年前より慢性的な食糧不足に喘いでおり、農村や下層には食糧が行き届いてないという。この状態では

ゴースティン相手に戦争を起こすなど鼻から無理であったことだろう。加えて、ゴースティンにつくならば、確実にファジール領土の一部の割譲を受けることができる。ケーニヒス王太子の選択は、為政者として国のためを思うならば、真っ当なものであった。

「もっとも、ケーニヒスがこちらの要請に応じなかったとして、そのときはケーニヒスに向けても軍を差し向けたまでのことだ。私としては、王弟派の閣僚どもを追放する理由が手に入ればそれでよかったのだからな。しかし、ロベルトはどうしたものか……。あれは今回の件には直接関わりがないから追放する理由が見当たらん。……メイローズは、それがわかっていたから私に手を貸したのやもしれんな」

ミカヤの唇が笑みを象りながらグラスに近づいた。

メイローズは大蔵大臣ロベルト・ネイゲルの一人娘であるが、ミカヤにとっては妾のような立場にある。そのような女性に王弟派の動きを探らせていることに対し、強い不快感を抱いた。

もはや隠しようがなく、ルキアは憤りを露わにした。

「殿下、メイローズ殿に間諜の真似事をさせておいでなのですか？」

「いけないか？　利用できるものはなんでも利用すればよい。メイローズとてそれはわかっている。そもそも、利用されることをわかった上で私に近づいてきた女だぞ」

「たしかにネイゲル男爵とクラヴィーエ公は昵懇の仲……。ですが、それはメイローズ殿には関わりのないことですし、なにより、あなたとの間に御子まで成された方です。それを、このような政争に巻き込んでなんとも思われないのですか？」

ミカヤは頬杖をつきながら、上目がちにルキアを見た。

「まったく、お前は誰かれかまわず同情するのだな。それでは宮廷では生きていけぬぞ。お前のような人間は情を盾にとられ、利用されるのがオチだ。くだらぬ情は捨てろと何度も言ってきたというのに、お前は一度とて耳を貸さんな。そのくせ、事あるごとに小言を垂れる煩い奴だ。だが……だからこそ、私はお前を信用しているのだ」

近似した色彩を持つ瞳が至近距離で交差する。

ミカヤの猛禽類を思わせる眼光は、対峙する者の強固な意思を砕きかねないほどに鋭い。それでもルキアはミカヤと向き合ったまま、長い沈黙を保っていた。

痺れを切らしたように、ミカヤは口を開く。

「ルキア、私の片腕となる気はないか？」

「ございません」

「少しは考えろ」

ミカヤは苦笑と怒りの入り混じった息を吐いた。

「少々考えてみたところで、わたくしの意思が変わるとは思えません」

「あいかわらず強情な奴だ」

「人は、そう簡単に変われるものではありませんので」

「数年前に比べれば、お前はずいぶんと変わったように思うがな」

「根本の部分は、という意味です」

「私はお前と言葉遊びをする気はない！」

ミカヤは乱暴にグラスを置いた。その鋭利な響きに、ルキアの身体はたじろぐ。

戦場にいたせいで、少しの物音にも敏感になっているのだろうか。

ルキアはわずかに震えの残る左の肘のあたりを右手で軽く押さえる。ルキアは瞳を伏せていたが、目蓋を通してミカヤの強い視線を感じていた。

ルキアにはミカヤの言いたいことはわかっていた。

ゴースティンは対外的な国政不安よりも、対内的な不安を常に抱えている。二年前に大病を患った国王は、それ以来病の床についたままである。病状に回復の兆しは見られるものの、既に六十半ばに差しかかる王には、いつなにが起こってもおかしくない。

そんな中、ミカヤはシベリー殲滅に絡む戦争を利用し、王弟派の権勢を削ぐことに成功した。これにより、今後ミカヤの発言力は高まっていくことになるが、キイルが二十数年にわたり国政を仕切ってきていたため、彼とつながりのある高官たちがあらゆる方面に幅をきかせている。ミカヤは自らの地位を強固にするために宮廷に群がる貴族を精査し、自ら選び取った者だけを重臣に据えようと考えている。

かつてのルキアならば、ミカヤから信頼され、その力を求められることをただ嬉しく思い、ミカヤのためだけに尽くそうとしただろう。しかし今はもう、ミカヤの言葉をそのまま受け入れることはできなかった。また、自らが選んだ道を覆すこともしたくなかった。それは、もはやルキアの確固たる意思によるものではなく、意地でしかなかった。

「殿下、わたくしの答えは変わりません。お話がそれだけならば、失礼させていただきます」

ルキアが身をひるがえそうとした途端、ミカヤから愉快げな声が飛ぶ。

「エリーヌ・グレンヴィルが、近衛隊除隊を申し出てきた」

「なっ……」

ルキアの脳裏に、エリーヌと交わした言葉が過ぎる。あのとき、ルキアは彼女に退役を促すようなことを告げた。エリーヌはそれを突っぱねたが、あれから二月（ふたつき）の間になにがあったというのだろうか。

ルキアは強い戸惑いを浮かべたままミカヤに問う。

「それは、退役ということですか？」

「いや、異動だ。来月にもグラッドのもとへ送ることにした」

その一言で、一気に血の気が引いたルキアは、すがるようにミカヤに近寄る。

「西方軍にですか？　なぜ、そんな急に……」

「さあな。本人の意思だ」

「いかに本人の意思であろうと、西方軍など彼女には――」

「荷が重すぎる、か。それはエリーヌも承知の上だろう」

ケールセン・グラッドは王太子派の軍人であり、先だっての戦においてはまるで総大将と呼べるほどの影響力を持ち、指揮官として多大な功績を上げた人物である。それゆえミカヤが手を回したのか、ともルキアは考えたが、すぐに思い直す。ミカヤが嘘を吐いているとは思えなかった。むしろ、エリーヌの意思であると考えたほうが納得のいくものであった。

もっとも、陸軍内において他の管轄への異動は基本的にありえない。たとえば近衛は近衛の中でしか、北方軍は北方軍の中でしか異動はなく、他の管轄への異動はしかるべき時期に、陸軍省内の人事会議にて決せられるものであり、このような中途時期での編入など准将以上の地位を有する者の口添えがなければ叶うわけがない。エ

リーヌがアシュレイに頼むとは考えられず、また、アシュレイがその望みを叶えようとするはずもない。エリーヌの意思を汲んだミカヤの一声で、無理矢理このような異動が決定したに違いないのだ。

「つくづく、この国は物的にも人的にも恵まれているものだと思う。ゆえに、配置の効率化を計らずとも充分に組織が機能する。信仰心のない者が聖職に就いても、なんら困ることはないのがいい例だ。それを補うだけの人材がいるというのは幸せなことだが、時には不幸だと思うこともある。まるで爛熟するこの国そのものだからな」

いつもであれば堪えることのないミカヤの皮肉だったが、今のルキアには充分な効果があった。

西方駐留軍は国内の軍隊の中でも最大規模のものである。それはひとえに西方軍の果たす役割の大きさに比例しており、シベリーとファジールを占領下においた今ではなおのことである。

ただし、規模が巨大であるゆえに、末端の兵士の質は低く、軍規も乱れやすい。それは西方軍の約半数が徴兵制に頼っていることにより、軍人としての心構えに欠ける者が他の軍隊に比して多いためである。また、人員の多い軍隊とはいえ、軍内は戦後処理で混乱が生じているはずである。戦場経験のほとんどないエリーヌがあのようなところで隊務に就くなど、ルキアの想像の範囲を軽く超えていた。

ルキアは思わず頭を抱え、大きく息を吐いた。すると、「そんなに心配なのか」とミカヤから失笑が漏れた。

「そういえば、グラッドが目にしていたらしい。エリーヌを抱えたお前が警戒陣地まで突っ込んできたところをな」

ルキアは両手に強く力を込めた。手のひらに伸びた爪が食い込んでいたが、痛みは感じなかった。

「お前の傷、生きているのが不思議なぐらい深かったそうだな。それにもかかわらず、たいした傷でもないエリーヌを優先したのか？」

「わたくしの傷は、一旦は塞いだものです。ですから、そう酷くはないものと判断したまでのことでございます」

「賢明なお前にしては、ずいぶんと浅慮な判断だな」

「初陣ゆえ、余裕のなさから的確な判断ができなかったのは認めます」

「その割に、お前が選んだ退路は的確なものであったようだが？」

「それはどうでしょうか。あの退路を選んだために、ファジールの竜騎兵との戦闘になりましたから」

「それは私の誤算でもある。ファジールのあれほど早い動きは読めなかった」

ルキアが言葉につまると、すぐさまミカヤは話を戻した。

「お前たち、王宮ですれ違っても、目すら合わせていなかったな」

どこか面白がっているような、それでいて冷ややかな声がルキアの胸を射抜く。

「まあ、エリーヌの場合はお前が無視を決めこむせいで、意地を張るようになったのだろうがな」

「……殿下」

「まったく、ここ何年かの苦労が水の泡だな。せっかく、大切なものを遠ざけてきたというのに、あんな光景を見せつけられては、誰の目にも――」

「殿下！」

堪らず、ルキアは声を荒げた。
ミカヤの瞳が興味深そうに瞬き、ルキアを見上げた。その揶揄を含んだ視線が、ルキアの心をかきむしる。

「あなたはどこまで――」
「卑劣なのかと、そう言いたいのか？」

ミカヤは目を細め、いびつな笑みを浮かべる。

「今さらだろう？　私という存在を象るものすべてが卑劣さで満ちている。私がどのような行いをしようとも、卑しい出自に似合いのものだと思わんか？」

ルキアの息は乱れた。怒りと悲哀と虚無が一気に身体中を巡っていき、込み上げる苦痛に身を強張らせた。

「……どうしてですか？　以前のあなたは決してこのような――」
「私はなにも変わってなどいない。お前ははじめから私を見ようともしなかった、それだけのことだろう？」

もうなにも言うことはないとばかりにミカヤは告げた。
ルキアは諦念を覚え、かすれた声を絞り出す。

「では、それが交換条件である、と？」
「勘違いするな。私は単にエリーヌの頼みを聞いてやっただけのこと。お前を脅すつもりでその頼みを引き受けたわけではない。ただ、お前の反応を見たことで、それも一つの手だと思ったまでだ。……改めて問う。お前の返事次第ではエリーヌの近衛除隊を取り消してやってもいいが、どうだ？」

ミカヤの言葉は、「所詮、お前は情で動く人間なのだろう」と言われているかのようだった。実際、その通りなのだとルキアは自覚していた。この数年間、ルキアの行ってきたいくつかの重大な選択は、すべて情に振り回された結果と言っても間違いではなかった。それを、さも不可避で最善の道を選び取ったかのように振舞っていただけだ。

ルキアが物憂げにミカヤを見やると、好奇を湛えた視線とぶつかった。

「結論は保留してやってもいいぞ。見たところ、ずいぶんと迷っているようだが？」

「……その必要はございません」

「無理をするな」

「いいえ、無理などしておりません。エリーヌ・グレンヴィルが自分の意思で決めたことならば、わたくしが口を出すことではありませんので。彼女の異動先が不適と思われるのであれば、殿下が取り消しになられればよろしいでしょう」

ルキアが即座に否定すると、ミカヤは再び射抜くような視線を向けた。

「お前はいつまで逃げ回るつもりだ？」

「わたくしは、自分の責務から逃げているつもりはございません」

「その責務とやらが、そもそもお前の逃げ場所だろう？」

「なんと言われましても、わたくしの意思は変わりません。それにわたくしは、殿下の言われるような“情を盾にできる人間”ではございませんので」

室内にミカヤの哄笑が響いた。

「言葉遊びをする気はないが、今回ばかりは私の負けか」

そう言って、本当に愉快そうにグラスを口へ運ぶ。

ルキアは一礼ののち退室し、離宮の廊下を足早に駆けていった。

・・・・†・・・・

本宮へと続く階段の踊り場で、ルキアはふと足を止めた。そこに掛けられている大きな宗教画は、ノワイユ三部作の一枚で、殉教者・聖イシスが四人の天使に導かれ、＞神の力＜を授かる様子が描かれている。

ルキアは、この絵を見るのが好きではなかった。この絵の中に描かれた、ある天使の姿が嫌いで、この階段を避けて通ることが多かった。しかし今日は頭が混乱していたために、いつもなら選ばない本宮までの通路を選んでしまっていた。

遠い昔、エリーヌがこの絵画の中の天使がルキアに似ていると言った。髪の色こそ同じではないが、彼の顔立ちと、ふとした表情が、その天使そのものなのだという。ルキアは、まだ幼かったころのエリーヌの言葉を打ち消しながら、その絵をぼんやりと見つめた。

ルキアの目の前で、戦場の光景が再現されていく。

人とともに大地を焼いた。自らの力で焼き尽くした黒い塊が山になっていた。仕留め損なったために皮膚と肉をずたずたに溶かされた人間が、泥の上をのた打ち回っていた。さらに、人を守るためで

はなく、殺すためだけに剣を振るった。血に濡れた手と刃、肉を切り裂くときの感触……。それらを思い出そうとすれば、すぐにでもはっきりとよみがえってくる。そんな自分の姿が脳裏を過ぎると眩暈を覚える。慈愛に満ちた、などという自分の容貌に対する称賛も、いたたまれない思いが募るだけだった。戦場での己の姿はまるで悪魔だ。

絵の中の天使は、弱き者を守るための力を聖者に与えようとしている。

しかし、それと同じ力を手にした自分はどうだのか。

あのような戦いに大義はあったのか。

自分が戦うことで失われる命が少なくなればいいとルキアは思っていた。それが大義なのだと偽りの言葉を言い聞かせていた。そうやって美しいものだけを求め、夢の中にたゆたい、現実を眼前から消そうとしていた。

逃げているだけだった。これを否定することは、また逃げていることになるのだろう。

ルキアはなにもかもをかき消すように頭を振り、再び階段を駆け降りていった。

たったひとりの天使

リジーは久しぶりにアイオーン離宮に忍び込み、大理石の階段の手すりを綱渡りでもするかのように歩いていた。エクシュール宮殿の警備が特に厳しいのは王のいる本宮で、いくつかの離宮においても謁見の間や大広間、王族の私室を除けば、いくらでも警備に穴のある場所があるのだ。

突如、階段を駆け降りる足音が階下から響いた。リジーは身を隠しながらそっと下に目をやると、そこには黒い祭服をまとったルキアがいた。

ルキアはじっと巨大な絵画を見つめている。リジーのいる位置からはルキアの顔は見えないが、呆然と立ち尽くしている様子は奇妙に思えるものだった。リジーはそんなルキアを訝しく眺めていたが、ルキアは急に身をひるがえし、再び階段を駆け降り始めた。

リジーは片側の口端を吊り上げ、手すりを飛び越えて、ルキアの前へと一気に降り立った。突然被さってきた影に、ルキアはとっさに後ろへ身を引いたが、すぐに気を取り直して乱れたケープを正した。

どうやら、ルキアは相当機嫌が悪かったらしい。リジーの顔を見るなり、滅多に見ることのできないような鋭い目つきでにらみつけてきた。

「宮殿には来るなと言っておいただろう」

「衛兵に捕まるようなヘマはしないから安心しろよ」

ルキアはリジーに背を向けたが、リジーはルキアの前に回り込み、顔を近づけた。ルキアの呼吸は乱れたままで、ずっと柳眉を寄せたままでいる。

その様子にリジーは思わず噴き出した。ルキアの額に手を伸ばし、彼の頭をからかうように撫でた。

「おいおい、なんて顔してるんだ?」

ルキアはリジーの手を軽く払い、そのままうつむいた。その不貞腐れたような仕草が子供じみていて、リジーは唖然としてしまった。おそらく、今は誰にも会いたくはなかったのだろう。

「お前さ……自分で自分を追いつめる方向へ突っ走っていったくせに、今さら、なにをそんなに気に病むことがあるんだよ?」

ルキアはゆっくりと顔を上げた。リジーが久々に目にするルキアの顔には、濃い疲労がにじんでいた。ルキアは実年齢よりニ、三歳は若く見えるせいか、あまりにやつれると痛々しさしか感じられない。一時期の彼はずっとこんな風な顔をしていた。リジーには、それを懐かしいと思うことはできなかった。

「以前私は、シベリーの者と共生できる道を模索したいと思っていた。まさか私自身がこのような迫害に回ることになるとは思ってもいなかった。シベリーはお前の同族だから、なんとかして――」

「俺を引き合いに出すのは止せよ。それに俺は長らく流浪の身だ。今さら生まれがどうのと気にしてない。それに、俺はお前に好きにしろと言ったはずだろ」

「私は、自分の好きにしたわけではない!」

なんという言い草だろうかとリジーは呆れたが、ルキアが明らかに混乱しているのが見てとれ、無理もないことだと自分を納得させる。

ルキアは一見、穏やかで沈着冷静な男だ。それは彼が子供のときから周囲の者たちによって下されてきた評価であるが、別に間違っているわけではない。ただし、それは上っ面のものにすぎないのだ。

リジーは灰色のフードを深く被り直しながら、ルキアに問いを投げる。

「お前がそうやって盲目的にミカヤの味方をするのは、どうしてなんだ？」

ルキアの肩がわずかに揺れ動いたのを無視し、リジーは言葉を続ける。

「お前、どうせミカヤが王位に就いたら宮廷を去るつもりなんだろ？　だったら今だけでも父親の味方をしとけばいいじゃないか。あの王様が生きているうちはお前の身も安泰なわけだし、お前だって自分の思うようにやって縁切るほうが清々するだろ？」

ルキアにはリジーの言葉など耳に入っていないのか、思いつめた顔で好き勝手なことを口走り始める。

「ミカヤ殿下は、あのようなことをなさる人ではなかった。王弟派の廷臣を排すために他国に戦争を仕掛けるなど……。昔は――」

「昔って、いつの話だよ？」

ルキアはこの期に及んでもまだ過去の絆にすがろうとしていた。

リジーはそんなルキアを諦めの悪い馬鹿だと思った。

「なあ、もう放っておけよ。今のお前にできることなんてなにもないだろ？　戦争に駆り出されて生きて戻って来られただけよかったじゃないか」
「たしかにそうだ。私にできることなど、なにもなかったのかもしれない。だが……」
「ミカヤの前でキイルは庇えない、か？」
ルキアは睫毛を伏せたまま言い澱んでいる。そんな彼を、リジーは鼻で笑い飛ばす。
「お前にしちゃ、ずいぶんとやることが子供っぽいな」
「……馬鹿げていると思うだろう？　たったそれだけのことで、私は見て見ぬふりをしたのだ。そして、何千何万という敵兵を手にかけた。他の司祭たちにもそれを強いた。今、私が一番腹を立てているのは、あまりに愚かな自分自身に対してだ。私がただ流されるがままになったことで、あのような惨劇が引き起こされたように思える。それが、とても恐ろしいのだ」
「ずいぶんと自惚れてるんだな。今のお前にどんな権力があるっていうんだ？　お前一人がどんな道を選ぼうと、結果は同じだったと思うぜ」
リジーは階上の踊り場に掛けられた絵を見つめ、そこに描かれているやたらと美しい光景にうんざりしながら、アルゼ教典の一節を口にする。
「荒野に立つ聖イシスの前に、天より遣わされた四人の御使いが舞い降りた。イシスは御使いたちに与えられた＞神の力＜を用い、悪魔と罵られる為政者ヴァーロンを屠った、か……。きっとその力はイシスが守りたかったもののために使われたんだろうな」
「ああ。イシスと同じ力を持ちながら、私のしたことはヴァーロン

と呼ばれるにふさわしいものだ。とても許されることではない。許されようなどと思うこと自体、おこがましい……」

ルキアは悲痛そうに呻いた。

寄せた眉、細められた瞳、わななく唇。そんな横顔を見つめているうちに、一人の少女の姿がリジーの頭を過ぎった。

崖上にそびえ立つ白亜の城には、柱廊に囲まれた中庭があった。その庭の大樹に吊るされたブランコに、彼女は腰かけたまま、遠くを見つめていた。その視線の先にあるのは、過去への憧憬なのか、未来への希望だったのだろうか。

幾日も幾日も、彼女は一日の大半をそうやって過ごしていた。白い花の咲く季節が、静かに終わりを告げても。

あるとき、リジーは意を決して彼女の前に降り立った。初めて間近で見る深緑の瞳からは、幾筋もの涙が伝っていた。

――どうして泣いてるんだ?

リジーは恐る恐る問いかけ、草を踏みしめながら少女に歩み寄った。

この広い庭には人の気配がない。時折吹く風がわずかに木々の葉を揺らすほかには、“動”というものが感じられない。まるで美しい一枚絵を見ているような光景だった。そんな中、翡翠のような瞳からこぼれる雫だけが、たしかな“静”を破るものだった。

――わたくしのせいで、大切な方を傷つけてしまったの……。

少女は薄く唇を開いて、呆然と呟いた。声には抑揚がなかったが、彼女の心の揺れは瞳にもっとも強く現れていた。細められた瞳からは悲哀がほとばしっていた。それを目にしたリジーの心も、強い動

へと転じた。

――わたくしはあの方の傍にいてはいけなかったの。だから離れることを選んだのよ。それなのに、もう一度お会いしたいって思ってしまうの。そんなこと望んではいけないのに……。

細い顎を伝う涙。鈴の鳴るような声が、金属的な響きを帯びていた。張りつめた瞳がリジーを見つめる。その痛ましい様相を見ていられず、リジーは必死で言葉を紡ぐ。。

――そんなこと言うなよ。またいつか会える日がくるかもしれないじゃないか。

彼女はゆらりと顔を上げた。瞬きを繰り返しながら徐々に微笑を浮かべ、こぼれる涙を細い指で拭った。

琥珀色の睫毛が濡れた翡翠の瞳をけぶるように縁取り、木漏れ日が長くまっすぐな亜麻色の髪を透かした。その姿はまるで天使のようだった。

無邪気な微笑みを向けられ、リジーは思わず胸が震えた。いつも人知れず涙を流していた彼女がやっと笑ってくれたことが嬉しかった。なんと言えば彼女は笑ってくれるだろうかと言葉を探していると、再び鈴のような声が耳に届く。

――結ばれることのない人だってわかっていたの。子供のころからずっと……。だからもういいのよ。

そう告げる彼女からは、頑なな意思が感じられた。つい先ほど見せた稚さを覆すような、大人びた相貌だった。笑みを象る瞳と唇が、悲しいと語っていた。

あんな風に笑う彼女を思い出すたび、リジーは胸が塞がる思いが

する。一度も会いに来ようともしなかった恋人に、一切恨み言を口にしなかった。ただ、あふれんばかりの思慕を抱き続けていた。

リジーは悔しさを噛みしめながらルキアを見やった。するとルキアは、思いつめたような瞳をリジーに向け、震える声で言葉を紡ぐ。

「私一人が耐えればよいのだと思っていたのだ。けれど、それは間違いだった。ずっとわかっていたのに、私はそれから目をそむけていたんだ……」

ルキアは呆然と呟く。

今、彼女と同じ色の瞳から涙は流れていない。辛い、悲しい……たったその一言を、彼は幼いころから口にすることができない。しかし、ルキアが時折見せる酷くいびつな微笑は、泣いているようにしか見えず、見ているほうがいたたまれなくなるものだ。

――不思議ね。わたし、ずっと前からあなたを知っていたような気がするわ。

最期にそう言って彼女は微笑んだ。その顔は今のルキアとよく似ていた。

リジーは彼女を膝の上に抱えて、萎えた身体を抱き寄せる。

（せめて彼女に安らかな眠りを。願わくは、愛しい男の腕に抱かれる夢とともに……）

長い髪を撫でながら、祈りの言葉を呟いた――。

「やめろよ……」

「リジー？」

ルキアはリジーの顔をのぞきこむようにして腰をかがめる。

「やめろ、そんな風に笑うな！」

肩へと伸ばされたルキアの手をリジーは強く払いのけた。

突然叫んだリジーに、ルキアは驚きで目を見開いている。その表情までもが、彼女に生き映しだったのだ。

リジーはルキアの姿を見ていられなくなり、勢いよく身をひるがえした。

「リジー、どこへ行くんだ！」

「出て行くんだよ、言われた通りにな」

ルキアはまだなにか言いかけていたが、リジーはそれを無視して階段を走り去った。

……†……

季節は春。初秋にも咲いていたシューゼランの花が再び咲き乱れるころ、少女は白い花の中で佇んでいた。

リジーが背後から近づくと、流れるような所作で振り返って笑みをこぼす。

『お前、俺が怖くないのか？』

『怖い？　どうして？』

国王の妃にと望まれながら不義密通により王弟の子を孕み、宮廷を追放され、教会からも除籍されたと聞く。しかし、目の前にいるアズノエルというドートリッシュ家の娘は、既に十八になっているというのにまだほんの少女のように見えた。色狂いと呼ばれる国王の妾であったとは思えないほどに無垢で可憐なままだった。

それでも、膨らみの目立つその腹部を見れば、その噂が事実なのだとわかる。

じっと立ち尽くしていると、細く、白い指が伸びて、ためらいがちにリジーの髪に触れた。

『本当に綺麗な色……。一本一本がまるで玻璃のようだわ』

穢れない唇が、澄んだ声を紡ぎ出す。

『書物に描かれているシベリー族とはずいぶんと違うのね。あの絵を描いた人は、きっとあなたたちを見たことがなかったのよ』

リジーはなんと言っていいかわからず、なすがままになっていた。暖かな日差しのもとで、髪を撫でられているのは、とても心地の良いものだった。永く触れることのできなかった人の温かさを、やっと手に入れることができたような気がした。

ほどなくして生まれたのは男児だった。瞳の色はアズノエルと同じ翡翠の色をしていて、日ごとによく似た面差しを宿すようになっていた。柔らかな髪は、彼女が愛してやまない男の髪の色彩を帯びるようにもなっていった。いつも愛おしげに腕に抱いていた。歌を唄い、つたない言葉を話すようになった子供に優しく応えていた。

リジーはそんな二人の姿を遠くから眺めていた。それはとても眩く美しい光景だったが、退廃の匂いも漂わせていた。

緩やかな月日が二度巡った。

彼女が精神に支障を来たしていたのはいつのころからだったのだろうか。思えば、リジーが初めて会ったころ、既に彼女にはそんな兆候はあったようにも思えた。徐々に表れてくる奇行を周囲が見かねたのだろう。従兄のクラウスが子供を本邸へ引き取ることに決めたのだそうだ。

いつか引き離されることとわかっていたのだろうか。それとも、それすらよく理解できていないのだろうか。子供がその腕の中からいなくなる瞬間も、クラウスに微笑み続けていた。

『クラウスお兄様、その子をお願いしますね。ベルチェ、あなたも……』

クラウスの後ろに控える、まだ十代に見えるクラウスと少し似た男にもそう告げた。ベルチェと呼ばれた青年は必死に取り繕った笑みをアズノエルに向けていた。

薄い硝子がひび割れて、静かに破片が崩れ落ちていくかのようだった。かすかな狂気を孕んだ静謐は、幼子の眠りを破ることはなかった。

蕾が開き、花は枯れる。幾度も歳月は巡っていった。

どれほど時間が前へと進んでいっても、彼女の心は過去の一点に留まってしまっていた。むしろ、退行していたのかもしれない。あれほど愛おしんでいた子のことも記憶から消し去ってしまっていた。

アズノエルは、リジーと初めて会ったころのように、大樹に吊るされたブランコに座って一日を過ごすようになっていた。あのころと違うのは、彼女の顔が幸福に満ちていたことだった。

ずっと、笑ってほしいと思っていた。だからそれは、リジーにと

って喜ぶべきことのようにも思えた。青々とした草地を歩き、一歩一歩近づいていく。

『来てくださったのですね。ずっとお会いしたかった……』

キイル殿下、と消え入りそうな声でアズノエルは呟いた。

彼女の心がどこにあるかなど、リジーはとっくに知っていた。美しく透きとおった瞳には、リジーなど映ってはいなかった。これまでで一番幸せそうな笑顔を見ても、胸は強く軋むばかりだった。

狂気の渦に呑まれて辿り着いた先は、偽りの楽園だった。もはや、彼女にとっての幸せはそこにしかなく、現実は崩れ去っていた。

リジーはアズノエルを瓦礫の上の楽園から連れ出したかったが、それはリジーの思い上がりでしかなかった。

『いや……』

か細い悲鳴が漏れた。青い筋が浮かび上がるほどの力を込めた両手で、髪をかきむしるように耳を押さえた。華奢な肢体を折り曲げ、言葉にならない声を唇から漏らし続けた。

日に日に壊れゆく彼女を優しく抱きしめることができれば、リジーの心はどれほど救われただろうか。どうすることもできずに、ただ、彼女を見つめていることは苦行でしかなかった。

それでも、アズノエルはリジーの存在を受け入れてくれていた。ただ静かに寄り添うことを条件に、リジーには楽園の住人である資格が与えられた。

今、あのころを想えば、後悔が募るばかりだったが、自らの行いを悔いてみても、どうすることが彼女にとっても自分にとっても最善であったのかリジーにはわからなかった。

だから、同じことを繰り返していくのだろう。誰も救えずに、今

もただ、時の砂をこぼし続けているのだ。

……†……

ルキアと別れたリジーは、宮殿内を闇雲に歩き回ったせいで迷子になっていた。馬鹿みたいに大きな窓からは、どこを見渡しても似たような景色が広がっているだけである。

リジーは苛立ちながら、長い廊下をずんずん歩き、中庭と思しき開けた場所へと出た。中庭を囲むのはアイオーン宮とは趣向の異なる厳めしい宮殿だった。

ふと、足元に視線を落としたリジーは自分の目を疑った。

そこには、あの白い花が一面に咲き乱れていた。

神からの贈り物

エクシュール宮殿における公式礼拝の後、ルキアは礼拝堂に留まっていた。

かねてより病床にあったデルタ・マーシェル主教の死後、ルキアはかつてのクラウスと同じ宮廷司祭長となり、王宮における祭事のすべてを正式に取り仕切ることとなった。デルタの直弟子であり、国王の信任厚い司祭であるルキアがこの役割を受け継ぐのは当然であり、いずれはこうなることをルキアは覚悟していたが、これまで以上に宮廷貴族らの前に姿を晒す機会が増えたことは少々気の重いことだった。長いため息を吐きながら、このまま天へと昇っていけそうなほど高い天井を見つめ、頭の中を空にする。

戦後より四か月が経ち、国内は落ち着きを取り戻している。それに伴い、ミカヤは国内のあらゆる権力に対し改革を進めており、聖域であったはずの教会に対しても既にその手を広げていた。以前であれば、王弟派の下位司祭を中心にミカヤに対する強い反発が起こっていたものだが、ハーシェリオン家の勢力が弱体化し、その後ろ盾を失った今となっては、ミカヤのなすがままとなるしかないのだろう。

高く響く規則的な音が、ルキアの思考に滑り込む。

ルキアは天井画の描かれた円蓋から視線を外し、礼拝堂の中央に立つ金髪の男に問いかけた。

「アシリング殿、いかがされた？」

「あなたにお訊きしたいことがあります。まだ礼拝堂にいらっしゃるとうかがったので、こちらに参りました」

ルキアが白い祭服の裾を捌きながら祭壇から降りると、アシリングはルキアの近くへ歩み寄った。

「ミカヤ殿下は相変わらず公式礼拝には出られないのですね。まあ、以前から公然と無視しておいでのようでしたが」

「……私への用とは、そのようなことか？」

ルキアのそっけない返答に、アシリングは眉をひそめ、鋭い視線を向ける。

「ルキア様！　なぜ、次代主教の座をお受けにならなかったのです！」

突然の問いに、ルキアは瞬きを繰り返す。

「なぜと言われても……。マーシェル主教が後任にはエクランド司祭を推されていたのだ。主教がそうおっしゃっている場に私は立ち会っている。ゆえに、私が就くわけにはいかない。それだけのことだ」

「それでは、司祭を辞められるわけではないのですね？」

アシリングの気鬱はそのことかと、ルキアはようやく笑みを浮かべる。

「その心配には及ばぬ。あなたもわかっておられると思うが、我々のような地位にある者が、そう簡単に辞めるわけにはいかない。……戦後、すでに幾人かの高位司祭たちがその地位を辞し、教会を去

っているが、これ以上そのような者が増えぬことを期待するしかあるまい」

数日前、リーヴァ・エクランドが主教の座に就任した。＞神の力（レガロ）＜の継承者は必ず四大司祭の地位になければならないという慣例がある一方で、四大司祭の地位にある者が最上位にあたる主教となる場合には、＞神の力＜を別の者に継承させるまでの間、四大司祭の一角は空席扱いとされるのが通例である。

しかし今回は事情が違った。

これまで、四大司祭は高位司祭の中でもっとも強い魔力を有する者の就く地位だと対外的に認識されてきたが、先の戦により＞神の力＜の継承者が就く地位であることが外部にも知れ渡ることとなった。それにより、他国には存在しない＞四大司祭＜こそがゴースティン＝ルドリア教会の権威であるという認識が信徒の間で沸き起こったため、慣例を維持するのが難しくなった。つまり、空席を設けるのは好ましくないという考えが強まったのだ。

現在、約二十名いる高位司祭の半数が風属性魔法を扱う者たちである。そのため、エクランドの後任たる継承者候補の高位司祭は幾人もいたが、そのうちの五名が立て続けに辞職したために、アシリングが継承を行うことなく四大司祭の空白を形式的に埋めることとなった。ルキアの知る限り、辞した者たちは神の教えに敬虔な司祭と呼べる者たちばかりではなかったが、軍人ですら恐怖や罪悪感から退役を願い出る者たちが存在する以上、司祭の中にそのような者たちがいてもなんら不思議ではなかった。

「予想はしていましたが、それにしても多すぎるように感じます。私が知るだけで既に八名が辞任を申し出ているということですからね。あの者たちの気持ちがわからないではありませんが、あまりに

無責任なものだと思いますよ。私はまだ禁忌魔法を継承していないのです。“名ばかりの四大司祭”などと陰口を叩かれ、肩身の狭い思いをしているのですから」

アシリングは言葉の端々に怒りと悲しみを交互に漂わせながらルキアに訴えかけた。アシリングは自他共に認める優れた才能を有しているため、いずれ必ず＞神の力＜を受け継ぐことができると信じている。そんな彼にとって、“名ばかりの四大司祭”と呼ばれるのは甚だ不愉快なことだろう。だが、少なくとも彼は礼典執行の資格を持つ高位司祭であり、決して見下される謂れはない。

なにより、アシリングの例は珍しいことではない。

デルタ・マーシェルの葬儀がフェルダ大聖堂で行われた後、高位司祭が議場に集い、後任の主教について話し合われた。デルタの意向どおり、リーヴァ・エクランドを主教とすることで意見は一致していたが、＞風の司祭＜の座については意見が分かれた。エーゼン・サルファは、高位司祭の中からふさわしい人物を＞風の司祭＜として形式的に任命するべきと主張した。それに対し一部の司祭から、戦の影響により事情が変わったとはいえ、信徒らを欺くような行為は避けるべきではないのかという主張がなされた。

それに対してエーゼンはこう答えた。

『四大司祭は＞神の力＜の継承者に与えられる地位ですが、四大司祭の地位にあった者がすべて＞神の力＜の継承者であったわけではありません。むしろ、そのような例は稀だったのですよ。……考えてもみてください。禁忌魔法の継承に耐えうるだけの力を有する者が、いつの時代にも等しく生まれいずるわけがありません。イシスによる聖戦以後、継承者が同時期にすべて揃った例など今を除いて一度もありませんでした』

たとえば三百年前、教皇軍がゴースティン軍に対し＞神の力＜をもって対抗しなかったのは、不幸にも、継承者が現れなかった時代であったからだという。決して、崇める神を同じくするガレ族相手に＞神の力＜を用いることなどできないと考えたわけではない。

『あのとき継承者であったのは教皇エルジェ三世のみでした。教皇が殺害されたために有効な対抗手段が断たれ、教会はゴースティン王の軍門に降ることとなったのです。……もし、あのときすべての継承者が揃っていれば、ルドリア教会の組織は今とはまったく別のものとなっていたでしょうね』

また、＞神の力＜はルドリア教会の前体制下においては王侯に対して秘匿された存在ではなく、むしろ教会権力を誇示するための象徴的存在であったという。教皇国に軍が送りこまれたのも、＞神の力＜を扱える者が精神を病んだ教皇以外にいないとゴースティン王に知れたためであった。

ゴースティン＝ルドリア教会が王権のもとに置かれた後、王家に侮られぬようにと四大司祭の地位に継承者でない者が就く例が増え、その際、＞神の力＜を用いることは禁忌であるという戒律もできた。その結果、徐々にその力の存在自体が曖昧なものと化し、司祭でさえその存在を疑問視する者が現れるようにもなったのだそうだ。

そして今、＞神の力＜が初めて戦に利用されたために、再びゴースティン＝ルドリア教会はその権威を取り戻すに至った。

『秘匿すれば侮られ、知らしめれば利用される……。辛いところです』

エーゼンは自嘲を含ませて笑った。

たしかに、高位司祭の操る力は充分戦闘に耐えうるものだが、そ

の存在を知っただけでは戦に利用はされなかっただろう。すべては禁忌とされる＞神の力＜の存在ゆえだということだ。

ルキアは憮然と横を向いたままのアシリングを見やる。

「アシリング殿、あなたはどうなのだ？　敵とはいえ、人を殺めたことへの罪の意識に苛まれてはいないのか？」

「もちろん、心が痛まぬわけではありません。ですが、あれは戦争なのですよ？　ミカヤ殿下のご命令に従い、敵を駆逐し、そして我々は勝った……。そのことを誇りに思いこそすれ、私は職を辞するつもりなどまったくありませんね。ミカヤ殿下のような強き方が王になられれば、この国はますます栄えることでしょう。神をも恐れぬ殿下の振舞いは、聖職にある私の目から見ても清々しさを感じるほどですから」

「……そうか。あなたにとっては、さぞ大義のある戦であったのだろう」

アシリングの答えは、ルキアの不安を増長させるものだった。

宮廷には若い者たちを中心として王太子の信奉者が増えつつある。ルキアは、ミカヤの手腕は評価しており、彼にある程度の権力が集中することを悪いと思っていない。ただ、ミカヤがそれらのすべてを掌握することには強い怖れを抱いている。

王弟派の閣僚及び軍人によるファジール密約の件は、当初ルキアが想像していたほど大きな波紋を見せなかった。しかしミカヤは、この不祥事の根源は王弟派の廷臣たちが正統な王位後継者たる王太子と協調しようとせず、独自に政策を推し進めてきたことにあるとし、内部組織の改革に着手することとなった。それは、まさに粛正と呼んでよいほどのものだった。この数か月の間に、ミカヤは自分にとって都合の悪い閣僚や軍人たちをその功績にかかわらず更迭した。その結果、重要職に多くの穴が生じており、その穴を埋めるた

めに一人の大臣がいくつもの職を兼任している。

ルドリア教会の状況もまた深刻である。元々数の少ない高位司祭の多くが失われた今、四大司祭が残っていることだけで体制を保っているのが現状である。教会を去っていった者たちは、シベリー軍殲滅戦において第一・第二部隊に配置されていた者――つまり、首都バードン戦に参加した者であった。軍人相手ならばともかく、ほとんど無抵抗の者たちを容赦なく葬り去っていったことは、彼らにとって深い傷となっていることだろう。

――我ら、ろくな死に方はせぬぞ。

首都バードン陥落の立役者ともいえるローザン・ゲーブルが、戦後ルキアに向かってそう言い放った。また、負傷を理由に一時的にでも戦線を離脱できたことをうらやましく思う、とも皮肉まじりに口にしていた。

ルキア自身、戦場の記憶がよみがえるたび、今ある地位を捨てたい衝動に駆られる。多数の人間の命を奪った力を用いて、神への祈りを捧げている。それが自分に課せられた役割であると思えばこそ、なんとかここに留まる覚悟が保てている。

逆に言えば、自らに残された唯一の役割にすがることで、向き合うべき一切のものから目をそむけているのだ。それは、この五年もの間変わることがない。

シベリー自治国ついては、ゴースティン主導による協議がケーニヒスとファジールの間で行われ、かつてケーニヒスとの戦争において争われたミレニス州やカールトン州の北部一帯をゴースティンが取得することになった。南部のジュダ州やアパス州についてはファジール領土に組みこまれる方向だが、現在ファジールはゴースティンの支配下に置かれており、その領土の半分はケーニヒスとの間で

分け合うことになるだろう。そうなれば、首都バードンをはじめとするシベリー中部はケーニヒスへ、それ以外の北部、南部の州がゴースティン領となる見通しである。

また、シベリー族の者たちの処遇はゴースティンに一任されている。まだ正式決定は下されていないが、ほぼ確実に彼らはゴースティンの属領へ奴隷として送られることになるだろう。

労働力としての使い道がある以上、いたずらにシベリー兵を殺傷するべきではなかったが、それを惜しむ者は少ない。あまりに反抗的な奴隷は統率の障害となるだけだと考えられている。

このようなシベリーの取り扱いについて、宗主国たるケーニヒスより異議が発せられることはなかった。シベリーが国境防衛軍としての役割を果たせなくなった以上、ケーニヒスにとっては保護の価値などない。なにより、異教の蛮族の保護を戦勝国たるゴースティンに願い出る義理など、はじめから持ち合わせてはいないのだ。

これにて、アレイシス大陸におけるシベリーの歴史は途絶えることとなるだろう。それをどれほど憐れに思おうとも、止める手立てはルキアにはなかった。

聖職に就く者は、政に対し一切の権限を持たない。これは、かつてルドリア教の司祭たちがゴースティン王を意のままに操っていたことへの戒めであり、高位司祭を中心とする教会自治が認められてきたこととの表裏でもある。

王の私的顧問としての役割を有しているルキアは、王を通じてなんらかの進言を行うことも建前としては可能である。しかし、アルト＝ヴィジェ王がいきなり政に口を出しなどすれば、それがルキアからの入れ知恵であることは明白であり、多方面より批判を招くことになるだろう。争いを嫌う情け深い王であっても、異民族のシベリーの行く末までを気にかけようはずがない。

ルキアは戦争が始まる以前より、教会内部に混乱が生じることも、

シベリーの辿るであろう憐れな末路についても予測していた。すべてわかっていて、戦場へ赴いたのだ。

ルキアに成しうることといえば、ゴースティンの統治下にあるファジール国内の安寧に対し、微力ながら手を貸すことぐらいであった。

……†……

人馬宮の月、四日。

フェルダ大聖堂において定例会議が開催された。これは戦後二度目となる会議であったが、高位司祭の着く中央の卓にはいびつな空席ができていた。とりわけ、四大司祭の一人ローザン・ゲーブルの欠席は、下位司祭の間で大きな波紋を呼んだ。この数か月、ゲーブルは司祭としての役目を放棄し、自邸にて享楽に耽っていると伝え聞かれている。既に教会に対し離籍を願い出ているようだが、四大司祭となった者――厳密に言えば〉神の力〈の継承者となった者はその地位を辞することは許されない。

新たな〉地の司祭〈候補へ、その力が受け継がれない限りは。

今現在、約半数の高位司祭が欠け、四大司祭の一人までもが失われようとしている。ゴースティンの司祭は、魔道の力を操れることが叙階の条件に課されているため、ただでさえ慢性的な聖職者不足に陥っている。それにもかかわらず、エーゼンに焦りは見られなかった。欠けた高位司祭の役割は、修道士の一部に対し礼典執行の資格を特別に付与することで補えばよい、と事もなげに口にした。それならばいっそ、修道士たちが上級聖職者となれるよう、魔道の力

を司祭叙階の条件に課すのを廃止すればよいのに、とルキアは思った。

会議終了後、リーヴァ・エクランドは席に就いて、じっとうつむいたままでいた。それを訝ったルキアがエクランドに声をかけたが、反応はない。その視線は虚空を漂っている。議場には他にもう誰もいないが、エクランドはルキアの存在すら認識できていないようだった。

再度名を呼びかけると、ややあって、エクランドはルキアのほうを見やった。その顔は青白く引きつっていた。

「エクランド主教、どうかされたのですか」

「……まだ、主教と呼ばれるのは慣れませんわね」

エクランドが動揺をひた隠すように微笑すると、ルキアもそれに呼応するように取り繕った笑みを浮かべた。

「私も、司祭長と呼ばれるのにはまだ違和感が拭えません。セヴァンス侯を襲爵したときも、半年もの間、その称号に慣れることができませんでした。呼びかけられているというのに、気づかずに通り過ぎようとしたこともあったぐらいです」

「ドートリッシュ司祭、あなたはその御年で宮廷司祭長となられたのですから、いろいろとご苦労はおありなのでしょうね。私では、とても宮廷仕えなど無理ですわ」

「エクランド主教、年齢のお話はお嫌いではなかったのですか？」

ルキアが茶化すと、エクランドは緊張をゆるませ、いつものように品のよい笑みを口元にたたえる。

「そういえば、女が主教となるのは私が初めてだそうですわ。まあ、

他国の教会では女性は司祭になれぬそうですけれど」
「……我が国において聖職書の性別まで考慮していては、高位司祭がいなくなりますよ」
「クラウス様はよく言っておられましたわ。魔道の力を叙階の条件に課し続ける以上、いずれ上級聖職者が枯渇するであろうと」
「既に、枯渇しているでしょう。辞めていった者たちは批判されるべきではありません。そもそも、いかに魔力に優れていようとも、信仰心のない者を教会の権力者に据えるべきではないのです。特に、私のように信仰を逃げ場所としているような卑怯者が……」
「そのようにおっしゃるものではありませんわ」

エクランドは首を横に振った。褪せた金髪が、白い祭服の上を力なくかすめる。

「あなたがそこまでご自分を責められることはありません。王太子殿下の命令を拒むことができないと判断したのは私やデルタも同じ……。そもそも、かつてのように＞神の力＜を盾に王権に対抗するわけにもまいりませんわ」

高位司祭による教会自治も、王の温情により保たれてきたにすぎない。この三百年、教会は王権のもとに服従し続けてきたのだ。

「先日、ラウルが＞風の司祭＜の地位を得ましたけれど、私はあの子がずっと“名ばかりの継承者”であってくれればよいと思っています。司祭が戦に駆り出されてしまったのは、偶然、継承者のすべてが揃ってしまったからです。それにあの子は、どうも総議長や王太子殿下のお考えに心酔しているようで……。いかに力に優れておりましても、聖職に就くにふさわしい者だなどと叔母である私の目から見ても思えません」

年若い甥の驕りを非難するようでいて、強い魔力を有して生まれたがために歪められていく人生を憐れむような口ぶりであった。

「私も、かつては名ばかりの継承者であったこと、あなたもご存じでしょう？」

「はい……。エクランド主教だけでなくウェーリック司祭も、数年前まで禁忌魔法を継承しておられませんでしたね」

＞神の力＜の継承者は皆、元々強い魔力を有している者たちばかりであるが、力を体内に宿すことで魔力が増幅し、魔道の波動が変質する。それは魔道を操ることのできる者ならば克明に感じとれるほどの変化であり、彼らが新の継承者となったとき、ルキアは＞四大司祭＜の地位の持つ本当の意味を知った。

ルキアが高位司祭となった五年前、四大司祭の地位には、風・地・水それぞれの＞神の力＜を継承した三人の司祭がおり、＞炎の司祭＜の座は、デルタ・マーシェルが主教となったため、空席扱いとされていた。この状態は、ルキアがデルタから禁忌魔法を譲り渡されるまで続いた。

『＞神の力＜をその身に宿した者は、四大司祭の地位から逃れることはまず叶いません。それでもよろしいのですか』

四年前、ルキアが四大司祭の候補者に挙げられたとき、エーゼンは継承の儀式の前に何度も確認するようにそう告げた。

あのころのルキアは、司祭としてその一生を捧げるだけの覚悟を有してはいなかった。エーゼンはそれをわかっていたため、翻意の機会を与えようとしたのだと思われるが、ルキアはその忠告を頑なに退け、継承者となることを選んだ。すべては、教会の権力者としての地位を確固たるものにするためであった。それが自分を守る鎧であり、格好の逃げ場所になるとルキアは思っていたのだ。その意

味では、金のために望んで地位を得たゲーブルと似たようなものであった。そして、今ではそのことを深く悔いている。

ルキアは漏れ出そうになるため息を呑みこんだ。

伏せていた目蓋を押し上げたとき、その瞳に、顔を両手で覆ったエクランドの姿が映る。目元を強く押さえたエクランドは、引きつれた呻き声を上げた。

「どうされたのです！」

慌てふためき駆け寄ろうとするルキアを、たいしたことはありません、とエクランドは手をかざして制した。小刻みに揺れる身体を肘掛けに寄りかからせ、息も絶え絶えに言葉を紡ぐ。

「ドートリッシュ司祭……。悪夢を、ご覧になることはございませんか？」

「なぜ、そのようなことを？」

「……このところ、ずいぶんとお顔の色が悪いようですから、ろくに眠っておられないのではないかと思いまして」

そう口にするエクランド自身、ろくに眠っていないような顔色をしている。元より雪のごとく白い肌は生気を失くし、青灰色の瞳を彩る金糸の睫毛にも艶はなく、目元には濃い隈が落ちている。

ルキアは動揺を押し殺し、平坦な声で答える。

「あれだけの人を手にかけたのです。悪夢のひとつも見ないわけにはいかないでしょう」

「先ほど、私は白昼夢に襲われておりました。……突然、目の前が血のように真っ赤に染まっていきますのよ……。あれはきっと、戦場での光景ですわね。私の放った＞フレイド＜が、獰猛な牙と爪で

兵たちの身体を一瞬で切り裂いていきましたわ」

エクランドの立てる小さな笑い声は、嗚咽と大差ないものであった。

「いつか、罰を受けるのではないかとさえ思っております。あの力を敵兵に向けて放ったとき、その覚悟も同時に決めなければならなかったのですけれど……恐怖を打ち消すことがいまだにできないのです」

エクランドは振り返り、議場の壁に掛けられた大きな絵画を見上げた。

まさに天へと召されようとするイシスが、四人の弟子たちに自らの力を受け継がせようとしている。神からの贈り物（レガロ）を次代へと受け継いでいくことを望んだのは、イシス自身であったのだろうか。それは却って無用の争いを生むだけではなかったのだろうか。以前エーゼンも、継承することそれ自体が禁忌ではないのかと語っていた。＞神の力＜を手に入れようなど、人間の驕りに他ならないものであろう。

これまで何十年に一人、という割合でしか継承者は現れてこなかった。それにもかかわらず、一時期にすべての継承者たちが揃ってしまった。クラウスが急死し、デルタが主教となったことで＞炎の司祭＜の座に空席ができたが、それもルキアが司祭となったことで一年と置かずに埋まった。

嫌な偶然だ、とルキアは胸中で呟き、苦々しく語り始める。

「イシスは一千年前にゴースティン地方の民を救いましたが、もし本当にこの国の民に危機が訪れたなら、そのときにこそ神はその力をふさわしい者へと与えてくださるでしょう。所詮私たちは、イシスと同じ力を手にしたところで、聖者のごとく在ることはできませ

ん。……このような力、失われてしまってもかまわないと私は考えております」

「クユラも、あなたと同じことを申しておりましたわ」

両手を祈るように組み合わせたエクランドは、恬淡に笑う。

「情けないことですけれど、戦後、信徒らの前に立つのが怖くて仕方ありません。ですから私、役目を堂々と放棄してしまったゲーブル司祭のことを責める気になれませんのよ。むしろ、うらやましいとさえ思っておりますわ」

「……今後は、静かに祈りを捧げていられる日々が続くはずです。戦は、もう終わったのですから」

ルキアはそう告げるとともに、議場を後にした。回廊を抜け、翼廊の階段を降りていると、聖歌隊の歌声がかすかに耳に届く。思わず足を止め、耳を澄ませてみたが、その清浄な歌声をつぶさに聞きとることはできなかった。

かつてルキアを取り巻いていたのは、どこまでも退屈で、どこまでも平穏な日常だった。戦場へと赴く前、そんな日々が再び戻ることを望んだ。しかし今、白い祭服に身を包み、剣の代わりに聖杖を手にしようとも、静かに祈りを捧げていられた日々がその手に戻ることはなく、ますます遠ざかっていくようにさえ感じられた。

追憶の痛み

――お前は逃げなさい。

口からこぼれる血を拭いもせず、彼女は必死にリジーに告げる。リジーの頬に触れる手が既に冷たく、助け起こそうとすることは彼女にさらなる苦痛を与えるものでしかなかった。

（ゼラ、お前はどうして……）

――彼らの悪行を許せるほどに、強くあれ……。

（俺は、お前のように強くはなれない）

リジーは夢を見ていた。

いつかの遠い過去の情景をふとした瞬間に思い起こすことはあった、こうして夢にまで出てくることは稀だったが、忘れ去ってしまいたいと思う気持ちを彼自身が罰しようとしているのだろうか。決して忘れるなとでも言わんばかりに、夢は傷を痛みとともに刻みつけてくる。

「……あなた、なにしてるの？」

静謐に満ちた聖堂の中に甘い声が響き渡る。

リジーが両の瞳を開けてふっと顔を上げると、そこには十五、六に見える貴族らしき少女が立っていた。リジーは誰かに見つかってしまった今の状況でもさして慌てることなく、その少女に屈託なく笑いかけた。その口端から発達した犬歯がのぞく。

「もしかして、シベリー族？　嘘、初めて見ちゃった……」

リジーの顔を見た途端、少女は酷く驚いたようだが、じきに薄紅色のドレスの裾を摘まんで駆け寄ってきた。

声をひそめて、リジーの耳元で囁く。

「こんなところにいたら危ないわ。見つかったら殺されちゃうかもしれないじゃない」

「大丈夫だよ。俺、この家の当主様と知り合いだから」

リジーは意気揚々として微笑む。

「ルキア様のお友達でいらっしゃるの？」

「友達……ってのはちょっと違うような気がするけどな」

リジーが複雑そうに眉を寄せると、少女は金茶色の瞳に好奇を宿らせた。

「ねえ、シベリー族って異教徒なんでしょ。ルドリア教の聖堂なんかにいていいの？」

「別にここの神様にお祈りしてるわけじゃないし、いいんじゃないの？　今日みたいな寒い日に、外に出てけとか言ってくれるなよ」

「そんなこと言わないわ。それに私、シベリー族のこと嫌ってなんていないのよ。ルキア様もおっしゃってたもの。シベリー族への差別は不当なものだって」

「そのわりには、あいつ、こないだの戦争でシベリー族殺しまくってるぞ。戦場はルキアが作り上げた黒焦げの死体の山ができてたらしいぜ」
「それは……」
少女はうつむいて唇を噛む。
「ミカヤ殿下のご命令だったからよ。本当はお嫌だったの。そんなこと、考えなくてもなくわかるでしょ、お友達なんだから」
「そりゃまあ、そうだろうけどさ」
好きでやったわけではない、と口走る大人げないルキアを思い出し、リジーは皮肉っぽい声で答えた。
戦争が終わってそろそろ半年が経とうとしているが、ルキアは後になっていろいろと思うことも出てきたのだろう。
ここ数か月、自室の大きな肘掛け椅子に身体をあずけたまま物思いに耽っていることが増えた。戦場に持参した剣をじっと見つめているかと思えば、目や耳を強く塞ぎ、身体をわずかに震わせていることもある。とりわけリジーが気にしているのは、深夜になってもルキアがなかなか眠ろうとしないことだ。寝台の脇に置いて時折口に運んでいる透明な液体は水ではなく、鼻を近づけるだけで眩暈を起こし、口に含めば舌や喉を焼くほどに強い蒸留酒である。赤い果実酒は血を思わせるため見ることも避けているらしい。
屋敷を徘徊しているリジーはそんなルキアの姿を見かけることが多いが、声をかけることすらはばかられる。この状態は五年前――クラウスが亡くなり、家を継いだときのことを思わせるものだった。状況がまるで異なるため単純になぞらえることはできないが、あのときよりも深刻に見えた。リジーと同じことを考えているのか、ル

キアの側近でもある家令は、なるべく彼を一人にさせないようにしていた。

「あ、そうだわ」

少女は思い出したようにドレスをひるがえし、祭壇へと向かって早足で進んでいった。そして燭台に手をかざし、一気に火を灯す。そろそろ日暮れが近く、立ち並ぶ大きな窓から差す光は陰ってしまっていた。

リジーは少女の後ろ姿に声を投げかける。

「へえ？　お前、炎の魔道士か……」

くるりと振り返った少女が、そうよ、と得意げな顔をすると、リジーはからかうように口の端を上げる。

「だけどさ、ルキアに見つかったら怒られるんじゃないの？　あいつ、クソ真面目じゃん？　魔道の力を不用意に使うのはいけません、みたいな」

「大丈夫よ。だって、いつもルキア様がそうされてるんですもの。それでルノー様やベルチェさんには秘密にしておいてくれって私におっしゃるの」

「あいつ、好き勝手にやってんだな……」

少女はリジーの隣の席に腰を下ろす。貴族の娘らしい、いかにも気取った所作だったが、この少女ならば嫌味な感じはしなかった。

「ルキア様、まだ王宮からお戻りになられないのかしら？」

「最近、忙しいみたいだよ」

「ええ、お母様も心配してらしたわ……。でも、今日こそはお願い

しなきゃって思ってたのに」
「お願い？」
「私ね、司祭になったらルキア様の弟子にしていただくの。子供のころからお約束してるもの」
「お前みたいなのが司祭になる気か？　まだ子供じゃないか」
「私はもうすぐ十七歳なのよ、もう大人だわ」
「俺、今いくつだっけな……」

リジーの呟いた言葉に少女は訝しげに首を傾け、じっとリジーの顔をのぞき込んでくる。それほどこの独特の容姿が珍しいのだろうかとリジーが苦笑すると、少女は顔をほころばせた。

その無邪気な笑顔は、リジーにアズノエルのことを思い出させた。彼女はとうに大人だというのに、いつまでも少女のようだった。

リジーがアズノエルのことを穢れのない天使のようだと思っていたのは、彼女が過酷な運命に晒されてもなお、誰かに恨みを抱くことがなかったからだ。それは決して狂気によるものではなく、たとえ正気のままであったとしても彼女は誰かに憎しみを持つような人間ではなかった。だから、その身に降りかかる災厄のすべてを、自分一人で背負ってしまったのだ。

――ねえ、どこにいるの……？

探るように伸ばされた手を、リジーは自分の手の中に握りこんだ。するとアズノエルはようやく安心したように微笑んだ。

――さっき、とても長い夢を見ていたの。そこにはあなたも出てきたわ。

アズノエルはもう片方の手を上げ、リジーの頬へと指を這わせる。

――夢って不思議ね……。夢だとあなたの姿をちゃんと見ることができるのよ。

透きとおる翡翠の瞳には、もうなにも映すことができなくなっていた。皮肉なことに、そこからあふれる涙は彼女の瞳を美しく輝かせていた。

日に日に蝕まれていく身体。人知れずその痛みに耐え、悲痛な叫び声を上げ続けている。それでもなお失われない無垢さに触れるたび、リジーは胸を抉られる思いがした。

罪があってこそ罰があるというのなら、彼女に与えられている罰は、一体なんの罪によるものだというのだろう。その身に流れ続ける古の血のせいだとでもいうのだろうか。だとするならば、あまりに不当な罰ではないか。

――ねえ、リジー……。

名を呼ばれたことで、彼女の世界に招き入れられているのが他ならぬ自分であることを知る。リジーがぎこちなく笑うと、それに応えるかのようにアズノエルの唇を再び微笑がかすめた。

――もう一度、あなたの顔が見たいわ。

視界は暗い闇に覆われていても、最期までその心に闇が届くことはなかった。美しさや清らかさといったものは一見、刹那的で儚いものに思えるが、彼女にとってのそれは季節が幾度巡り、悠久の時が流れたとしても不変のものであったことだろう。永遠に続くかに思える怒りや憎しみも、心ひとつでいくらでも変わりゆくものであったのかもしれない。

ゆっくりと目蓋を閉じる。
あの柔らかな手の温もり思い出すように、リジーは冷えた手を握りしめた。

……†……

王宮から戻ったルキアは、いつものように邸内の聖堂までの通路を歩いていた。
色を失くした空のもと、葉の落ちた木立の間を小鳥が行き交い、木立の奥に広がる池には、降り立った水鳥が緩やかな波紋を水面に広げている。ルキアは足を止め、それらの光景をぼんやりと目に映していた。
冷たい風が、再び長く伸びた彼の髪をさらさらと散らす。舞い落ちる小さな雪の粒が赤い髪と混じり合い、ルキアの顔色を奇妙に青白く見せていた。

陽がさらに陰り、強い風が吹き始めた。
風の流れに導かれるように、ルキアが視線を聖堂のほうへと投げると、聖堂の扉の前にビビの姿を捉えることができた。今まで帰りを待っていてくれたのだろうか、と申し訳なさも感じたが、ルキアはビビを呼び止める気にならなかった。
聖堂の中から出てきたビビは、あたりをうかがうように左右に顔を振ってから扉をゆっくりと閉めた。ドレスを手で摘み、石段を降りていく途中、また聖堂を振り返り、名残惜しげに見やっていた。

最近、リジーは屋敷にまぎれ込む代わりに、聖堂内に堂々と居座っていることが多いことを思い出す。まさかと思い、ルキアは白い息を吐きながら急いで聖堂へと駆け込んだ。

扉を乱暴に開けた音が聖堂内に響き渡る。少しの間をおいて、銀糸をなびかせて振り返ったリジーは、悪戯っぽく微笑んだ。

「お帰り、ルキア。思ったより遅かったな。待ちくたびれたぞ」
「さっき、ここからビビが出てきたが、もしかして会ったのか……？」
「ああ。でもあの子なら見られても大丈夫だろ。誰かに言いふらすような奴じゃないって」

ルキアはリジーに強い視線を向け、大股で近寄っていく。

「リジー、最近のお前の行動は大胆すぎる。宮殿には来るなと言っていたのに勝手に出入りしているようだし、この聖堂にしても、いくらドートリッシュの敷地内とはいえ一般にも開放されているんだ。騒ぎになったらどうするつもりだ？」
「見つかったときは全力で逃げ切ってみせるさ。優雅に扇子やハンカチを持ったお貴族様たちに俺が捕まえられるわけないじゃないか」

あまりに楽観的すぎるリジーにルキアは呆れ、前髪をかき上げ、大きく嘆息しながら、椅子に腰を下ろした。するとリジーは、椅子の背にもたれかかってルキアに顔を近づけてくる。

「疲れてるみたいだな」
「半分ぐらいはお前のせいだよ」
「俺に当たるなよ。あの王子様のせいで戦後処理に追われてんだろ。司祭のくせに管轄外もいいとこじゃないの？　ご愁傷さまだな」

疲労が気を短くさせているのは事実だった。ルキアはリジーの前で自分を取り繕う気などなかったが、殊更に指摘されると周囲の者も同様に感じているのかもしれないと思い、気恥ずかしさを覚える。

「……政治にも関わることも多少あるが、管轄外というほどのことでもない。それに、戦後すぐのころに比べれば、まだ落ち着いたほうだ」

「なるようにしかならないさ。だからあんまり思いつめるなよ」

ルキアは少し顔を上げて、顔にかかる前髪の隙間から目線だけを上げた。そこには昔と変わらないリジーの陽気な顔がある。

「みんな思ってるんじゃないの？　昔みたいに明るく冗談を言い合ったりさ、そんなお前を望んでる」

リジーが慰めてくれようとしているのはルキアにもわかったが、その言葉を受け入れる気にはなれなかった。

「……あのころの私は、偽善と欺瞞に満ちた己だけの正義を振りかざしていた。あまりに無知で、愚かだった。なにも知らないから、あんな風に笑っていられただけだ」

「おいおい、子供のころなんて普通そんなもんじゃん。そんな全力で否定することないだろ」

ルキアが打ち消したいのは、なにも知らずに甘い夢に浸っていたころの自分だった。過去に戻ることはできないが、望ましい未来を目指して前に進むことはもうできない。進むべき道など、とうに絶たれてしまった。

「だからといって、今もそう大差ないだろう。ただ、無知で愚かな自分を知ったというだけ……」

ルキアが自嘲的な言葉をさらに口にすると、リジーはあからさまに嫌な顔をした。

「なんでお前がそこまで自分を卑下しなきゃなんないんだよ？　いい加減、お前は自分の好きに生きていくことを考えるべきだって。あの王子にはとっくに愛想尽かしてるんだろ？　お前を脅してくるような主君に従えないのは当然じゃないか」

「……そう悪く言わないでくれ」

「まだ庇うつもりか？　呆れたな」

不満げなリジーをちらと見やったルキアは、彼の怒りをなだめるように微笑した。

「見つからないんだ……」

リジーはますます顔をしかめ、怪訝に問う。

「なにが？」

「……言葉が」

虚空を見つめ、ルキアは重く息を吐いた。

――お前には敵わぬ。

ミカヤがルキアに向かってそう言ったのは、もうずいぶんと前の

ことだ。

日当たりのいい離宮の一室で、二人は大きな机に向かって肩を並べて座り、たくさんの書物を机上に広げていた。授業を行っていた教師が席を外した途端、乱暴に書を閉じたミカヤがそのように言ったのだ。

その言葉を受けて、ルキアは無邪気に笑む。

――殿下とわたくしは今こうして共に学んでおりますが、いずれ学ぶべきものは異なるようになりましょう。臣下であるわたくしの代わりはいくらでもおりますが、殿下の代わりはおられないのです。ですから、わたくしなどとお比べになる必要はございません。

この国の頂に立つべき人間とそれを支える人間という立場の違いゆえに、自分たちに求められている素養はまるで異なるのだとルキアは告げた。

――そんなことを私に言うのはお前ぐらいのものだ。

――たしかに殿下の御前でこのようなことを口にするのはわたくしぐらいでしょうが、きっと胸の内では同じように思っております。

ルキアの返答が気に入らなかったのか、ミカヤは不満げに眉を吊り上げる。

――あやつらが私のことをなんと言っているのか、お前は知らんのか？

常にミカヤの傍らにいるルキアが、宮廷貴族らによるミカヤへの中傷を知らないはずがない。それらは、一国の王太子に向けられる言葉とは思えないほど無礼なものであり、ルキアは強い憤りを感じていたのだ。

ルキアは怒りを押し殺し、ミカヤには微笑を向ける。

――ミカヤ殿下はアルト＝ヴィジェ陛下唯一の継嗣であられるではありませんか。それは揺るぎようのない事実なのですから、なにも気にされることではないのです。

あのころ、ルキアはミカヤが立太子された経緯をろくに知らなかった。母親の身分が歴代王妃に比べ著しく低かったため、第二位の継承権を持つ王弟クラヴィーエ公を次代の王に推す声が強いのだと解していたのだ。

――父は、わたくしが幼いころから将来は殿下にお仕えするよう申しておりましたが、こうして宮廷に上がり殿下のお傍でお仕えするようになって、わたくしはその想いを改めて強く持つようになりました。なにがあろうと、わたくしにとっての主君は殿下ただ一人であるのだと思っております。

空虚な言葉が舞う。

ルキアは決して嘘を口にしようとしたわけではなかったが、いくつかの嘘も含まれていた。

あれらの愚かしく、欺瞞に満ちた言葉はどのようにミカヤへと響いていたというのだろうか。

なにも疑うことはしなかった。深く知ろうともしなかった。その苦しみを、どれほども理解していなかった。

「もうずっと前のことだが、ミカヤ殿下に言われたことがある。お前は私のなにを理解しているのか、と。殿下の学友として宮廷にいたころ、私は殿下を崇めるような言葉を口にすることがよくあった。

そんなとき、殿下はいつも皮肉っぽく笑っておられた。あのころの私には、あの方がお笑いになる理由を推しはかることができなかった」

ルキアは熱を帯びた額に冷えた手のひらを押し当てた。椅子の背にもたれかかったリジーは、ルキアを見守るような視線を向ける。

「そして、殿下はこうも言われた。私は一度として満たされたことなどない。ただ、惨めでしかなかったと……」

ルキアは頭を抱えてため息を吐く。

――ふと、考えることがある。私がオルストン家で生まれ育っていれば、今ごろどうなっていただろうか、と。少なくとも、母は死なずにすんだであろうな。

自嘲を滲ませたミカヤが、苦しげに言葉を吐き出す。

――与えられるはずのないものが不自然な形で私のもとに舞い降りてきた。……だから、歪みが生じるのも当然なのだろう。

今も昔も、ルキアはミカヤに向けるべき言葉を見つけることができないでいる。ミカヤが王弟派の廷臣たちを理由もなく排斥したことについては、道義にもとる行いであると諫めることはできるだろう。だが、それ以外になんの言葉も持ち合わせてはいなかった。

「結局、殿下は憎しみの対象を自らの手で排除することで空虚を満たそうとされたが、そのようなやり方ではなにも満たされはしない。あの方はそれをわかっておられるはずなのだ……」

神など信じぬ、と吐き捨てる幼いミカヤの姿をルキアは思い出す。

ミカヤは信仰というものを昔から毛嫌いしていた。祈ることなどになんの意味があるのかとミカヤに問われたとき、ルキアは、祈ることは心に平穏をもたらすのだと答えた。するとミカヤは、滑稽だと鼻で笑った。

ミカヤが本当に求めていたのは信頼と庇護であったことだろう。ミカヤの周囲には、真に彼の味方になろうとする者がおらず、そのせいで彼は幼いころから猜疑心が非常に強かった。

ひたすら降り注がれる悪意の中で、辛さを忘れることは叶わず、憎むことでしか心に平穏は訪れなかった。なにかを願うこと、なにかのために祈ること、それを滑稽だと思えるほど、彼の世界は荒れ果てていた。ひっきりなしに襲いかかる悪意をなぎ払うのが精一杯で、なにかを望む余裕さえ失くしていた。そんな深い悲しみが、やがて憎しみへと姿を変えていったに違いない。

かつてミカヤは、キイルに対し、愛情と憎悪、尊敬と軽蔑といった相反する感情を抱いていた。それらの感情を一つの方向に振り切ることを選んだのは、ミカヤ自身が葛藤から解放されることを望み、永い悲しみと苦しみを絶とうとしていたからに他ならない。しかし、かつて深く敬意を抱いた者を自らの手で陥れても、心の平穏など得られはしない。それこそ虚無しか残らないだろう。

「そもそも、私には偉そうなことを言う資格などない。私は、わかったつもりでいただけだ。それどころか、いざ自分が苦境に立たされたとき、それと向き合うことができずに逃げた憶病者だ。自分の存在があの方々のあるべき未来を狂わせ、悲しみと憎しみの連鎖が生まれたと知ったとき、私にできることなどなにもなかった……」

ルキアが肩を震わせると、リジーはその肩口へと手を伸ばそうと

する。

「狂わせたって、なに言ってるんだ？　別にそれはお前のせいでも、母親のせいでもないだろう？　キイルだってお前のこと――」

「違う、そうじゃない！」

ルキアは身をよじって、慰めを与えようとする温かな手から逃れた。

宮廷で語られている恋物語……。

悲しい運命により引き裂かれた恋人たちは、今生で結ばれることが叶わずとも、天上での逢瀬を願って永遠の愛を誓い合ったという。

あの物語の通りであれば、少しは救われただろう。

ルキアは両目を固く閉じた。その目蓋の裏に浮かぶものは、押し隠せない憎悪、底の知れぬ恐怖、終わりのない絶望をかき混ぜた極彩色の悪夢であった。

無想の箱庭　（1）（前書き）

ルキア回想編。
ルキア１６歳、ミカヤ１７歳、エリーヌ１５歳。

無想の箱庭　（1）

初夏のよく晴れた、少し風が強い日の昼下がり。
エクシュール宮殿の敷地内にある丘の上で、ルキアは大樹のふもとに座り、ゆったりと背をあずけていた。時折、和やかな空気を破る銃声が、森の中から鳴り響く。彼はそれを気にも留めず、わずかな間にも姿を変えていく空模様を飽きることなく眺めていた。

「ルキア！」

この空のように高く澄み切った声に名を呼ばれ、ルキアは視線を地上に戻し、馬を駆る幼馴染みの少女の姿を見つめた。
エリーヌは幼いころから美しいドレスには目もくれず、やたらと飾り立てようとする侍女たちを煩わしげにしていたが、それは十五になった今でも変わらない。今日は男物の鞍に跨り、乗馬服に身を包んでいる。
しかし、彼女から雄々しさを感じることはない。男装は却って彼女の可憐さを引き立てているようでもあった。

「エリーヌ、狩りはもう終わったのか？」
「ええ。小さな動く的を打つのは難しかったけれど、兎を二匹も仕留めることができたわ。ルキアも来ればよかったのに」
「あいにくと、私は猟銃の扱い方を知らない。短銃なら扱えるかもしれないが」
「使わないから上達しないだけでしょう？　今度私が教えてあげる」

エリーヌは得意げに笑みを浮かべて明朗に語る。

「私はもう王宮に戻るわ。今日は伯母上が離宮でサロンを開かれてるの。ルキアは今からどうするの？」

エリーヌは早くに母を亡くしたため、彼女にとってもっとも身近な貴婦人は伯母のカレニーナであった。カレニーナは元王女であるため、一般的な貴婦人の基準には当てはまらない人物である。カレニーナの双子の姉リリアーナ第一王女は、ゴースティン北に位置するリオールの王妃となっているが、カレニーナもまた他国の妃となるべく教育を施されていた。ゴースティン王女に求められているのは、他国の内政の主導権を世継ぎの王子とともに掌握することであるため、婦女必須の教養に留まらず、財務、経済、外交等において王や大臣たちと渡りあっていけるだけの高度な知性が必要とされている。さらにカレニーナは乗馬を嗜み、父王の許しを得て剣術まで習得するような姫であった。

そんなカレニーナから多大な影響を受けたエリーヌもまた、王太子らに混じって狩りをする一風変わった貴婦人となっていた。

「私はもう少しここにいる。また後で会おう」

「わかったわ。じゃあ先に行ってる」

エリーヌは白馬を駆る。無造作に束ねられた栗毛が、小さな背に散らばった。雲の切れ間からこぼれ出した光のもとで去りゆく彼女を、ルキアは眩しさに目を細めながら見送っていた。

その姿がもう肉眼で捉えられなくなったころ、ルキアの横に黒馬が立ち止まり、やや挑発的な声が投げかけられる。

「まったく、お前たちはどっちが男でどっちが女かわからんな」

ルキアは馬上にいる赤い髪の少年を見上げ、穏やかな声を返す。

「怒ってもよろしゅうございますか、ミカヤ殿下」

「その程度のことでいちいち怒るのか？　お前らしくもない」

軽口の応酬をして、ミカヤは馬から降りた。芝の上に腰を下ろし、

「いつまでも仲がいいことだ」と、目を細めて呟く。

「私はお前がうらやましい。私には、お前のように自由にできることが少ない。一日の行動ひとつをとってもそうだが、なにかにつけ口煩い注文がつく。妃については殊更だ。とにもかくにも身分の高い者を、と誰もが口にする。よほど、私の中に流れる血の半分が下賤のものであることが気に入らんようだ」

「そのようなこと……」

「ないわけがないだろう？　お前やエリーヌの家柄からすれば、私の母の生家など平民と大差ないものだ」

ミカヤはそう吐き捨てるとともに、無防備に寝転んだ。

今のような人目のつかないところでは、ミカヤはよく羽目を外す。彼は四六時中多くの者たちから監視めいた視線を向けられており、これはそんな日常への反動なのだろう。ルキアがミカヤのそういった振舞いについて口を出さないのは、ミカヤを包む閉塞感が、自分とは比べ物にならないものだとわかっているからである。

昨年末、ミカヤの婚約者であったケーニヒスの第一王女マルヴィーダが亡くなった。ミカヤとマルヴィーダ王女の婚約は、単なる次代のゴースティン王の妃選びではなく、ファジールの独立に際して生じていたゴースティンとケーニヒスの間の強い軋轢を解消するため、同盟締結が求められていたことにある。

ケーニヒス王家には男系の分家が多くあり、その間で婚姻を結ぶ

例が極めて多く、ゴースティン王家との婚姻というのは異例なことであった。それでもキイルやデデュー公の苦心の結果、ミカヤとマルヴィーダ王女の婚約のほか、アルト＝ヴィジェ王の庶子であるエルザをケーニヒス第二王子の妃とする二重結婚が取りまとめられようとしていた。

両国ともにその成婚を望んでいたが、マルヴィーダ王女の急死により二つの婚約は破談になった。フェルナンド王には王女が一人しかおらず、分家の近親者にも年の見合う娘がいないため、ミカヤの新たな妃候補が決まらなかったためである。

王女の死により両国間の同盟の締結には暗い影が落ちた。

元々マルヴィーダは、子は望めないのではと言われていたほど病弱であったが、結婚を半年後に控えた時期においての王女の死は、ミカヤに酷く堪えたようであった。宰相も閣僚らも破談となった婚姻の処理に追われるばかりで、同盟の駒にすぎなかった王女の死を心から悼む者など宮廷にいなかった。そのことはミカヤに強い失意と虚無を与えたことだろう。

「所詮、私は奴らにとってただの手駒なのだ。口では私のためと言いながら、いかに自分たちの地位を守るかだけに注力し、そのための布石を打っているにすぎない。私の意思などいつも捨て置かれてきた。……本当に、無礼な奴らだ」

ルキアは返す言葉が見つからず、ミカヤのかすかに歪む横顔を盗み見る。

「あの男とて似たようなものだ。自分が次代の王となるつもりだっただろうに、なにを思って私の補佐などをしているのやら……。もし父上が亡くなりでもしたら、宮廷貴族どもは真っ二つにわかれ、醜悪な争いを始めるだろう。さぞや、この退屈な日々に鋭い亀裂を

入れてくれるに違いない」

ミカヤが不穏当な言葉を口にしても、ルキアにはそれをたしなめることができない。

ここ数年、ミカヤが少しずつ政に関わるようになったことで、派閥という勢力のせめぎ合いは個々人の対立へと様変わりし、ミカヤと閣僚らの間に強い軋轢が生じ始めていた。

現在のミカヤの地位は、王の外戚の力によって辛うじて保たれている状態である。ミカヤが実権を握り、宰相であるキイルが“影の王”でなくなり、なおかつ、それまで王が存命であれば、彼は薄氷の上に立つような地位から脱却できるだろう。そのためミカヤはひたすら早く時が流れてくれることを望んでいるようだった。

ミカヤの焦燥と、そこから生まれる野心について、ルキアは一定の理解を示しているものの、ミカヤが幼いころからキイルへと向ける過剰なまでの敵意については強い抵抗を覚えていた。

ルキアは重く閉ざしていた口を開く。

「……もし陛下がお亡くなりになったとしても、クラヴィーエ公が殿下を排斥なさるとは思えません。あの方は、国のため、陛下のために、ご自分の責務を忠実に遂行されておられるだけです」

「どうした、やけにあの男の肩を持つのだな」

「そういうわけではありません。ただ、殿下を敵視されているのは、クラヴィーエ公ご本人ではなく、側近の方々ではありませんか」

「だからなんだ？　そんなもの、同じことだろう」

二人の間でこの件に関する会話が交わされるとき、ミカヤはいつも不快感を露わにする。そして、いつもここで会話が閉じられてしまうのだが、今日に限ってミカヤは怒りを見せず、さらに話を続けようとした。

「……私は、お前のそういうところが気に入らん」

呟かれたミカヤの声は、彼のものとは思えないほど無機質だった。ルキアが驚いて顔を上げると、薄目を開いたミカヤと目が合う。

「先ほどお前は、むやみに生き物を殺したくないだのと理屈をこねて、狩りに加わらなかったな。……まあ、甘ったれた理想であろうと、私はそれを否定する気はない。それが単なる逃避でなければ、の話だが」

ミカヤは芝の上に落ちた葉を拾い上げ、握りつぶした。その瞳に強い光が宿る。

「お前のその理想は、お前の中でしか意味をなさないものだ。お前一人が理想に執着し、それをひたすら守ろうとしたところで、別の者がお前の代わりを務めるだけのこと。現に、お前が狩りに加わらずとも別の者が獲物を撃ち殺していた。今日はそこらにいる動物ですんだが、人間相手ではどうなる？　それも他人任せにする気か？」

「……わたくしが武官の道を選ぶならば、戦場に出て、敵兵を殺めることをやむをえぬことと受け入れたと思いますが」

ミカヤの問いの真意をルキアは理解していたが、あえて彼は的外れな答えを返した。すると、間髪入れずに、ミカヤから嘲笑が漏れる。

「そうやって、お前はすぐに枝葉の話へと逃げる。私が訊いているのは、一切の私情を挟まず、目的を遂行する覚悟がお前にあるのか、ということだ」

ミカヤはいつになく穏やかに笑み、まるでルキアに諭すような口

調で語り始める。

「私とて、なにも望んで奴らといがみ合っているわけではない。だが、どれほど争いを厭おうとも、奴らは勝手な理想を掲げ、馬鹿げた義憤に駆られた結果、いつ何時でも私を陥れようと画策している。いずれお前も否応なしに巻きこまれていくことになるだろう」

隙を見せれば、足をすくわれる。現在のゴースティン宮廷とはそのような世界である。ミカヤが生きている世界はその最たるものであり、ルキアが足を踏み入れようとしているのもまた同じものであった。

「これから私とともに同じ道を歩もうとするのなら、くだらん私情は捨てろ。お前が選び取らねばならぬものは、たったひとつであるはずだろう。己の忠義の在り処をはっきりさせておけ」

ミカヤは上体を起こし、宮殿の方向をにらみすえた。その顔が意味ありげに笑む。

「私が奴らと交わることはない、一生な」

ミカヤは立ち上がり、悠然と馬に跨った。

去りゆくミカヤの姿を見つめているうちに、ルキアの意識は過去に沈む。この数日、ルキアの頭の中を支配していたのは、ロベルト・ネイゲルにより聞かされた己の出自についてであった。

三日前の午後、ルキアは本宮の資料室に一人こもっていた。ミカヤが中央会議や閣議などに出席したり、ダラス公とともに執務室に

て過ごしている時間、ルキアは近年実施された政策について自主的に学ぶことが日課であった。

昨年、文官の補佐を務めて行政について実地で学ぶようになってから、ルキアは自身の知識不足を痛感していた。ゴースティンは八十年前のケーニヒスとの戦争の後、大幅な行政・軍制改革が行われた。それ以降に行われた改革が現在の政治機構の基盤を成しているため、正式に任官されるまでに、ルキアはそのすべてを網羅しておこうと考えていた。父やグレンヴィル家に恥をかかせずにすむだけの知識と経験を備えておかねばならないのだと、憑かれたように勉学に励んでいたのだ。

立ち並ぶ棚からある資料を手に取ったルキアが席へと戻ろうとしていたところ、隣接する大臣執務室の扉が開いた。口髭を蓄えた壮年の男の存在に気づいたルキアは、その場で立ち止まる。彼は大蔵大臣ロベルト・ネイゲルであった。

ルキアは頭を下げ、ロベルトが通り過ぎるのを待ったが、ロベルトはルキアの前で立ち止まり、資料の束にちらと目をやった。

『十年前の救貧法改革の資料か』

『はい、ネイゲル男爵が中心となって進められた改革であると聞いております』

かつてロベルトは王立学院の神童として名を馳せており、十三のとき大学教授らの推薦により、キイルの学友として宮廷に召された。デデュー公とともにキイルの両腕とされる臣下であり、キイルが実権を握るようになってからというもの、ロベルトの推し進めた改革のいくつかは国内外で高く評価され、十年ほど前に男爵位が叙爵されている。

ルキアの家庭教師としてドートリッシュ家を出入りしていた王立大学の教授は、少年のころのロベルトをよく見知っており、彼の優

れた知性について懐かしげに褒め称えていたが、ルキアはロベルトに好意を抱くことはできなかった。

というのも、ロベルトは王弟派の廷臣の中でもっともミカヤに辛く当たっている人物であるからだ。派閥に関係なく、ミカヤに冷笑的な視線を投げかけたり陰口を叩く廷臣は珍しくないが、ロベルトはキイルへの忠義の名のもとに徹底的にミカヤを無視しており、公の場において“王太子”と呼ぶことは一度としてなかった。

『ルキア殿、あなたはもうすぐ十七になられるのだろう。これからどうされるおつもりなのだ?』

十七歳は貴族男子の成人年齢に当たり、襲爵、婚姻、任官等が可能になる。ルキアは幼いころ武官志望であったが、十五のとき士官学校への入学を断念してからは、いずれ文官として登用されることを望んでいた。

『もちろん、ミカヤ殿下にお仕えするつもりです。ネイゲル男爵はクラヴィーエ公の学友であられたそうですが、私もネイゲル男爵のように主君のための忠実な臣下でありたいと願っております』

そう告げた直後、ルキアははっとして口を引き結んだ。その言葉がロベルトにとって嫌味に受け取られはしないかと懸念したのだ。

案の定、ロベルトは憮然とした顔をしていた。ロベルトは口髭のせいで少々表情が読みにくいが、彼の眉は明らかに不機嫌とわかる動きを見せた。

『あなたをミカヤ王子の学友に推薦したのはダラス公なのだ。ダラス公の真意はわからぬが、あなたをなんらかの手駒に仕立て上げるつもりで宮廷に招いたのだろうと私は案じていた』

あまりに不穏当な言葉だった。ルキアが困惑の目を向けると、ロベルトは苛立ちまじりに問いをぶつけてくる。

『なぜキイル殿下が次期王としての地位を奪われねばならなかったのか、あなたはご存じではないのか？　まさか、ミカヤ王子が国王唯一の嫡子として生まれたからなどと思っておられるのか？』

その話について、ルキアは疑問に思いつつも、あえて誰にも訊くことができなった。

ミカヤは、自分が立太子された経緯について、キイルが王の妾に手を出したために廃位され、私生児にすぎない自分が王太子に祭り上げられる羽目になったのだと話していた。キイルが王の妾に手を出した、というのは、ダラス公の言葉をそのまま信じているものだが、それが事実であるなどと、ルキアには到底信じられるものではなかった。

しかし、ハーシェリオン家を後ろ盾に持つキイルをそう簡単に排斥などできはしない。ミカヤの生母アイリーン・オルストンは教会が婚姻許可を渋ったほどの家柄である。キイルがなにかよほどの事態を引き起こしたのは事実であるのだろう。

『……かつて、キイル殿下はある貴族の姫君を深く愛しておられた。殿下はその姫を秘かに妃にと考えられていたのだが、国王陛下が姫を見初められ、ご自分の妃にと所望されてしまったのだ。だが、その方は殿下の御子を身籠られていた。キイル殿下はご自分の立場が危うくなることを覚悟の上で、お二人の関係を認めていただこうと国王陛下に直訴され、お情け深い陛下は寛大にもそれをお認めになろうとしていた。それにもかかわらず、ダラス公が殿下の行いは反逆罪に当たるなど難癖をつけ、ミカヤ王子を無理やりに立太子させたのだ。当時、ミカヤ王子は陛下の御子として認められてすらいなかったというのに、ダラス公はただ自らの地位の安寧だけを考え、

ミカヤ王子の後見を買って出たのだ』

過去を紡ぐロベルトの声は、徐々に荒々しさを増していく。

『キイル殿下には、ミカヤ王子を害されるおつもりはない。ただ、ダラス公については強い不信を持っておられる。あの男はキイル殿下と恋人を引き離しただけでなく、殿下からあるべき地位まで簒奪した。さらに、ミカヤ王子に殿下の歪められた醜聞を吹き込む始末……。ミカヤ王子は我らに敵愾心をむき出しにされるが、我らが恨まれるなど筋違いもいいところなのだ』

その話は、ルキアが初めて耳にするものではあったが、強い驚きを彼に与えることはなかった。すべてが、腑に落ちるものであったのだ。

ダラス公とキイルの不和はあらゆる面において見受けられる。また、ダラス公と対峙するキイルからは、いつもの冷静さがいささか失われ、激しさを垣間見せることも多かった。このような過去の因縁があったならば、キイルの挙動にも納得がいく。

『そのお話が真実であれば、真に痛ましいことです。ミカヤ殿下もクラヴィーエ公に対する見方をお変えになるでしょう。ただ、ミカヤ殿下はダラス公に信頼を寄せておられるわけではないのです。ですから、そのように殿下を悪く言われないでください……』

ルキアは声をつまらせ、そのままうつむいた。

王弟派の者たちのミカヤに対する侮蔑的な態度の理由は、ロベルトが語ったものの中にあった。しかし、彼の主張にはミカヤの心情は一切考慮されておらず、ルキアはそのままを受け入れるわけにはいかなかった。

――次期王となる人間だからどうだというのだ？　私はただそこにおればよいのだ。誰も私になにも求めてはいない。アンジェですら私を蔑んでいる。下賤の者よ、とな。

ミカヤの怒りと悲哀を押し殺した声がルキアの脳裏によみがえる。

この国において王に次ぐ地位にありながら、ミカヤには、尊敬の代わりに侮蔑の眼差しを、賛辞の代わりに嘲笑が与えられるのみだった。それは、ミカヤがどのように振舞おうとも変えられることではなかっただろう。どれほど周囲を納得させるだけの教養や武芸を身につけたところで、“下賤の者”という一言（いちげん）のもとに否定されてきたのだ。

ふいに、ロベルトの手が肩に触れる。ルキアを見下ろすロベルトの目には、怒りの色は消え去り、これまでに見たこともないような温かみが宿っていた。

『ルキア殿、ミカヤ王子とあなたは幼いころからのご友人同士……。だからこその情もあるだろう。それは私も理解している。だが、あまりミカヤ王子に入れこむのは控えてもらいたい。父君の御心を煩わせるような真似はしないでいただきたいのだ』

『……おっしゃっている意味がわかりません。なぜ、ミカヤ殿下にお仕えすることを父が不愉快に思うのですか？　私がミカヤ殿下にお仕えすることを望んだのは父なのです』

『クラウス卿のことではない。キイル殿下のことだ』

ルキアは訳がわからずに口を閉ざしていたが、ロベルトはさらに顔を近づけ、重々しく囁く。

『キイル殿下が愛しておられた姫は、あなたの母君アズノエル様だ。あなたは、国王陛下の命によりクラウス卿が引き取られたのだ』

ルキアは、母がどういった素姓の人間なのかろくに知らなかった。誰もルキアに教えず、また訊ねてもろくな返答はなかった。その理由については、主教という教会最高位の地位にあるクラウスが妻を娶る前に関係を持った女性であるため、公にできないのだと彼は解していた。母の話題に触れられるのを嫌ってきたために、母について知っていることといえば、名はアズノエル、かつて宮廷を出入りしており、その容貌はルキアと瓜二つ、そして、既に故人であるということだけであった。

『殿下は、まだアズノエル様を愛しておられるのだろう。三年前にアズノエル様がお亡くなりになられてからというもの、酷く塞ぎこまれるようになった。十七年前、あの方をお救いできなかったことをずっと悔いておられたゆえ……』

そこで一旦、ロベルトは言葉を止めた。ルキアがロベルトの手を払うようにして後ずさったためである。

今、ルキアには立っている感覚さえ失われつつあったが、それでもロベルトの言葉は容赦なく続く。

『だからルキア殿、決してキイル殿下に対立するような真似はしないでもらいたい。つまり、先ほど申し上げたように、ミカヤ王子には必要以上に関わらないと誓っていただきたいのだ』

『……そのようなこと、誓えません』

声こそ弱々しかったものの、ルキアは即答した。ロベルトの話はルキアを酷く狼狽させていたが、ミカヤに仕えるなという言葉は、考えるまでもなく否定すべきものであった。

意地を張るように唇を噛みしめるルキアに、ロベルトは残酷に告げる。

『あなたとアズノエル様は本当によく似ておられる。キイル殿下はあなたの姿をご覧になるたびに姫のことを思い出されることだろう。あなたがミカヤ王子の側近となり我らに歯向かわれるようなことになれば、殿下に不要な心痛を与えかねないのだ。ご理解いただけるだろう？』

今度は言葉を返すことができなかった。

ミカヤは幼いころからキイルを毛嫌いしていたが、それでもキイルは嫌な顔一つせず、王太子に対する礼節を貫き続けていた。そのため、ミカヤは十三になるころにはキイルへの横暴な態度を軟化させつつあった。

しかし、あるときを境にキイルのミカヤに対する態度は冷淡なものとなっていった。それにつれ、ミカヤは以前にも増してキイルに悪感情を露わにするようになったのだ。

キイルがどことなく変わり始めたのは、三年前――アズノエルが他界したとされる時期と一致していた。

静寂にひびをいれるように、大臣執務室の扉が開き、大理石の床に複数の靴音が反響する。ルキアはその音に気づいてもうつむいたままでいたが、音が途切れたときにやっと顔を上げた。

その瞬間、ルキアの身体は凍りつき、歩み寄る二人から顔をそらせなくなった。

ルキアとロベルトの前に立つのは、陸軍大臣ジーク・ラッセルとクラヴィーエ公キイルあった。

『こんなところでなにをしている？　ずいぶんと意外な顔合わせだが？』

キイルが感情を浮かべない平坦な声で問うた。ルキアが恐る恐る

ロベルトの顔を見やると、ロベルトは表情を乱すこともなく、キイルに向かって頭(こうべ)を垂れる。

『殿下、申し訳ありません。わたくしの独断でございます』

キイルはロベルトを怪訝な顔で見下ろしていたが、その表情は、徐々に硬質で冷たいものへと変わっていく。

『……ロベルト、どういうつもりだ?』

キイルの声は、その表情に違わず、慄然とさせる響きを伴っていたが、ロベルトはまったく顔色を変えることなく、落ち着いた声で言葉を返す。

『勝手な振舞いであったことはお詫びいたします。ですが殿下、いつまでも隠しておけることではございません。もしダラス公に先手を打たれるようなことになれば大変なことになります』

隣に立つジークもまた、焦燥を募らせたようにロベルトに加勢する。

『そうでございます、殿下。あのダラス公のこと、いずれルキア殿にも歪曲した考えを植えつけるようになるでしょう。それならば今のうちに真実をお教えし、我らの側についていただけるようにしておいたほうがよいではありませんか』

『私は、そのようなことを訊いているのではない』

矢継ぎ早に言葉を口にする腹心らを前に、キイルは酷薄な空気を放つ。そんなキイルの姿を、ルキアは虚ろな目で見つめていた。

ルキアにとって、キイルの顔は二つあった。

ひとつは、華やかで自信に満ちあふれた顔である。そんなときのキイルは、一国の指導者として栄華を極めた者だけが放ちうる発気を全身に行き渡らせていた。

そしてもうひとつは、穏やかで莞爾（かんじ）たる微笑を浮かべた顔である。それはまだ幼いころのルキアやミカヤに向けられていたもので、その姿が鮮明に焼きついて離れない。思えば、ルキアがキイルのことをミカヤが言うほどに悪く思えないのは、そのころの印象があまりに強すぎるためであった。

だが、今のように冴え凍るように怒るキイルの表情を見たのは初めてだった。そのせいか、目の前で繰り広げられている彼らのやり取りには現実感がなかった。

ジークは呆然としているルキアに歩み寄り、その手を取った。

『ルキア殿、ご理解いただきたい。どうか殿下を失望させるようなことはなさらぬよう――』

『ジーク、黙れ！』

キイルはジークの言葉を制し、ジークとルキアの間に割り入った。

ルキアに向けられるキイルの眼光は、刃のように鋭いままであった。キイルの目に宿るのは怒りとも憎しみとも思えるものだったが、ルキアにはなぜそれが自分に向けられるのかわからなかった。

キイルは戸惑うルキアを見下ろしていたが、やがて、かすかに和らいだ声で告げる。

『ロベルトの話は忘れるがよい。そなたには関係のないことだ』

『……わたくしに関係がないというのは、どういう意味ですか？ネイゲル男爵の話されたことが真実ではないということなのでしょうか』

『どうとでも、好きに取るがよい』

冷淡な視線を保ったまま、キイルは言い捨てた。それはますますルキアを混乱させた。キイルは腹心らを引き連れ大臣執務室へと去っていったが、扉の閉まる音が聞こえてもなお、ルキアは顔を上げることができなかった。

夢想の箱庭　（2）

しばらく木陰で物思いに耽っていたルキアは、エリーヌとの約束を思い出し、王宮へと戻った。今日のような晴れた日には、エリーヌは宮殿の談話室ではなく、離宮の庭園にいることが多い。談話室には扇の裏で嫌みの応酬を繰り返す貴婦人たちが群れをなしているため、気疲れがするのだと、以前からエリーヌは漏らしていた。ルキアもまた、それらから逃れるように離宮で過ごすことが多かった。

「ルキア！」

噴水の縁に腰かけていたエリーヌが、手を振りながらルキアを呼ぶ。

ルキアは足を止め、こちらへ駆け寄ってくる彼女を、力をなくした目で見た。

「ずいぶんと遅かったのね。ルキアを待ってる間、伯母上たちの長話に付き合わされてしまったじゃない」

カレニーナは、降嫁して二十年近く経つ今なお宮廷での影響力は強く、宮廷に出向いたカレニーナの周りには閣僚や高官らがずらりと揃う。また、カレニーナの開くサロンには派閥を越えて多くの貴族たちが集い、文学や哲学、果ては近代科学に至るまで高名な学者たちによる高度な講義や議論が交わされるほどである。

現在、ゴースティン王室には王妃も王女もいないため、もっとも国王に近い女性であるカレニーナが依然として社交界の花形であり

続けていた。

「……ねえ、どうかしたの？」

ルキアの反応が悪かったため、エリーヌは不安そうに眉を下げた。

なんでもない、とルキアは首を振り、口元に笑みを浮かべる。

「それより、カレニーナ様とはどのような話をしていたんだ？」

池のあるほうへと足を進めながら、二人は和やかに言葉交わす。

ハーシェリオン家で開かれた舞踏会の話、完成したカレニーナの肖像画の話、レイヴァン夫人の幼い養女の話……。エリーヌはさっきまで繰り広げられていた雅やかな話題を次から次へとかい摘んで話す。

それを聞いているうちに、ルキアは自分の中に広がった暗雲が少しずつ晴れていくのを感じていた。

エリーヌと別れたルキアは、王宮に出向いている父と落ち合うため、本宮の王室礼拝堂へ向かった。ルキアは五年前より王宮で生活しているが、月に一度ほどはドートリッシュ本邸へと戻っている。今日は晩餐にレイヴァン家の者が訪れることもあり、数日間、本邸に滞在することになっていた。

礼拝堂を見渡したが、父の姿を見つけることはできなかった。居合わせた司祭によると、クラウスは国王のもとに伺っているとのことだった。父が国王とどのような会話をしているのかルキアは関知していないが、その話はいつも数時間に及ぶものである。

ここで待っていようかとルキアが逡巡していると、赤く染まり始めた柱廊を足早に歩く音が響く。振り返ると、ルキアの前に立ち止

まったクラウスが顔をほころばせた。

「ルキア、ずっとここにいたのか？」

「いいえ、先ほどまで離宮の庭園におりました」

「そうか、ずいぶんと待たせてしまったのではないかと思っていた」

疲労のにじむ父の顔を見て、ルキアは不安に駆られる。

「なにかあったのですか？」

「いや、これといったことではないのだ。ただ、陛下は近ごろめっきり気弱になられてしまってな。お年のせいもあろうが、あの方はご心痛の種を多く抱えておいでだから……」

クラウスの漂わせる憂慮は、ルキアの身体をも蝕んでいった。クラウスは明言を避けたが、おそらくそれは、キイルやミカヤについてのこともあるのだろう。国王が介在しようとも、あの二人を取り巻く状況を変えるのは難しいのだ。

陰鬱な空気を振り払うように、ルキアは明るい声を発する。

「父上、もしかしたらミルドレッドはもうお越しになっているかもしれませんよ。あの方は時間にとても正確ですから」

クラウスは、ああ、と失念していたというように呟く。

「そうだな、ルノーも待ちくたびれているかもしれんな」

クラウスが先に歩き始めると、ルキアは無理に作った笑みをほどいていく。渦を巻く激情に碇をつけ、深い海底（うなぞこ）へと沈めた。

……†……

ドートリッシュ本邸の広間には、当主のクラウス、長子のルキア、その隣にルノー、そしてミルドレッドとビビが対座している。

知る者は少ないが、レイヴァン家はドートリッシュ一族の落胤が興した家であり、そのために魔力に優れた者が稀に誕生する。両家は屋敷が比較的近い位置にあることもあり、月に一度ほど晩餐をともにする程度には親しかった。

ドートリッシュ本家では肉を食さない。それが家の決まりというのではなく、クラウスの好みにルキアもルノーも倣っているだけである。大規模な晩餐会ともなれば別だが、今日のような身内同様の付き合いのあるミルドレッドやビビを招くときは、いつものやり方が貫かれる。

宮廷晩餐会で出されるような豪華さはないものの、ドートリッシュお抱えの調理人の手により繊細な見栄えが追求されてきた料理は、決して質素なものではない。材料も、セヴァンスの菜園で採れた新鮮な野菜や豆類が使用され、南の属領から渡った幾種類ものの香辛料がふんだんに使われている。

前菜の後にスープが運ばれてきたとき、葡萄酒を口にしていたクラウスが感慨深げに告げる。

「ルキア、お前が宮廷に上がるようになってから五年も経つのだな。早いものだ」

ルキアは曖昧に苦笑を返すことをしかできなかったが、その代わ

りに、ミルドレッドが朗らかな声で応える。

「ルキア様は、宮廷では未来の宰相様だなんて呼ばれておりますのよ。正式にミカヤ殿下の秘書にでも任官されれば、いずれそうならるかもしれませんわね」

「そういった話はまだ早すぎますよ」

ミルドレッドの言葉に被さるように、ルキアは早口で告げた。

ミカヤとは関わるなというロベルトの声が、ルキアの脳裏に深く刻み込まれていた。脅しとも取れるあの言葉を受け入れるつもりは毛頭ないが、それを気にせずにいられるほどの図太さもなかった。

「私がどういった官職に就くことができるか、まだわかりませんから……」

ルキアは努めてやんわりとその話題を終わらせようとしたが、クラウスは手にしていた葡萄酒をテーブルに置き、ルキアを諭すように告げる。

「来月にはお前も成人するのだ。早すぎるということはないだろう。……まあ、宰相というのは大仰であるがな」

今から十年以上も前、クラウスは幼少のルキアを連れ立って、王のもとに出向くことが幾度となくあった。宮廷に上がることが許された貴族たちであっても、十に満たない子を伴って王に謁見を願い出ることはない。

王の間には、国王の側近であるギルベイド家やハーシェリオン家出身の高官らが控えており、ルキアは彼らから探るような目線を向けられた。その視線は、時が経つにつれ露骨になっていったのを覚えている。

先日、ルキアは彼らの視線が持つ意味を知るに至った。ギルベイド家の者もハーシェリオンの者も、ルキアの利用価値を見定めていたのだろう。王族の落胤が政に関わる例はこれまでに幾度かあったが、そのいずれも宮廷の実力者として権勢を誇ったと言われている。

それゆえ、彼らはクラウスの出方をうかがっていたのだ。クラウスがどちらに加担するかにより、彼らの目論見も変わる。

ルキアはスープを一口飲んでから手を止め、クラウスに視線を向ける。

「そういえば父上、私は司祭になってはいけなかったのでしょうか？」

「いきなりどうしたというのだ」

「以前より、疑問に思っていただけです。なぜ父上は私を司祭にさせるおつもりがなかったのか、と。なにか、私では不十分なところがあったのでしょうか？」

これまでルキアはずっと疑問に思っていた。

クラウスは宮廷司祭となってからこの二十数年、宮廷の派閥争いに一切関与せず、王にのみ尽くしてきた。そんなクラウスが、なぜ火種を持ち込みかねないルキアを宮廷に上げようとしたのだろうか、と。

ロベルトいわく、ルキアをミカヤの学友に選んだのはダラス公だということだが、クラウスはダラス公の力を恐れたわけではない。それ以前よりずっと、将来はミカヤに仕えるようルキアに言って聞かせてきたのだ。今のように「司祭になってはいけないのか」と問いかけたことは何度かあったが、クラウスはそれを曖昧にはぐらかしてきた。

今もまた、クラウスは言いあぐねたまま、視線をそらしてしまった。ルキアは予想通りの父の反応に苦笑をにじませる。

「ルキア様、魔道を操ることのできる者のすべてが司祭となるわけではありませんわ。わたくしだってそうでしょう？　なによりルキア様は皆から期待されておいでですのに」

澱み始めた空気を追い払うかのように、ミルドレットは明るい声で父子の会話に割って入った。今あえて訊くような話ではなかったとルキアは反省し、最近の宮廷での出来事に話題を変えた。

晩餐の後、ルノーとビビはともにクラブサンを演奏し、その調べを聴きながらルキアとミルドレッドはテラスへと出た。ルキアは葡萄酒をいつもより多めに呷ったために少し酔いが回っていたが、初夏の夜風は火照った身体に心地良いものだった。

ねえ、と背後から声をかけられ、ルキアは振り返る。

「もしかしてお聞きになったの？　クラヴィーエ公とアズノエル様のこと……」

ミルドレッドが小声で訊ねると、ルキアは瞠目し、食い入るように問い返す。

「あなたはご存じだったのですか？」

「ええ、有名なお話ですもの。大国の王子様が貴族のお姫様と恋に落ちて、将来を誓っていたにもかかわらず、姫を見初めた兄王により引き裂かれてしまう……。この悲恋物語、ルキア様も一度くらいは耳にされたことがあるのではなくて？」

ルキアは手すりにもたれかかった。これは決して、先ほど飲みす

ぎた葡萄酒の酔いのせいではない。

「まさか、あの話は陛下やクラヴィーエ公を揶揄するために語られていたのですか？」

「いいえ、なにもすべての者が真相を知っているわけではないわ。若いお嬢さんたちが、恋への憧れを込めて好意的に語っているのが大半よ」

件の物語は、貴婦人たちとの談笑の中で語られることが多く、とりわけ若い女性に人気があった。貴族の娘に生まれた以上、想い人と結ばれることはまずない。彼女たちは恋を知ることもなく嫁がされる運命を受け入れるため、甘美な恋に落ちる夢を見ている。共に生きることが叶わなくとも、たった一人と決めた相手に真実の愛を捧げるのが理想なのだという。

「ただ、はじめに語り始めた者はなにもかもわかっていたのでしょうね。おそらく、あの恋物語を宮廷中に流したのは王弟派の者たちではないかしら。あれはキイル殿下とアズノエル様を庇う内容ですもの」

たしかに、王太子派の者が流した物語ならば、王の妾に懸想して廃位された王弟の秘話になっていたことだろう。

どちらにしても、ずいぶんと陰険なものだとルキアは思う。あれほど頻繁に語られていれば、キイルの耳にも入っているに違いない。それを想像するだけで薄ら寒くなる。

「わたくし、てっきりルキア様は知ってらっしゃるものだと思っておりましたわ。あのお話をクラウス様はどうしてお話しにならなかったのかしら。宮廷にいれば、いずれ耳にすることになったのは確実ですのに」

「本当に……よく、五年もの間知らずにいられたものだと思いますよ」

ルキアがアズノエルという女性を母だと知ったのは、自ら王に訊ねたのがきっかけだった。王は母のことを懐かしそうに話していたが、妃に望んでいたということはそれほど愛していたということなのだろうか。しかしあの王のこと、単なる気まぐれだったのではないのかと、ルキアは複雑な気分にもなった。それにより、キイルが次期王としての地位を失うことになったとしたなら、あまりに理不尽でしかない。

「ミルドレッド、あなたは私の母を知っていますか？」

「ええ、わたくしがまだ子供のころでしたけれど、何度もお会いしたことがございます。とてもお優しくて、大好きなお姉様でしたわ」

「母は、どんな容貌でしたか？」

「あなたが鏡をご覧になられれば、そこに母君がいらっしゃるわ」

いっそ清々しさを覚えるほど、ミルドレッドは艶然と笑みながらうそぶいた。ルキアがあからさまに眉を寄せても、ミルドレッドは意に介す素振りもなく、淡々と語る。

「アイオーン離宮と本宮をつなぐ階段にノワイユの絵が掛けられているでしょう。あの絵の中の天使、あまりにもアズノエル様にそっくりですわ。もちろん、ルキア様にも」

その絵ならばルキアはよく知っている。七十年ほど前にノワイユにより描かれた巨大な絵画であるが、アイオーン離宮に居室が与えられているルキアはほぼ毎日のようにその階段を使用する。また、以前エリーヌからも似ていると言われたことがあったのだ。

ルキアがさらに問いを重ねようとしていたところ、席を外していたクラウスが広間へ戻ってきた。それに気づいたミルドレッドは、室内へ引き返そうと身をひるがえし、すれ違う際にルキアの耳元で囁く。

「詳しくお知りになりたいのであれば、うちにいらして」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0798w/

鈍色の空を溶かして

2012年1月4日07時51分発行